瀬戸大橋建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ

下川津遺跡

―第２分冊―

1990・3

香川県教育委員会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター
本州四国連絡橋公団

瀬戸大橋建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ

下川津遺跡

―第 2 分 冊―

1990・3

香川県教育委員会
㈶香川県埋蔵文化財調査センター
本州四国連絡橋公団

第2分冊 本文目次

第IV章　低地帯の調査
第1節　はじめに……1
第2節　低地帯各部の状況……3
第3節　水田遺構について……54
第4節　土　器……63
第5節　石　器……158
第6節　金属器……159
第7節　木　器……194
第V章　考　察
第1節　下川津遺跡における地形的変遷……298
第2節　下川津遺跡の歴史的変遷……302
第3節　下川津遺跡の弥生から古墳時代前期の集落構造……306
第4節　下川津遺跡における6～8世紀の集落構造と動向……312
第5節　下川津遺跡といわゆる条里地割について……341
第6節　古墳時代後期の方形土坑……351
第7節　蛸壺および蛸壺焼成土坑……354
第8節　下川津遺跡の古代・中世墓について……360
第9節　弥生時代前期の石器について……365
第10節　下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について……367
第11節　下川津遺跡における7・8世紀代の土器様相について……409
第12節　出土木製品について……417
第VI章　自然科学分析
第1節　下川津遺跡出土土器の蛍光X線分析……422
第2節　下川津遺跡土壙墓出土の歯の鑑別……431
第3節　下川津遺跡のプラント・オパール分析報告……435
第4節　下川津遺跡における花粉・珪藻分析委託報告……479
第5節　下川津遺跡出土木製品の樹種分析委託報告……519
第6節　下川津遺跡出土鍛冶関係資料の分析委託報告……568
第7節　下川津遺跡出土資料のC－14分析委託報告……591
第VII章　おわりに……594
第2分冊付表……597

第2分冊 挿図目次

第IV章　低地帯の調査

第1図　下川津遺跡地形分類模式図…… 2
第2図　第1低地帯北部…… 4
第3図　低地帯セクション1
（第1低地帯流路1）…… 5
第4図　低地帯セクション2
（第1低地帯流路2）…… 7
第5図　第1低地帯流路2（国道以北）
遺物出土状態平面図…… 8
第6図　第1低地帯流路2（国道以北）
遺物出土状態断面図…… 9
第7図　第1低地帯・第2低地帯合流部……10
第8図　低地帯セクション3（第1低地帯
流路3・第2低地帯合流部）①……12
第9図　低地帯セクション3（第1低地帯
流路3・第2低地帯合流部）②……13
第10図　木群1出土状態図……14
第11図　低地帯セクション4
（第2低地帯流路1・2）……15,16
第12図　木群2出土状態図……17
第13図　第2低地帯流路2斎串
・人形集中状態図……18
第14図　第1低地帯・第3低地帯合流部……19
第15図　低地帯セクション5
（第1低地帯・第3低地帯合流部）①…21
第16図　低地帯セクション5
（第1低地帯・第3低地帯合流部）②…22
第17図　低地帯セクション6
（第3低地帯流路1～3）①……23
第18図　低地帯セクション6
（第3低地帯流路1～3）②……24
第19図　低地帯セクション7
（第1低地帯流路4・5）……25
第20図　低地帯セクション8
（第3低地帯流路6～8）……27
第21図　木群4出土状態図……28
第22図　土器溜り5遺物出土状態図……29
第23図　第1低地帯南部……30
第24図　低地帯セクション9
（第1低地帯流路4・5）……31
第25図　第2低地帯……33
第26図　低地帯セクション10
（第2低地帯流路1）……35
第27図　第3低地帯……36
第28図　低地帯セクション11（第3低地帯）…38
第29図　低地帯セクション12
（第3低地帯・第4低地帯流路1）…39
第30図　第4低地帯北部……41
第31図　低地帯セクション13
（第4低地帯流路8・9）①……43
第32図　低地帯セクション13
（第4低地帯流路8・9）②……44
第33図　低地帯セクション14
（第4低地帯流路2）……45
第34図　SXIII11平・断面図……46
第35図　第4低地帯南部……47
第36図　低地帯セクション15（第4低地帯
流路1・4・5）①……48,49
第37図　低地帯セクション15
（第4低地帯流路1・4・6）②……50
第38図　低地帯セクション16
（第4低地帯流路1・6・10）①……51
第39図　低地帯セクション16
（第4低地帯流路1・6・10）②……52
第40図　水田1北半部平面図……55
第41図　水田1南半部平面図……56
第42図　水田1・2関連整地部分断面図……57
第43図　水田2平面図……58
第44図　水田3平面図……59
第45図　水田3付属テラス面断面図……60

第46図　第１低地帯流路１出土絵画土器……63
第47図　第１低地帯流路１出土土器……84
第48図　第１低地帯流路１出土土器……85
第49図　第１低地帯流路１出土土器……86
第50図　第１低地帯流路１出土土器……87
第51図　第１低地帯流路１
弥生土器溜り１出土土器……88
第52図　弥生土器溜り１出土土器……89
第53図　第１低地帯流路２出土土器……90
第54図　第１低地帯流路２出土土器……91
第55図　第１低地帯流路２出土土器……92
第56図　第１低地帯流路２出土土器……93
第57図　第１低地帯流路２出土土器……94
第58図　第１低地帯流路２出土土器……95
第59図　第１低地帯流路２出土土器……96
第60図　第１低地帯流路２出土土器……97
第61図　第１低地帯流路２出土土器……98
第62図　第１低地帯流路２出土土器……99
第63図　第１低地帯流路２出土土器 ……100
第64図　第１低地帯流路２出土土器 ……101
第65図　第１低地帯流路２出土土器 ……102
第66図　第１低地帯流路２出土土器 ……103
第67図　第１低地帯流路２出土土器 ……104
第68図　第１低地帯流路２出土土器 ……105
第69図　第１低地帯流路２出土土器 ……106
第70図　第１低地帯流路２出土土器 ……107
第71図　第１低地帯流路２（国道以南）
出土土器 ……108
第72図　第１低地帯流路３出土土器 ……109
第73図　第１低地帯流路３出土土器 ……110
第74図　第２低地帯流路２出土土器 ……111
第75図　弥生土器溜り２出土土器 ……112
第76図　弥生土器溜り２出土土器 ……113
第77図　弥生土器溜り２出土土器 ……114
第78図　弥生土器溜り４出土土器 ……115
第79図　弥生土器溜り４出土土器 ……116
第80図　弥生土器溜り４出土土器 ……117
第81図　第３低地帯流路１出土土器 ……118
第82図　第３低地帯流路３出土土器 ……119
第83図　第３低地帯流路３出土土器 ……120
第84図　木群４共伴土器 ……121
第85図　第１低地帯流路６・５北半部下層・
同上層・第３低地帯流路２出土土器…122
第86図　弥生土器溜り５出土土器 ……123
第87図　弥生土器溜り５出土土器 ……124
第88図　弥生土器溜り５出土土器 ……125
第89図　弥生土器溜り５出土土器 ……126
第90図　弥生土器溜り５出土土器 ……127
第91図　弥生土器溜り５出土土器 ……128
第92図　弥生土器溜り５出土土器 ……129
第93図　弥生土器溜り５出土土器 ……130
第94図　弥生土器溜り５出土土器 ……131
第95図　弥生土器溜り５出土土器 ……132
第96図　第１低地帯流路５南半部出土土器 …133
第97図　第１低地帯流路５南半部出土土器 …134
第98図　第１低地帯流路５南半部出土土器 …135
第99図　第１低地帯南半部上層出土土器 ……136
第100図　第１低地帯南半部上層出土土馬……137
第101図　第２低地帯流路１出土土器……138
第102図　第２低地帯流路１出土土器……139
第103図　第２低地帯流路１出土土器……140
第104図　第２低地帯流路１出土土器……141
第105図　第２低地帯流路１出土土器……142
第106図　第２低地帯流路１出土土器……143
第107図　第２低地帯流路１出土土器……144
第108図　第２低地帯流路１出土土器……145
第109図　第２低地帯流路１出土土器……146
第110図　弥生土器溜り３出土土器……147
第111図　弥生土器溜り３出土土器……148
第112図　弥生土器溜り３出土土器……149
第113図　弥生土器溜り３出土土器……150
第114図　水田１・２，第３低地帯最下層
出土土器……151
第115図　第４低地帯流路１・２上層
・水田３直上層出土土器……152
第116図　第４低地帯流路４・５出土土器……153

第117図　第４低地帯流路６出土土器……154
第118図　第４低地帯流路６出土土器……155
第119図　第４低地帯流路６出土土器……156
第120図　第４低地帯流路７・ＳＸⅢ11
出土土器……157
第121図　第１低地帯流路１出土石器(1)……159
第122図　第１低地帯流路１出土石器(2)……160
第123図　第２低地帯Ⅶ層出土石器(1)……165
第124図　第２低地帯Ⅶ層出土石器(2)……166
第125図　第２低地帯Ⅶ層出土石器(3)……167
第126図　第２低地帯Ⅶ層出土石器(4)……168
第127図　第２低地帯Ⅶ層出土石器(5)……169
第128図　第２低地帯Ⅶ層出土石器(6)……170
第129図　第２低地帯Ⅶ層出土石器(7)……171
第130図　第２低地帯Ⅶ層出土石器(8)……172
第131図　第２低地帯Ⅶ層出土石器(9)……173
第132図　第２低地帯Ⅶ層出土石器(10)……174
第133図　第２低地帯Ⅶ層出土石器(11)……175
第134図　第２低地帯Ⅶ層出土石器(12)……176
第135図　第２低地帯Ⅶ層出土石器(13)……177
第136図　第２低地帯Ⅶ層出土石器(14)……178
第137図　第２低地帯Ⅶ層出土石器(15)……179
第138図　第２低地帯Ⅶ層出土石器(16)……180
第139図　第２低地帯Ⅶ層出土石器(17)……181
第140図　第２低地帯Ⅶ層出土石器(18)……182
第141図　第２低地帯Ⅶ層出土石器(19)……183
第142図　第２低地帯Ⅶ層出土石器(20)……184
第143図　第２低地帯Ⅶ層出土石器(21)……185
第144図　第２低地帯Ⅶ層出土石器(22)……186
第145図　第２低地帯Ⅶ層出土石器(23)……187
第146図　第２低地帯Ⅴ・Ⅵ層出土石器……188
第147図　低地帯出土鉄器(1)……191
第148図　低地帯出土鉄器(2)……192
第149図　低地帯出土鉄器(3)・青銅器・貨銭…193
第150図　鬼虎川遺跡出土籾掻い……195
第151図　ワラジ編み台……199
第152図　針江中遺跡出土鋤柄……200
第153図　犂・不明木製品装着想定図……201
第154図　美園遺跡出土木棺状木製品……208
第155図　曲物結合方式……209
第156図　斎串分類図……211
第157図　船形模造品分類図……212
第158図　人形分類図……213
第159図　木群２出土柱材……214
第160図　刻書木板読解案……216
第161図　上田部遺跡出土馬鍬……218
第162図　斧柄……221
第163図　刀子柄……222
第164図　鋤先……223
第165図　籾掻い状木製品・犂・その他……224
第166図　犂……225
第167図　鎌柄……226
第168図　鎌柄・横槌……227
第169図　横槌……228
第170図　横槌……229
第171図　竪杵……230
第172図　木錘……231
第173図　木錘……232
第174図　木錘……233
第175図　木錘……234
第176図　木錘……235
第177図　木錘……236
第178図　木錘・編み具……237
第179図　ワラジ編み台……238
第180図　ワラジ編み台
・スティック状木製品……239
第181図　スティック状木製品……240
第182図　糸巻……241
第183図　糸巻……242
第184図　紡錘……243
第185図　壺鐙……244
第186図　壺鐙・鞍……245
第187図　櫛・下駄……246
第188図　下駄……247
第189図　挽物・円形刳物……248
第190図　方形刳物……249

第191図　方形刳物……250
第192図　方形刳物……251
第193図　円形曲物……252
第194図　円形曲物……253
第195図　円形曲物……254
第196図　円形曲物……255
第197図　円形曲物……256
第198図　楕円形曲物……257
第199図　楕円形曲物・長方形曲物・蓋……258
第200図　脚付台……259
第201図　斎串……260
第202図　斎串……261
第203図　斎串……262
第204図　斎串……263
第205図　斎串……264
第206図　斎串……265
第207図　斎串……266
第208図　斎串・船形模造品……267
第209図　船形模造品……268
第210図　船形・鳥形・刀子形模造品……269
第211図　馬形・人形模造品……270
第212図　人形模造品……271
第213図　人形模造品……272
第214図　人形模造品・独楽・琴柱……273
第215図　柱材……274
第216図　柱材……275
第217図　柱材……276
第218図　梯子段・板材……277
第219図　板材……278
第220図　板材・用途不明品……279
第221図　組み合わせ部材……280
第222図　組み合わせ部材……281
第223図　板材……282
第224図　板材・墨（刻）書板……283
第225図　木札状木製品……284
第226図　有孔板……285
第227図　篦状木製品……286
第228図　篦状木製品……287
第229図　組み合わせ篦状木製品
・棒状木製品……288
第230図　棒状木製品……289
第231図　棒状木製品……290
第232図　有孔棒状木製品……291
第233図　有頭棒状木製品……292
第234図　尖頭棒状木製品……293
第235図　尖頭棒状木製品……294
第236図　用途不明品……295
第237図　用途不明品……296
第238図　用途不明品・自在鉤形・掛矢他……297
第Ⅴ章　考　察
第239図　下川津遺跡における地形変遷模式図
（右下 第4低地帯の流路変遷）……300
第240図　下川津遺跡断面模式図……301
第241図　第1微高地6～8世紀の集落(1)……313
第242図　第1微高地6～8世紀の集落(2)……315
第243図　第2･3･4微高地6～8世紀の集落 …323
第244図　第4微高地6世紀の集落……329
第245図　第4微高地7世紀の集落……331
第246図　第4微高地8世紀の集落……332
第247図　掘立柱建物時期別面積比……334
第248図　下川津遺跡周辺坪界線分布図……341
第249図　第1・2微高地部分9世紀以降
主要溝と地割線……343
第250図　第4微高地8世紀代集落と地割線…344
第251図　第4微高地9～13世紀代集落と
地割線……346
第252図　上一坊・中村・稲木B・
郡家一里屋遺跡……349
第253図　第4微高地方形土坑主軸方位……351
第254図　第4微高地方形土坑配置図……353
第255図　飯蛸壺（左）・真蛸壺（右）の
諸形態……356
第256図　蛸壺出土地点……358
第257図　下川津遺跡古代・中世墓分布図……362
第258図　第1微高地8世紀代建物群と墓……363
第259図　第2低地帯Ⅶ層出土石器器種組成…365

第260図　関連遺跡分布図……367
第261図　編年試案(1)……373,374
第262図　編年試案(2)……375,376
第263図　加藤遺跡溝１資料……378
第264図　森広遺跡Ⅲ次ＳＨ01資料……379
第265図　大空遺跡資料……380
第266図　南谷遺跡資料……381
第267図　南谷遺跡資料……382
第268図　竹元遺跡(上)・佐料遺跡(下)資料 …383
第269図　高屋遺跡資料……385
第270図　高屋遺跡資料……386
第271図　高屋遺跡資料……387
第272図　稲木遺跡Ｃ地区ＳＨ05資料……388
第273図　彼ノ宗遺跡ＳＴ21資料……389
第274図　彼ノ宗遺跡ＳＴ15資料（上）
仲村廃寺ＳＨ24資料……390
第275図　一の谷遺跡大形土坑資料……392
第276図　一の谷遺跡大形土坑（上）・
７号溝（下）資料……393
第277図　一の谷遺跡７号溝（上）・
１号竪穴住居（下）資料……394
第278図　一の谷遺跡18号竪穴住居資料……395
第279図　Ｂ類土器編年表……404
第280図　７～８世紀前半の供膳形態
（第１低地帯流路２）……411,412
第281図　土師器杯Ｃ形態法量分布（上段
７世紀前半 下段 ７世紀後半）……410
第282図　須恵器杯Ａ形態法量分布（上段
７世紀前半 下段 ７世紀後半）……410
第283図　７～８世紀代の煮沸形態
（第１低地帯流路２）……410
第284図　６世紀後半主要供膳形態
（左 須恵器 右 土師器）……413
第285図　９世紀代の供膳形態
（上段 ＳＥⅢ03 下段 ＳＥⅢ04）…413
第286図　供膳形態・構成比……414
第287図　円形曲物底板径分布……419
第２分冊付表
第288図　主要石器計測基準図……598

第２分冊 表目次

第１表　水田１北半部一覧表……54
第２表　水田１南半部一覧表……54
第３表　水田２一覧表……57
第４表　水田３一覧表……61
第５表　第２低地帯流路１弥生前期
土器器種構成一覧表……78
第６表　第１低地帯流路１出土石器組成表 …164
第７表　第２低地帯Ⅶ層出土石器組成表 ……164
第８表　時期・微高地別住居一覧表 ……333
第９表　規模・微高地別竪穴住居一覧表 ……334
第10表　６～８世紀側柱建物規模・
類型別一覧表 ……335
第11表　６～８世紀総柱建物規模・
類型別一覧表 ……335
第12表　第４微高地９～13世紀代
建物一覧 ……345
第13表　古墳時代後期方形土坑一覧表 ……352
第14表　蛸壺出土遺構一覧 ……354
第15表　讃岐地方弥生後期資料対比表 ……377
第16表　讃岐周辺地域編年対比表 ……395
第17表　Ｂ類土器出現頻度一覧 ……406
第18表　出土木製品主要器種一覧表 ……417

第2分冊 付表目次

付表1　微高地上遺構出土土器観察表 ……599
付表2　低地帯出土土器観察表 ……697
付表3　石器観察表 ……753
付表4　玉類観察表 ……761
付表5　鉄器観察表 ……761
付表6　鏡類観察表 ……763
付表7　銅製品観察表 ……763
付表8　古銭観察表 ……763

小学生見学風景

第IV章　低地帯の調査

第1節　はじめに

本章では下川津遺跡の低地部分に関する調査所見－堆積状況・遺構・遺物出土状態および出土遺物を報告する。

既に述べたように下川津遺跡は弥生時代前期以来長期に渡って継続された生産・消費・居住・祭祀などの諸活動の痕跡の累積からなるが，この間舞台となった周辺環境は不変ではない。現在多少の起伏と傾斜は残すもののほぼ平坦な地表面の連続として捉えられる本遺跡周辺の状況は最初の集落が形成された弥生時代前期以来の景観ではない。

後に述べるように弥生時代前期段階では四つの微高地と，その間にあってそれらからは2～3mの比高を持つ深い低地部分からなる非常に起伏にとんだ地形であったと推定できる。これから今見るような景観に至る変化は，下川津遺跡の展開過程を考える上で欠くことの出来ない要素である。特に集落機能・周辺耕地開発の展開を理解するためには遺跡を取り巻く地形環境の変遷過程の追及は重要である。

したがってここでは，調査時の諸制約や問題意識の未熟さから決して十分なデータを得たとは言い難いが，出来うるかぎり積年の諸活動の舞台となった下川津遺跡の地形的変化に関するデータの提示に勤めることとする。合わせてこのような変化の諸段階に形成された諸遺構の状況，人為的・自然的営為に関わらず，低地部分に包含された遺物について報告する。

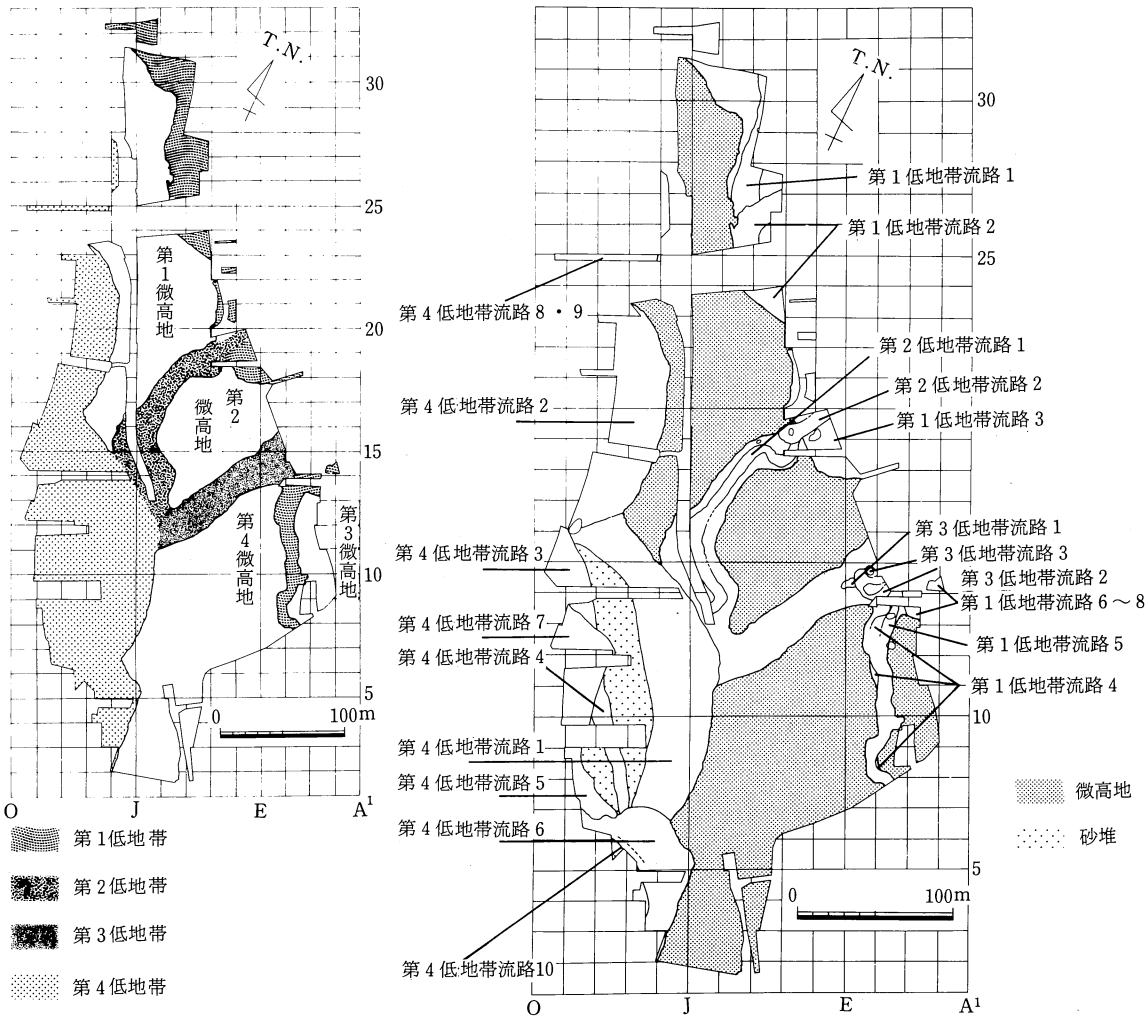
地形分類及び概要（第1図）

筆者の力量からして以下の記述中で，必ずしも厳密な地理学上の用語に則っていなかったり，熟していない新造語を使用せざるを得ない点を予めお断りしておく。また合わせてこうした用語の意味するところを先に示し，筆者の意図するところを御了解いただきたい。

微高地－以下では弥生前期段階には既に堆積が完了しておりかつ河川活動に伴う開析作用を免れた結果，形成された河床面に比して相対的に高く取り残された部分を示す。下川津遺跡の場合にはそうした部分はその後殆ど周辺河川活動にもとづく堆積作用を被らないと云う特徴がある。従って古代末以降に形成されその後一時期居住域に取り込まれた部分（第4低地帯流路1堆積層上面など）はここに含めない。南北に連なる三つの微高地を北から第1微高地・第2微高地・第3微高地とし低地部を挟んで第4微高地の東に位置するそれを第3微高地とすることは（第1図）に示したとおりである。

低地帯－形成要因のいかんを問わず微高地間の相対的に低い部分をこのように仮称する。遺跡の東側第1微高地東側に位置し南半部で第3微高地に挟まれた低地帯を第1低地帯とする。第1微高地・第2微高地間に位置し南西から北東に抜ける低地帯を第2低地帯とする。第2微高地・第4微高地間にあって南西から北東に抜けるそれを第3微高地とする。南北に連なる第1・第2・第3の各微高地の西側低地帯を第4低地帯と総称する。なお第1低地帯中部（B13）では，第3微高地の東側からまわり込む厳密には別の低地帯を確認したが，第1低地帯との合流部のごく一部にすぎないので，これに含めている。

流路－ここでは低地帯にあって河川活動により先行堆積層を開析して形成された凹地の連続を流路とする。第１低地帯は調査区外の未掘部分が多く，大部分流路が断片的にしか捉えられておらず，一本の流路の復元が困難なため，各地点で確認し得たそれぞれに番号を付した。各流路の位置関係については（第１図）に示した通りである。（大久保）



第１図　下川津遺跡地形分類模式図（左 低地帯分布・右 流路分布）

第2節　低地帯各部の状況

1．第1低地帯北部（G～I－23～31）（第2図）

調査区北半部，第1微高地東側の低地部分を指す。低地部はG23付近からH23にかけて一旦弧状に第1微高地東縁を抉り込んだ後に北東部に抜けて，西側の低地帯に続くと予想できる。すなわち第1微高地北半部は急激に幅を狭めながら半島状に北に伸びるが，ほぼ31ライン付近で途切れ，角山南麓へは直接つながらない様である。北端の独立した調査区IJ31・32では南側の微高地を構成するのと同質の土層がそれと同等のレベルでは検出できない第1，第4低地帯に続く低地部を確認している。ここでは平安時代後半までにようやく南側の微高地面とほぼ同等レベルまでの堆積が進行し，平安時代末ないしは鎌倉時代初頭以降にようやく集落域に取り込まれている。

さて本地点では，微高地上面の遺構および遺物包含層と低地部堆積物の層序的関係から判断して，もっとも古い遺構が形成される以前に本低地の開析は基本的に完了しており，以後下川津遺跡の全継続期間を通しての主要な地形的変遷は低地部の埋積，つまり微高地面との比高の減少，地表の平準化の進行過程である。この過程を大別すれば，一定量の恒常的な流水が期待でき，河川として機能していた段階とそうでない段階に別れる。この前半段階に形成された流路としては微高地東縁に沿って北流する流路1（幅15.2～17.8m）とGH23～27でこれを切りながら，南東から流れ込み，強く湾曲して北東に出る流路2（幅15.6～18m）の二本がある。

前者は形成時期は不明であるが，古墳時代前期までに埋没を完了し，後者はこの後に形成され，奈良時代前半までに埋没する。つまり第1低地帯のこの部分が河川としての命脈を保っていたのはこの段階までである。また，この二本の流路の埋没過程でそれぞれ豊富な遺物が投棄・包含されている。ただし，何らかの河川利用を物語る護岸等の施設はこの部分では検出していない。この後この地点では，先行堆積物を開析して形成される流路は確認できず，薄い水平堆積の連続で徐々に，微高地上面との比高を減じてゆく。

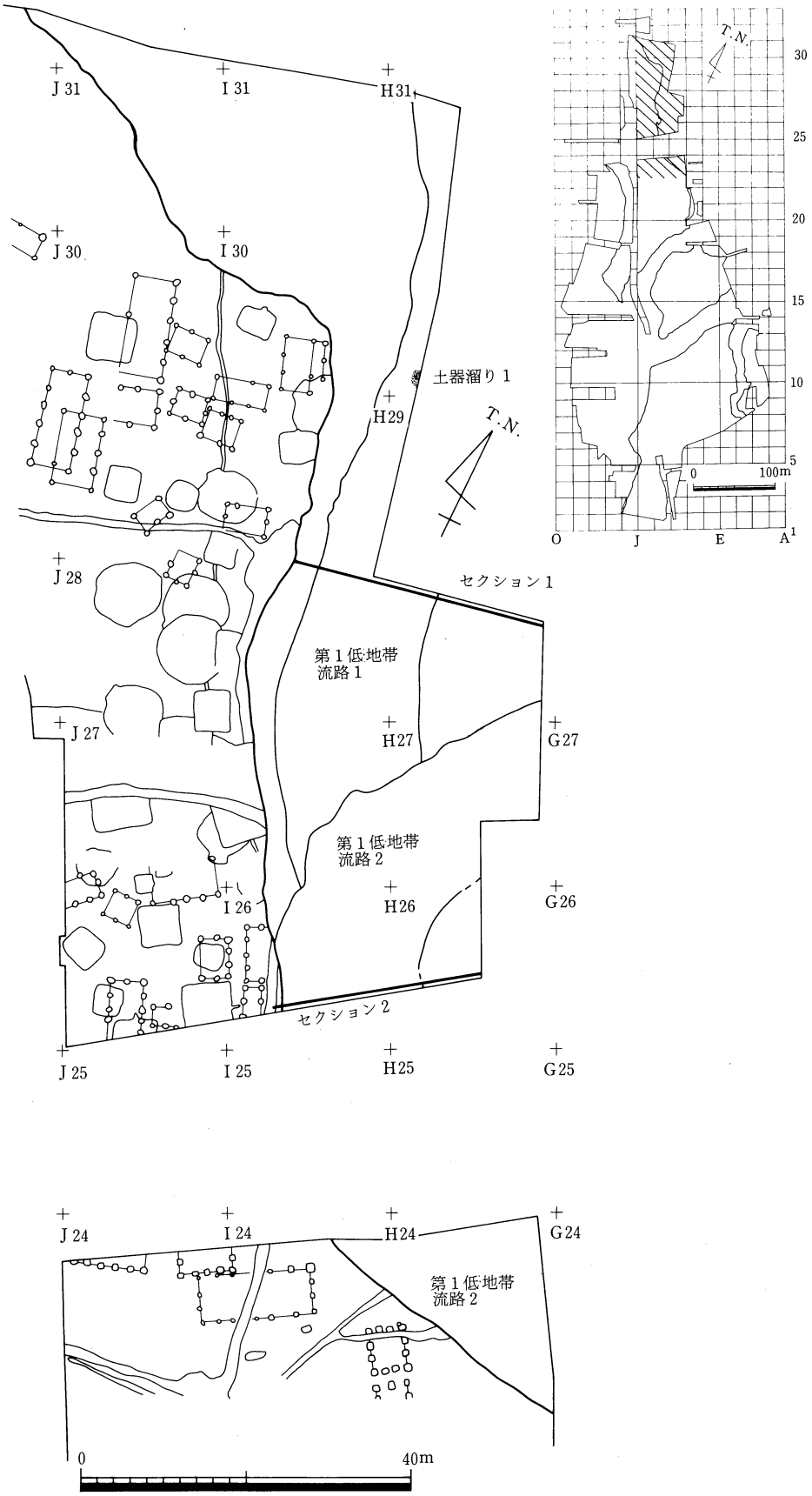
水田遺構は未確認だが，セクション1・2で行ったPO分析では，平安末以前の堆積層の一部で水田耕作を想定しうる程度のプラントオパールを検出した部分がある。本地点が河川機能を喪失してあまり間を置かずに水田利用が行われた可能性がある。

また厳密な時期比定は成し得ていないが，低地帯内，流路1南端部の東肩の微高地面より約1m低い面で堀立柱建物1棟を検出した。3章で詳述したように8世紀代に位置付け得る可能性の高い建物である。もしそれが正しいとすれば，該期のほかの建物群との立地上の著しい差異を持ち，敢えて低地に占地していること，また周辺に水田域が広がる可能性があることから一般的な居住用とは異なる機能を持つ建物を想定すべきかも知れない。

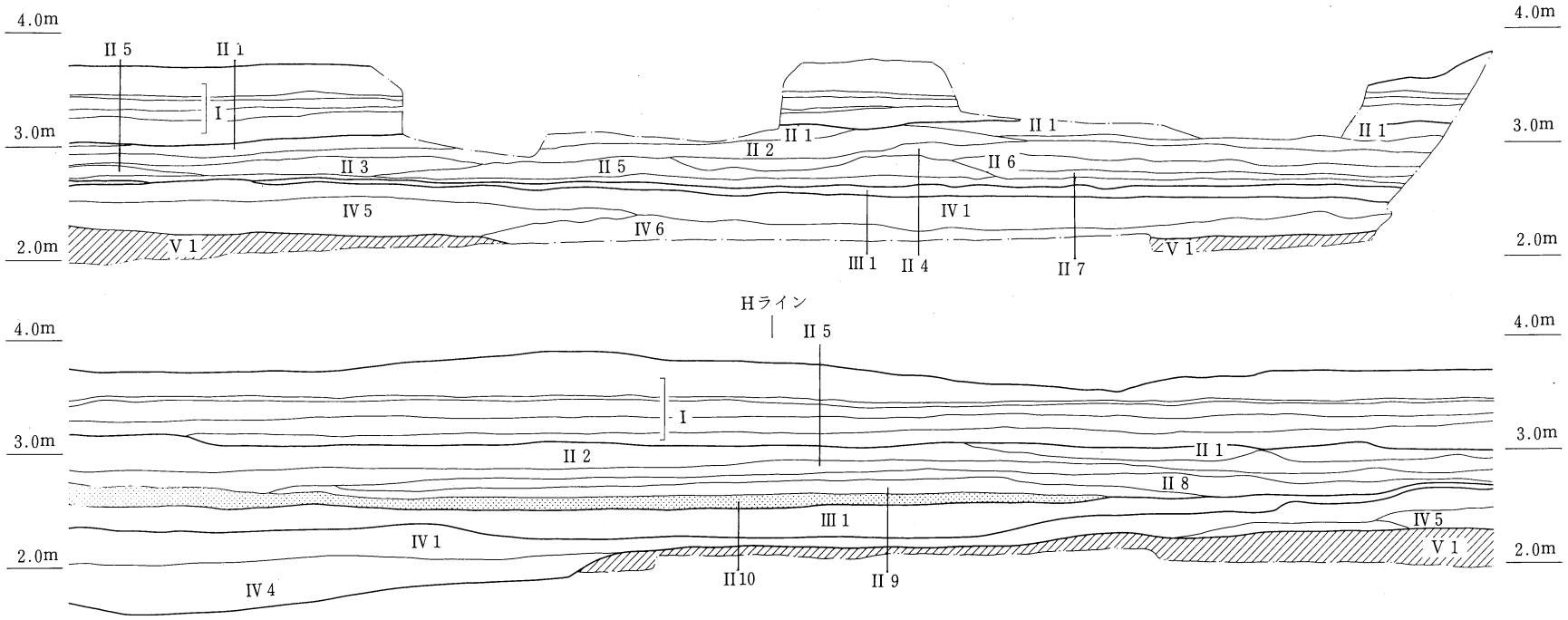
セクション1（第3図）

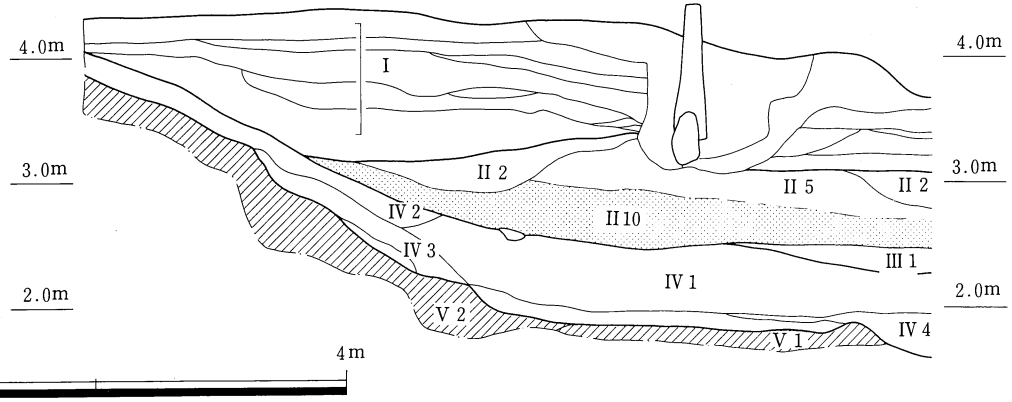
流路1は幅15.2～17.8mで，あまり深くない。この部分で最深部の標高1.6m，微高地上面との比高は約2.5mを測る。

最下層V層が本流路の堆積層に当たり，層厚0.6mで暗褐色の砂・粘土からなり弥生後期～古墳前期の包含層となる。堆積物の土質から比較的平穏な堆積環境が想定しうる。上面で微高地上面との比高1.9mを測る。


J 31
I 31
H31
J 30
I 30
土器溜り 1
H29
T.N.
J 28
セクション 1
第 1 低地帯
流路 1
J 27
H27
G27
第 1 低地帯
流路 2
I 26
H26
G26
セクション 2
J 25
I 25
H25
G25
J 24
I 24
H24
G24
第 1 低地帯
流路 2
0
40m
T.N.
30
25
20
15
10
5
0
100m
O
J
E
A1

第 2 図　第 1 低地帯北部





I　耕作土連続堆積層（4面以上）
II－1　弱黄灰褐色細砂質土層
II－2　黄褐色細砂質土層
II－3　黄緑灰色細砂層
II－4　灰褐色細砂層
II－5　淡緑灰色細砂層
II－6　灰褐色砂質土層
II－7　灰褐色砂質土層
II－8　黄緑灰色細砂層
II－9　灰褐色細砂質土層
II－10　灰褐色シルト層　堆定水田層
III－1　暗灰色粘土層
IV－1　砂混黒色粘土層（古式土師器包含層）
IV－2　砂混暗褐色粘土層
IV－3　粘土暗褐色粘土層
IV－4　暗褐色粗砂層
IV－5　礫混黒色粘土層
IV－6　黒灰色砂質土層
V－1　青灰色砂層
V－2　暗褐色硬質粗砂層

第3図　低地帯セクション1（第1低地帯流路1）

III層はこれを被覆する薄い暗灰色粘土層で，奈良時代までの遺物を少量包含する。なお本層以上は流路2上面を含め第1低地帯北部の大部分におよぶ。上面で微高地面との比高1.6mを測る。本層も下層同様に比較的平穏な堆積環境を予想できる。

II層は灰褐色ないしは黄灰色の均質的な細砂からなる層群で下層に比べ堆積物の粒径は大きい。後述するように第4低地帯流路1等に起因する洪水堆積物と考えられ第1低地帯北部全域に分布する。層厚は約0.6mで本層上面で，微高地面との比高は1m内外にまで減じている。本層上部で黒色土器片を検出していることから，ほぼ平安時代末までには堆積を完了したと推定できる。なお本層最下部（II－10）では比較的多量のプラントオパールを検出しており，水田利用の可能性がある。

I層は現耕作土とその床土および，その下部に連続して認められるマンガン・鉄分集積層の互層状堆積物である。マンガン・鉄分集積層の枚数から見て5面以上の旧耕土面を想定しうる。連続的な水田経営が想定できるのはこれ以降である。ただしこれらが近世以前のどの時点まで遡りうるかは検証し得ていない。

セクション2（第4図）

流路2最深部の標高1m，微高地面との比高約3mを測る。先行する流路1に比べ河床が0.6m程度も低く，重複部分ではその堆積物・および同流路床面をほぼ完全に削り取っている。

IV層は流路2の堆積層で黒褐色系統の粘土からなり層厚約1m，上面での微高地面との比高約2mを測る。部分的に多量の植物遺体を含む。後述するように7世紀初頭から8世紀前半の多量の木器・土器を包含している。また流路1の包含遺物が二次的に混入したと考えられる弥生後期から古墳時代前期の土器も若干量含んでいる。

III層はセクション1と共通する堆積層で，この部分では層厚0.2m，上面で微高地面との比高約1.8mを測る。本層上部（III－2）で多量のプラントオパールを検出している。

II層もセクション1と共通する細砂層で層厚1.2m，この上面では微高地面との比高は約0.6mに縮まっている。

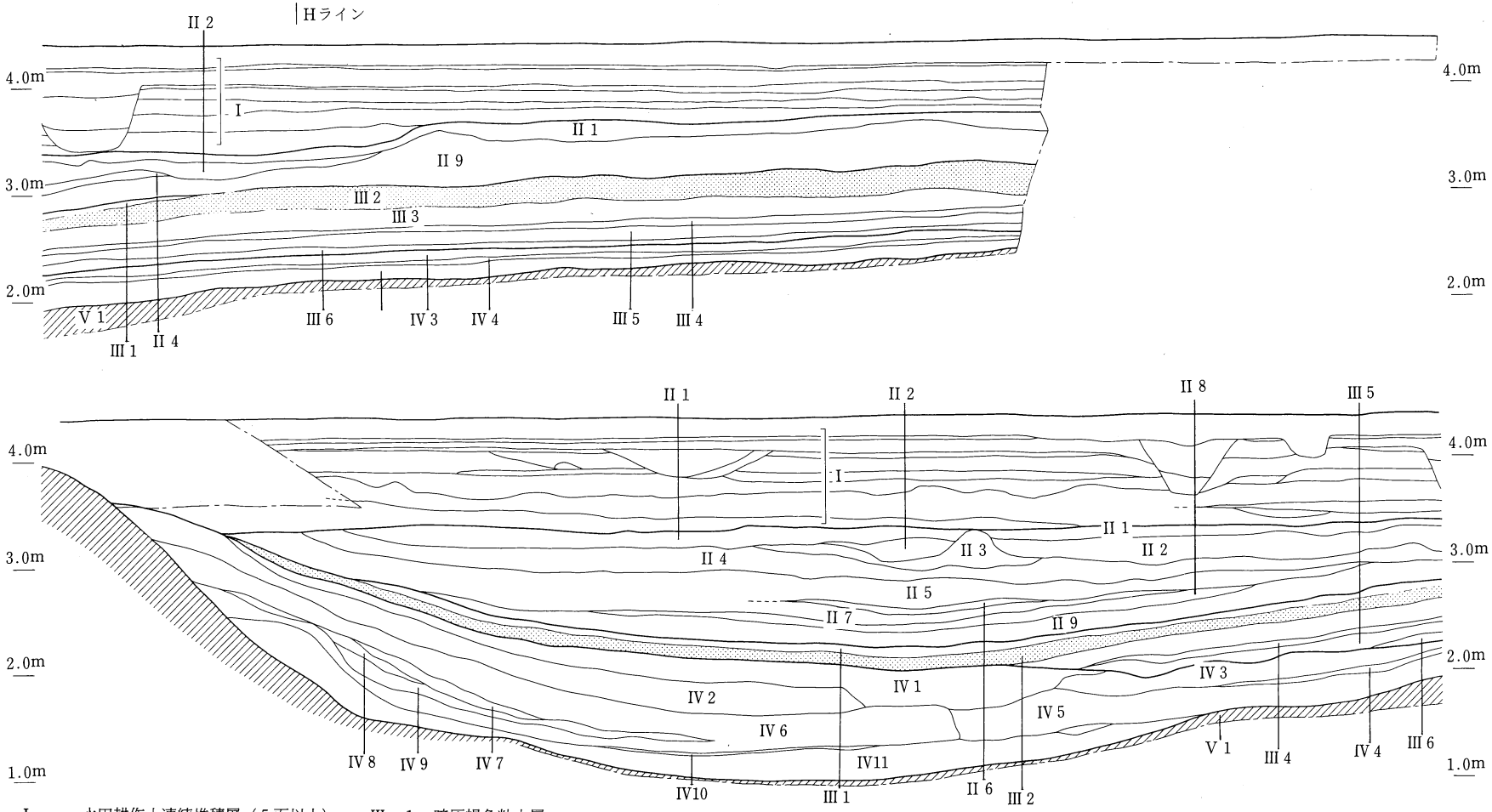
I層は現耕作土とその床土および，その下部に連続して認められるマンガン・鉄分集積層の互層状堆積物である。集積層の枚数から見て5面以上の旧耕土面を想定しうる。

遺物の出土状態

遺物の大半は流路内堆積層中から出土しており，両流路がほぼ埋没した後のI～III層中には殆ど包含されない。特にII・III層堆積期間のかなりの部分（奈良時代後半～平安時代）には第1微高地北半部の居住域としての利用は確実に行われているにもかかわらず，以前のような投棄が成されていないことは，当該時期に本低地部分の利用目的が変化したと捉えるべきかも知れない。

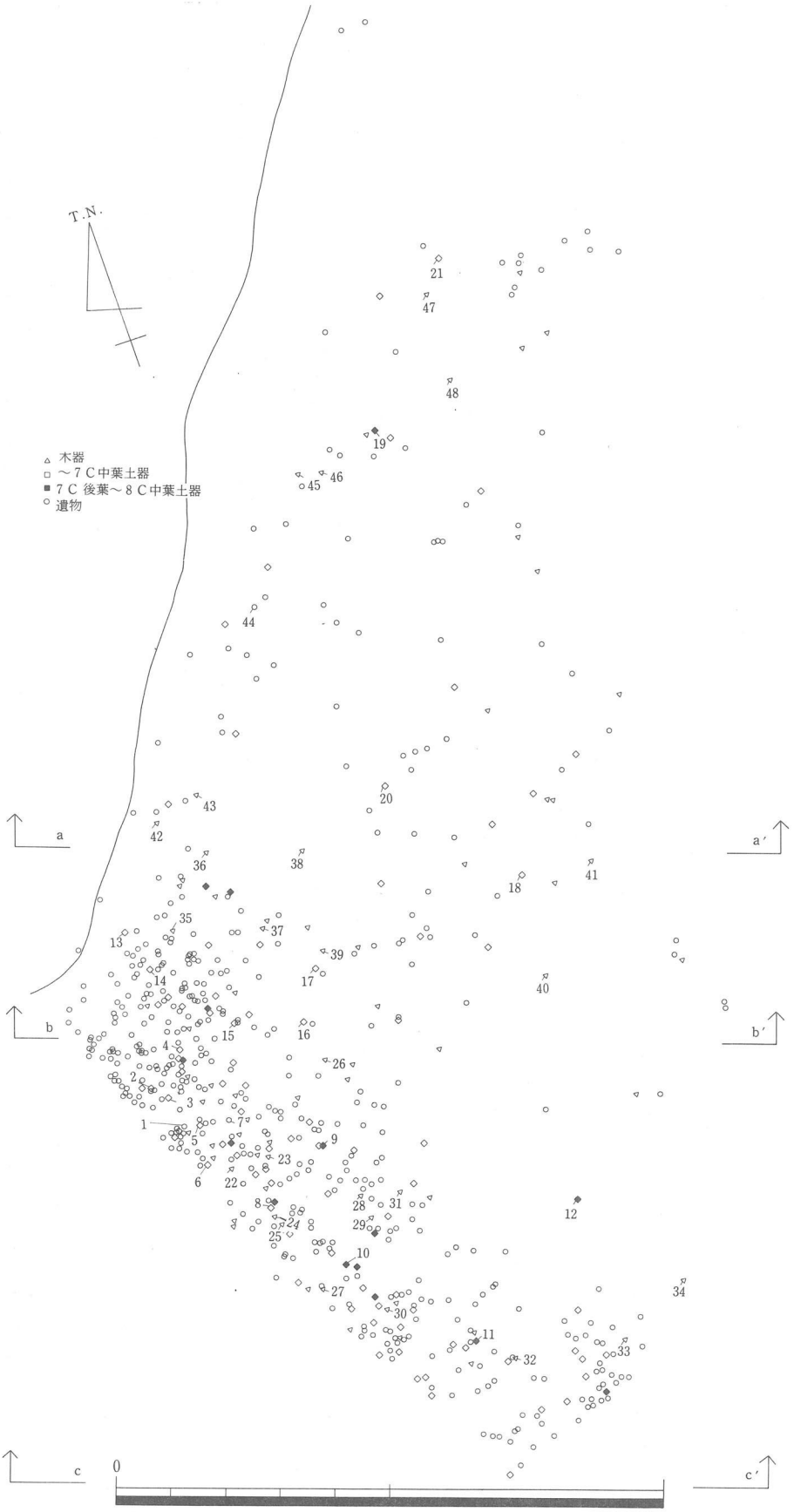
流路1では弥生後期から古墳時代前期にかけての土器を中心に少量の弥生前期に遡る石器類と古式須恵器を出土している。遺存状態から見て，遠方から押し流されてきたとは考えられない。因に3章でみたように調査区域内では古墳時代前期後半～後期前半の遺構は一切確認していないが，こうした所見からすれば近接した位置，恐らく第1低地帯の東側にその時期の遺跡が存在する可能性は極めて高いと云えよう。また出土土器等の総量コンテナ300箱以上におよぶが，投棄単位・投棄時期を区分して取り上げる事が不可能であった。

唯一土器溜り1として報告する弥生後期後半の土器群は遺物分布のかなり希薄な部分に完形ないしはそれに近い破片が折り重なるようにして出土した。点数は多くないものの同時投棄と見成しうる資料で



I　水田耕作土連続堆積層（5面以上）
II－1　黄灰褐色細砂質土層　堆定水田層
II－2　黄灰褐色粘質土層
II－3　灰褐色細砂混粘質土層　堆定水田層
II－4　暗灰色細砂層　堆定水田層
II－5　暗灰色細砂質土層　堆定水田層
II－6　暗灰褐色粘土層
II－7　青灰色細砂質土層（グライ砂）
II－8　暗灰褐色粘土層
II－9　青灰色細砂質土層
III－1　暗灰褐色粘土層
III－2　灰色砂混弱粘質土層　水田堆定層
III－3　暗灰褐色粘土層
III－4　暗青灰色砂混土層
III－5　暗灰褐色粘土層
III－6　暗青灰色砂混土層
IV－1　黒灰色粘土層
IV－2　暗褐色粗砂層
IV－3　暗黒灰色粘土層
IV－4　黒灰色粘土層
IV－5　暗黒灰色粘土層
IV－6　黒褐色粘土層
IV－7　黒褐色細砂質土層
IV－8　暗灰褐色細砂質土層
IV－9　黒褐色細砂質土層
IV－10　暗褐色粗砂層
IV－11　青黒色粘土層
V－1　灰色砂礫層（地山）

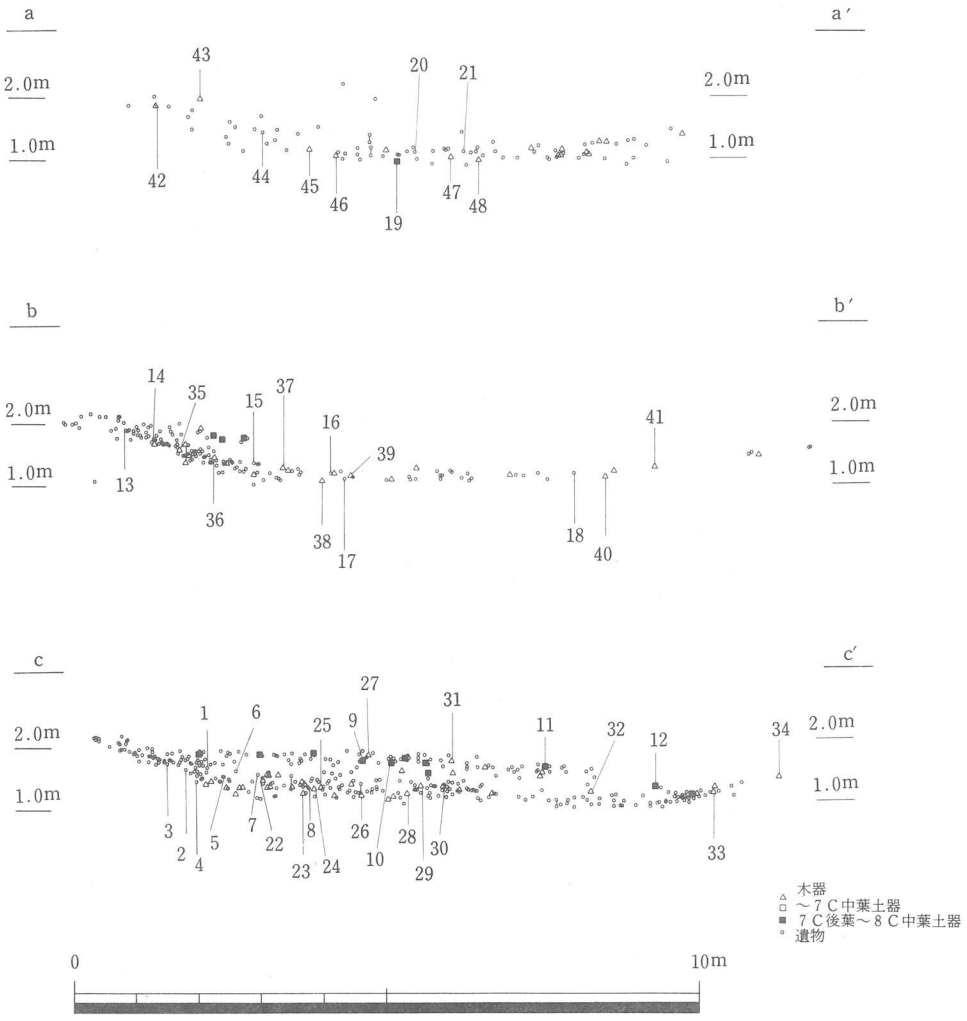
第4図　低地帯セクション2（第1低地帯流路2）



第5図　第1低地帯流路2（国道以北）遺物出土状態 平面図

ある。

流路2では少量の弥生後期土器と共に多量の7世紀初頭から8世紀代前半期の土器類・木器類を出土している。特に木器類は下川津遺跡出土の過半をこの地点で得ており，犁・壺鐙・墨書木片など重要な資料が多い。(第5・6図)はこれらのうち主な資料の出土位置を示している。流路内でも東よりの部分，つまり第1微高地に接した辺りに特に遺物は集中する傾向にある事が容易に理解できる。これらの資料は厳密に層位・地点によって分離することは困難であるが，大まかな傾向としては7世紀初頭から後葉前半までの資料が流路内に万遍無く分布するのに対して7世紀末葉から8世紀代に下る土器類（図中■印)が微高地肩部付近の上層部に集中する様子が窺える。年輪年代法で754年のデータを得た曲物底板(図中43）がこの奈良時代土器群の集中する部分で出土していることと矛盾しない。またこのような土器類の傾向に照らし合わせてみると，木器類の大半（曲物・木錘の一部をのぞく）は7世紀代の土器群に近い位置にある。最も時期比定に関心が持たれている犁（図中41）は出土位置から見ると，後述するようにこれの部品の可能性が高い不明木製品（図中30）ともども7世紀代に比定しうる蓋然性が高い。



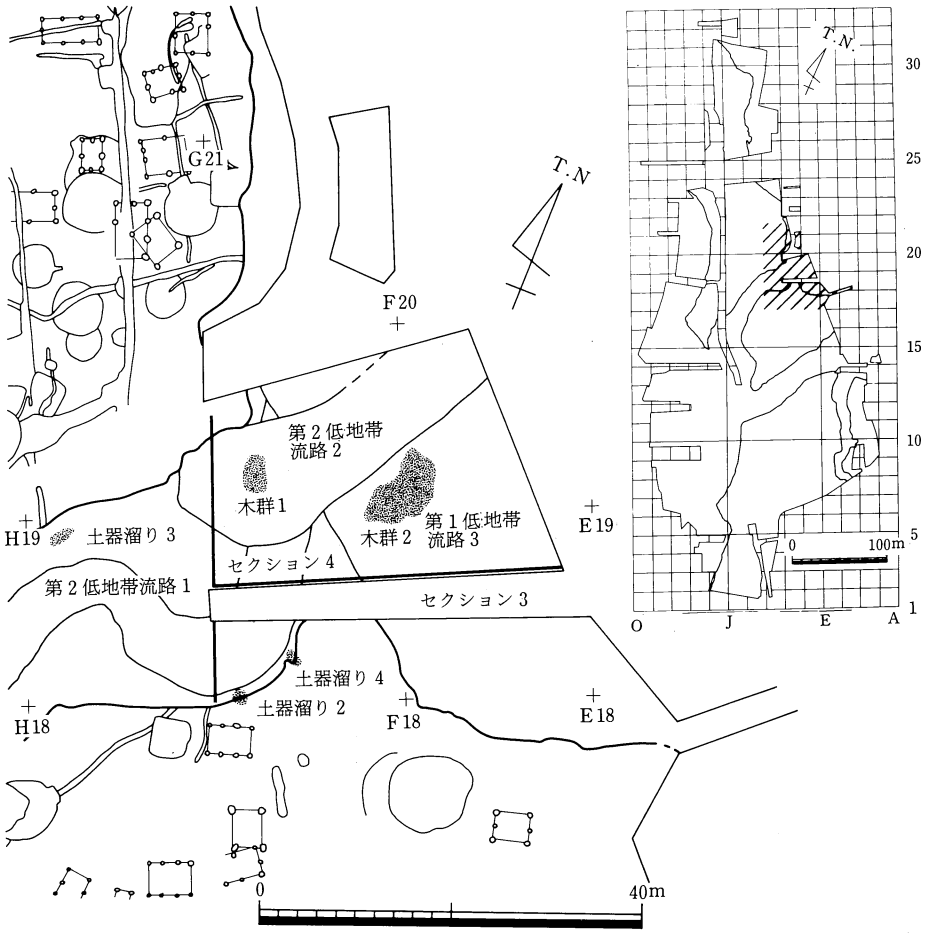
第6図　第1低地帯流路2（国道以北）遺物出土状態 断面図

2．第１低地帯・第２低地帯合流部（ＥＦ－17～19）（第７図）

第１・第２微高地間を通って北東に進んできた第２低地帯と南東方向から流れ込み第１微高地の南東隅に当たって北に抜ける第１低地帯とが調査区東縁中部（ＥＦ－17～19）で接する。第１低地帯東岸は調査区から外れている。合流部付近で第２低地帯は幅約23mを測る。セクション３・４に示したようにここでも低地帯が微高地堆積層を切り込んで形成されている事は疑いない。また第２低地帯流路１では弥生前期前半の遺物を確実に包含することからその形成はそれ以前に限定できる。したがって遺跡形成期間の大局的な地形変化は両低地部の埋積過程として理解できる。

流路は第１低地帯で一本（流路３），第２低地帯に関わるもの二本（流路１，２）を確認した。第２低地帯流路１は蛇行しながら第１低地帯に流れ込み，北東に抜けていくが，弥生時代前期には早くも埋没している。第１低地帯流路３はこれを切って流れ，７世紀代には埋没している。河床の凹地部分に弥生後期土器が貼り付いているのでこの段階には既に第２低地帯流路１を切り込んでこの位置に流れていたらしい。

第２低地帯流路２は，先に見た第１低地帯北部とも共通する平安時代の洪水砂層堆積時期に突発的に合流部に形成された深い凹地で，他の流路とは異なる。恐らく洪水時の強い水流によって合流部の川底の若干の段差部分が局部的に深く抉られ滝壺状を呈したものと考えている。



第７図　第１低地帯・第２低地帯合流部

この洪水砂堆積時期を別にすれば，恒常的な水流が期待でき河川としての機能が維持されていたと予想できるのは第1低地帯でせいぜい流路3が埋没する7世紀代まで，第2低地帯で流路1の埋没時期，弥生時代前期までにすぎない。

第1低地帯流路3では，さほど濃密ではないが南岸近くと木群1周辺である程度の遺物を出土している。木器類では斎串・人形など祭祀具類が比較的多く，また挌小破片を含むことが注目できる。第2低地帯流路1では弥生前期の土器・石器を多く見るが，木製品は全く含まない。同流路2の遺物量は多くない。9～10世紀代を中心に墨書土器を含む若干量の資料を得た。これと共に鍛冶炉残骸を出土したことは十分注目すべき点である。

水田遺構は確認していない。木群1，2を第1低地帯流路3，第2低地帯流路2で，土器溜り2を第2低地帯南岸でそれぞれ確認した。

基本層序

複数の流路の入り組んだ低地帯合流部の層序関係はかなり複雑であるが，ここでは二本のセクションを提示して報告する。セクション3で第1低地帯と第2低地帯の相互関係と埋没過程を，セクション4で第2低地帯流路1および2の関係と埋没過程をそれぞれ説明する。

セクション3（第8・9図）

第2低地帯流路1の河床は標高1.7m，微高地上面との比高約2.3mを測る。第1低地帯流路3の河床は標高1.1m，微高地上面との比高約2.9mを測り，先行する流路河床よりも約0.6m低い。

VI層－流路3堆積層で黒灰色粘土などからなる。比較的平穏な堆積環境を予想させる。層厚1.8m，上面での比高約2.2mを測る。南端肩部付近上部で若干量の奈良時代に下る土器を見るほかは大部分6世紀末から7世紀台の遺物である。河床直上で少量の弥生後期土器片を持つ。木群1は本層上部に埋没している。

V層－第2低地帯流路1堆積層で黒色ないし黒褐色の粗砂層・粘土層からなる。層厚約1.3m，上面での比高約1mを測る。多量の弥生前期前半の遺物を，特に河床直上層に多量に含む。

IV層－V層上面の薄い層で第2低地帯にのみ堆積する。灰色ないし茶灰色の砂混じり粘土層で奈良時代までの遺物を少量含む。

III層－第1低地帯・第2低地帯に共通して堆積する黄灰色細砂層。いわゆる洪水砂層。層厚1m，上面での比高は僅かに0.1mに過ぎない。合流部南側で第2微高地が半島状に突出した辺りで本層上面に平安末以降の遺構が形成されている。

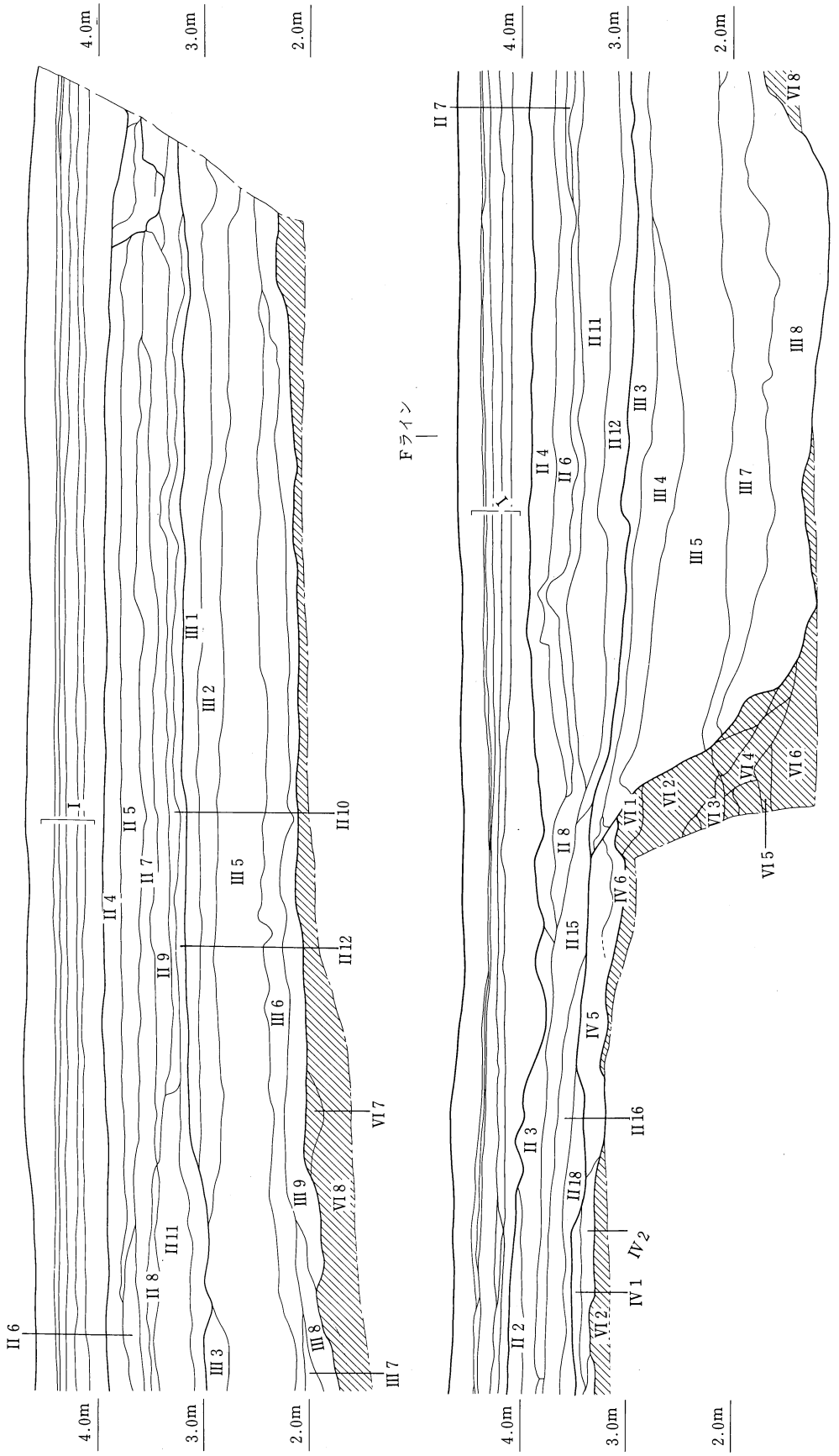
I層－現耕土およびその下部に連続する旧耕土層。マンガン・鉄分集積層の枚数から見て4面以上の旧耕土面が想定できるが，上限は確認できていない。

セクション4（第11図）

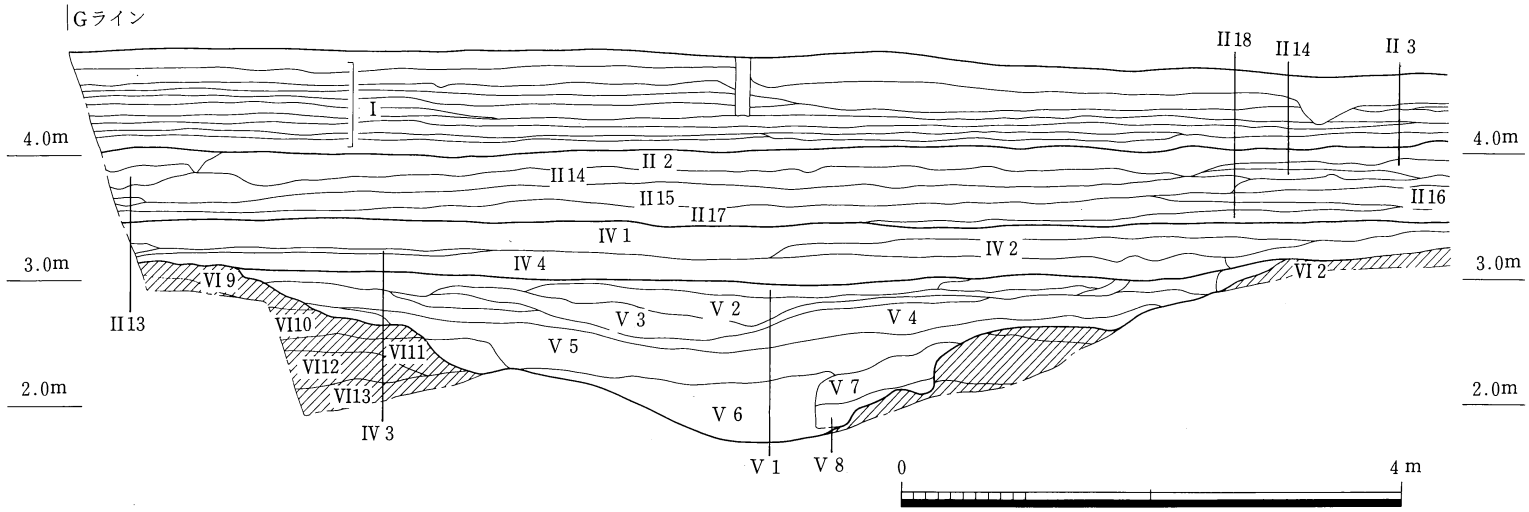
第2低地帯流路2の河床は標高0.6m，微高地上面との比高約3.6mを測り，この地点の流路のなかでは最も深い。

V層－第2低地帯流路1堆積層で黒色ないし黒褐色の粗砂層・粘土層からなる。上面で比高約1.2m，弥生前期前半の遺物を多量に含む。

IV層－V層上面の薄層で茶灰色粗砂層・粘土層からなる。本層から続く南側肩部で土器溜り2を始め多量の弥生後期土器を検出している。

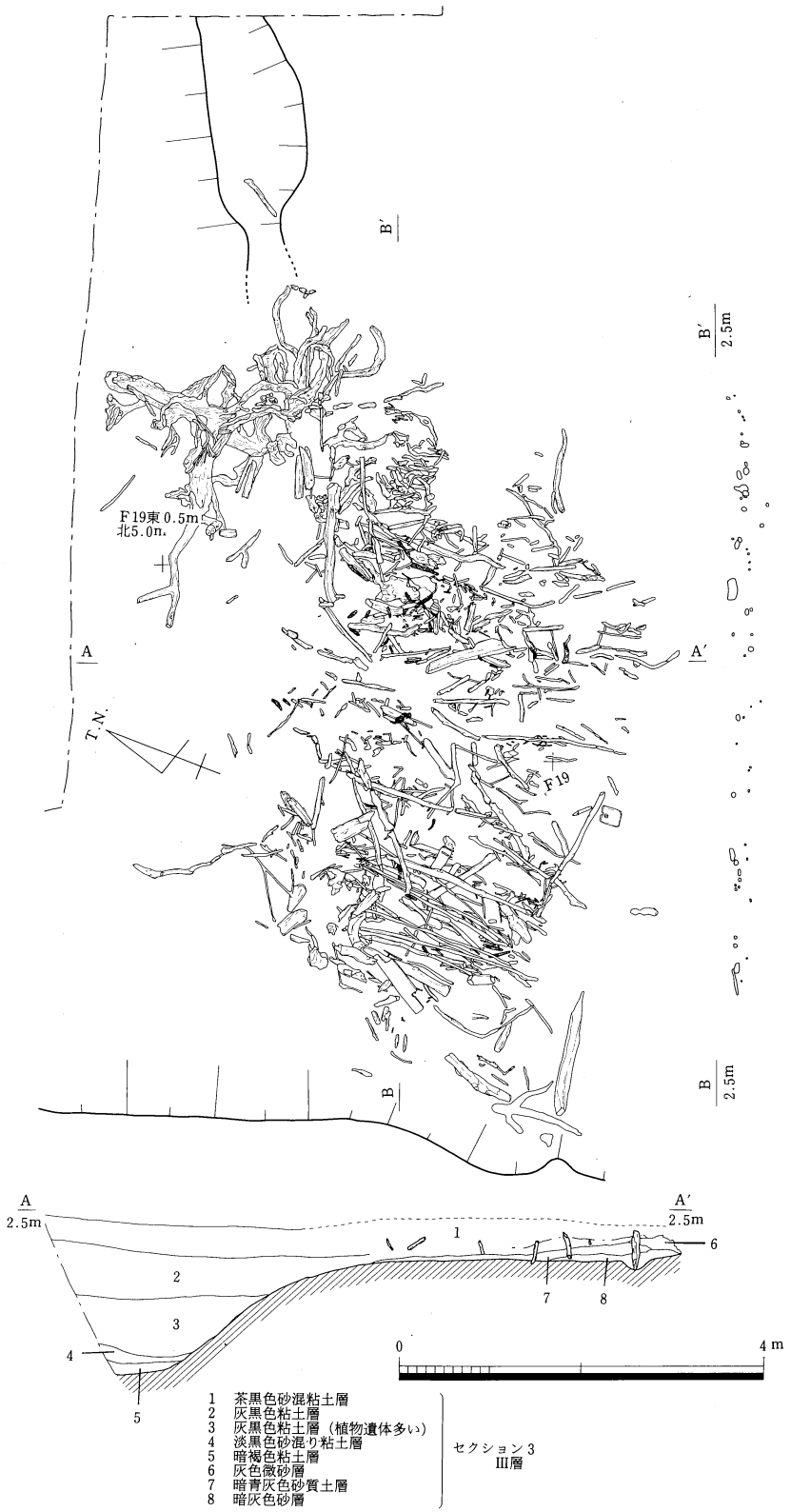


第8図　低地帯セクション3（第1低地帯流路3・第2低地帯合流部）①

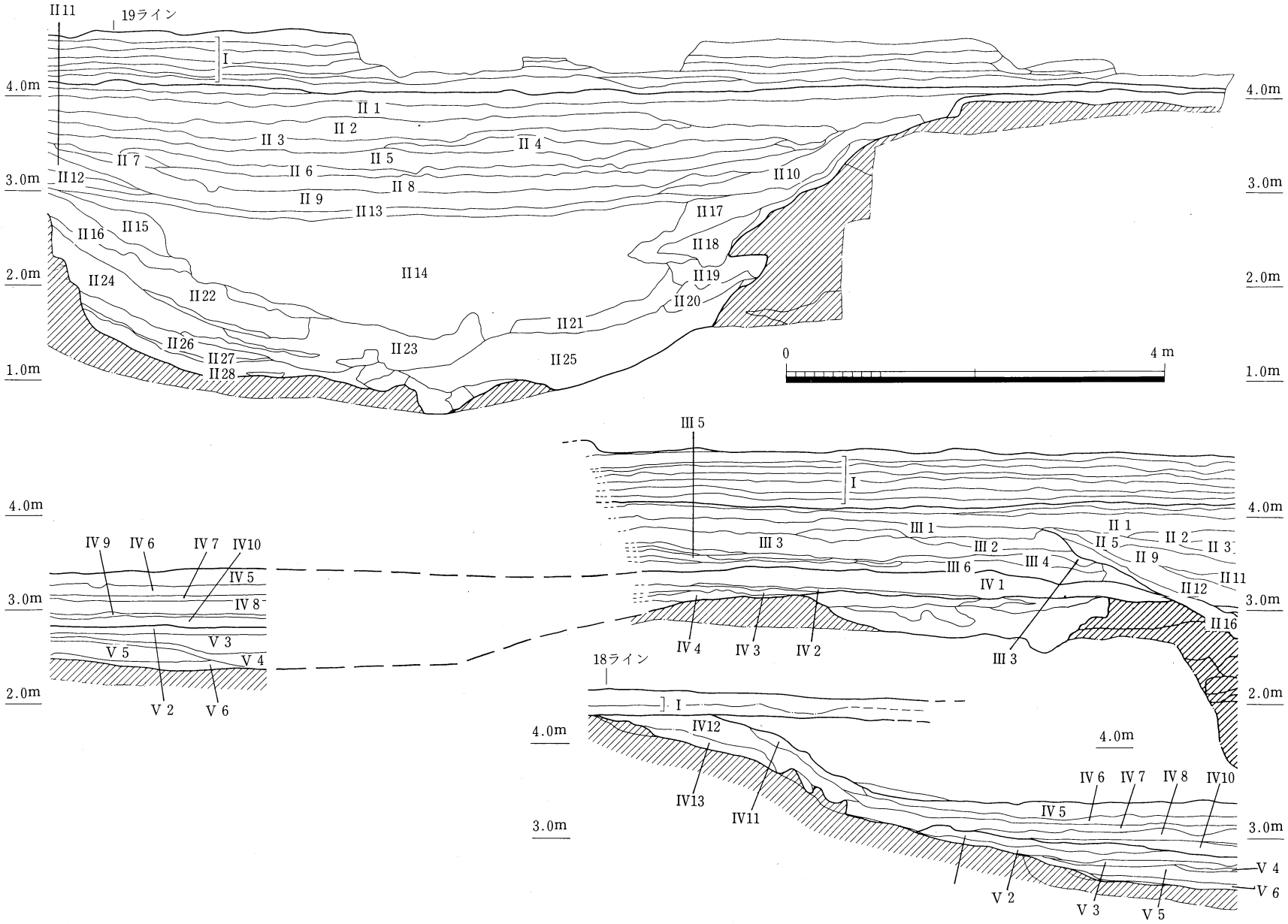


I	水田耕作土連続堆積層（4面以上）	III－1	灰色粘土混淡灰褐色細砂層		
II－1	灰黄色粘質土層	III－2	暗灰色細砂層		
II－2	灰褐色土層	III－3	砂混暗灰色粘土層	V－5	粗砂混暗灰茶色粘土層
II－3	暗灰黄色砂質土層	III－4	砂混灰黒色粘土層	V－6	黒色粘土層
II－4	黄褐色砂質土層	III－5	灰黒色粘土層　木群埋没層	V－7	青灰色粘土層
II－5	黄灰褐色細砂質土層	III－6	砂混黒色粘土層	V－8	青灰色シルト層
II－6	黄灰色細砂層	III－7	青灰色粘土混黒色粘土層	VI－1	青灰白色粘土層
II－7	黄灰色細砂層	III－8	灰黒色粘土層	VI－2	暗青灰白色粘土層
II－8	淡黄灰色細砂層	III－9	黒色砂礫層	VI－3	青灰色粘土層
II－9	淡黄灰色細砂層	IV－1	灰色粗砂混砂質土層	VI－4	暗青灰白色粘土層
II－10	黄灰色細砂質土層	IV－2	黒色粘質土層	VI－5	灰白色粗砂層
II－11	青灰色細砂質土層	IV－3	灰色砂混粘土層	VI－6	暗青灰色砂礫層
II－12	淡緑灰色微砂層（僅かにグライ化）	IV－4	粗砂混茶灰色粘土層	VI－7	粗砂混暗青灰色粘土層
II－13	灰茶褐色粗砂層	IV－5	粗砂混灰色砂質土層	VI－8	暗青灰色砂礫層
II－14	灰色シルト層	IV－6	黄青灰色粘土層	VI－9	淡黄灰色粘土層
II－15	黄灰褐色細砂層	V－1	茶灰色粘土層	VI－10	灰黒色砂層
II－16	黄灰褐色細砂層	V－2	茶黒色粘土層	VI－11	淡灰褐色砂層
II－17	灰色砂質土層	V－3	灰黒色粗砂層　弥生前期包含層	VI－12	淡青灰色細砂層
II－18	暗灰色砂質土層	V－4	黒色粘土層	VI－13	黒色・青灰色粘土ブロック層

第9図　低地帯セクション3（第1低地帯流路3・第2低地帯合流部）②



第10図　木群1　出土状態図



第11図　低地帯セクション4（第2低地帯流路1・2）

I	耕作土連続堆積層（5面以上）	II－11	微砂混淡灰色粘土層	II－20	暗青灰色粘質土層（有機質を多量に含む）	III－3	灰茶褐色粗砂層
II－1	黄灰褐色砂質土層	II－12	灰色粘土層	II－21	灰茶褐色粘土層（有機質を僅かに含む）	III－4	灰色砂層
II－2	黄灰褐色砂質土層	II－13	暗灰茶色粘土層（茶色有機物ラミナあり。斎串群）	II－22	粘土混暗灰茶色細砂層（有機質を多量に含む）	III－5	暗茶灰色細砂層
II－3	黄灰色細砂質土層	II－14	暗灰褐色粘土層（有機物を含む）	II－23	暗灰色粘土層	III－6	灰色砂質土層
II－4	淡灰色シルト層	II－15	暗灰色粘土層（細砂、有機質を含む）	II－24	粘土混暗青灰色細砂層	IV－1	灰色砂質土層
II－5	灰色粘土層（僅かに砂含む）	II－16	黒灰色細砂層（有機質を含む）	II－25	青灰色細砂層	IV－2	黒茶色粘土層
II－6	灰緑色砂質土層（グライ化進む）	II－17	黒青灰色粘質土層（斎串群）	II－26	暗灰色砂礫層	IV－3	黒色粘質土層
II－7	淡青灰色粘土層	II－18	暗灰茶色粘質土層	II－27	砂混暗灰褐色粘土層	IV－4	粗砂混茶灰色粘土層
II－8	淡青灰色粘土層	II－19	暗茶褐色砂質土層	II－28	灰色砂層	IV－5	淡茶灰褐色砂質土層
II－9	灰色粘土層			III－1	灰黄色粘質土層	IV－6	灰色粘質土層上位水田相当層？
II－10	灰色粘土層			III－2	灰褐色砂質土層	IV－7	黒茶青灰色粘質土層弥生後期末の包含層
						IV－8	暗青灰色粗砂層
						IV－9	暗茶青灰色粘質土層下位水田相当層？
						IV－10	暗青灰褐色粗砂層
						IV－11	灰褐色粘質土層
						IV－12	暗褐色粘質土層
						IV－13	粗砂混黒褐色粘質土層弥生前期包含層
						V－1	暗茶灰褐色粘質土層
						V－2	粗砂混黒青色粘土層
						V－3	黒色粘土層
						V－4	灰黒色粗砂層
						V－5	黒色粘土層
						V－6	灰色粗砂層

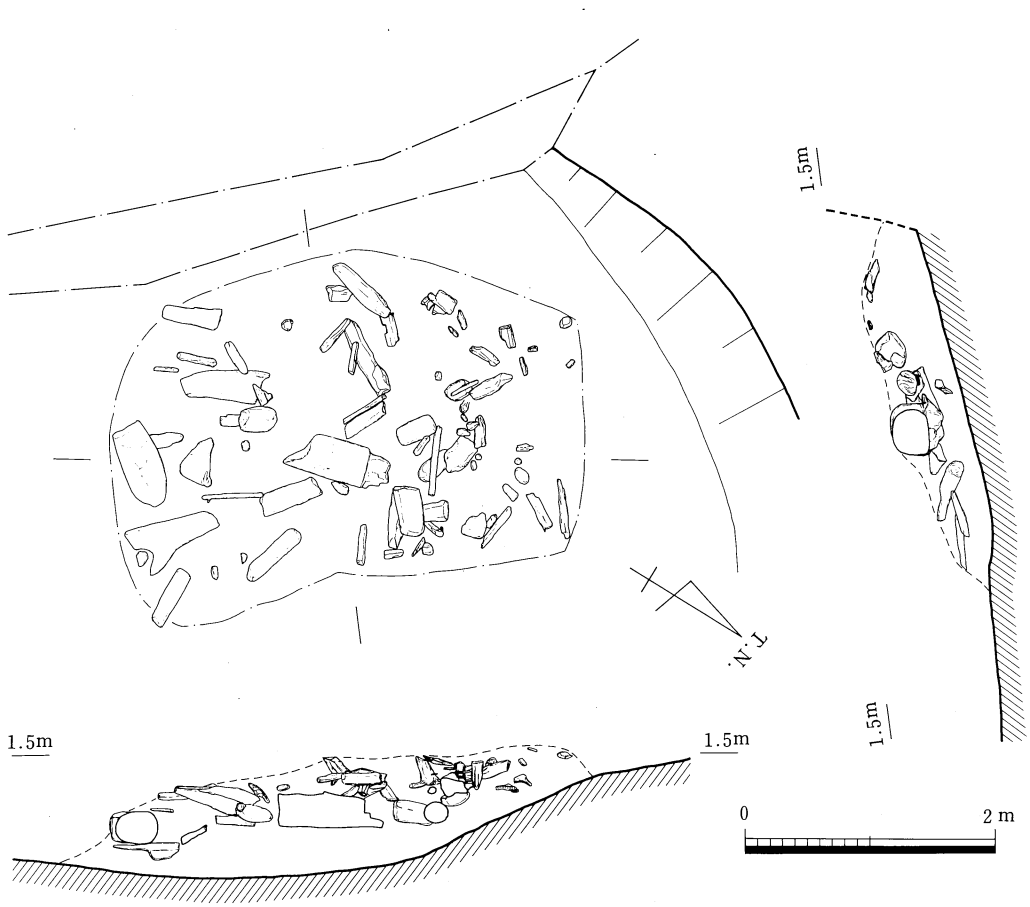
II層－平安時代の洪水堆積層で第２低地帯流路２とした落ち込みは本層堆積途中で切り込まれ，完了時には完全に埋没している。全体的には他で確認した一連の洪水砂層と同様に黄灰色ないしは灰褐色の細砂層からなるが，流路２の中下位では多量の有機質を交えたシルトあるいは粘土が互層状・ブロック状に汚く堆積している。出土遺物は多くないが，それらによれば本層堆積開始は奈良時代末ないしは平安時代初頭に遡る可能性がある。また流路２最下部で木群２を検出し，中位に斎串・人形の集中地点がある。

Ｉ層－現耕土およびその下部に連続する旧耕土層。

遺構その他

木群１（第10図）

第１低地帯の確認部分のほぼ中央，Ｅ，Ｆ19区でＶ層上部，標高約2.2～2.5mで検出した。流路方向にほぼ直行するように東西に長く僅かに弧を描き，東西９m，南北６mの範囲に建築部材・加工木・自然木小片が集中している。この中には丸太杭を中心に，切り落とされただけの樹皮付き自然木あるいは板材・建築部材等の加工度の高い製品を含む。丸太杭は長0.4～1.2m，平均径0.05mと全般的に細く不揃いである。



第12図　木群２　出土状態図

それぞれの木片は多くの場合横倒しになり，流路方向に沿うものが多い。中心部付近では部分的に２～３段に折り重なるように出土したが，規則的に積み上げたとは見成し難い。また木片相互を緊縛・固定した痕跡はない。しかしながら図示したように木群下部から集中的に立杭を検出した事や，木片の方向にある程度の規則性が見られる事，加工の程度を問わなければ大多数が何らかの形で手を加えられた製品である事から，この位置に築かれた構築物の残骸である可能性は否定できないが，使用材の規模から考えてさほど強固な構造物は想定が難しい。検出状況からその本来的な機能・形態を特定・復元することは困難である。なお出土層位や伴出遺物から見て７世紀後半代の所産と推定する。

木群２（第12図）

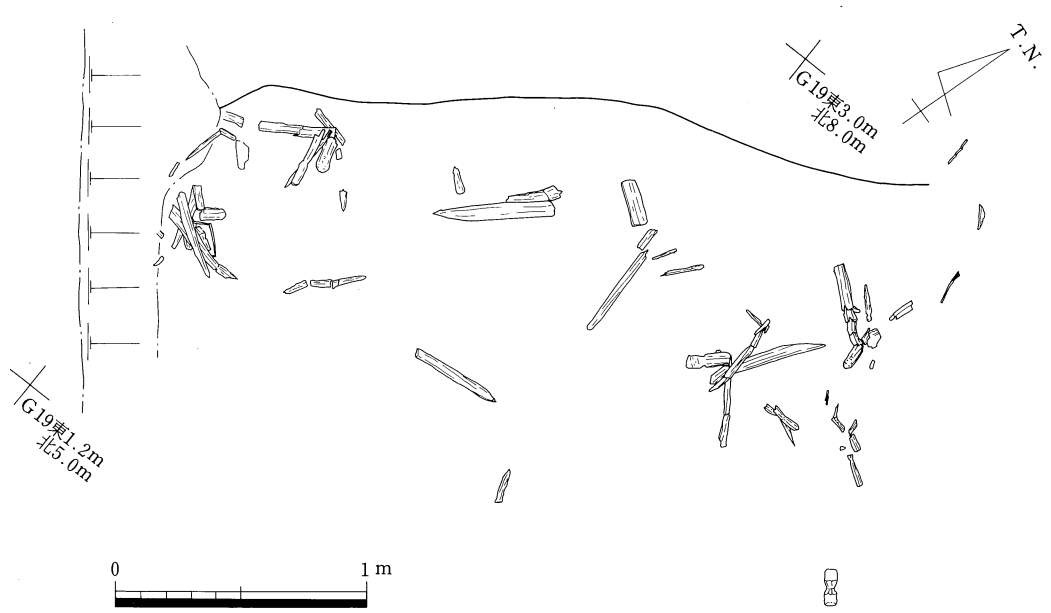
第２低地帯流路２最下部の凹みの約3.8m×2.7mの範囲に径0.15～0.35m，長0.3～0.7m程度の短く裁断された丸太材など40点余りがが無秩序に集中しているのを検出した。出土状況から見て何らかの構造物とは見成し難い。また木群１とは異なり，切り落とされた樹枝や杭類は含まない。形態的に見て柱材の一部の可能性が高いものが目立つ。（第159図）いずれも軽度の加工は施されているが表面の摩耗が著しい。明らかに加工後に端部を粗く切断されたとおぼしいものも含まれている。老朽化した建築材を解体・集中投棄した可能性を想定している。

搬出土器類が乏しく年代比定は困難であるが，第２低地帯流路２最下層に位置することから平安時代初頭頃を想定している。

第２低地帯流路２斎串・人形集中地点（第13図）

第２低地帯流路２北辺中央部の中位，標高約2.9mで斎串・人形の集中する部分を検出した。これらは東西に帯状に長く３m×１mの範囲に15本の斎串と34本の人形，曲物一個体分が認められた。配置に規則性は見いだし難いが，一部の人形は直立し，突き立てられた状態を示している。使用時の様相をかなり忠実にとどめており，かつ使用単位を反映していると思われる。

直接的に伴出する土器類はないが，出土層位・斎串・人形の形態から平安時代前半を想定している。



第13図　第２低地帯流路２　斎串・人形集中状態図

土器溜り 2

第 2 低地帯が合流部の直前で南に大きく蛇行する部分の南岸肩部では多量の弥生後期土器を検出している。二つの特に目だった集中地点があり，それらを土器溜り 2 ・ 4 とした。土器溜り 2 は西側に位置し肩部緩斜面の 5 m × 2 mの範囲におよそコンテナ10箱程度の弥生後期土器が集中していた。土器溜り下部は若干窪む程度で明確な遺構は確認していない。検出状況からは分離する根拠は見い出し難いが出土土器の形態的特徴を見るかぎりでは，一定の時期幅が認められた。

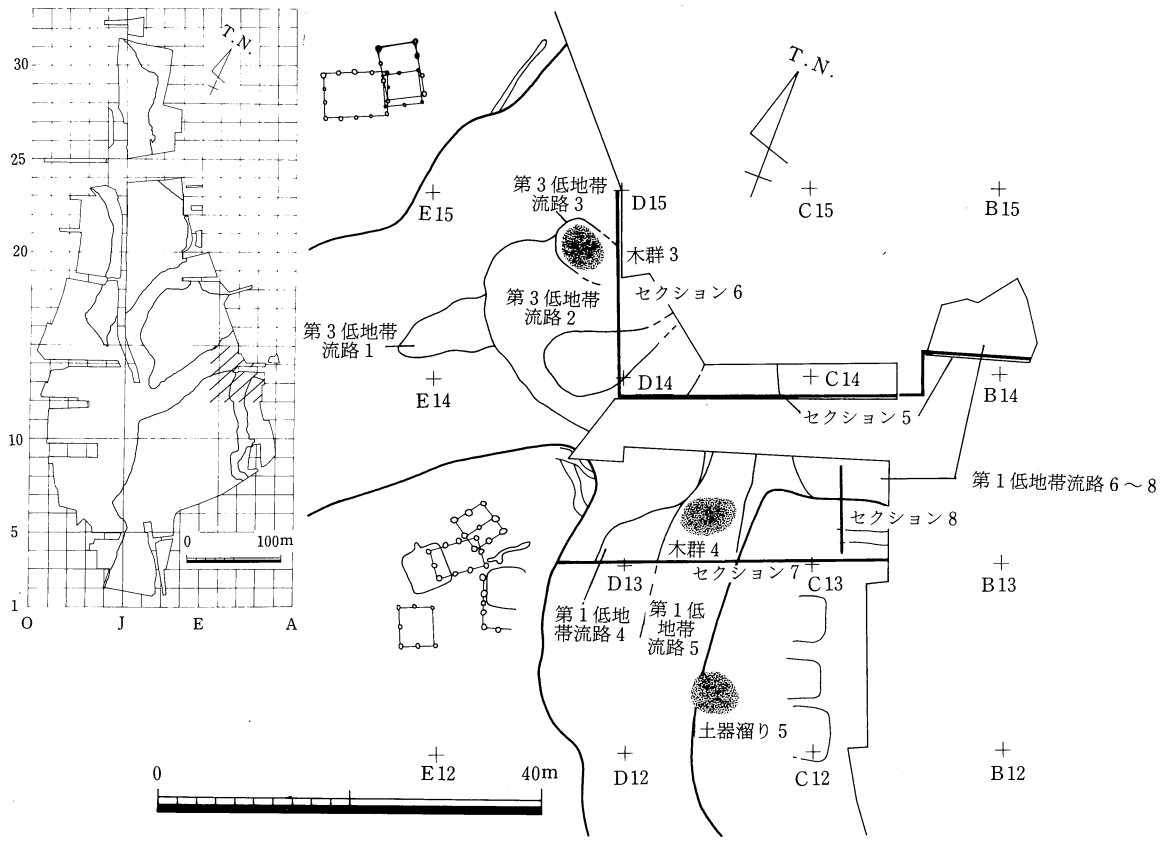
土器溜り 4

東側の土器溜りである。第 2 低地帯の中心にむかって幅1.4m，長さ2.3mで帯状に土器が集中していた。完形品を含む大形片が多いが，器種組成などの点で特殊性は認められない。当該期の一般的な資料である。出土状況・出土土器の形態から見て，一括資料と見成して大過無い。ほぼ弥生後期中葉に比定できる資料である。

3．第 1 低地帯・第 3 低地帯合流部（ＣＤ－13・14）（第14図）

第 2 ・第 4 微高地間を通って北東に進んできた第 2 低地帯と南から流れ込む第 1 低地帯とがＣＤ－13・14で接する。更に第 3 微高地東側に続く別の低地帯がこの部分で第 1 低地帯に接続する。以上三本の低地帯を流れる計 7 本の流路がこの地点で複雑に重なり合っている。

第 1 低地帯および東からそれに接続する低地帯に面する部分の微高地縁辺は，大抵鋭く切り立っており，低地帯形成時の激しい侵食作用と相対的に短期間の埋没を物語っている。これに対して第 3 低地帯に面する側の微高地斜面は一部で境界線を引くことを躊躇するほどに緩やかである。



第14図　第 1 低地帯・第 3 低地帯合流部

第3低地帯は前述の通り，微高地上部を形成する黄色粘土層の堆積（第3低地帯の全面につながる。）以後，これを侵食して貫通する流路は全く見られない。遅くとも弥生前期段階には恒常的な河川としての機能を一切失っている。恐らくこの点と密接に関わるのであろうが，標高3.2m前後と他低地帯に比べ最深部標高が最も高い。このため第1低地帯との間には一定の落差が認められる。この部分にかぎって一時的な出水時に形成されたと考えられるクレバス状の「落ち込み」が確認できる。規模の点では第2低地帯流路2の「滝壺」状落ち込みに劣るが，形成地点・形状の点から同様の性格を想定している。第3低地帯流路としたものはすべてこうしたものである。三本の流路は何れも一定量の遺物を包含し，その年代観から，流路1が弥生時代後期，流路2が奈良時代末ないしは平安時代初頭，流路3が同末までにそれぞれ形成され埋没したと考えられる。流路1は末端部分を残し，ほぼ後出する流路2に削り取られている。流路2は二筋に別れており，稜線部分の末端が崩落しているために一見馬蹄形を呈している。間の削り残し部分の大半は流路1の堆積物から成る。なお本流路から一群の人形・斎串を検出している。流路3は流路2の北端を削りこんで形成されるが，大半が調査区外に出てしまい，また溝（SD）と重複するため全貌は判りにくい。

第1低地帯とそれに続く東の低地帯では最終段階の流路5および8と，それに先行する4，6を確認している。流路5，8は古墳時代後期までには形成され，同末にはほぼ同じ頃に埋没している。包含遺物では明確な時期差は見いだし難いが，層位関係から見て，流路8の埋没がやや遅い。

先行する3本の流路はこれらによって主要部分を削り取られ部分的にその残骸が確認できるにすぎない。流路6は弥生時代前期中葉の遺物を少量包含する。流路4，7は同後期の遺物を包含する。

この部分では明確な水田遺構を確認していないが，後述するようにその存在を推定する材料は得た。また木群3・4，土器溜り3を検出している。またセクション7の二箇所で実施したＰＯ分析では，その部分のII－10層（平安時代前半）が水田耕作土層となる可能性が高い。

基本層序

本地点の基本層序はセクション5～7の三本で把握した。セクション5では合流部そのものの堆積状況を，同6では合流直前の第3低地帯を，同7では合流直前の第1低地帯，同8では第3微高地西北端部斜面の南北土層で部分的ではあるが，第1低地帯流路6～8の堆積状況を示している。

セクション5（第15・16図）

Ⅷ層－第1低地帯流路7堆積層。この部分も最深部にまで達していないが，河床は標高1.3mより低い暗灰色ないしは淡黒色の砂層・粘土層が複雑に入り乱れて堆積する。

Ⅶ層－第3低地帯流路1の一部。最深部まで発掘しきれていないが，河床は標高1.5mより低いことは確実である。青灰色の砂層・粘土層から成る。

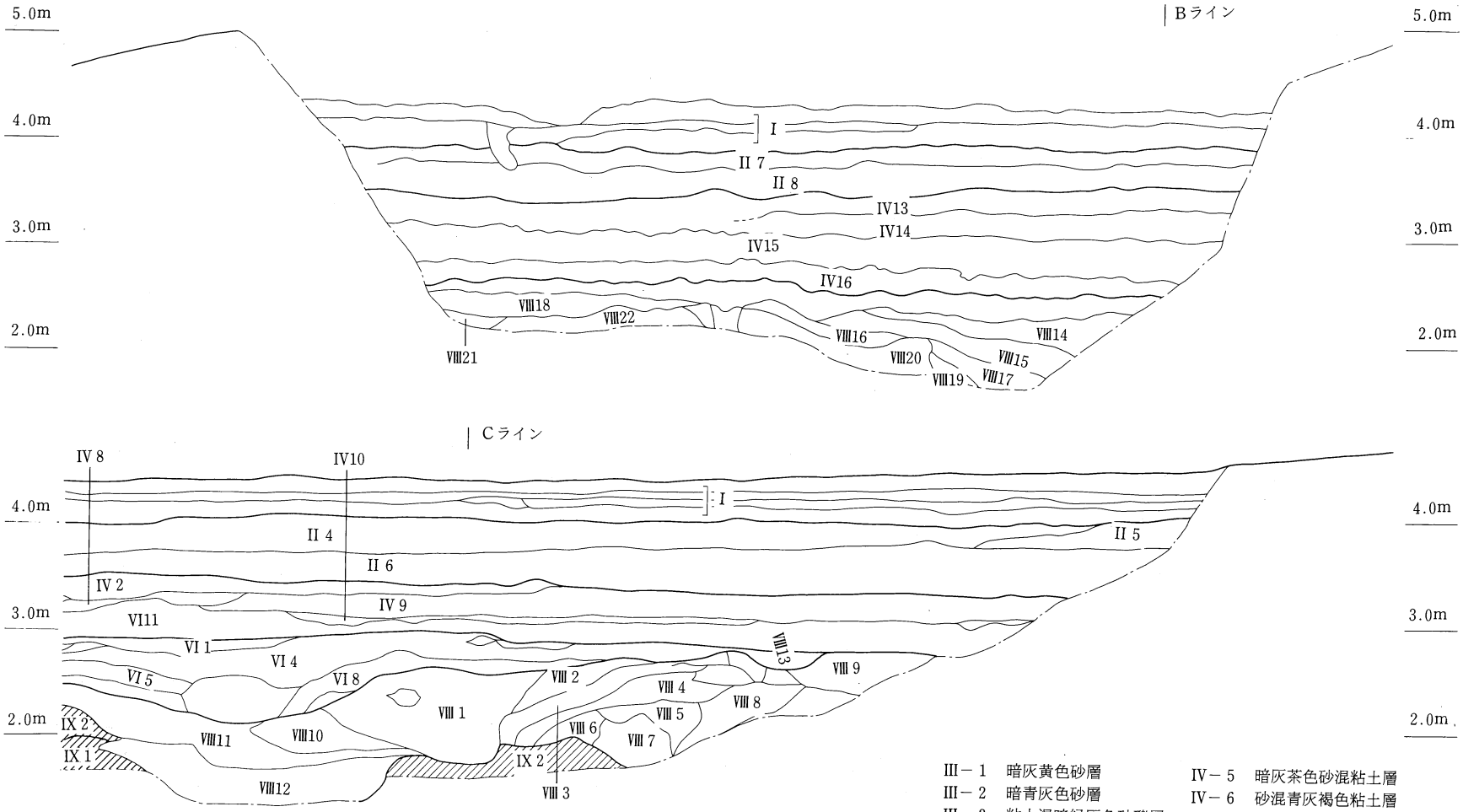
Ⅵ層－第1低地帯流路8堆積層。暗褐色系統の粘土層・砂層からなり，上面での比高約1.1mを測る。

Ⅴ層－第1低地帯流路5堆積層。淡黒色粘土層・砂層からなり，上面での比高約1.3mを測る。

Ⅳ層－第1低地帯流路5，8の上面に堆積して，第3低地帯流路2に切られている。暗灰色粘土層が主体を成す。本層上面で微高地面との比高0.7mを測る。

Ⅲ層－第3低地帯流路2堆積層。灰茶色ないしは青灰色の砂混じり粘土層から成る。本層上面で微高地面との比高0.7mを測る。

Ⅱ層－青灰色ないしは黄灰色の粘土層で合流部全域に堆積する。これ以北の地点では平安期の洪水砂層

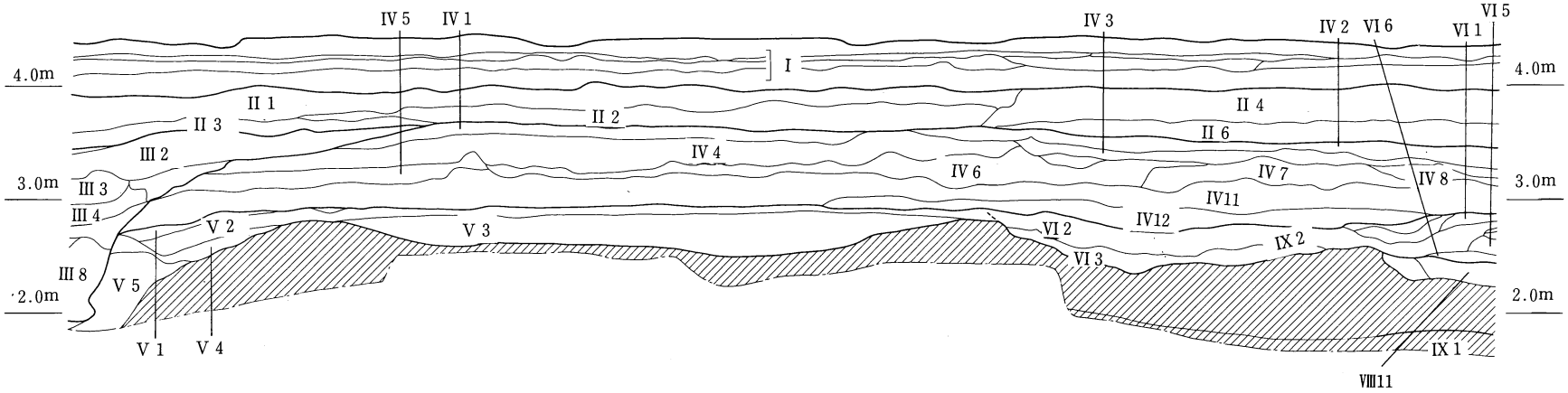


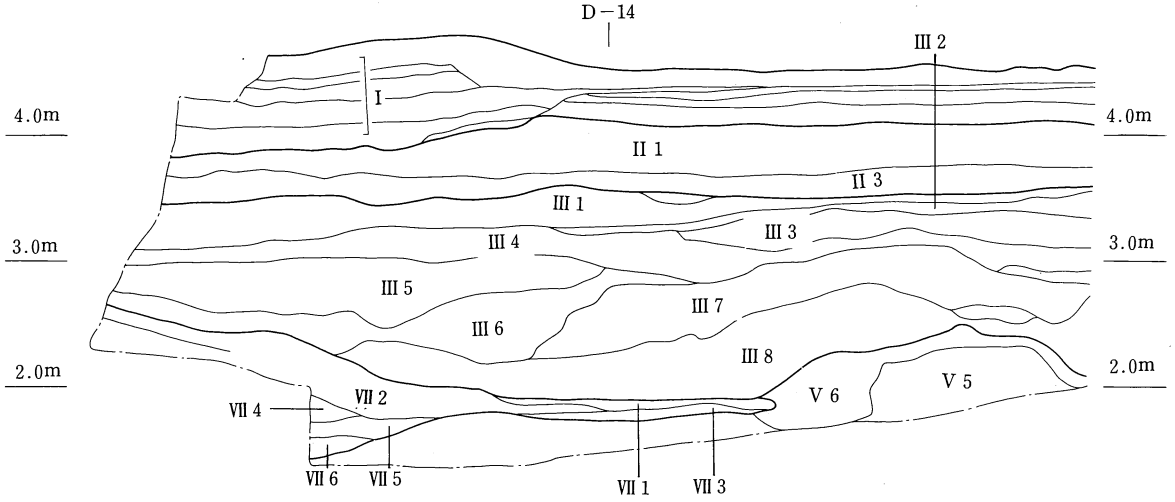
I　水田耕作土連続層
II－1　淡灰白色粘土層
II－2　灰白色粘土層
II－3　青灰色粘土層
II－4　淡黄灰色粘土層
II－5　灰黄色粘土層
II－6　灰色粘土層
II－7　淡青灰色シルト層
II－8　淡青灰色粘土層

III－1　暗灰黄色砂層
III－2　暗青灰色砂層
III－3　粘土混暗緑灰色砂礫層
III－4　青灰褐色砂層
III－5　砂混暗灰色粘土層
III－6　砂混暗青灰色粘土層
III－7　粘土混暗青灰色砂層
III－8　砂混暗灰色粘土層
IV－1　淡黄青色粘土層
IV－2　暗青灰色粘土層
IV－3　粘土混淡灰黄色砂層
IV－4　粗砂混灰黄色粘土層

IV－5　暗灰茶色砂混粘土層
IV－6　砂混青灰褐色粘土層
IV－7　淡黄青色粘土層
IV－8　暗灰茶色砂混粘土層
IV－9　暗灰茶色砂混粘土層
IV－10　粘土混淡灰黄色砂層
IV－11　暗灰茶色粘土層
IV－12　暗青灰色粘土層
IV－13　暗青灰色粘土層
IV－14　暗青灰色粘土層
IV－15　暗青灰色粘土層
IV－16　暗灰色粘土層

第15図　低地帯セクション5（第1低地帯・第3低地帯合流部）①

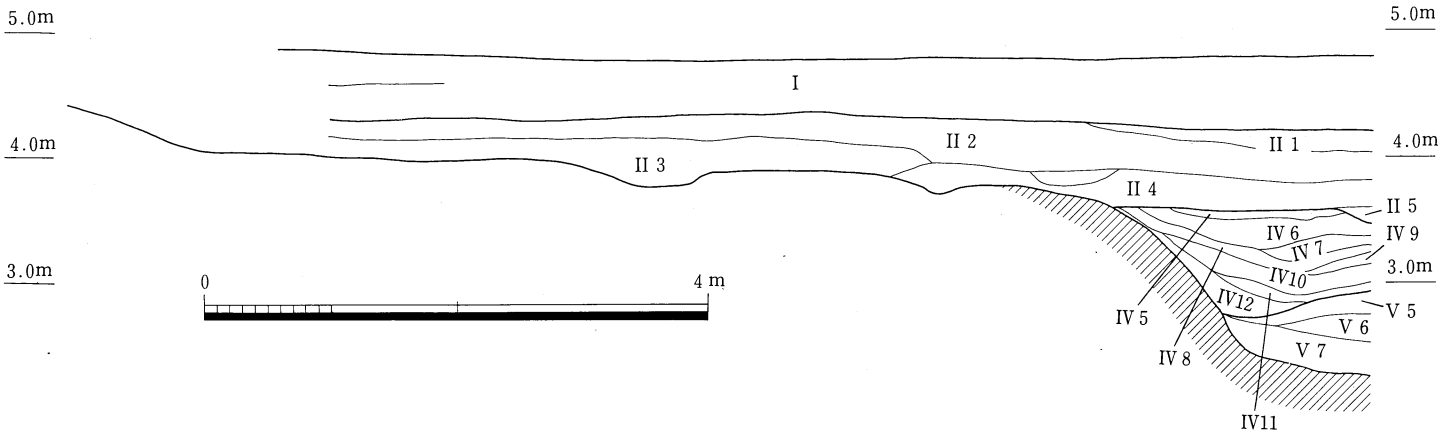




V－1　砂混淡黒色粘土層
V－2　砂混淡黒色粘土層
V－3　暗黄黒色砂層
V－4　淡黒色シルト層
V－5　黒色砂礫層
V－6　暗灰色粘土層
VI－1　淡黒色砂層
VI－2　砂混淡黒褐色粘土層
VI－3　暗灰褐色粘土層
VI－4　粘土混暗緑灰色砂礫層
VI－5　暗青灰色砂層
VI－6　暗灰黄色砂層
VI－7　暗茶灰色砂層
VI－8　砂混暗灰色粘土層
VII－1　暗灰色砂層（有機質含む）
VII－2　暗茶灰色砂層
VII－3　砂混青灰色粘土層
VII－4　暗黄色砂層
VII－5　砂混青灰色粘土層
VII－6　暗青灰色砂層
VIII－1　粘土混暗緑灰色砂礫層
VIII－2　粘土混暗青灰色砂層
VIII－3　砂混黒色粘土層
VIII－4　砂混暗灰色粘土層
VIII－5　砂混暗青灰色粘土層
VIII－6　砂混青灰色粘土層
VIII－7　暗灰色粘土層
VIII－8　暗灰色砂層（有機質含む）
VIII－9　砂混黒色粘土層
VIII－10　淡灰褐色砂層
VIII－11　暗青灰色砂礫層
VIII－12　青灰色粘土混黒色粘土層
VIII－13　暗灰色砂混粘土層
VIII－14　暗青灰褐色粘土層
VIII－15　暗灰色粘土混砂層
VIII－16　淡黒色粘土混粗砂層
VIII－17　淡黒色粘土混粗砂層
VIII－18　淡黒色砂混粘土層
VIII－19　淡黒色粗砂混粘土層
VIII－20　暗灰色砂礫層
VIII－21　淡黒色シルト層
VIII－22　暗灰色砂層
IX－1　淡青灰色砂層
IX－2　黒灰色砂礫層

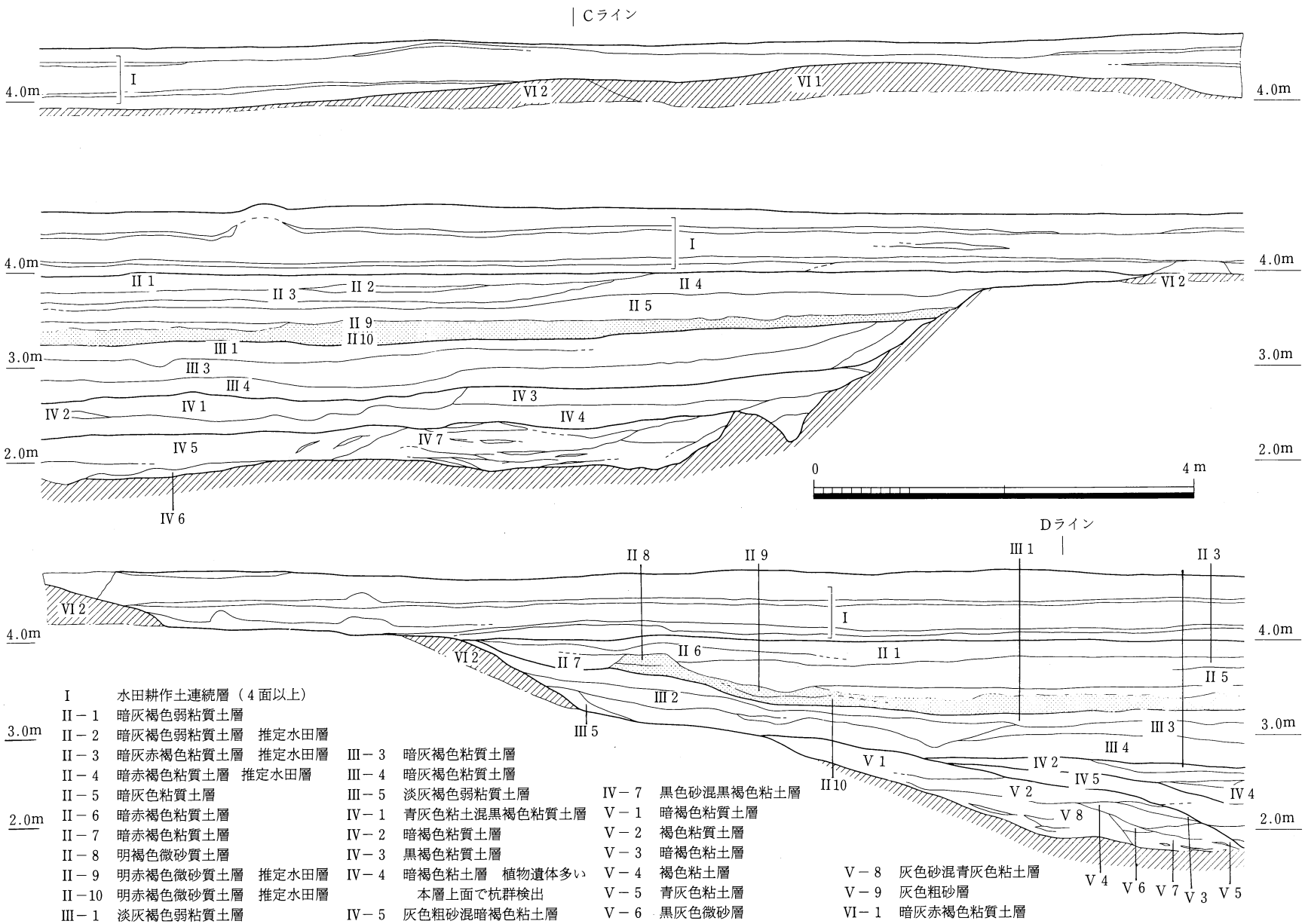
第16図　低地帯セクション5（第1低地帯・第3低地帯合流部）②

第17図　低地帯セクション6（第3低地帯流路1・2・3）①



I	耕作土連続層（5面以上）	IV－2	（黄混）青灰色砂（細砂）	V－1	細砂混暗灰色シルト層
II－1	黄灰褐色粘質土層	IV－3	茶灰色粘質砂層	V－2	砂礫混暗灰色シルト層
II－2	黄灰褐色粘質土層	IV－4	灰色粘土	V－3	黄青灰色粘質土層
II－3	茶褐色粘質土層	IV－5	青灰色粘土層	V－4	砂礫混暗灰色シルト層
II－4	黄褐色粘質土層	IV－6	灰色シルト層	V－5	灰黒色粘土混青灰色粘土層　弥生土器多い
II－5	黄灰色シルト層	IV－7	灰黒色砂層	V－6	黄灰粗砂混青灰粘土層
III－1	緑灰色粘土層（やや砂質で軟）	IV－8	灰緑色砂層	V－7	砂礫混青灰粘土層　弥生含む
III－2	粗砂混黄褐色粘質土層	IV－9	黄灰色砂層	VI－1	黄茶色粘土層
III－3	茶灰色粘質砂層（木片を含む）	IV－10	灰黒色粘質土層（木を含む）	VI－2	黒黄色粘土層
III－4	暗灰色粘質砂層（木片を多く含む）	IV－11	灰緑色砂層	VI－3	黄灰色シルト層
IV－1	黒色・暗灰色粘質砂	IV－12	青灰色粘質土層		

第18図　低地帯セクション6（第3低地帯流路1・2・3）②



I　水田耕作土連続層（4面以上）

II－1　暗灰褐色弱粘質土層
II－2　暗灰褐色弱粘質土層　推定水田層
II－3　暗灰赤褐色粘質土層　推定水田層
II－4　暗赤褐色粘質土層　推定水田層
II－5　暗灰色粘質土層
II－6　暗赤褐色粘質土層
II－7　暗赤褐色粘質土層
II－8　明褐色微砂質土層
II－9　明赤褐色微砂質土層　推定水田層
II－10　明赤褐色微砂質土層　推定水田層
III－1　淡灰褐色弱粘質土層
III－2　明赤褐色微砂質土層
III－3　暗灰褐色粘質土層
III－4　暗灰褐色粘質土層
III－5　淡灰褐色弱粘質土層
IV－1　青灰色粘土混黒褐色粘質土層
IV－2　暗褐色粘質土層
IV－3　黒褐色粘質土層
IV－4　暗褐色粘土層　植物遺体多い
本層上面で杭群検出
IV－5　灰色粗砂混暗褐色粘土層
IV－6　黒色粘質土層
IV－7　黒色砂混黒褐色粘土層
V－1　暗褐色粘質土層
V－2　褐色粘質土層
V－3　暗褐色粘土層
V－4　褐色粘土層
V－5　青灰色粘土層
V－6　黒灰色微砂層
V－7　青灰色粘土混黒灰色微砂層
V－8　灰色砂混青灰色粘土層
V－9　灰色粗砂層
VI－1　暗灰赤褐色粘質土層
VI－2　暗灰色粘質土層

第19図　低地帯セクション7（第1低地帯流路4・5）

が堆積する層準に相当するが，明確にそれとは異なる。層厚0.6m程度で本層堆積完了時には微高地面との比高はほぼ解消されている。

Ⅰ層－現耕作土層およびその下部に連続する旧耕作土層

セクション6（第17・18図）

Ⅴ層－第3低地帯流路1堆積層。青灰色の粘土･砂層からなり，弥生土器を多く含む。最深部の標高2.3mで，微高地面との比高約1.7mを測る。

Ⅳ層－第3低地帯流路2堆積層。二筋に別れているのが判る。灰黒色ないしは淡灰色の粘土層・砂層が互層状に堆積する。本層上面で微高地面との比高0.7mを測る。

Ⅲ層－第3低地帯流路3堆積層。流路2の北辺をきって堆積する。茶灰色のシルト層からなり，有機質を多く含む。木群3は本層中にある。

Ⅱ層－セクション5のⅡ層と同一。この部分で層厚0.7mを測り，微高地面との比高はほぼ解消する。

Ⅰ層－現耕作土層および旧耕作土層。鉄分・マンガン集積層から5面以上の耕土面を想定できる。

セクション7（第19図）

Ⅵ層－第1低地帯流路4堆積層残部。同流路5の肩部に断片的に堆積層が残されているに過ぎない。黒灰色系統の粘土・細砂層がブロック状に入り混じる。なお本層中から一木造りの梯子段を検出している。

Ⅴ層－第1低地帯流路5堆積層。黒褐色粘土層から成り，中位で植物遺体を多く含む。木群4は本層中に包含される。層厚0.8m，本層上面で標高2.6m，微高地面との比高1.6mを測る。

Ⅳ層－セクション5Ⅳ層に連続する。少量の奈良時代から平安時代初頭の遺物を包含する。層厚最大0.5m，上面の標高3.1mで微高地面との比高約1mとなる。

Ⅱ層－平安期洪水砂層に対応する時期の堆積層で，セクション4・5Ⅱ層と同一層。上面の標高4.0mで微高地面との比高はほぼ解消される。なお本層下部に水田層の可能性が高い層準が認められる。（Ⅱ－9・10）

Ⅰ層－現耕土および旧耕土層。旧耕土面は4面以上想定できる。

セクション8（第20図）

Ⅶ層－第3微高地形成層

Ⅵ層－流路6堆積層で最深部の標高2.7m，微高地面との比高約1.3m，本層の厚さ約1.1mを測る。黒色～暗灰色粘土層からなり，比較的細かいレンズ状薄層の集合である。中位のⅥ6層を中心に弥生前期中葉の土器を検出している。

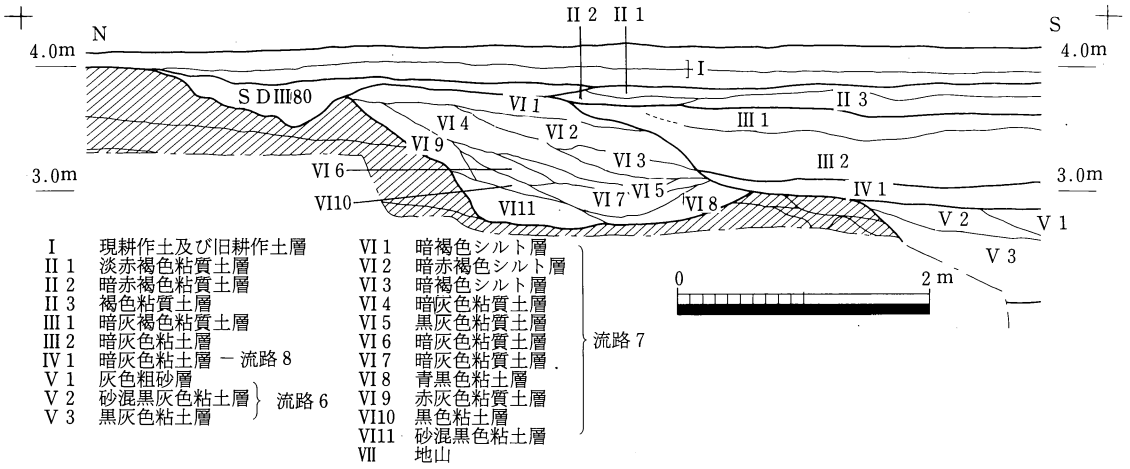
Ⅴ層－流路7堆積層で流路6よりも北側に位置する。明らかに先行する流路よりも深く微高地形成層を抉り込んでおり，部分的な確認に留まるが最深部の標高は2.1mよりも低い。黒灰色の粘土および粗砂層からなり弥生時代後期の遺物を濃密に包含する。

Ⅳ層－流路8の確認部分での最下層堆積物である。堆積状況から判断して本流路は先行する流路6・7を削り形成されている。暗灰色粘土層で6世紀代の遺物を少量検出した。

Ⅲ層－流路8上部堆積層で暗灰色粘土層からなる。遺物は確認していない。なお本層は流路4・5上面に連続する。

Ⅱ層－褐色粘質土層で以北に分布するいわゆる洪水砂層に対応する層位である。

Ⅰ層－現耕作土および旧耕作土層。



第20図　低地帯セクション 8 （第 3 低地帯流路 6 ～ 8 ）

遺構その他

木群 3

第 3 低地帯流路 3 下部の凹みに 6 m × 8 mの範囲で丸太杭・切断された樹枝など僅かな加工を加えた程度の製品と自然木片約50点余りが集積していた。検出された杭も比較的小形で打ち込まれたものもないし，意図的な配置も認められないので構造物ないしはその一部とは見成し難い。また溝 S D III71と半ば以上重複しているため，包含遺物の完全に分離し得たかどうかはやや不安が残るが，平安期のかなり広い時期幅，ほぼ 9 ～12世紀代の土器類を比較的多量に検出している。

木群 4 （第21図）

合流部直前の第 1 低地帯流路 5 中位，標高2.6m前後で検出した。南北 6 m × 東西2.5mに広がり，南北二群に分けることが出来る。それぞれ30本前後の南北を向いた杭とこれに直交する一本の杭とからなる。かなり整った配置を持っているが，南北杭相互あるいはそれらと東西杭とを緊縛・固定した痕跡は全く認められない。またそれぞれをこの場に固定した痕跡も確認できなかった。やや離れた流路肩部では木株状の自然木等も見られたが，木群自体を構成するのはほぼ全て多少の加工が認められる木材である。検出された杭は長1.5～2.5m，径0.05～0.1mで小枝を払っただけで先端を斜めあるいは尖状に簡単に加工したもので規模・形態・加工方法の点で極めて似通っている。均質的な一群の杭だけからなる点が本木群の特徴である。

さてこの木群の性格であるが，使用杭の共通性から見て同時に準備された一群と推定できるが，その規模から見て一定の強度を必要とする堰等の材料とするには脆弱であろうしまたその場に固定しようとした形跡が見られないことからも低地帯に築かれた構造物とは見成し難い。

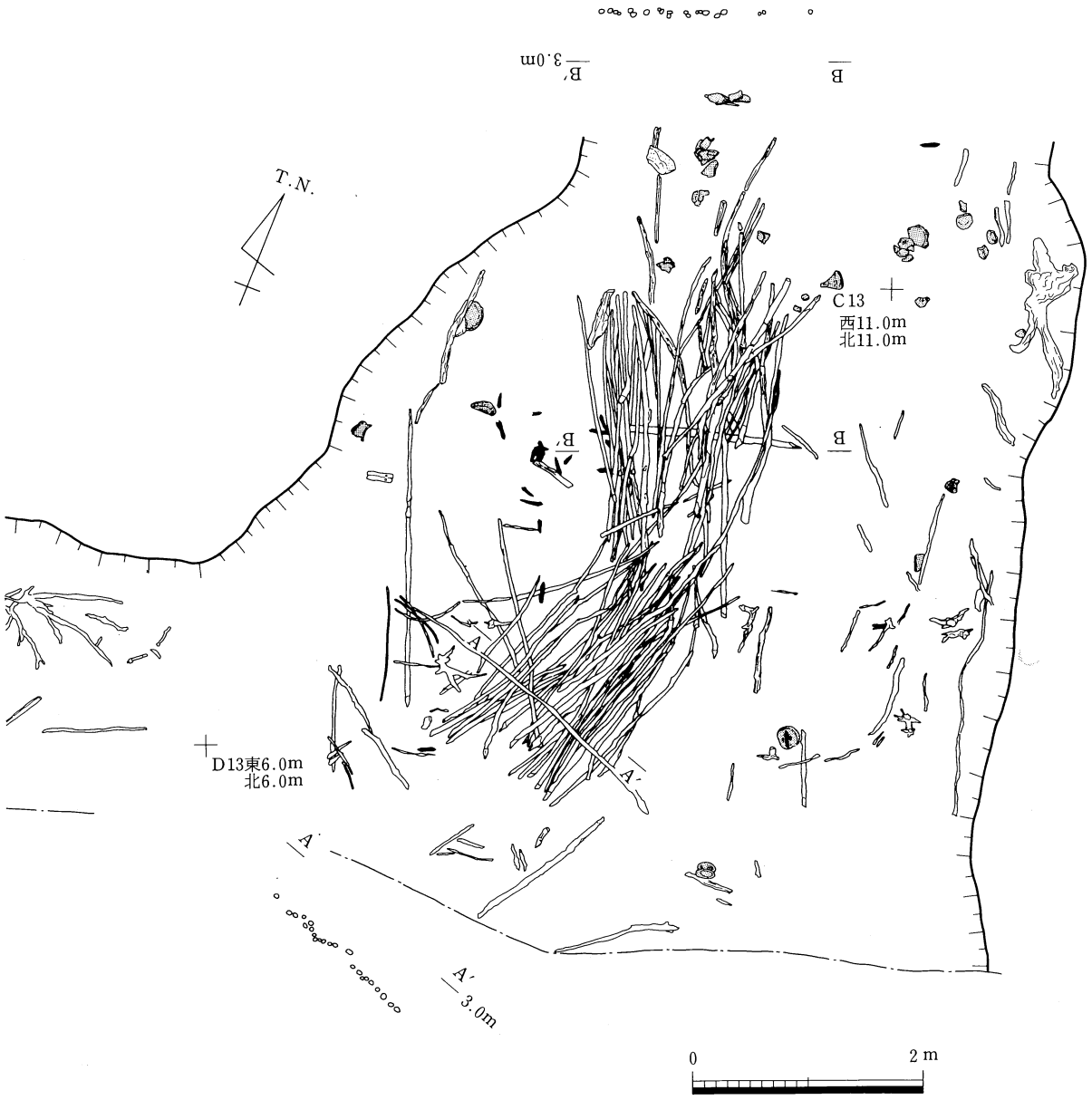
木群に伴ない，40点余りの同一型式の斎串と皿類を中心とした土師器を検出している。その他の木製品は非常に少ない。斎串の大部分は木群に接してその西側の径 1 m程度の範囲にまとまっている。ただし規格的な配置や樹立の状況は確認できない。第 2 低地帯流路 2 の斎串・人形集中地点同様一回の使用単位と使用方法を反映すると見て良いであろう。

伴出土器類から判断して木群および斎串群の年代はほぼ 7 世紀後葉に比定できる。

土器溜り５（第22図）

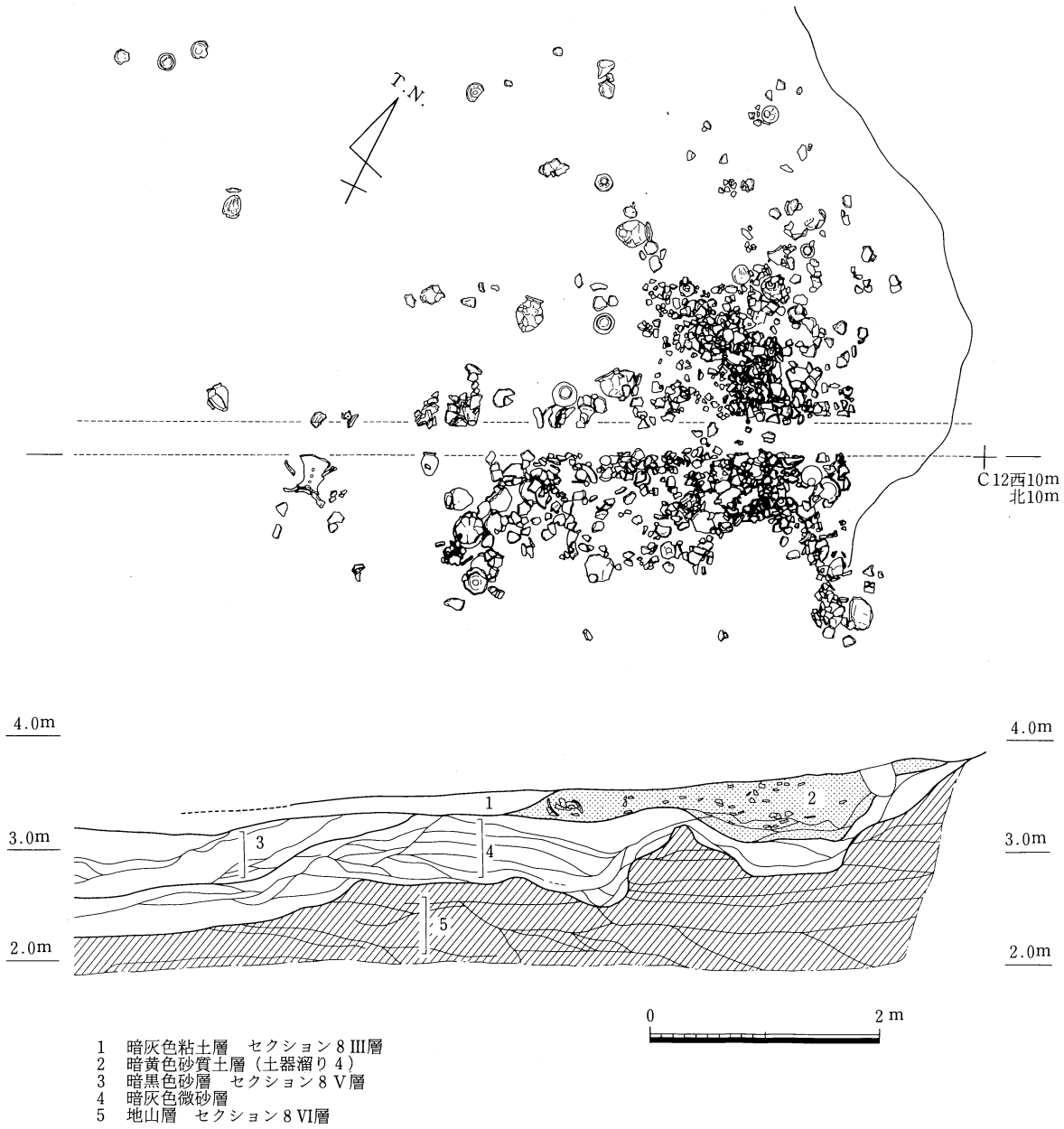
Ｃ12区の第１低地帯東岸，第３微高地側斜面に形成された弥生後期中葉の土器溜り。第１低地帯に面する微高地縁辺としてはかなり緩やかな斜面に位置する４ｍ×４ｍ，最大深0.5m程の浅い凹みを完形品ないしはそれに近い大形破片を主体に200個体を優に越える弥生土器でほぼ完全に充塡していた。土器以外の遺物は全く含まない。多量の完形品を含むが，特に人為的な配列は認め難いし，組成の点でも該期の主要器種を通有の比率で含み，殊更特殊な形態は見受けられない。この点から本土器群について祭祀行為など，特定の用途を想定することは困難であろう。

凹みの中央部分では平面的にも断面を見てもこの土器溜りを分割しうる状況は認められないので土器群の廃棄の同時性はほぼ間違い無いと思われる。ただし斜面下方に接する部分の縁辺はやや不明瞭で周辺包含層中の資料との峻別が困難な部分もある。この点を踏まえたとしても低地帯出土の弥生後期資料の中ではセット関係を最も良好に示す資料であることは間違い無い。



第21図　木群４　出土状態図

またこの出土位置は，今回の調査では確認できなかったが，第３微高地上，調査区外の東方に弥生後期集落が広がる可能性を示すものである。

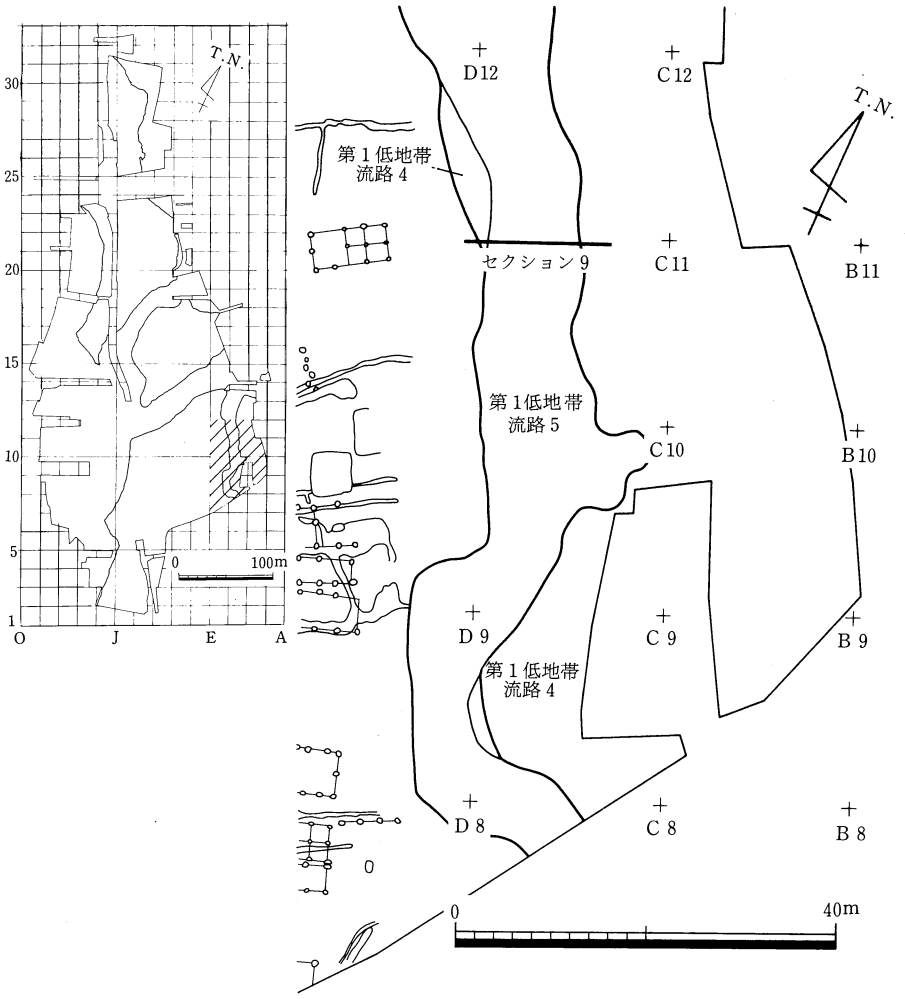


第22図　土器溜り５　遺物出土状態図

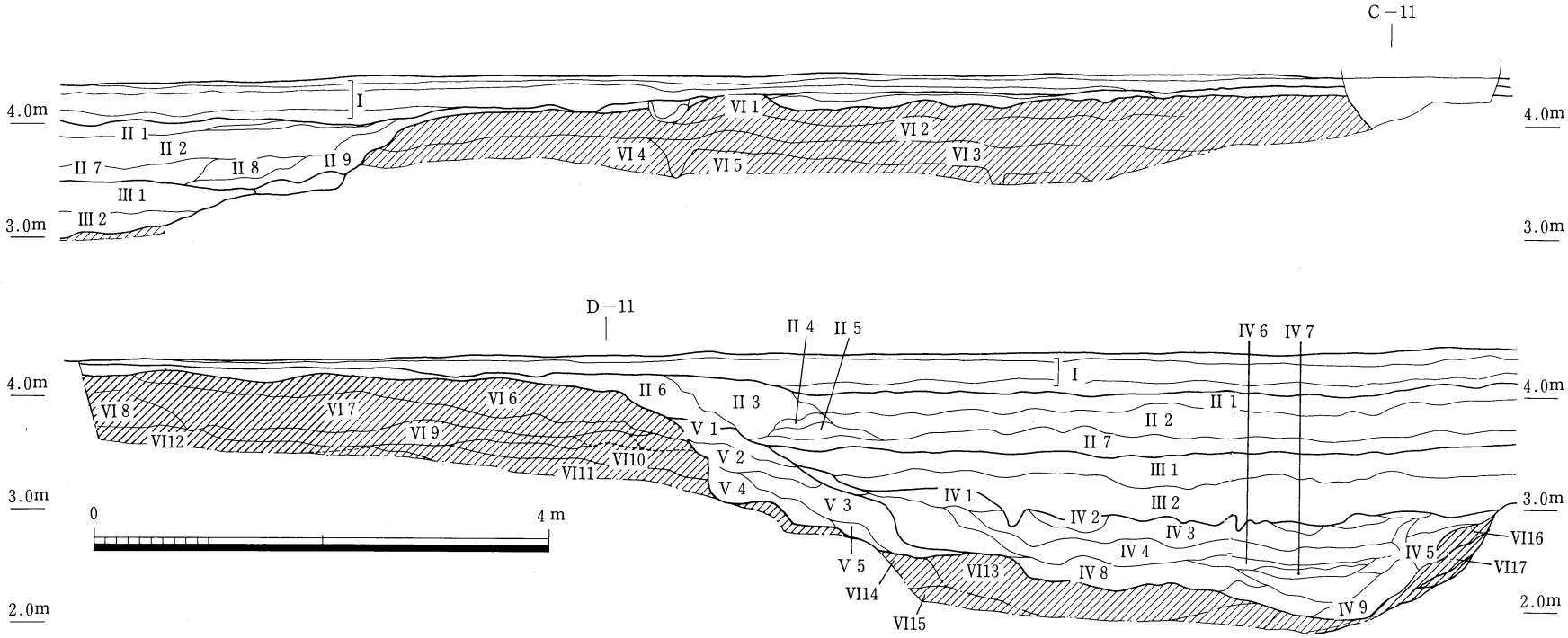
4．第１低地帯南部（ＣＤ７～12）（第23図）

第３微高地・第４微高地に挟まれた第１低地帯の南半部。細かく蛇行しながらほぼ北流し，両岸は鋭く切り立つ。この部分で低地帯幅７～11m，最深部標高2.0m程度である。第３低地帯との合流部で検出した流路４・５の二本はこの部分までほぼ辿ることが出来る。同様に先行する流路４はその大部分を流路５に削り取られ，堆積物の残骸を部分的に確認できるにすぎない。共に埋没過程で多量の遺物を包含している。特に流路５ではＣＤ７～９で６世紀後葉から７世紀末葉ないしは８世紀初頭までの多量の土器類と共に鞍･壺鐙などを始めとする木器類を豊富に含んでいる。年代幅の点では流路１の遺物に比べ，上限・下限共にやや遡る。この他多数の土馬・斎串など祭祀具を伴うことが注目出来る。ただしこれらは細かく時期的に弁別することが困難であった。

また以上の遺物は本流路内に万遍無く分布するのでは無く，偏りが著しい。特に木器類においてそれが顕著に認められる。第３低地帯の合流部の直前，木群４周辺では殆ど斎串しか認められない。それより南の約60mの間では殆ど木器を含まない。調査区南部のＣＤ７～９では第１低地帯流路２に次ぐ出土量がある。建築部材・祭祀具，容器など多様な器種を含むが農工具は殆ど含まない点で流路２とは異なる。



第23図　第１低地帯南部



I	耕作土連続堆積層	III－2	砂混暗灰色粘土層	V－2	暗黒灰色微砂層	VI－8	暗茶褐色シルト層
II－1	暗黄色粘土層	IV－1	砂混暗灰黒色粘土層	V－3	暗灰白色砂質土層	VI－9	暗茶灰色微砂層
II－2	黄灰色粘土層	IV－2	砂混暗灰色粘土層	V－4	暗黒灰色微砂層	VI－10	灰色礫層
II－3	赤茶色シルト層	IV－3	暗灰色粘土層　植物混入	V－5	緑青灰色砂質土層	VI－11	灰白色微砂層
II－4	黄燈色土層	IV－4	黒灰色粘土層	VI－1	暗褐紫色粘土層	VI－12	暗灰黒色砂層
II－5	黄灰褐色粘土層	IV－5	暗青灰色粘土層	VI－2	暗褐紫色粘土層	VI－13	暗灰色砂礫層
II－6	黄燈色粘質土層	IV－6	暗灰色粘土層	VI－3	暗黄紫青色粘土層	VI－14	暗灰色砂層
II－7	暗黄緑色砂質土層	IV－7	暗灰色粘土層　植物遺体多い	VI－4	砂混黄褐色粘土層	VI－15	青灰白砂層
II－8	赤褐色シルト層	IV－8	砂混暗灰色粘土層	VI－5	粘土混黄褐色砂層	VI－16	砂混明白青色粘土
II－9	暗青灰褐色粘土層	IV－9	砂混暗灰粘土層	VI－6	明黄灰色土層	VI－17	砂混青灰色粘土
III－1	暗灰色粘土層	V－1	暗燈色砂質土層	VI－7	暗灰黄色微砂層		

第24図　低地帯セクション9（第1低地帯流路4・5）

こうした明瞭な差異，特に農工具類の量・組成に著しい差がある点について，遺物は投棄地点から余り流されていない事（各流路において検出された斎串・人形のような小型品ですら投棄あるいは使用状況を反映すると思われる出土状態を示している点から支持しうる。）を前提に考えれば，第1微高地から第4微高地に続く一連の該期集落内部の機能差を検討する材料となるやも知れない。

基本層序

第3低地帯との合流部より南，第3低地帯と第4低地帯に挟まれた南北約100mの部分は包含遺物量に著しい疎密が認められるが，別低地帯との合流が無いため，基本的に同一の堆積状況を示す。

セクション9（第24図）

Ⅴ層－第1低地帯流路4堆積層残部。同流路5の肩部に断片的に残存するに過ぎないが，包含遺物量は比較的多い。ただし木器は含まない。黒褐色系統の砂層からなる。

Ⅳ層－第1低地帯流路5堆積層。黒灰色粘土層が主体を占め，部分的に植物遺体を多く含む。9列以南で目だって包含遺物が増える。層厚最大約1.1m，上面の標高2.9m，微高地面との比高1.2mを測る。

Ⅲ層－セクション5Ⅳ層に連続する。少量の遺物を包含する。層厚最大0.6m，上面の標高3.5mで微高地面との比高約0.6mとなる。

Ⅱ層－平安期洪水砂層と同時期の所産であるがそのものではない。茶灰色粘土層が主体を成す。層厚最大0.5mを測り，本層堆積完了時には微高地面との比高はほぼ解消している。

Ⅰ層－現耕土および旧耕土層。

5．第2低地帯（F～J－13～19）（第25図）

第1微高地と第3微高地の間にあって，緩く湾曲して南西から北東に抜ける。南端では第3低地帯に続く。南西方向に今以上に伸びていたと思われるが，その部分は第4低地帯流路1に完全に削り取られていて窺うことが出来ない。第3・第4低地帯に接する部分で幅約34mを保つが，中央部で約16.4mに狭まり，再び僅かに開いて第1低地帯に接する。肩部の形状は第1低地帯・第4低地帯に面する微高地縁辺程急傾斜ではないが，第3低地帯のそれに比べれば切り立っている。

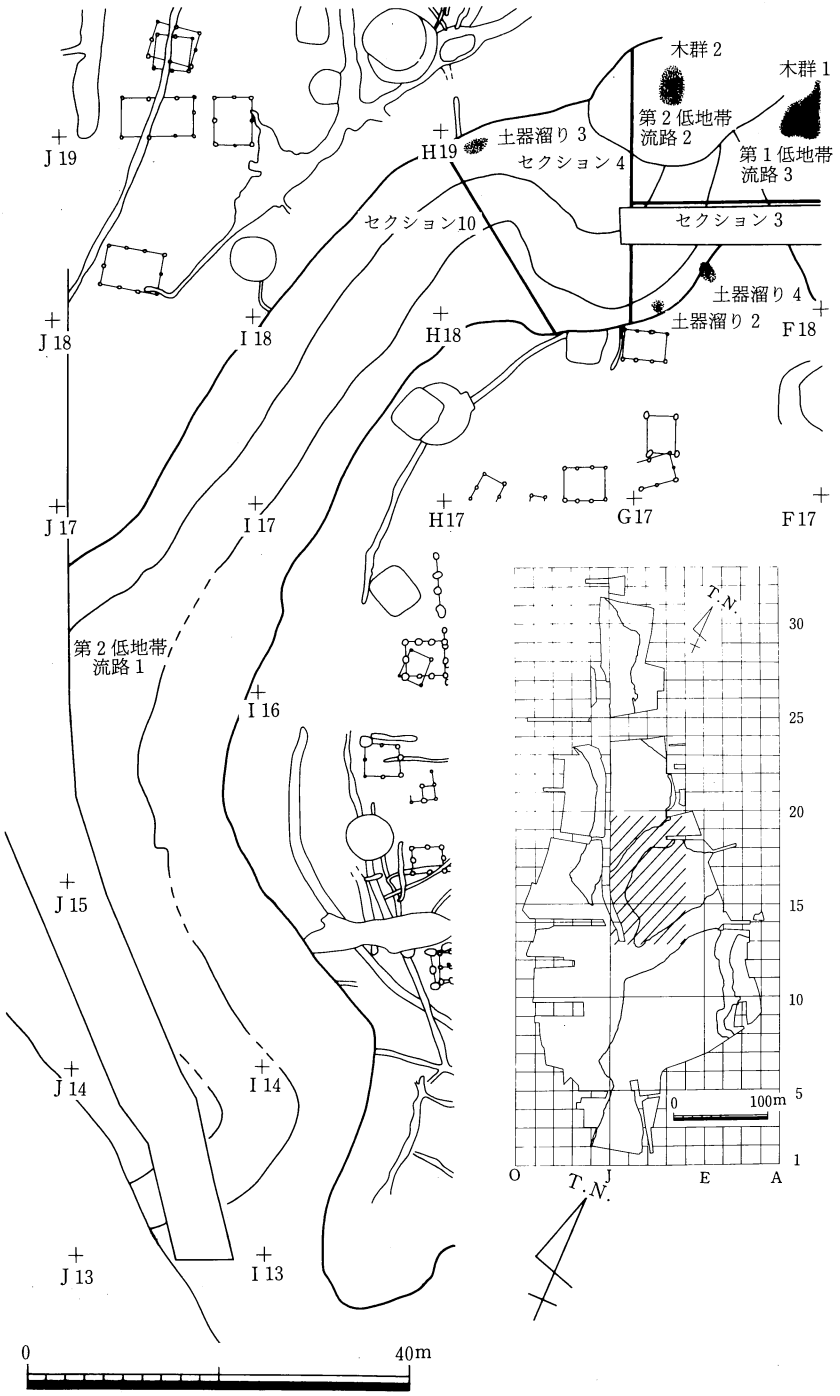
セクション9に示したように第1・第4低地帯同様，両岸微高地の堆積完了後にこれを開析して形成されていることはほぼ疑いない。因に肩部の第2微高地形成層中で検出した自然木（第24図中，№1・2）について後述するようにC14年代測定を委託実施しており，各々B．C．2560±70年，B．C．8470±135年の値を得ている。微高地形成の時期を知る一つの目安とはなろう。

しかしこれらに比べて河川としては早く死滅しており，貫通する流路としては弥生前段階に埋没している流路1が認められるにすぎない。この他前述した落ち込み，流路2が第1低地帯との合流部に局所的に認められる。河川機能の早期消失と密接に関わる点であろうが，最深部標高が中心部で標高約2m前後と第1・第3低地帯に比べればかなり高い。

貫通する流路1は平均して幅6.5m，深さ1mを測り埋没過程で多量の弥生前期遺物を包含している。特に17列以北では流路下部を殆ど埋め尽くすほどの遺物の集中が認められた。全体でコンテナ400箱以上に達する。これらは流路1堆積層（Ⅶ層）下部でほぼ河床に接した部分に最も濃密であるが，多少を問わなければⅦ層細分層各層に含まれている。ただし細分層間で包含土器の形態差・組成差は指摘し難い。

流路１の埋没後は包含遺物量は多くない。上層で奈良時代の遺物と共に円面硯が出土していることが注目できる。

本低地帯では弥生後期後半と奈良時代前半の二時期の水田面（水田１・水田２）を確認した。畦畔等の水田遺構を検出し得たのは一部に限られるが，二面ともＰＯ分析所見と耕作土層の広がりから本低地帯の大部分に及び第３低地帯の水田層につながっていたと思われる。



第25図　第２低地帯

なおこれら水田の造成に伴い，低地帯両肩部斜面の水田面から連続する部分を多少削りこんで小平坦部を二段造り出していることが確認できた。これによって本来低地部に注ぎ込んでいた溝状遺構の一部が破壊されている。また下段の水田1面に伴う平坦面上あるいはこれに近接した数か所で弥生後期土器の集中部分を検出した。それらは本低地帯に面した第1・第2微高地縁辺部に立地する竪穴住居群に対応する位置に見られる。これらは概して水田2造成時に著しい削平を受け遺存状態は良くない。最も残りの良いものを土器溜り3として後に報告する。

基本層序

第1低地帯との合流部付近の流路2に関わる部分を除けば本低地帯の大部分の基本堆積に差異は見られない。したがってここではやや北に偏するが最も層位的諸関係が典型的に現れている部分（セクション9）を例示する。またここでは部分的に微高地形成層の断面観察も行っているので微高地を形成する諸層の堆積状況およびそれと低地帯並びに低地帯堆積層との関係を良く知りうる。

セクション10（第26図）

X～Ⅷ層－微高地を形成する堆積諸層。大局的には上層に向かって次第に堆積物の粒径が細かく成る傾向が認められる。微高地上面はほぼ黄色系統の粘土層が覆っている。ここでは様々な粒径の砂層が主体を占める下部層との間に低地帯堆積層と同様の暗褐色ないしは黒色の粘土層を中心とした堆積層が認められる。現微高地の形成以前ないしは形成途上に存在した「旧河道」であろうか。粘土層中には大形の自然木を含め比較的多量の植物遺体を含む。また下部の砂礫層中からも大形の自然木片を検出した。これらについてC14年代測定を実施している。

Ⅶ層－第2低地帯流路1堆積層。この部分で河床の標高2.1m，微高地面との比高2mを測る。暗褐色の砂層・粘土層がブロック状に混在する。層厚最大約1m。上面の標高3.1m，微高地面との比高1mを測る。弥生前期の遺物を多量に含む。

Ⅵ層－水田1耕作土層　暗茶褐色粘土層。層厚0.1m程度の薄い層で中央部に畦畔の高まりが認められる。なお本層上面に続いて両肩部に平坦面が広がる。本層上面で少量の弥生後期土器を出土した。また連続する平坦面上に土器溜り4などまとまった弥生後期土器が認められる。

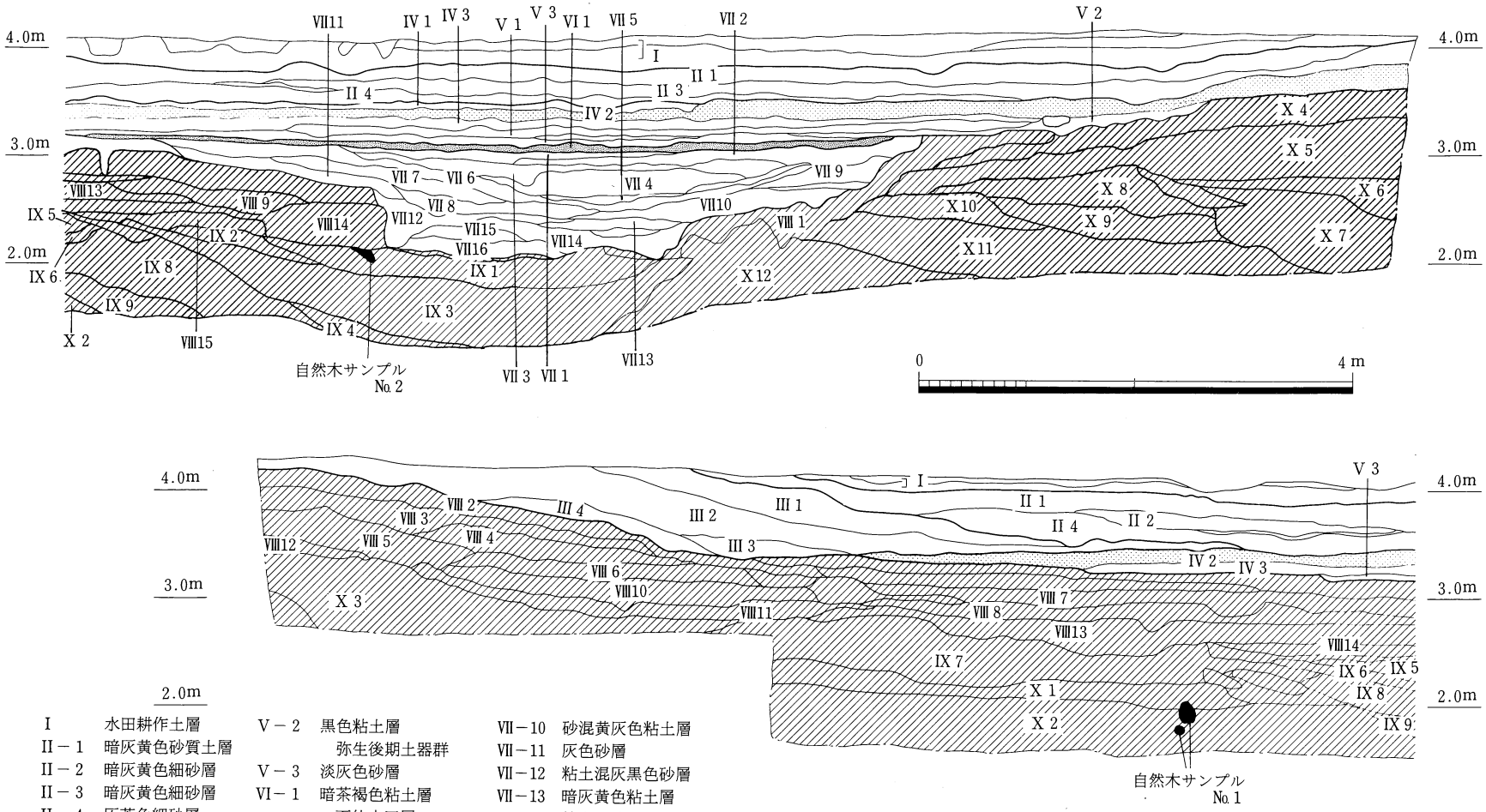
ⅣⅤ層－暗灰色ないし黒色粘土層。層厚最大0.3m，上面の比高3.4mで微高地面との比高約0.7mを測る。弥生後期から奈良時代の希薄な遺物包含層である。なおⅣ層は南半部で検出した水田2耕作土層に続く堆積層である。この部分では畦畔等水田遺構は確認できなかったがＰＯ分析によれば，ここまで水田2が続く可能性が高い。

Ⅱ層－平安時代洪水砂層。灰茶色ないしは黄灰色の細砂層からなり，層厚最大0.4m程度を測る。上面の標高3.8mで微高地面との比高は僅かに0.3mを残すだけである。この砂層は第4低地帯の流路1などから供給されて本低地帯を越えて第1低地帯北部におよぶ。第2低地帯流路2は本層中位から切り込まれ，堆積完了時までには完全に埋没している。

遺構その他

土器溜り4

G18区，第1低地帯と合流する直前で本低地帯が大きく東に湾曲している部分の北岸第1微高地側に位置する。東西3.5m，南北1.2mの長楕円形にコンテナ10箱ほどの弥生後期土器・石器が集中していた。



I　水田耕作土層
II－1　暗灰黄色砂質土層
II－2　暗灰黄色細砂層
II－3　暗灰黄色細砂層
II－4　灰茶色細砂層
III－1　暗灰褐色粘質土層
III－2　黒褐色粘土層
III－3　暗灰褐色粘土層
III－4　淡黒茶色粘土層
IV－1　暗灰茶色粘質土層
IV－2　暗灰褐色粘土層
上位水田推定層
IV－3　暗灰色粘土層
上位水田推定層
V－1　淡黒色粘土層
V－2　黒色粘土層
弥生後期土器群
V－3　淡灰色砂層
VI－1　暗茶褐色粘土層
下位水田層
VII－1　暗灰褐色砂層
VII－2　暗灰茶褐色砂質土層
VII－3　茶黒色粘土層
VII－4　黒色粘土層
VII－5　砂混暗黄色粘土層
VII－6　灰黒色粗砂層
弥生前期包含層
VII－7　暗灰色砂層
VII－8　黒色粘土層
VII－9　淡黒褐色粘土層
VII－10　砂混黄灰色粘土層
VII－11　灰色砂層
VII－12　粘土混灰黒色砂層
VII－13　暗灰黄色粘土層
VII－14　粘土混暗灰色粗砂層
VII－15　粘土混暗灰色粗砂層
VII－16　黒色粘土層
VIII－1　暗黄色粘土層
VIII－2　淡灰黄色粘土層
VIII－3　淡灰黄色粘土層
VIII－4　淡黄褐色粘土層
VIII－5　赤黄色粘土層
VIII－6　淡赤黄色粘土層
VIII－7　黄灰色粘質土層
VIII－8　淡灰白色砂質土層
VIII－9　淡灰褐色粘土層
VIII－10　灰黄色粘土層
VIII－11　淡青灰色粘土層
VIII－12　暗黄灰色粘土層
VIII－13　砂混灰色粘土層
VIII－14　砂混灰色粘土層
VIII－15　暗灰黄色砂層
IX－1　黒色粘土層
IX－2　淡黒色粘土層
IX－3　黒色粘土層
IX－4　暗青灰色粘土層
IX－5　砂混黒茶色粘土層
IX－6　暗灰黄色粘土層
IX－7　暗灰色砂礫層
IX－8　シルト混黒色粘土層
IX－9　灰色砂層
X－1　砂礫混淡黒色砂層
X－2　灰色砂層
X－3　淡灰茶色砂層
X－4　黄灰色粘土層
X－5　灰黄色粘土層
X－6　淡灰色シルト層
X－7　暗灰色細砂層
X－8　灰白色砂質土層
X－9　暗灰色砂層
X－10　灰黄色シルト層
X－11　灰色砂層
X－12　暗青灰色細砂層

第26図　低地帯セクション10（第２低地帯流路１）

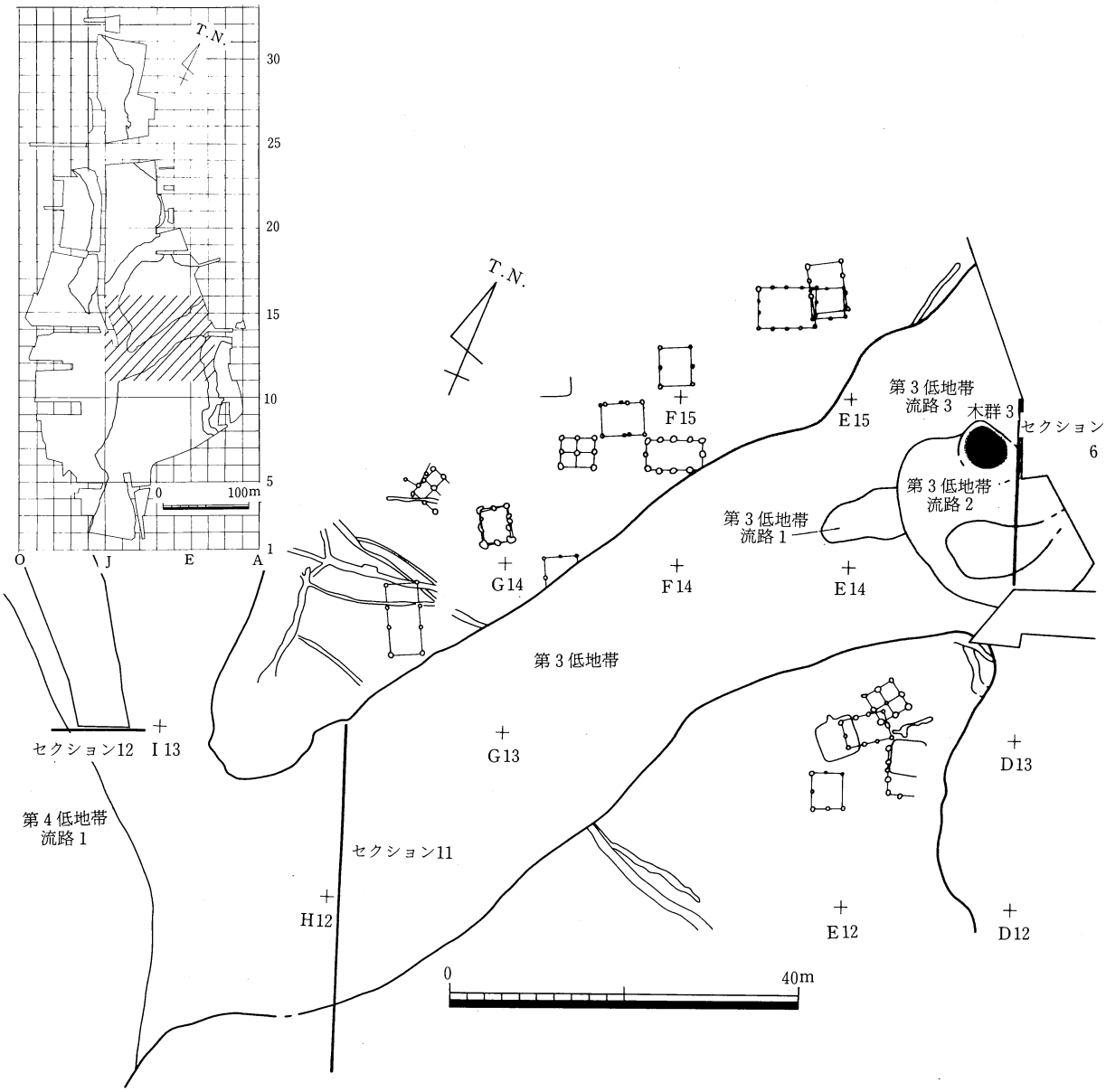
土器の残存状況は余り良好ではなく小破片が多い。水田１に伴う平坦面の末端にあり，上半部を上位の水田２に伴う同様の平坦面造成時に削り取られている。

北接する第１微高地東南部には該期の竪穴住居群が認められる。この遺物はここから投棄されたものであろう。なお本土器溜りは該期の多量の良好な遺物を伴った排水溝ＳＤII11の延長方向に位置するものの，接点は恐らく水田２に伴うと考えて良い平坦面造成によって破壊されて，関係は不明である。

６．第３低地帯（D～Ｉ－11～15）（第27図）

第２微高地と第４微高地間でほぼ直線的に東西に走る低地帯である。西端で滑らかに第２低地帯に連続するが，その部分の大半を第４低地帯流路１に削り取られている。

肩部の立ち上がりは南北両岸共に極めて緩やかである。また幅22～36mに対して微高地面と河床との比高1.4m程度とかなり浅い。河床標高自体，東端第１低地帯との境界部に位置する流路１～３部分を除



第27図　第３低地帯

けば他の低地帯に比べ著しく高く3.2～3.5mを測る。更に河床高の変化を詳細に見ると，他の低地帯のように一方の端から他端に向かって低くなるわけではなく，ほぼEからF列の部分が最も高く，そこから東西に向かって低くなる。

こうした著しい差異は本低地帯の形成時期の問題に係わる可能性がある。現在の形状が出来たのが奈良時代後半以降と著しく新しい第4低地帯を除いても，第1・第2低地帯に関しても形成は微高地部分の堆積が完了した後であることが判る。各低地帯ともに肩部斜面に微高地上部堆積層である相対的に粒径の小さい粘土・シルト層およびその下部の砂層・砂礫層断面が露出しており，それらの堆積後に開析・形成されていることが知られる。

ところが，第3低地帯においては南北両側の微高地上部を形成する黄色系粘土層が河床部まで完全に連続しており，他の低地帯のように微高地形成層を開析して出来上がった形跡が無い。つまり微高地堆積の完了後に形成されたとは言い難い状況にある。なお以上の点と密接に係わるのであろうが本低地帯では貫通する流路が認められない。僅かに第1低地帯との接点に，その河床高落差が原因して生じたと見られる短い落ち込み流路1～3が認められるだけである。河床高の点から見ても恐らく恒常的な河川活動は期待できない。

微高地面に比して相対的に低いと云う意味で等しく，低地帯としているが以上の点について他との差異が大きい。

最終的な埋没は平安時代で，第4低地帯流路1から流れ込んだ灰褐色砂が東端部を除いて堆積している。その上面には平安時代末以降の遺構面が形成される。

本低地帯では二面の水田層（水田1・2）を確認した。上層の水田2では畦畔が第2低地帯に続いている。下層の水田1では直接的な接続は確認できなかったが，耕作土層・レベル・位置関係からみて連続は間違い無い。しかし本低地帯の東端部まで広がる可能性は少ない。これら2面の水田は畦畔の配置から判断して，原存部分以上に西に広がっていたことが容易に想定できるが，第4低地帯流路1によって破壊されている。また第2低地帯で確認した水田域縁辺に続く低地帯肩部斜面の削平部分はここでは不明瞭である。

なお全体的に包含遺物量は多くない。他低地帯の肩部でしばしば認められるような集中的な遺物の投棄は認められなかった。

基本層序

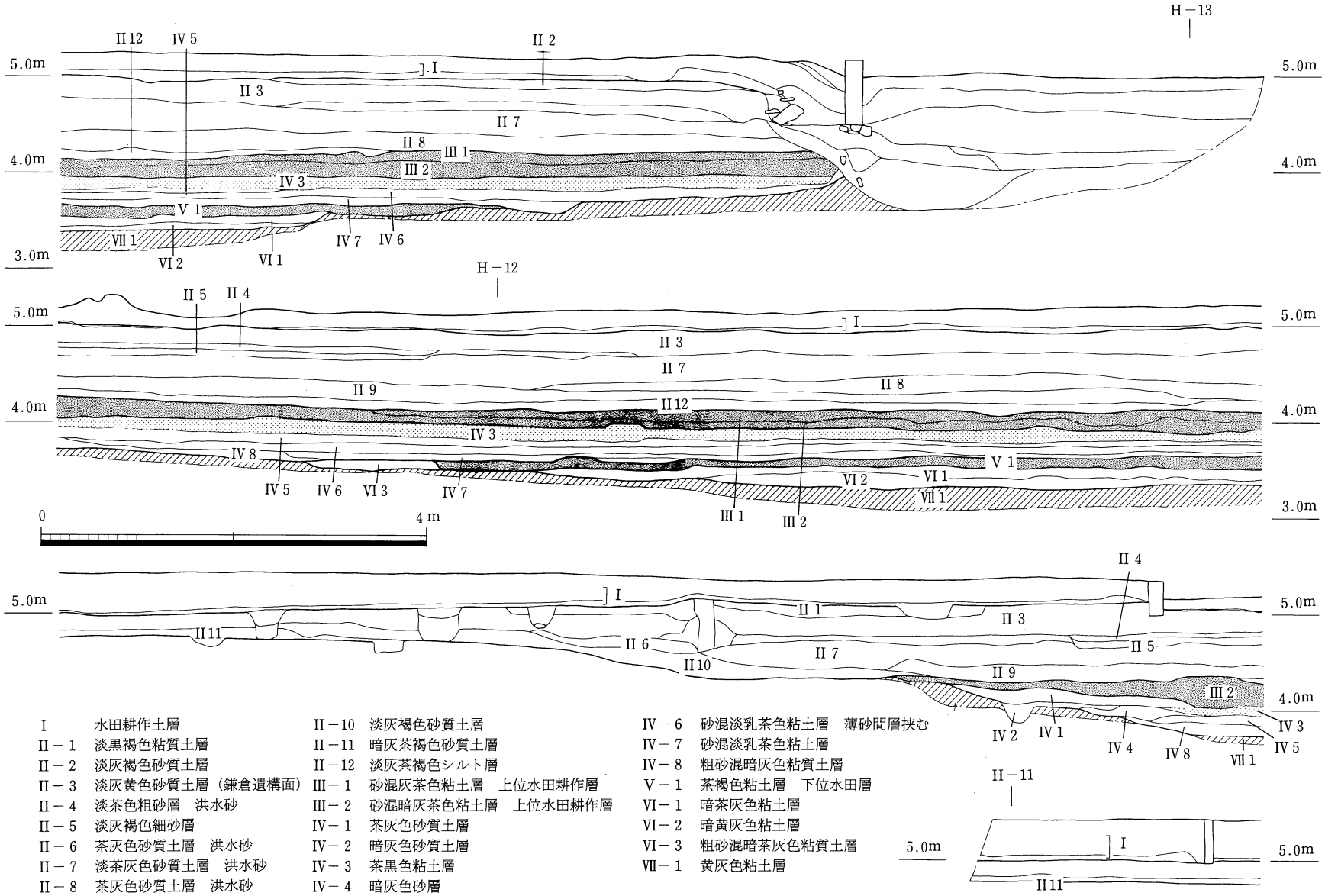
ここでは2本のセクションで本低地帯の埋没過程と隣接低地帯との関連を示す。なお第1低地帯との関連は既に示している。セクション11では本低地帯の基本堆積を示す。セクション12では第4低地帯流路1との切り合い関係，特に上位水田2との関連を示す。

セクション11（第28図）

VI層－灰茶色粘土層　弥生前期の遺物を少量含む。層厚0.2m以下の薄い層で中央部に部分的に認められるにすぎない。

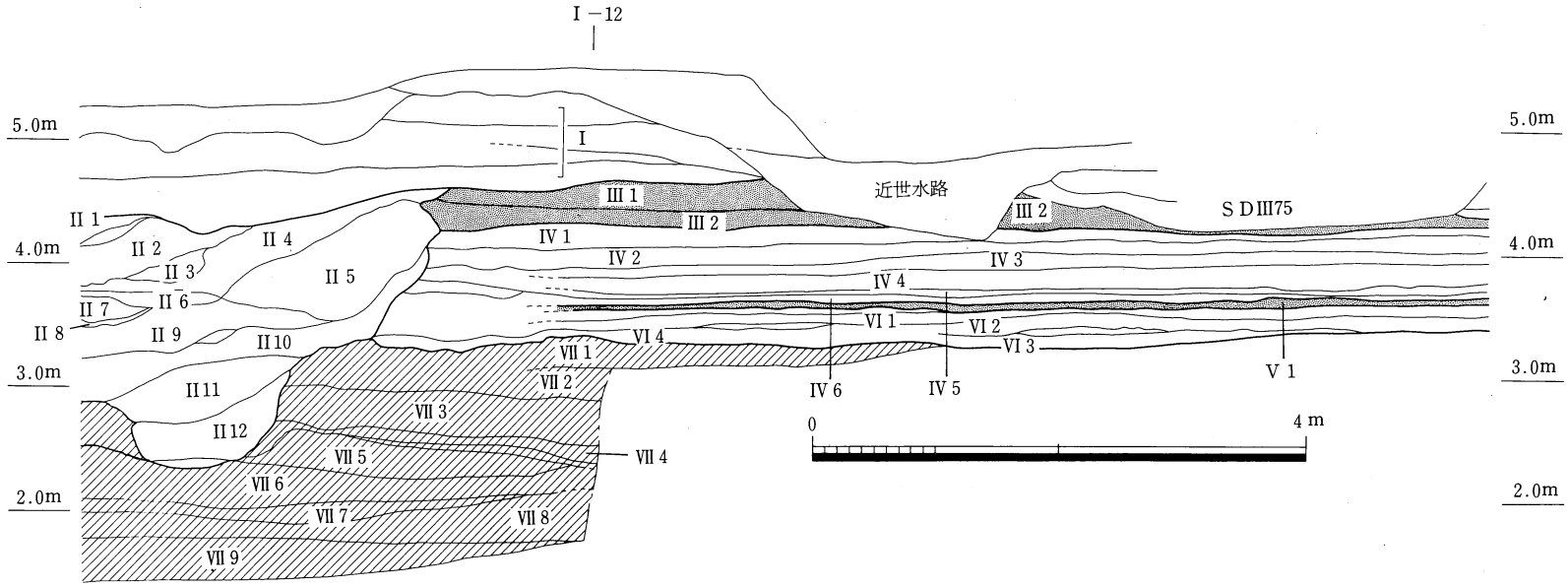
V層－茶褐色粘土層　水田1耕作土層。上面で少量の弥生後期の遺物を検出している。上面の標高3.6m，微高地面との比高約1mを測る。

IV層－暗灰色砂層。層厚約0.5m，上面の標高4.1m，比高0.5mを測る。古墳時代後期を中心とした時期の遺物を少量含む。



I　水田耕作土層
II－1　淡黒褐色粘質土層
II－2　淡灰褐色砂質土層
II－3　淡灰黄色砂質土層（鎌倉遺構面）
II－4　淡茶色粗砂層　洪水砂
II－5　淡灰褐色細砂層
II－6　茶灰色砂質土層　洪水砂
II－7　淡茶灰色砂質土層　洪水砂
II－8　茶灰色砂質土層　洪水砂
II－9　茶灰色砂質土層　洪水砂
II－10　淡灰褐色砂質土層
II－11　暗灰茶褐色砂質土層
II－12　淡灰茶褐色シルト層
III－1　砂混灰茶色粘土層　上位水田耕作層
III－2　砂混暗灰茶色粘土層　上位水田耕作層
IV－1　茶灰色砂質土層
IV－2　暗灰色砂質土層
IV－3　茶黒色粘土層
IV－4　暗灰色砂層
IV－5　砂混淡乳茶色粘土層
IV－6　砂混淡乳茶色粘土層　薄砂間層挟む
IV－7　砂混淡乳茶色粘土層
IV－8　粗砂混暗灰色粘質土層
V－1　茶褐色粘土層　下位水田層
VI－1　暗茶灰色粘土層
VI－2　暗黄灰色粘土層
VI－3　粗砂混暗茶灰色粘質土層
VII－1　黄灰色粘土層

第28図　低地帯セクション11（第３低地帯）



I	水田耕作土連続層	II－12	黒青灰色粘土層	VI－3	砂混黄褐色粘質土層　弥生前期含む
II－1	淡茶灰色細砂層	III－1	砂混淡黒褐色粘質土層	VI－4	灰色粗砂層
II－2	淡灰黄色粘質土層	III－2	茶褐色粘質土層（上位水田層）	VII－1	淡黄灰色粘土層
II－3	灰褐色粘質土層	IV－1	暗茶褐色砂質土層	VII－2	淡黄灰色粘土層
II－4	淡茶黄色砂質土層	IV－2	褐色砂質土層	VII－3	淡灰茶色粗砂混灰色粘質土層
II－5	黄茶色粗砂層	IV－3	黄褐色砂質土層	VII－4	灰黒色粗砂質
II－6	淡茶黄色粘質土層	IV－4	茶褐色砂層	VII－5	灰黒色粗砂
II－7	灰褐色細砂混青灰色粘土層	IV－5	淡黄褐色砂質土層	VII－6	砂礫層
II－8	淡茶青灰色砂質土層	IV－6	砂混淡黄褐色粘質土層	VII－7	暗青灰色粘土層
II－9	灰褐色細砂混青灰色粘土層	V－1	砂混暗黒褐色粘質土層　下位水田層	VII－8	砂礫層
II－10	灰色細砂混青灰粘土層	VI－1	砂混黄褐色粘質土層	VII－9	暗青灰色粘土層
II－11	淡黄茶色粗砂層	VI－2	砂混淡黒褐色粘質土層		

第29図　低地帯セクション12（第３低地帯・第４低地帯流路１）

III層－灰茶色粘土層　水田２耕作土層。上面で奈良時代前半までの遺物を少量検出している。上面の標高4.2m，比高0.4mを測る。

II層－淡灰色砂層　第４低地帯流路１から供給された平安時代洪水砂層。この部分を始め本低地帯西半部では層厚最大0.8mにまで達し微高地縁辺部の一部を覆っている。東端，第１低地帯との合流部にまでは及んでいない。上面の標高4.9mを測る。

Ｉ層－現耕土および旧耕土層。

セクション12（第29図）

VII層－微高地形成層　上部に黄灰色粘土層が認められる。第３低地帯はこれを切り込んでいないが，第４低地帯流路１はこれを削り込んでいることが判る。

VI層－褐色粘土層・灰色粗砂層　少量の弥生前期の遺物を含む。セクション10VI層に対応する。

Ｖ層－黒褐色粘質土層　水田１耕作土層。

IV層－褐色砂質土層　セクション11IV層に対応する。

III層－茶褐色粘質土層　水田２耕作土層。

II層－第４低地帯流路１堆積層　灰色系統の砂層・粘土層が互層状に堆積する。下位に行くほど粘性が強くなる。この部分では上面を削平されており，本層が第３低地帯に及んでいる状況は確認できないが，水田２形成後に第４低地帯流路１がこれを穿っていることが判る。

Ｉ層－現耕土および旧耕土層。

７．第４低地帯（第30・35図）

本低地帯は調査区の西側に広がる低地帯である。現地表面の様相から判断してこれより西，大束川までの間に安定した微高地は認め難い。つまり大束川の影響を直接受ける部分で，それの氾濫原と見成しうるであろう。その意味で第１～第３低地帯とは異なる環境下にある。このことと密接に係わるのであろうが，他の低地帯に比べ少なくとも調査区域内では河川活動が最も遅くまで続き，著しく埋積が遅れる。

本低地帯では10本の流路（流路１～10）を確認した。うち一本（流路10）を除き，奈良時代後半以降に形成されいずれも遅くとも鎌倉時代には埋没している。またこれらによって先行する流路・堆積物はほぼ完全に破壊されている。また第４低地帯に面した第１・第２・第４微高地西縁辺の形状もまた奈良時代後半以降に形づくられたものである。

これら一群の流路はかなり重複し合うが，大勢として後出するものほど西に，つまり現大束川方向による傾向がある。

流路１は幅22～36m，川底高2.3～1.9mで東肩は比較的急傾斜であるが，西肩は非常になだらかである。奈良時代後半に形成され第２低地帯・第３低地帯の合流部付近を削りとっている。平安時代末までには完全に埋没して上面に平安時代後半以降の遺構面が形成される。堆積層はシルト層・粘土層・砂層が互層状に堆積する下層と比較的均質的な砂層からなる上層に大きく２層に別れる。上層堆積物は第２・第３低地帯から第１低地帯北部まで連続する。「洪水砂層」と称しているものである。

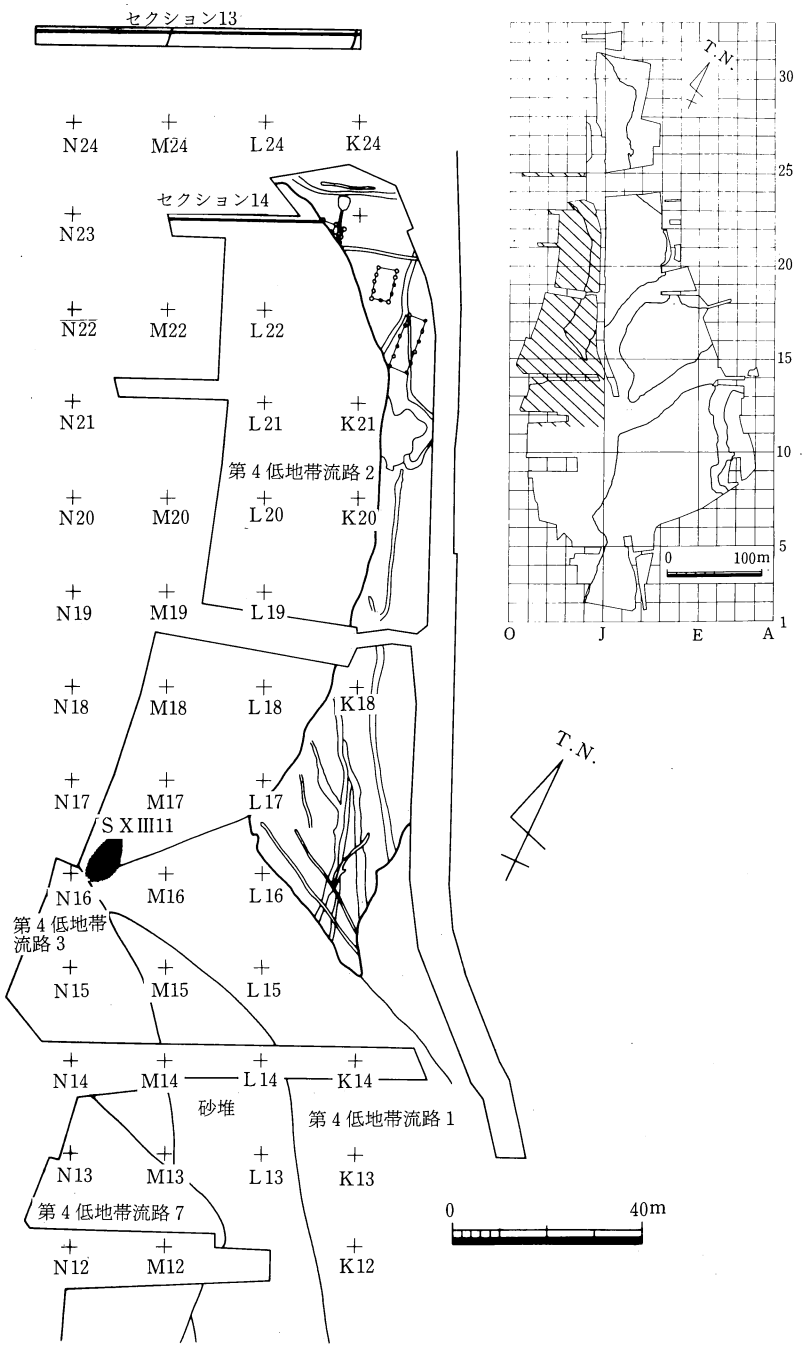
流路２は幅58m以上，川底高2.3～1.9mで第１微高地に接した東半部が最も深く，西に向かって非常に緩やかに上がる。流路１を切って第１微高地西縁を弧状に鋭く削って流れる。ただしこの段階で流路１は完全には埋没していない。流路２上部には流路１から連続する「洪水砂層」が堆積する。平安時代

前半には形成され中位に水田３がある。なお水田廃絶後の埋没過程で流路２との境界線上に不明遺構SX Ⅲ11が作られる。平安時代末ないし鎌倉時代に比定できる。

流路３は狭い砂州状の微隆起を挟んで流路１の西側に位置する。断片的な検出のため規模などは不詳である。流路２を切る。少量の遺物を検出している。

流路４は狭い砂州状の微隆起を挟んで流路１の西側でこれに並行する。南を流路６で，北を流路７に切られる。平均幅10m，河床高３mを測る。

流路５は同様の狭い砂州状の微隆起を挟んで流路４の西側でこれに並行する。やはり南は流路６に切られる。平均幅16m，河床高2.8mを測る。



第30図　第４低地帯北部

流路6は調査区南西隅で検出。幅38m，最深部の標高約2mで微高地面との比高3.1mを測る。第4微高地西縁を削り込みながら北流しJ5付近で大きく湾曲して西に抜け流路1・4・5を切る。また西半部下面から先行流路（流路10）堆積層で奈良時代までの包含層を検出した。堆積層は三大別でき主に中下層から湾曲部を中心に平安時代後期の遺物を多量を出土した。

流路7は西端中央部で湾曲部を確認した。幅は不明であるが河床高2.2mを測る。流路3・4・5を切り漆椀・櫛など鎌倉時代の遺物を含む。

流路8・9は位置関係と堆積層から判断して流路2を切ることは間違い無い。時期は不明。流路8は全掘していないが，流路9では幅約38m，深さ0.6mとかなり浅く広い。

流路10は流路6の西半部下部に部分的に残存する。奈良時代までの遺物を含む。南東から北西に流れる。包含遺物から判断すれば流路1に先行する可能性が高い。

基本層序

セクション13（第31・32図）

第4低地帯流路2を切って流れる流路8・9の堆積状態を示す。

IV層－灰褐色砂層・粘土層　第1微高地西縁部の堆積層。ここでは微高地上部の黄色粘土層は現れていない。

III層－灰褐色・黄灰色砂層　流路8堆積層。調査は河床まで及んでいない。河床高は2.2mより低い。

II層－灰褐色粘土層　流路9堆積層。III層東半の上部を削って堆積する。河床高2.6m，層厚約0.6mで上面の標高3.2m，微高地面との比高0.9mを測る。

I層－現耕土および旧耕土連続層。

セクション14（第33図）

第4低地帯流路2堆積層本流路は第1低地帯の西側で南北140m以上の長さに亙って検出した。基本堆積に差異はないのでもっとも把握し易かった北端部の堆積状況で代表させる。

V層－暗青灰色砂層　流路2の河床に当たり，第1微高地下部に続く。

IV層－青灰色ないし緑灰色の砂混粘土層　層厚最大0.5mで流路下部にほぼ水平に堆積する。遺物を殆ど含まない。

III層－青灰色シルト層　水田3耕作土層。東よりの部分が最も厚く約0.5mを測り，西に向かうに連れて徐々に薄くなる。上面はほぼ水平であるが，西端は僅かに高い。上面の標高2.7m，微高地面との比高1.3mを測る。本層中および直上で10世紀前後の若干量の遺物を検出している。

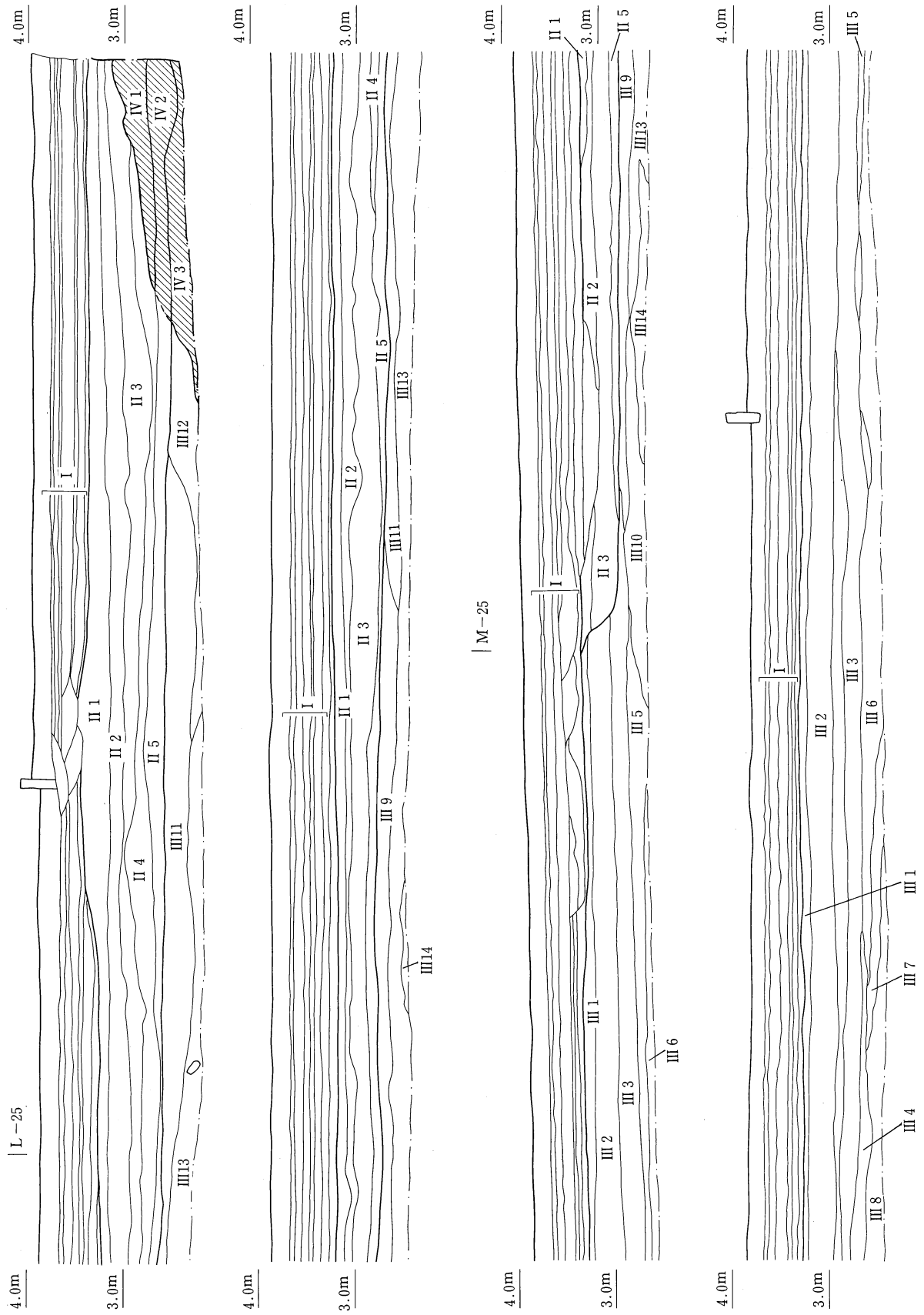
II層－淡灰色・淡黄色細砂層　水田3を被覆する砂層。流路1に係わる「洪水砂層」と同一と考えられる。

I層－現耕土および旧耕土連続層　旧耕作面は5面以上想定できる。

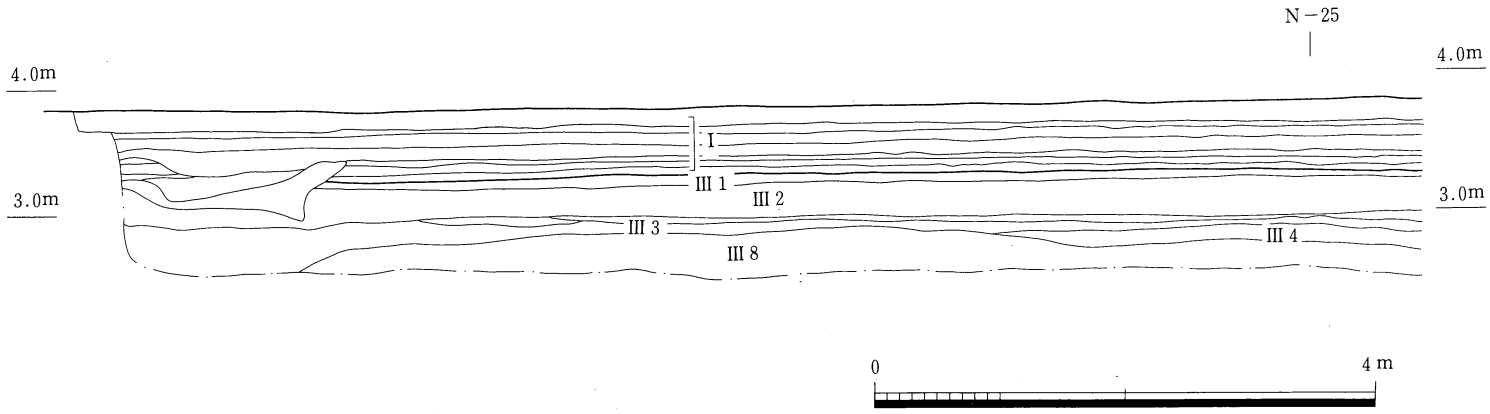
セクション15（第36・37図）

VI層－流路1・4・5の河床を構成する堆積層。VI－17～23は第4微高地堆積層である。上部に粒径の細かい黄色シルト層（VI－17・18）を認めることができる。下部の砂礫層は微高地下部層に連続するであろうが，流路1・4間，同4・5間の砂州状隆起の構成層はそれぞれ上半部に少量の土器片を含むことから，少なくとも一部は形成が新しい。

V層－暗灰色・淡褐色砂層　流路4堆積層。層厚最大1mを測る。比較的小さいレンズ状ブロックの集

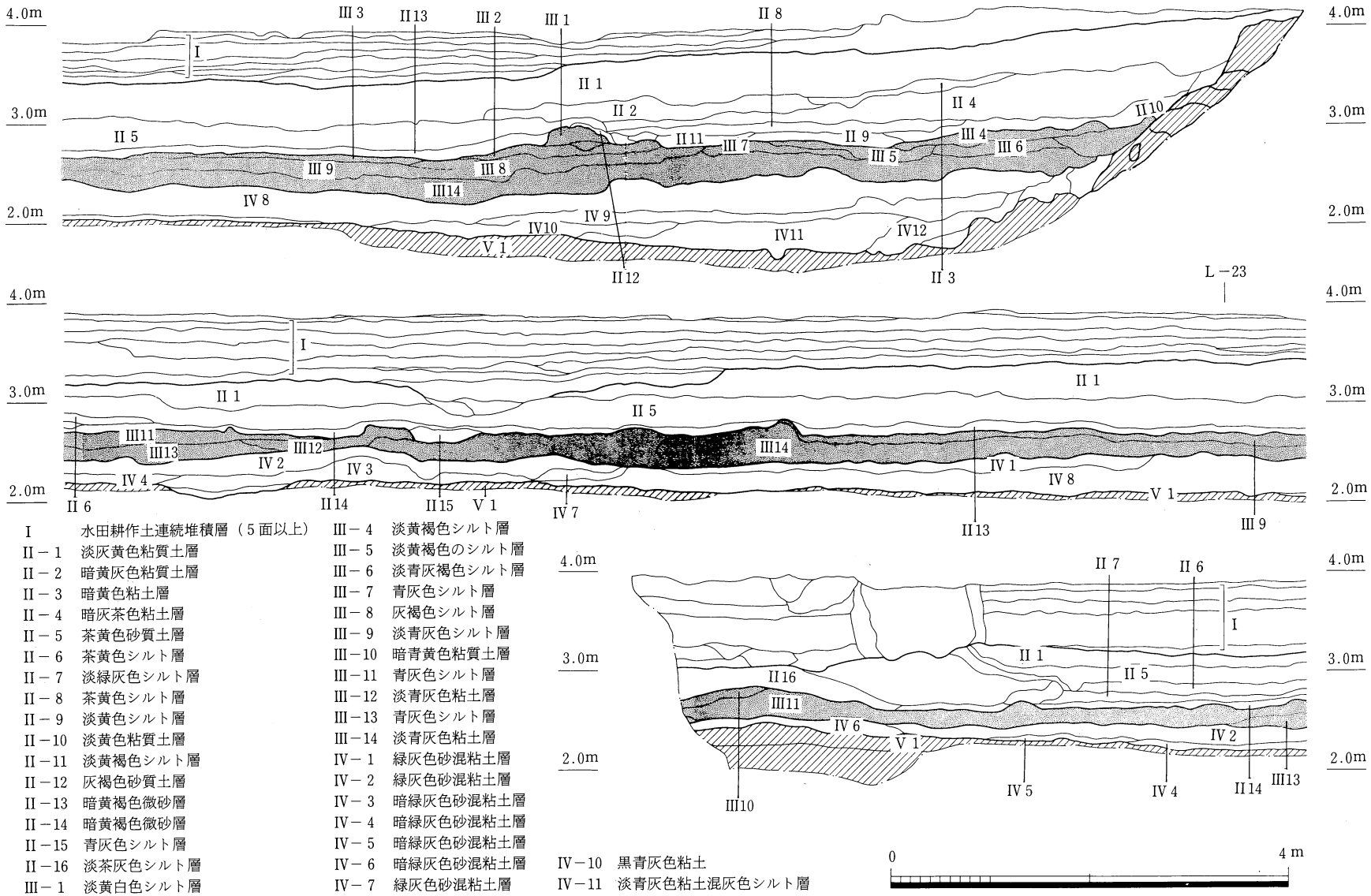


第31図　低地帯セクション13（第４低地帯流路８・９）①



I	水田耕作土連続層	III－3	黄灰褐色砂層	III－11	灰褐色砂混粘土層
II－1	灰褐色土層	III－4	細砂混灰褐色砂質土層	III－12	灰色弱混粘土層
II－2	灰褐色弱粘質土層	III－5	黄赤褐色砂層	III－13	灰褐色砂質土層
II－3	黄褐色粘質土層	III－6	灰色砂層	III－14	グライ粗砂層
II－4	淡褐色粘質土層	III－7	赤褐色粗砂	IV－1	灰褐色土層
II－5	灰褐色粘土層	III－8	黄赤褐色砂層	IV－2	灰褐色粘土層
III－1	灰褐色土層	III－9	黄灰色細砂層	IV－3	灰褐色砂質土層
III－2	灰褐色砂質土層	III－10	灰褐色砂質土層		

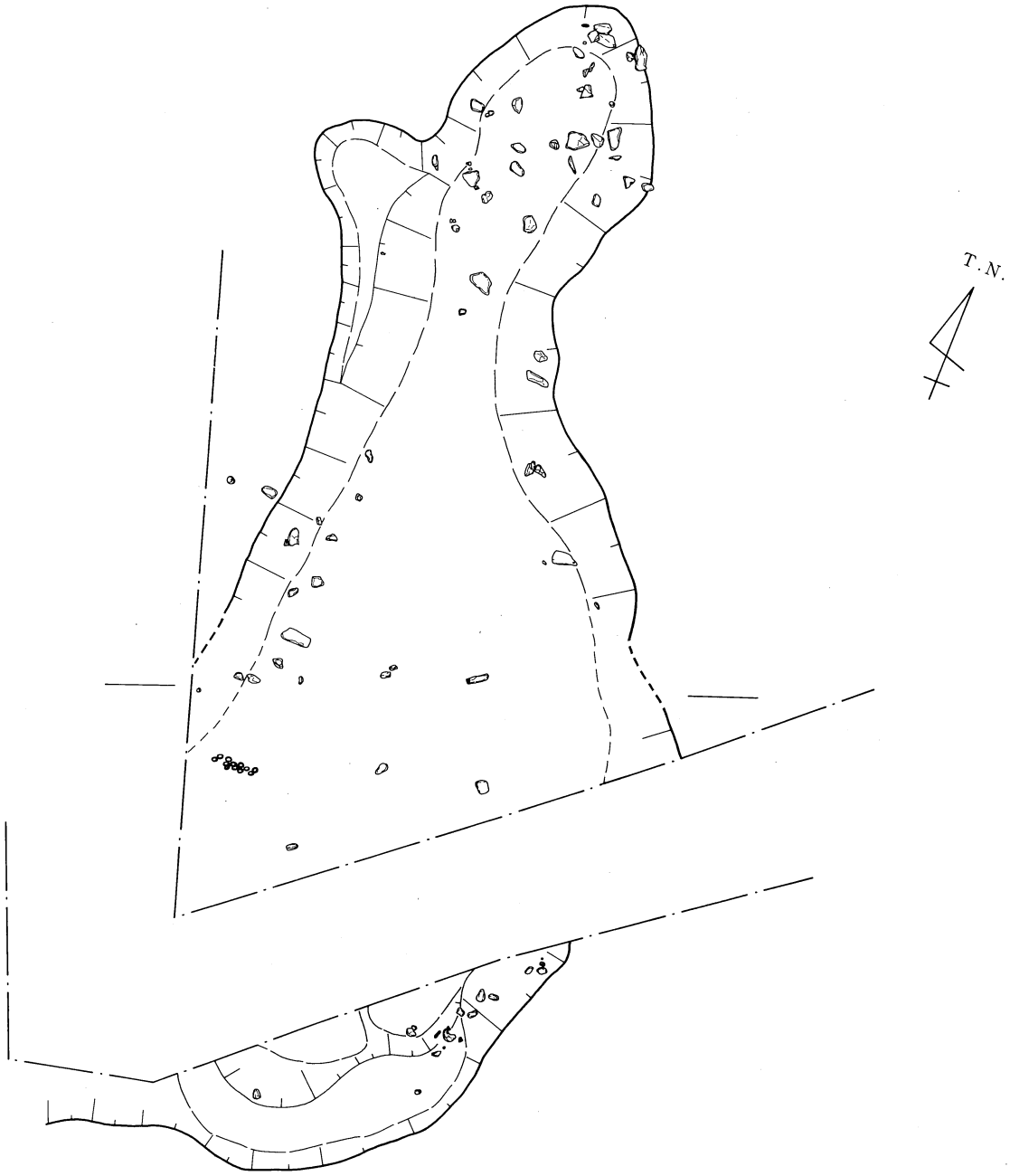
第32図　低地帯セクション13（第4低地帯流路8・9）②



I　水田耕作土連続堆積層（5面以上）

II－1　淡灰黄色粘質土層
II－2　暗黄灰色粘質土層
II－3　暗黄色粘土層
II－4　暗灰茶色粘土層
II－5　茶黄色砂質土層
II－6　茶黄色シルト層
II－7　淡緑灰色シルト層
II－8　茶黄色シルト層
II－9　淡黄色シルト層
II－10　淡黄色粘質土層
II－11　淡黄褐色シルト層
II－12　灰褐色砂質土層
II－13　暗黄褐色微砂層
II－14　暗黄褐色微砂層
II－15　青灰色シルト層
II－16　淡茶灰色シルト層
III－1　淡黄白色シルト層
III－2　灰色シルト層
III－3　淡黄灰色シルト層
III－4　淡黄褐色シルト層
III－5　淡黄褐色のシルト層
III－6　淡青灰褐色シルト層
III－7　青灰色シルト層
III－8　灰褐色シルト層
III－9　淡青灰色シルト層
III－10　暗青黄色粘質土層
III－11　青灰色シルト層
III－12　淡青灰色粘土層
III－13　青灰色シルト層
III－14　淡青灰色粘土層
IV－1　緑灰色砂混粘土層
IV－2　緑灰色砂混粘土層
IV－3　暗緑灰色砂混粘土層
IV－4　暗緑灰色砂混粘土層
IV－5　暗緑灰色砂混粘土層
IV－6　暗緑灰色砂混粘土層
IV－7　緑灰色砂混粘土層
IV－8　暗緑灰色砂混粘土層
IV－9　淡青灰色粘土
IV－10　黒青灰色粘土
IV－11　淡青灰色粘土混灰色シルト層
IV－12　灰色シルト層
V－1　暗青灰色砂層

第33図　低地帯セクション14（第4低地帯流路2）



1 淡灰色砂混粘土層
2 淡青灰色砂混粘土層
3 灰色粘土層
4 淡灰色砂質土層
5 暗灰褐色粘土層
6 淡青灰色砂混粘土層
7 淡灰色砂層　セクション13II層
8 淡灰色シルト層（水田III耕作Ⅰ）セクション13III層
9 淡青色粘土層　センション13IV層

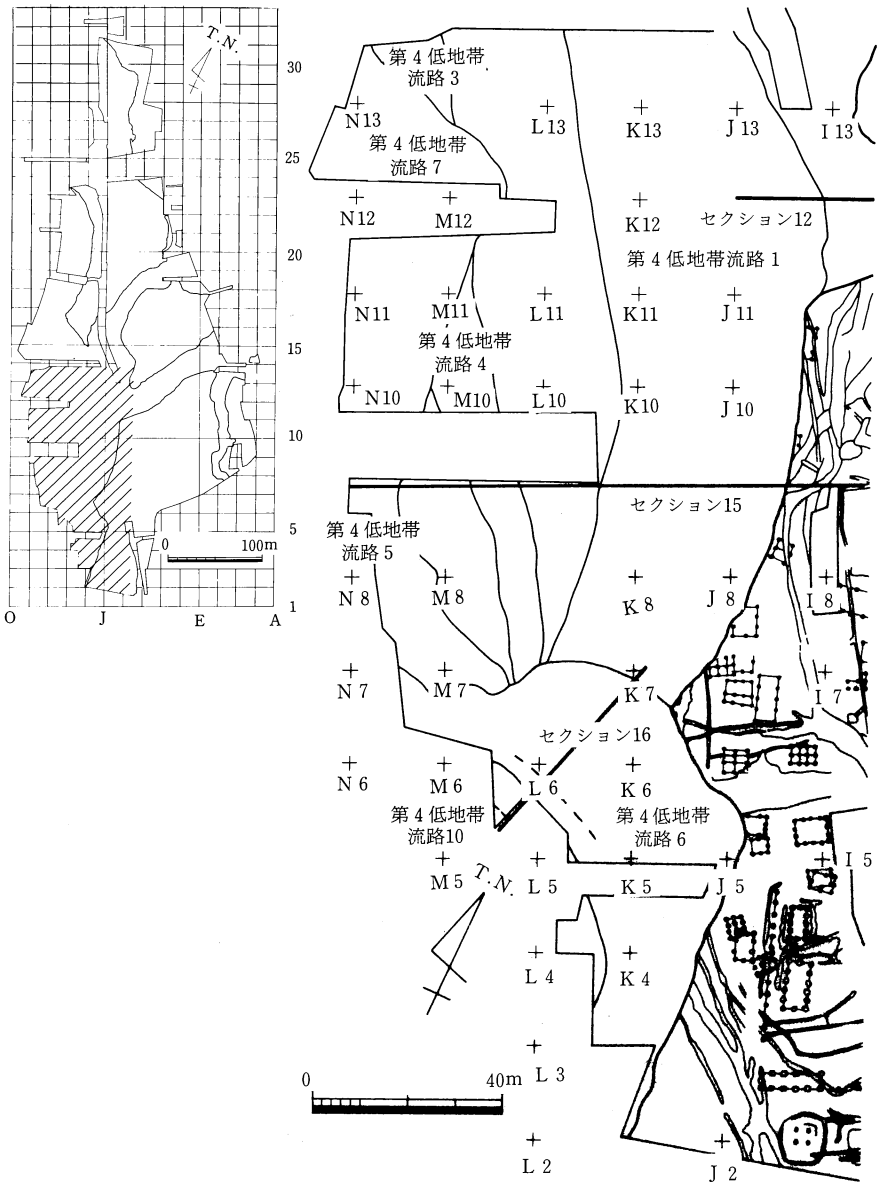
SXIII11
埋土

0　4 m

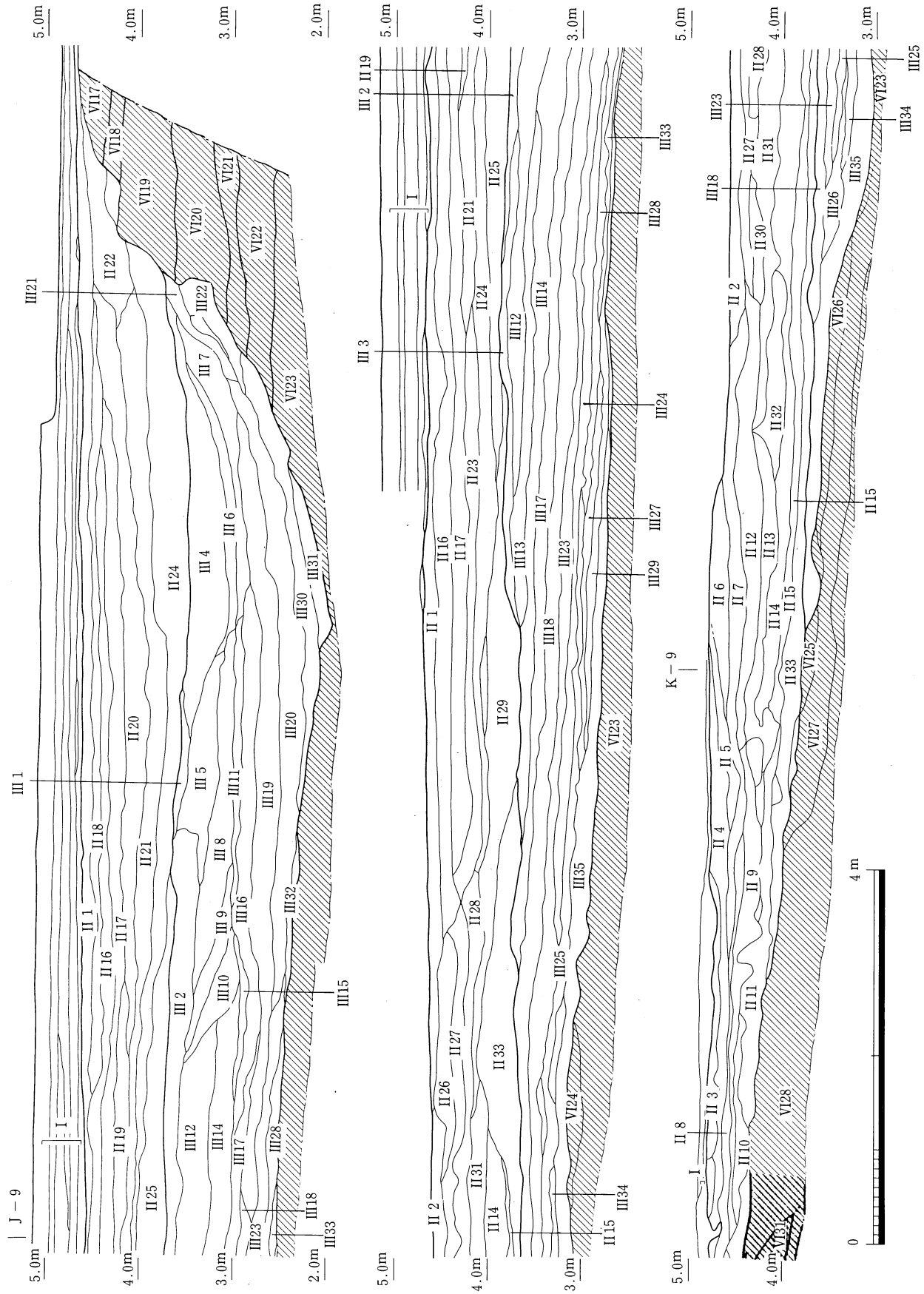
第34図　SXIII11 平・断面図

積からなる。上部層が流路１堆積層上面をうすく覆っているのがわかる。少量の12～13世紀代の遺物を含む。

Ⅳ層－淡褐色系統粘質土層　流路５堆積層。層厚最大1.5mを測る。同様の細かいレンズ状ブロックの集積からなる。流路４堆積層との前後関係は不詳である。少量の12～13世紀代の遺物を含む。

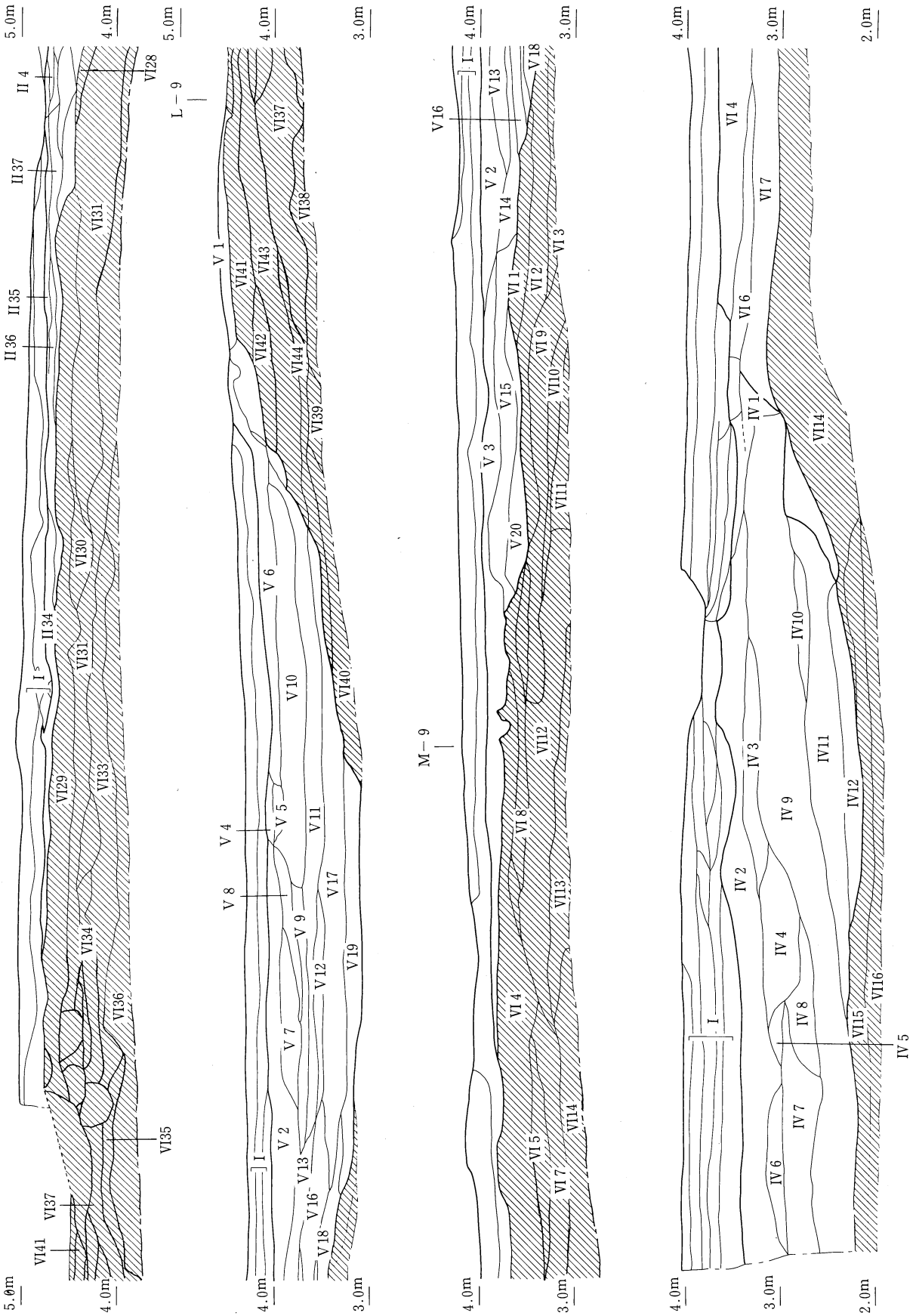


第35図　第４低地帯南部

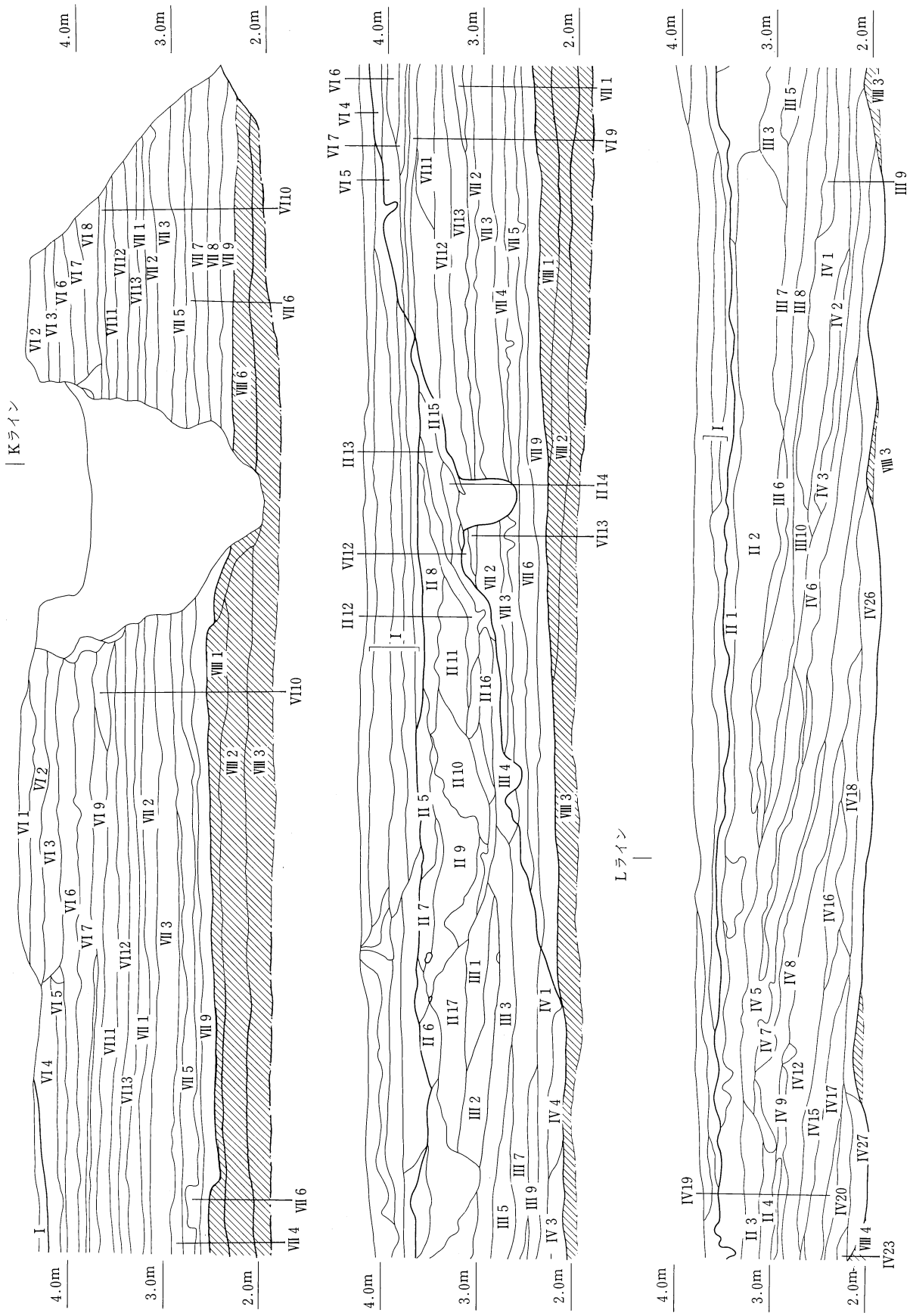


第36図　低地帯セクション15（第４低地帯流路１・４・５）①

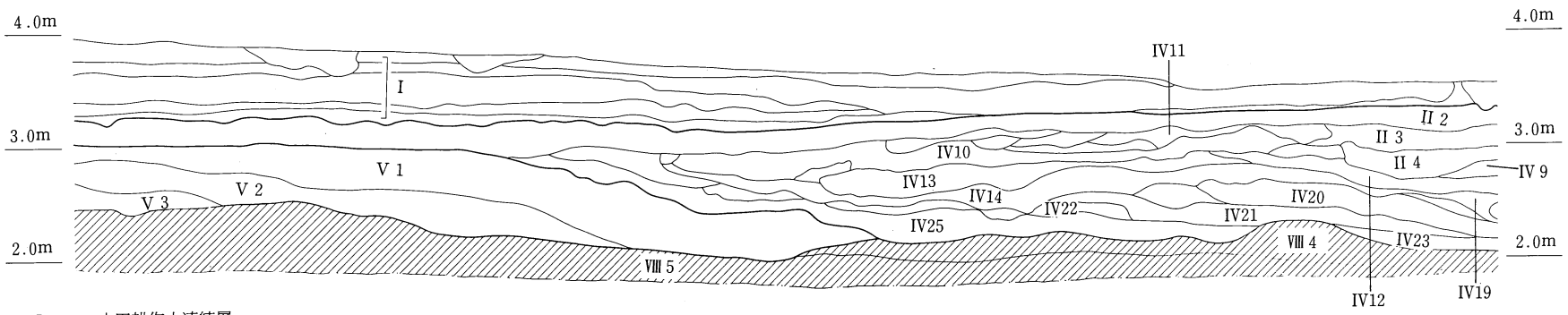
I　水田耕作土連続層
II－1　暗灰色砂質土層
II－2　混暗灰色砂質土層
II－3　黄褐色砂層
II－4　淡灰褐色砂質土層
II－5　砂混淡褐色砂層
II－6　淡黄褐色砂層
II－7　暗灰褐色砂質土層
II－8　黄灰色微砂層
II－9　淡褐色微砂層
II－10　淡褐色細砂層
II－11　淡黄色細砂層
II－12　淡黄褐色砂質土層
II－13　黄褐色砂質土層
II－14　黄褐色シルト層
II－15　暗灰褐色シルト層
II－16　明黄灰褐色砂質土層
II－17　黄茶褐色砂質土層
II－18　淡黄灰褐色砂質土層
II－19　淡茶褐色砂質土層
II－20　暗茶褐色砂質土層
II－21　茶褐色砂質土層
II－22　淡灰色砂質土層
II－23　暗茶褐色砂質土層
II－24　砂質土混淡茶褐色砂質土層
II－25　シルト混茶褐色シルト層
II－26　明茶褐色砂質土層
II－27　淡茶褐色砂質土層
II－28　暗茶褐色砂質土層
II－29　暗灰茶色砂質土層
II－30　淡黄褐色砂質土層
II－31　暗黄褐色砂質土層
II－32　淡茶褐色砂質土層
II－33　淡灰色礫層
II－34　淡褐色砂質土層
II－35　砂質土混淡灰色砂質土層
II－36　淡灰色砂層
II－37　淡灰色砂層
III－1　灰茶褐色砂質土層
III－2　シルト混明青灰色シルト層
III－3　暗茶色砂質土層
III－4　明灰色粘質土層
III－5　シルト混暗青灰色シルト層
III－6　シルト混明灰色シルト層
III－7　暗青灰色粘質土層
III－8　シルト混青灰色シルト層
III－9　シルト混暗青灰色シルト層
III－10　シルト混暗青灰色シルト層
III－11　暗灰色シルト層
III－12　明灰色粘質土層
III－13　砂質土混明灰色砂質土層
III－14　明灰色粘質土層
III－15　シルト混暗灰色シルト層
III－16　暗茶灰色微砂層
III－17　暗青灰色細砂層
III－18　シルト混暗灰色粘質土層
III－19　青灰色粘質土層
III－20　粘質土混暗茶色粘質土層
III－21　暗茶色粘質土層
III－22　明青灰色細砂層
III－23　粘質土混暗茶色粘質土層
III－24　灰茶色微砂層
III－25　暗灰茶色粘質土層
III－26　茶褐色細砂層
III－27　明灰色微砂層
III－28　暗茶色粘質土層
III－29　暗灰色シルト層
III－30　細砂混暗茶灰色粘質土層
III－31　粗砂混明青灰色粗砂層
III－32　暗茶色粗砂層
III－33　暗茶灰色微砂層
III－34　粗砂混淡褐色粗砂層
III－35　淡褐色砂礫層
IV－1　灰色シルト層
IV－2　明青灰色粘質土層
IV－3　淡灰色シルト層
IV－4　暗青灰色粘質土層
IV－5　粘質土混暗褐色微砂層
IV－6　粘質土混淡褐色細砂層
IV－7　微砂混短黄褐色微砂層
IV－8　微砂混暗灰色粘質土層
IV－9　暗灰色シルト層
IV－10　粘質土混暗灰色シルト層
IV－11　微砂混暗茶灰色粘質土層
IV－12　微砂混暗灰色粘質土
V－1　黄褐色粗砂層
V－2　淡灰色砂質土
V－3　暗茶灰色砂質土
V－4　淡灰色微砂層
V－5　暗灰色微砂層
V－6　微砂混茶褐色砂質土
V－7　砂質土混灰色砂質土
V－8　淡茶褐色砂質土
V－9　黄褐色砂質土
V－10　茶褐色砂質土
V－11　茶褐色砂質土
V－12　暗灰色シルト層
V－13　暗灰色砂利層
V－14　暗灰色砂利層
V－15　青灰色粗砂層
V－16　淡茶灰色シルト層
V－17　青灰色シルト層
V－18　暗青灰色粘質土
V－19　青灰色粘質土
V－20　暗茶褐色シルト層
VI－1　暗茶褐色砂利層
VI－2　淡灰褐色粗砂層
VI－3　茶褐色砂利層
VI－4　灰色粗砂混暗茶色砂利層
VI－5　暗黄褐色砂質土
VI－6　暗黄褐色砂質土
VI－7　黄褐色砂利混黄褐色粗砂層
VI－8　暗茶褐色シルト層
VI－9　褐色砂利層
V－10　暗茶褐色微砂層
VI－11　暗茶灰色砂礫層
VI－12　暗灰色砂利層
VI－13　青灰色砂利層
VI－14　暗茶褐色砂礫層
VI－15　暗灰色砂礫層
VI－16　淡褐色砂礫層
VI－17　黄褐色シルト層
VI－18　黄灰色砂質シルト層
VI－19　褐色砂層
VI－20　褐色砂層
VI－21　褐色粗砂層
VI－22　黄褐色砂層
VI－23　黄褐色砂礫層
VI－24　淡黄褐色砂礫層
VI－25　黄褐色砂礫層
VI－26　淡黄褐色砂礫層
VI－27　淡灰色粗砂層
VI－28　礫混淡灰色粗砂層
VI－29　淡灰色砂礫層
VI－30　暗褐色砂礫層
VI－31　暗褐色砂礫層
VI－32　礫混淡灰色粗砂層
VI－33　小石混淡褐色粗砂層
VI－34　淡灰色粗砂層
VI－35　淡黄色粗砂層
VI－36　暗褐色砂層
VI－37　淡茶褐色砂利層
VI－38　淡黄色粗砂層
VI－39　黄褐色粗砂層
VI－40　暗茶褐色砂礫層
VI－41　茶褐色粗砂層
VI－42　灰褐色砂礫層
VI－43　暗褐色砂利層
VI－44　黄褐色砂利層

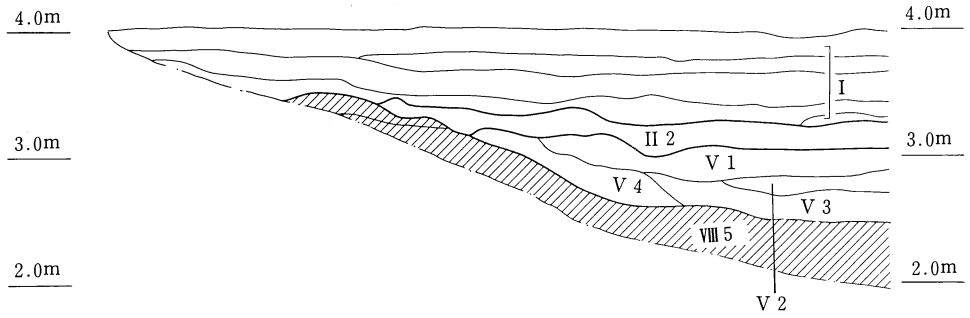


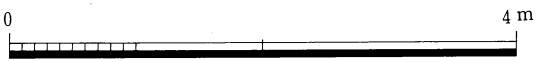
第37図　低地帯セクション15（第４低地帯流路１・４・６）②



第38図　低地帯セクション16（第４低地帯流路１・６・10）①







I	水田耕作土連続層						
II－1	暗黄青灰色粘質土層	IV－3	暗青灰色粗砂層				
II－2	暗青灰色粘土層	IV－4	青灰色粗砂層				
II－3	暗青灰色粘質土層	IV－5	淡灰褐色粗砂層				
II－4	粘土混暗灰色砂層	IV－6	明灰色粘質土層				
II－5	灰色砂質土層	IV－7	灰色細砂層				
II－6	黄灰色砂質土層	IV－8	淡青灰色砂利層				
II－7	濁青灰色砂質土層	IV－9	暗灰色シルト層				
II－8	暗灰色粘質土層	IV－10	暗茶色粘質土層				
II－9	暗灰色微砂層	IV－11	黄灰褐色砂質土層				
II－10	暗黄褐色粗砂層	IV－12	灰褐色粗砂層				
II－11	暗灰色粘質土層	IV－13	淡灰黄色砂利層				
II－12	暗青灰色粘土層	IV－14	暗灰色粘質土層				
II－13	暗灰色粘質土層	IV－15	灰褐色砂利層				
II－14	青灰色粘質土層	IV－16	灰色砂利層				
II－15	暗灰色粘土層	IV－17	青灰色砂礫層				
II－16	濁青灰色微砂層	IV－18	暗茶色砂利層				
II－17	粘土混暗灰色微砂層	IV－19	粘土混青灰色細砂層				
III－1	灰色細砂層	IV－20	淡褐色粗砂層				
III－2	淡茶褐色砂礫層	IV－21	粘土混暗灰色細砂層				
III－3	淡褐色砂礫層	IV－22	シルト混暗灰色粘質土層				
III－4	濁青灰色砂利層	IV－23	明灰色砂利層	VI－2	暗灰褐色砂質土層	VI－11	淡茶褐色砂質土層
III－5	淡青灰色砂利層	IV－24	細砂混灰色細砂層	VI－3	暗灰色砂質土層	VI－12	淡灰褐色砂質土層
III－6	灰茶色微砂層	IV－25	淡黄褐色砂利層	VI－4	暗灰褐色砂質土層	VI－13	粘質土混淡茶褐色砂質土層
III－7	暗灰黄色砂礫層	IV－26	粗砂混暗灰色粘質土層	VI－5	薄黄灰褐色砂質土層	VII－1	青灰色シルト層
III－8	淡茶褐色粗砂層	V－1	淡茶褐色砂礫層	VI－6	明黄灰褐色砂質土層	VII－2	濁青灰色シルト層
III－9	淡灰褐色粗砂層	V－2	淡灰黄色細砂層	VI－7	淡黄灰褐色砂質土層	VII－3	暗灰茶色粘質土層
III－10	淡褐色粗砂層	V－3	暗茶褐色粗砂層	VI－8	黄灰褐色砂質土層	VII－4	暗灰色微砂質層
IV－1	淡青灰色粗砂層	V－4	淡灰色シルト層	VI－9	淡茶褐色砂質土層	VII－5	青灰色粘質土層
IV－2	粘土混淡青灰色粗砂層	VI－1	黄褐色砂質土層	VI－10	黄茶褐色砂質土層	VII－6	細砂混暗茶色シルト層

VII－7	青灰色粘土層		
VII－8	青灰色粘質土層		
VII－9	淡灰色砂礫層		
VIII－1	淡灰褐色砂礫層		
VIII－2	淡黄褐色砂礫層		
VIII－3	淡青灰色砂利層		
VIII－4	淡青灰色砂利層		
VIII－5	淡青灰色粗砂層		
VIII－6	淡青灰色砂利層		

第39図　低地帯セクション16（第4低地帯流路1・6・10）②

III層－灰色系統粘土層　流路１堆積層下層。層厚最大1.5mを測る。微妙に色調･粒径の異なる薄層の水平堆積からなる。

II層－灰褐色系統細砂層　流路１堆積層上層。いわゆる洪水砂層。層厚最大１mを測り，上面ではほぼ微高地面との比高を解消しており，平安時代末以降の遺構面となる。

Ｉ層－現耕土および旧耕土連続層。

セクション16（第38・39図）

流路１・４・５を切って流れる流路６およびその下部に断片的に残存する先行堆積層に関する断面図。

VIII層－青灰色砂礫層　流路１～６の河床を形成する砂礫層。第４微高地下部の砂礫層につながる。

VII層－灰色シルト層　流路１堆積層下層。層厚約１mを測る。奈良時代末ないしは平安時代初頭までの遺物を極少量含む。

VI層－灰褐色砂質土層　流路１堆積層上層。下層に比べ堆積物の粒径は比較的大きい。いわゆる洪水砂層。本層堆積物が第４低地帯のみならず第３低地帯，更に第２低地帯を通って第１低地帯北部に続く。平安時代の遺物を少量含む。

Ｖ層－灰色系統砂層　流路６西半部下部に残存する流路10堆積物で弥生時代後期～奈良時代の遺物を少量含む。検出部分の最深部標高1.9mを測る。

IV層－灰色系統砂層　砂礫層と細砂層が互層状に堆積する。流路６堆積層下層，流路２との接点付近でIV－１層を中心に多量の11世紀末まで遡るものを含む平安時代後期の遺物を検出した層厚0.5～1.1mを測る。

III層－灰褐色系統砂礫層　流路６堆積層中層。下層に比べ相対的に堆積物が粗い。砂層・砂礫層のレンズ状堆積の集合体である。本層でも多量の12世紀代を中心とする平安時代後期の遺物を出土した層厚0.3～0.7mを測る。

II層－暗灰色粘質土層　流路６堆積層上層。中下層に比べ遙かに堆積物は細かい。12世紀末ないし13世紀前半を中心とした遺物を検出した。層厚0.3～0.7mで上面の標高3.7m，微高地面との比高1.6mを測る。

Ｉ層－現耕土および旧耕土連続層。

遺構その他

ＳＸIII11（第34図）

M15・16区の流路１・２・３の接点部分で検出した不定形落ち込み遺構である。標高3.4m，流路２II層中位で検出した。少なくとも水田３の廃絶後一定程度の砂層が堆積した後に形成されている。南北17.5m，東西７m以上の北に向かっていびつにすぼまる長楕円形を呈し，断面形は浅い皿状で深さ0.85mを測る。埋土は微妙に色調・粒径の異なる灰色系統の粘土層薄層が水平に堆積している。炭辺などは確認できなかった。

また北端部を中心に縁辺で底面に接してに拳大の小礫が見られるが，規則的な配置は認められない。西辺中程の検出面近くで12枚の土師質小皿が積み重ねられた状態で出土した。東辺中程では銅銭「至道元宝」等６枚がやはり積み重ねられていた。これら以外にはまばらに土器片を検出したにすぎない。　銅銭・小皿の出土状態は埋葬施設を思わせるものがあるが，それを支持する材料に乏しい。何らかの「まじない」的行為に関する遺構としか推定し得ない。　（大久保）

第3節　水田遺構について

下川津遺跡では2地点計3面の水田遺構を検出した。水田1～3である。しかし，この段階では香川県下で水田調査の実績が無く，また検出したそれらの何れもが耕作土層との分離がやや困難な土質の被覆層を持ち，試行錯誤的に調査を進めたが，正直云ってすべての水田遺構を完全に確認し得たかどうかは若干不安が残る点である。

実際畦畔などそれを構成する諸遺構を確認し得なかったものの，ＰＯ分析によってその可能性を指摘できる部分もある。その多くは低地帯を最終的に埋めるいわゆる洪水砂層上部以高の各層に関してであるが，2地点でそれ以前の堆積土中で水田層の可能性が指摘できる。これらについては上記の水田1～3の様相を記した後に，合わせて報告する。なおＰＯ分析成果は第6章にまとめて掲載している。

検出した水田1～3は全て微高地間の低地帯に位置する。第2章で述べたように現状では旧微高地部分，低地帯部分を問わず調査区域のほぼ全面に水田が広がっていたわけであるが，こうした景観が何時成立したか，特に微高地上の水田化の開始時期については重要な問題であるが，明確な解答を提出にいたっていない。調査時の状況では水田1・2以外は程度に差があるものの耕作土層はグライ状態にあった。また検出範囲内においては何れもこれらに伴う灌漑水路は確認していない。ただしどの水田も上下流方向両端を確実に捉えたわけではないのでそうした施設を必要としないタイプとは断定できない。また水田1・2はほぼ同一地点における上下層の関係にあるが，近接した時期に連続したものではなく，水田3および推定水田域も含めて少なくとも中世以前に連続的に安定して営まれた状況は確認していない。

1．水田1（第40・41図）

第2低地帯および第3低地帯に広がる二面の水田のうち，下層のそれである。第2低地帯の17ライン以北，第3低地帯のGライン以西で検出している。これ以東では僅かではあるが河底が緩やかに上昇している。したがって本水田域がこの辺りで途切れてもあまり不自然ではない。西縁は第4低地帯流路1に削り取られており，明らかではない。また第2低地帯南半部では未検出であるが，第3低地帯で検出した水田耕作土層と第2低地帯北部のそれとが酷似し，層序的にも連続すると見て問題が無いこと，更

第1表　水田1北半部一覧表

番号	区画形態	規　模	面　積	平均高	備　考
1	－	－ × －	－	3.15	
2	－	－ × －	－	3.15	
3	略方形	2.8 × 2.8	6.3	3.17	
4	扇形	15 × 4	74.2	3.2	
5	扇形	11.5 × 3	41.9	3.17	
6	長方形	7.9 × 4.1	32.5	3.2	水口西南隅－8
7	長方形	6.4 × 5	23.6	3.3	
8	長方形	22.5 × 5.1	110.7	3.25	水口東南隅－6
9	略方形	4.8 × 4	17.7	3.3	
10	長方形	16.3 × 4	75.4	3.36	
11	－	4.7 × －	－	3.36	
12	－	4.7 × －	－		

第2表　水田1南半部一覧表

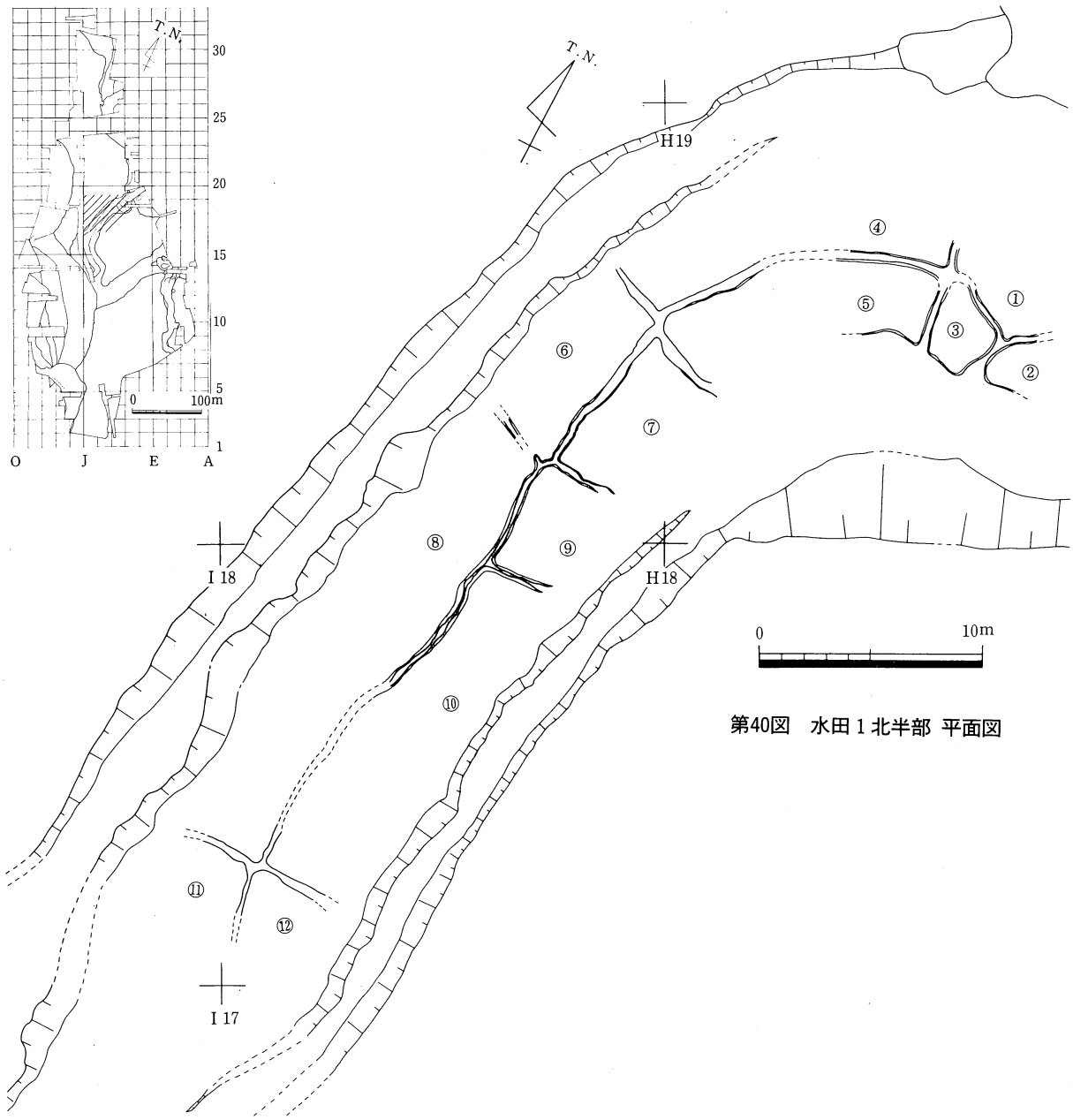
番号	区画形態	規　模	面　積	平均高	備　考
1	－	4.5 × －	－	3.7	
2	－	2.8 × －	－	3.75	
3	長方形	5.6 × 9.2	49.6	3.7	
4	三角形	2.7 × 6	42.5	3.71	
5	長方形	1.9 × －	－	3.75	
6	－	4.7 × －	32.6	3.61	
7	三角形	3.5 × 2.8	－	3.67	
8	－	5.3 × －	－	3.66	
9	－	× －	－	3.7	
10	－	× －	－	3.72	
11	－	× －	－	－	
12	－	3.1 × －	－	3.75	

に両者に時期差を認め難いことから本来存在し第3低地帯の下層水田と連続していた可能性が高い。

さて本水田造成時の両低地帯の状況であるが，何れも河川活動は終息し，狭い平坦面が川底に形成されている。しかしまだ微高地面との比高は大きく第2低地帯で1m前後を，第3低地帯で1m前後を測る。

水田耕作土層は第2低地帯VI層，第3低地帯V層で，層厚0.1m程度と比較的薄い。レベルは第2低地帯・第3低地帯合流部で3.75m前後と最も高く，北・東に向かって緩やかに下降する。水田面の比高は東西・南北それぞれで最大0.1m，0.6mを測る。伴出遺物は極めて少ないが，耕作土層直上で検出した若干量の土器から判断して弥生時代後期後葉には廃絶している。また造成時期については不詳とせざるを得ないが，耕作土層の発達の度合いから見てさほど長期に亙る耕作継続は想定し得ない。

さて次に水田区画であるが，第2低地帯で12区画，第3低地帯でも断片的に12区画を検出している。

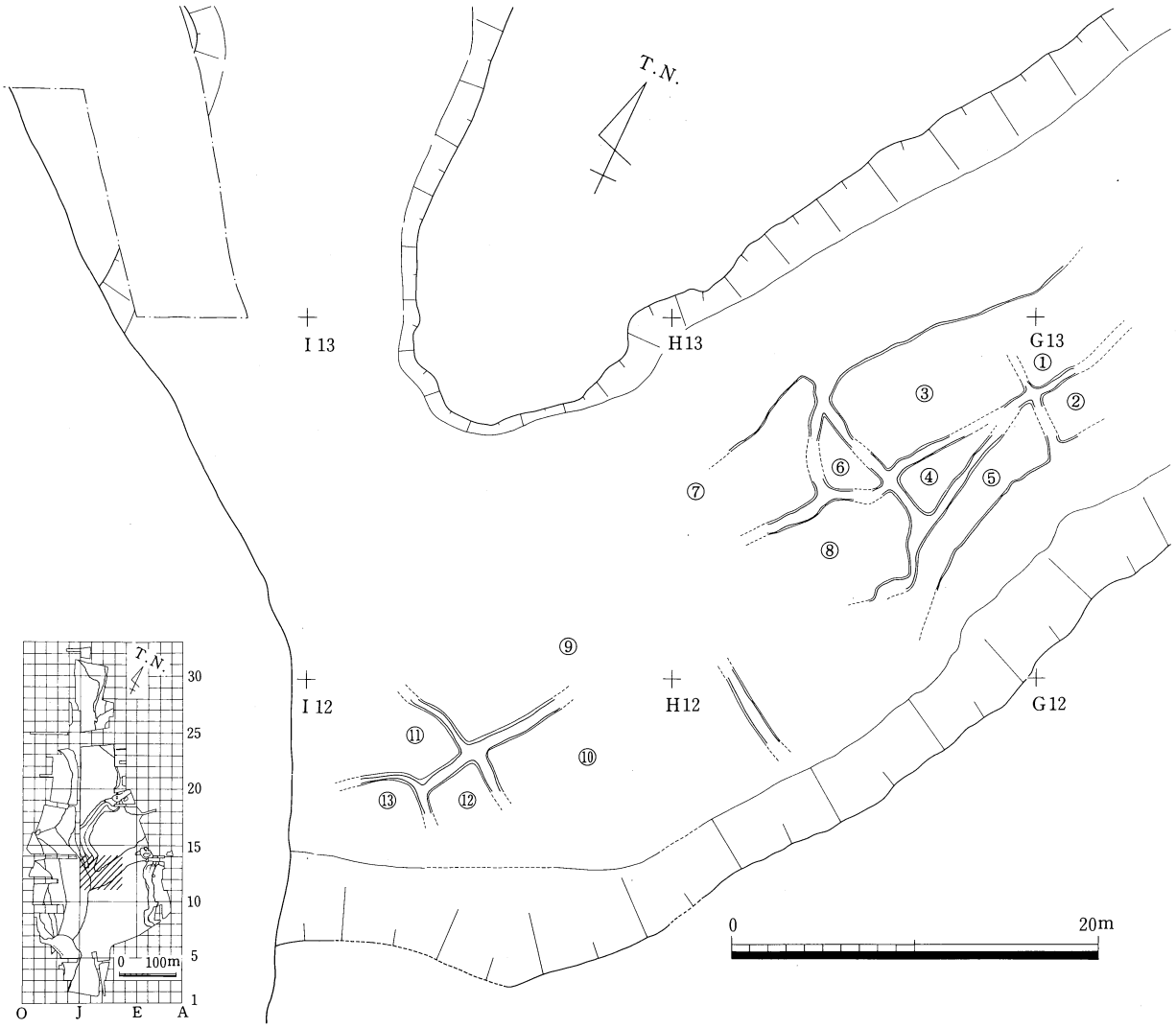


第40図　水田1北半部 平面図

第2低地帯にかかる部分では大勢として，低地帯中央に，その延長方向に沿った，いわば背骨に当たる畦畔を1条配し，さらにこれと直交する東西方向の畦畔で区画を完成させている。幅の狭い低地帯で，南北方向に長く比高が大きい地形に合わせた区画と云えよう。第3低地帯にかかる部分では，断片的な検出ではあるが，やはり低地帯の延長方向，直交方向の畦畔が基調となるものの，ばらつきは大きく，結果として区画毎の形態差・面積差が著しい。

それぞれの区画の面積・平均標高は（第1表）に示した通りである。全体の平均面積が46.1m²，第2低地帯にかかる部分では47.8m²，第3低地帯では41.4m²と，やや北半部の水田区画が大きい傾向にあるが，総じて区画面積は小さく形態のばらつきも著しい。上記水田の検出地点は基本的に狭隘な帯状の低地帯部分に限られ，広い平坦面の確保が困難なためこうした小規模かつ不定形な水田区画としているのであろう。

畦畔幅は平均0.2m，比高は現状で0.05m以下とかなり低い。水口は第2低地帯にかかる部分で一箇所確認したに留まる。また本水田に係わる水路施設は一切検出していない。



第41図　水田1南半部 平面図

なお第２低地帯にかかる部分では両岸斜面に本水田面に接してこれと連続する小平坦面が存在する。北端湾曲部以南でほぼ全域に認めることが出来る。典型的な形状は（第42図）に示した通りである。第１微高地側斜面であるが，水田１耕作土層に続いて幅1.1m程度の平坦面が続く。斜面部を削り整形している。土器溜り３はこの面に形成されている。なお上層の水田２耕作土層に続く部分でも同様の作出がより顕著に認められ，微高地縁辺部に位置する弥生時代後期以前の遺構の幾つかがこれにより破壊されている。ＳＤII11はその典型例である。

これらは水田造成時に整形・作出されたもので相対的に微高地斜面の傾斜が急で平坦面に乏しい第２低地帯部分に限って，低地帯床面の耕地化可能な平坦部を少しでも広げ水田域もしくはそれに伴う作業スペースを確保する目的で成されたものと考えている。

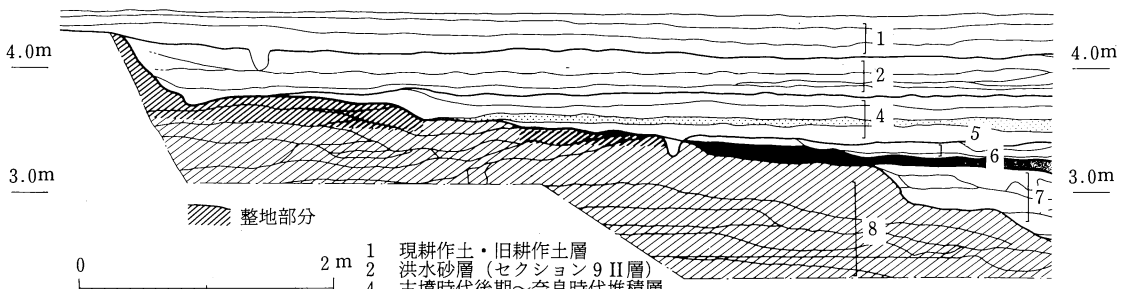
２．水田２（第43図）

第２低地帯および第３低地帯に広がる二面の水田のうち，上層のそれである。第２低地帯の14ライン以南，第３低地帯のＧライン以西で連続して検出している。ただし第３低地帯北縁部分と合流部西半の過半は平安時代後半に開削された大溝ＳＤIII75（現行地割から復元できる坪界線に一致する）によって破壊されている。また下層水田（水田１）同様西縁は第４低地帯流路１に削り取られており明らかではない。また第２低地帯の大部分では畦畔その他の水田遺構を未検出であるが，北部のセクション10部分で行ったＰＯ分析では本水田耕作土層に対応する層位で多量のプラントオパールを検出しており，水田２が第２低地帯の大部分に広がっていた可能性が高い。遺構確認範囲だけで1,500㎡，第２低地帯の推定部分を含めれば推定2,200㎡に達する。

第３表　水田２一覧表

番号	区画形態	規　模	面　積	平均高	備　考
1	長方形	6 × －	－	4.27	
2	略方形	8.5 × 4.9	45.3	4.4	
3	方形	9.4 × －	192.8	4.3	
4	長方形	8.4 × 3.5	30.2	4.38	
5	長方形	31.5 × 6	158.4	4.5	
6	長方形	22.5×10.6	231.3	4.35	
7	長方形	8.5 × 3.7	78.1	－	
8	方形	8.2 × 8.2	94.1	4.22	
9	方形	11.2×8.1	－	4.4	
10	－	4.8 × －	38	3.95	
11	方形	7.7 × －	－	3.9	
12	－	× －	－	4.0	水口南辺東－16
13	方形	8.2 × 4.6	－	－	
14	－	× －	－	3.8	
15	－	4.5 × －	－	－	
16	－	7.8 × －	－	4.2	水口北辺東－13
17	－	7.3 × －	－	4.23	
18	－	16.5 × －	－	4.3	

さて本水田造成時の両低地帯の状況であるが，下層水田廃絶後に間層として本水田耕作土層下に0.2～0.5m程度の砂質土層の堆積が確認できる。これによって両低地帯の底



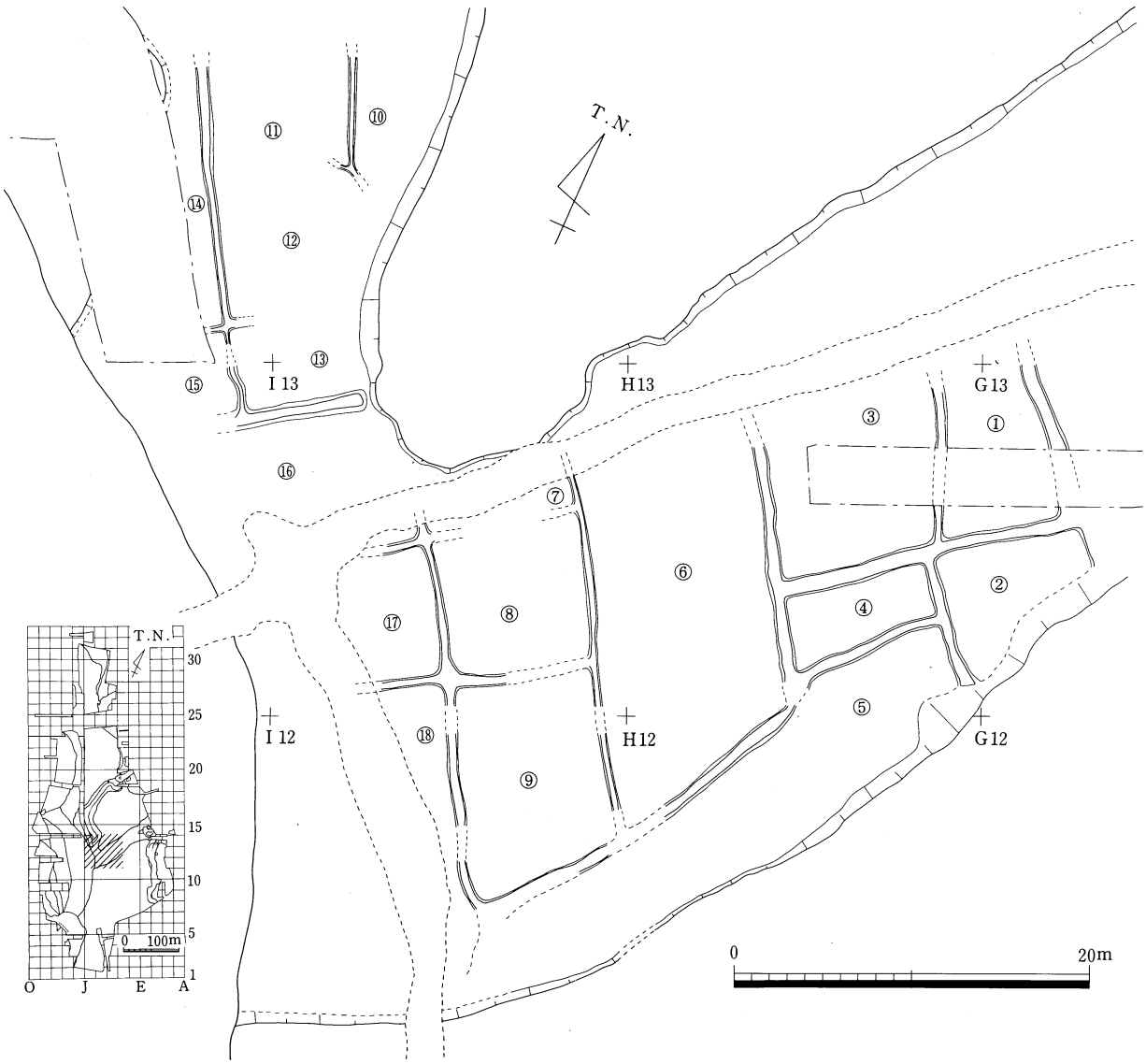
1　現耕作土・旧耕作土層
2　洪水砂層（セクション９II層）
4　古墳時代後期～奈良時代堆積層
（トーンは水田耕作土層と推定セクション９IV２層）
5　弥生時代後期堆積層
6　水田１耕作土層（セクション９VI層）
7　弥生時代前期堆積層（セクション９VI層）
8　地山層（セクション９VIII～X層）
※太線（網トーン上面）は整地部分

第42図　第２低地帯水田１・２関連整地部分断面図

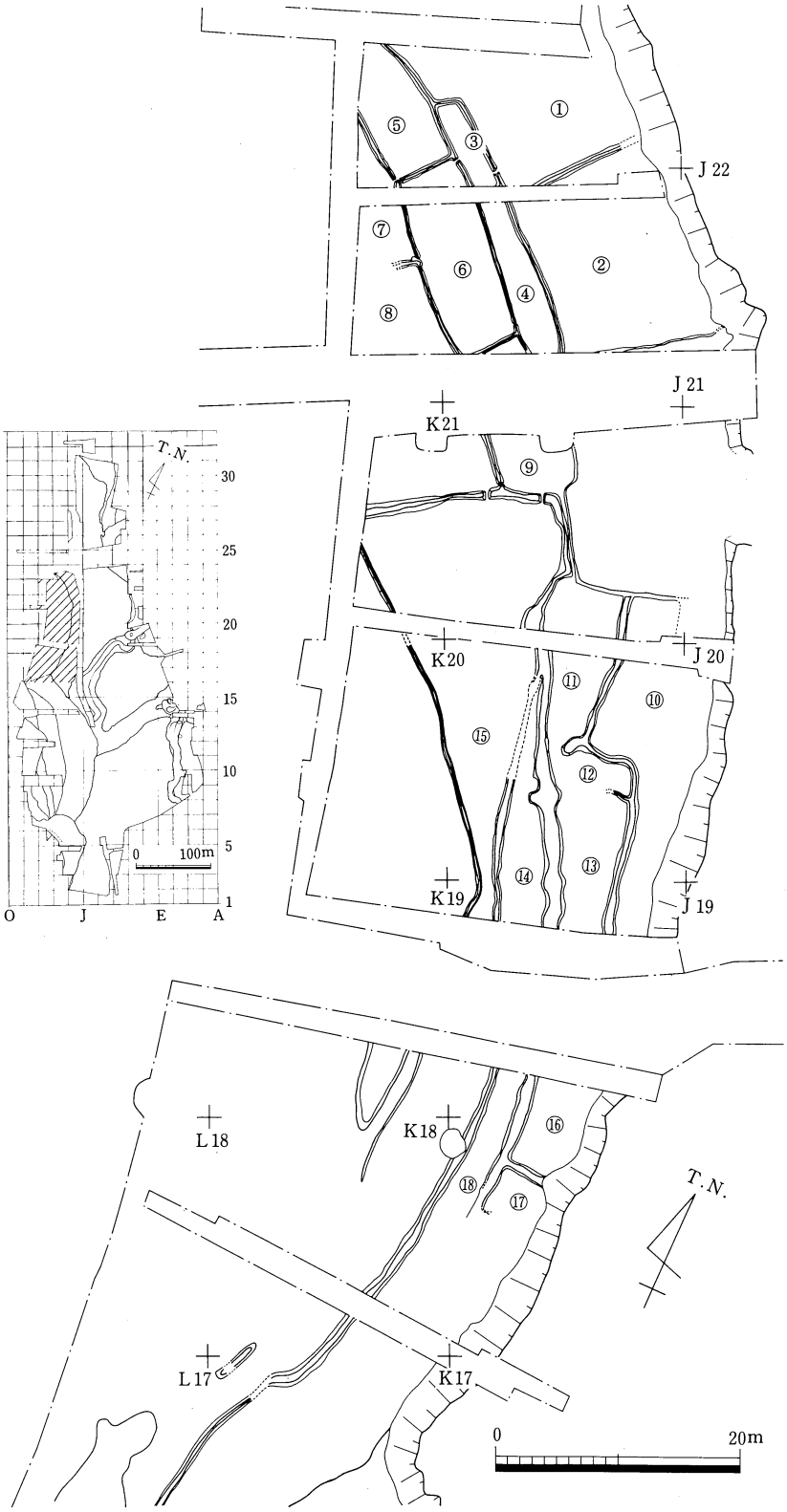
が上昇した分だけ，河床部平坦部が広がり，水田面を形成し易くなっている。しかし微高地面との比高は未だ第2低地帯で0.8m，第3低地帯で0.6mを残している。

第2低地帯VI2層，第3低地帯IV層の灰褐色砂質土層が水田耕作土層に当たる。層厚は平均0.15mとやはり薄い。上面の標高は第4低地帯との合流部が4.3mで最も高く，水田面の比高は東西・南北それぞれで最大0.1m，0.4mを測る。またセクション10の推定水田層上面では3.5mを測る。耕作土層直上の遺物から見るかぎり本水田廃絶時期は奈良時代後半まで下らない。このことはこれを切って流れる第4低地帯流路1の形成時期の所見とも矛盾しない。また造成時期は第3低地帯で耕作土直下層に少量ながら含まれる遺物の下限年代から見て6世紀末まで上らない。

水田区画は18区画を検出している。畦畔は平均幅0.7m，高さ0.7mで比較的幅が広く低い。先行する水田1に比して遙かに規格性が高く，本水田の区画は比較的整った方形を呈する。畦畔間隔は南北方向では地形に制約されて特に縁辺部では狭くなるなどある程度の差異が認められる。これに比べ東西方向では7～11.5mと比較的揃っている。その結果各区画面積についても水田1ほどばらつきは大きくなく，平均108.5mを測る。



第43図　水田2　平面図



①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
⑪
⑫
⑬
⑭
⑮
⑯
⑰
⑱
J 22
J 21
K21
K20
J 20
K19
J 19
K18
L 18
L 17
K17
T.N.
0
20m
30
25
20
15
10
5
1
O
J
E
A
0
100m

第44図　水田３　平面図

水口は確実なところで一箇所が確認されるだけであり，水路施設は検出していない。なお先に示したように水田１同様の小平坦面を，第２低地帯両岸の大部分においてより明確な形で見出す事が出来る。

また低地帯内に限定して水田を形成しているにもかかわらず，水田区画の方向はこの段階での低地帯上面の傾斜方向とは微妙にずれる。水田畦畔の最も根本的な機能からすれば，水田面の主要傾斜方向に直交して配することが最も合理的なはずであるがこれとは確実にずれる。

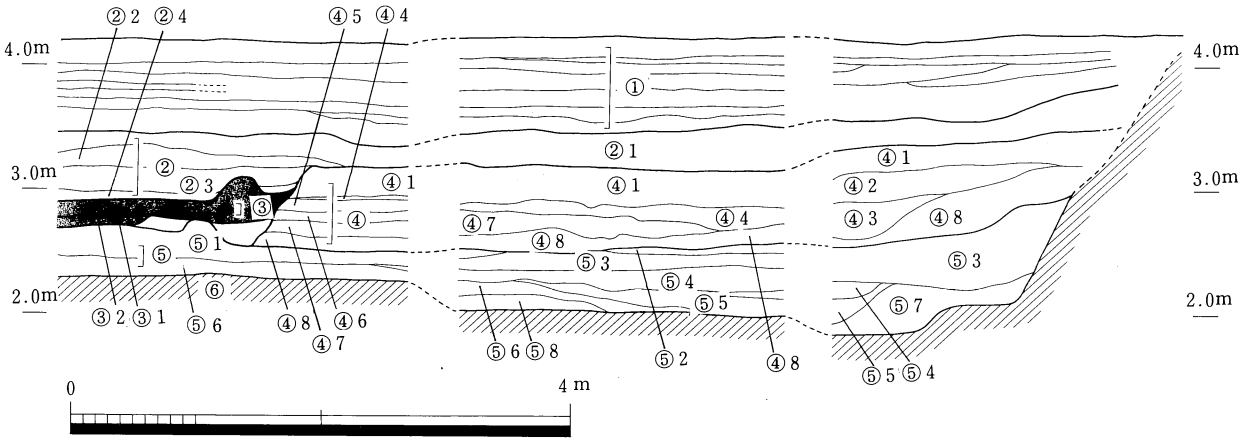
興味深いことにこの畦畔配置方向は現行地割から推定される鵜足郡条里の方向にほぼ一致し，なおかつ検出範囲西端の南北畦畔（区画11～13と14・15間）は推定坪界線に近い位置にあり，さらに東側の並行する南北畦畔は各々１／10町に近似した間隔をもって配置される。条里地割との関連を検討する必要がある。特に本水田の廃絶年代が奈良時代前半と推定できるだけに重要な問題である。この点については本遺跡で確認した他の条里割関連遺構と共に第５章で改めて検討することとする。

３．水田３（第44図）

第４低地帯流路２に形成された水田である。検出範囲は流路２の大半に当たり，延長120mに及ぶ。東は第１微高地によって画されるが，西縁は一般に不明瞭である。区画14西辺は小溝が，同18は断片的な畦畔が認められる。南端は流路３に破壊されている。北端は調査区外に続くので不詳であるが，40m北方の25ライン上の東西トレンチで流路２を切り込む可能性の高い別流路を検出している。したがって本来的な広がりは完全には明らかにし得ないが，今調査で残存部分の過半は検出している。

伴出遺物が乏しく，それから形成時期を明らかにすることは困難である。流路２が１を切ること，１の形成時期が８世紀後半頃と考えられること，水田３は流路２形成後，河川機能を喪失して一定の堆積を見た後に造成していることが上限を探るほぼ唯一の資料と云って良い。一方廃絶年代は水田面直上被覆層に伴う遺物からほぼ11世紀前半と推定できる。

流路２Ⅲ層（セクション14），黄褐色シルト層が水田耕作土層に当たり，層厚平均0.4mを測る。水田面の標高は中心部で2.9m前後，微高地面との比高では1.5m程度となる。また水田面の比高は南北方向



①　現耕作土および旧耕作土連続層
②1　暗青灰色シルト層
②2　淡茶色砂質土層
②3　淡灰褐色シルト層
②4　淡灰褐色粘質土層
（セクション14Ⅱ層）
③1　淡茶灰色シルト層
③2　茶灰色粘土層
（水田３耕作土セクション14Ⅲ層）

④1　暗茶褐色粘土層
④2　暗灰褐色粘土層
④3　砂礫混灰色シルト層
④4　粗砂混暗灰茶色粘質土層
④5　粗砂混暗茶褐色粘質土層
④6　暗灰褐色砂層
④7　暗茶灰色粘質土層
④8　粗砂混青灰色粘質土層

⑤1　暗青灰色粘土層
⑤2　礫混灰茶色砂層
⑤3　粗砂混青灰色粘土層
⑤4　砂礫混灰褐色粘土層
⑤5　淡黒色粘土層
⑤6　暗青灰色シルト層
⑤7　黒色粘土混黄灰色粘土層
⑤8　青灰色砂
⑥　青灰色砂礫層

第45図　水田３　付属テラス面断面図

で最大0.2m，東西方向で0.1mを測る。流路の埋没が必ずしも十分ではなく，弱い凹面に水田を形成しているので水田１・２に比しても，流路幅の割には比高が大きい。

畦畔は通常，平均して幅0.4m，高さ0.1m程度を測る。北部の区画１～９に関わる畦畔が比較的細身であるのに対して，以南では0.9m程度と幅広い。特に区画13･14間のそれは最大1.3mを測るが幅は一様ではない。水田区画は18区画を検出している。ほぼ流路方向に沿って緩やかに湾曲する南北畦畔を３～４条配して，これと直交する方向の畦畔と合わせ区画を形作る。東西・南北方向とも畦畔間隔に規則性は見いだし難い。全体として南北方向，つまり流路方向に長い傾向は持つものの，区画毎の面積・形態にばらつきが大きい。他水田域に比べ，相対的に水田面の起伏が激しくならざるを得ない地点にあり，それに合わせて畦畔を配するため，勢いその間隔に統一を保ち難くなるのであろう。

第４表　水田３一覧表

番号	区画形態	規　模	面　積	平均高	備　考
1	－	12.3 ×		2.72	水口西辺南－３
2	略方形	17.5×14.0	199.0	2.83	
3	長方形	8 × 2	14.3	2.86	水口西辺中-6 東辺南-1
4	長方形	14.5×3.3		2.91	
5	長方形	11.5×5.2		2.86	水口南辺西-6 西辺南-7
6	長方形	15.5 × 6	83.3	2.90	東辺北-3西辺中 -7北辺西-5
7	－	6.6 × 5	36.9	2.91	水口東辺中-5 東辺南-6
8	－	19.5 × 11		2.90	
9	長方形	11 × 4.8	74.4	2.91	水口南辺東－11
10	－	2.5~9.2×		3.03	
11	長方形	13.4 × 6	62.4	2.96	水口北辺西-9 南辺西-12
12	長方形	6.4 × 1.9	20.7	2.96	水口北辺西-11
13	長方形	5.6 ×		2.98	
14	狭三角形			2.97	
15	三角形	16.5 ×		2.97	西縁小溝で画す
16	長方形	5.2 ×		2.9	
17	－	4.5 ×		2.94	
18	－	2.4 ×		2.89	
19	－	5.9 ×		2.93	

また北半およそ20ライン以北では東西畦畔を明瞭に配し，略方形ないしは長方形の水田区画を完成するが，これより南では東西畦畔が不明瞭である。ただしこの差異が，本水田区画の完成された姿であるかどうかは以下の点で疑問がある。異常に南北に長い区画14・18等では南北両端の比高と畦畔の高さから見て，これを分割する東西畦畔を中に配さなければ，一面に水を張ることが不可能となる。したがって南半部の水田区画は未完成の可能性がある。

北半部の水田区画１～９では，四周の畦畔が完存している場合には必ず１～３箇所の水口が認められる。取排水施設として畦畔に水口を切ることが本水田では一般化していると云えよう。先に示した区画14の西縁を画する小溝は，その規模から見て取排水の主要な用水路とは見成し難い。これ以外に水路施設は確認していない。

この他本水田に伴う施設としては，東縁第１微高地斜面から張り出し，区画９，14の東側に位置する南北20m，東西13mを測り，水田面との比高0.2mを持つ平坦面がある。水田耕作土層に先行して，流路２東縁に堆積した土砂を整形･作出している。（第45図）上面に柱穴その他の施設は見られない。性格の特定は困難であるが，位置から見て耕作時の作業スペースとして確保されたものであろうか。

４．推定水田域

第１低地帯北部

セクション１のII10層，同２のIII２層で多量のプラントオパールを検出している。両層は同一層と考えられ流路１・２堆積層の上面に広がる。標高2.5m～３mで先行堆積層に比べれば比較的水平に近いものの流路２中央部上面ではやや凹む。微高地面との比高は約0.7mを測る。流路２堆積層上部にあり，直上から洪水砂層II層の堆積が始まる。上下層の年代観から，奈良時代後半～平安時代初頭に位置付けられる。

第1低地帯中部

セクション7のII 9層で多量のプラントオパールを検出している。同セクション部分では，層厚約0.2mでほぼ水平に堆積しており，上面の標高3.4m，微高地面との比高0.6mを測る。調査時に平面的に確認し得なかったが，本層では同セクション部分で畦畔状の高まりを確認している。本地点より北部に堆積するいわゆる洪水砂層と同時期の堆積と推定している層直下にあり，本層では少量の平安時代前半期の遺物を検出できた。

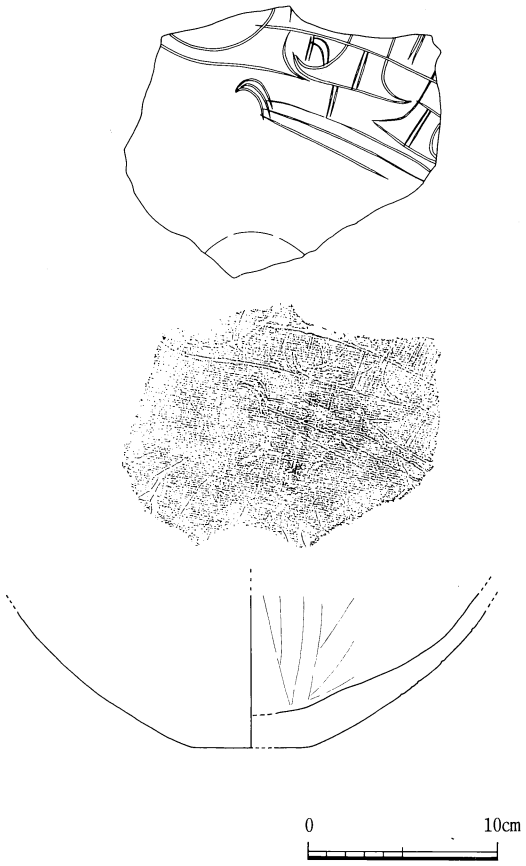
本層は少なくとも南は10ラインまで，北は第3低地帯との合流部まで広がることが確認できる。

（大久保）

第4節　土　　器

1．第1低地帯流路1出土資料

多量の弥生後期～古墳時代前期の資料を出土しているが時期的な区分の指標となりうる状態で出土していない。下川津遺跡における弥生後期～古墳時代前期の集落存続期間全過程にほぼ匹敵するだけの時間幅を持つ資料ではある。少量の古墳時代前期末～後期初頭の資料も確認している。また当地方では類例の乏しい吉備系の小形供膳形態を伴出しているほか，一例であるが壺体部下半に線刻画を描いた資料がある。ここでは全器種を網羅すべく，更に器種毎のバリエイションを出来るだけ示しうるように資料を抽出・掲載した。



第46図　第1低地帯流路1　出土絵画土器

（第47図1～30）は広口壺である。小形壺を除いて中・大形品では壺の口頸部形態は全て広口である。上東式に見るような長頸壺は見られない。（1）が僅かに長頸壺の名残をとどめる程度である。口縁部を拡張して二重口縁を成す資料では（19～21・26）に見られるように内傾するものが多い。(22)のようなタイプの二重口縁資料はきわめて少ない。また拡張部外面には文様体を持つ例が一般的であるが，施文する文様は鋸歯文（19～21・27）がもっとも多く，波状文（16・17・27）は少ない。また円形浮文（24・25）も稀に認められる。(18)は口縁端部に幅広の粘土帯を貼り大きく拡張して外面に刺突文，内面に複合鋸歯文を施す。胎土に特異な点は認め難いが，形態・文様構成は吉備地方に比較的良く見るものである。

（第48図1～6）は小形の壺類。（1）の細頸壺は口縁部だけを小さく外反させ，内外面ヘラ磨きを施す。基部には細かい列点文があり外表に赤色顔料を塗布する。形態・調整の点から見て搬入品，備中南部の土器の可能性が高い[(1)]。（2）は台付直口壺。吉備地方での類例は多いが讃岐地方ではまず見られない器種である。ただし本例は体部形状に吉備の同器種とは一定の差異がある。（5）は台付の小形丸底壺，雲母土器である。類例は徳島・萩原墳墓にある。（7）は壺体部で扁平球状を呈し，最大径に突帯2条を配し，その上下を鋸歯文で充塡する。やはり吉備地方に類例の多い器種である。ただし胎土の点では讃岐産としても違和感はない。

甕（第48図8～第49図17）内面のヘラ削りは上端に達しない例が大部分である。多くの場合内面上半には顕著な指押さえを残す。また内面にハケ調整を加える例も少ない。(第49図16)は口縁部が薄く，長く外反する。体部の張りは強く内面ヘラ削りは上端まで丁寧に施され，該期の当地方一般の土器では違和感のある甕である。（第49図5～8）はいわゆる雲母土器甕である。（9・10）は二重口縁甕。(10)は

口縁部顎の開きの割りには立ち上がりが高い。顕著な撫で肩，内面調整の点を含め吉備酒津系甕とは異なる。(第49図11)は布留式甕と考えてよかろう。口縁部下端は緩やかに屈曲して稜を持たない点は異なるが，かすかに内湾気味に開き，端部内面は弱く肥厚する。

(第50図13～23) は鉢，(第51図１～11) は高杯である。(４) は外面上半部に暗文状に山形状にヘラ磨きを施す。(９) は丁寧なヘラ磨きと緻密な波状文をもち，装飾高杯口縁部片の可能性がある。(10) の高杯軸部はエンタシス状に膨らみ，細い並行沈線を配す。内面は丁寧にヘラ削りを施す。(11)は外表を丁寧に磨き，軸部下端に沈線を巡らす。讃岐地方では類例に乏しい。

(第51図15) は一見したところ短脚化した高杯脚部片のようにみえるが完形品である。蓋もしくは支脚の可能性を考えている。(第51図16) は筒形の支脚である。こうした支脚類の点数はきわめて少ない。

(第46図) は線刻画資料である。矮小化した平底を残す大形壺の体部下半・器表面を，ハケ調整となで調整で仕上げた後に細身の鋭利な工具 (刻線の形状から金属器と判断できる。) で深く刻み付ける。描画後，一部では重ねてヘラ磨きを加える。破片のため画像の全貌は知り得ないが，下端に船とおぼしき表現がある。船体を三本の平行線で表し，船首は強く反りかえる。上方には両端を強く反りかえらせた台形様の表現が一部重複して三個並ぶ。何れも上半を欠損して全体形を知り得ないが，中位に横線を入れ下半の中央には垂下平行線を表現する。帆と見成す可能性も有るが，帆柱の表現は明確ではない。

２．第１低地帯土器溜り１出土資料

個体数が乏しく，高杯・小形鉢の一部が欠落する点が惜しいが，良好な一括資料である。広口壺の一部には明らかに吉備地方のいわゆる酒津壺の影響が窺われる。その点で編年上の一定点になりうる資料である。

(第51図17～第52図４) は広口壺である。(17) はやや肩を張り頸部は弱く内傾する。口縁部は鋭く折れて直線的に強く開く。口縁端部を除いて全体形状，特に頸部形態は吉備酒津系壺の影響と考えられる。他の広口壺は頸部が直立して口縁部は緩やかに開く。(第52図４)は雲母土器壺である。体部片であるが，形態から見て小形の広口壺であろう。体中位で強く張り，内面上半は指押さえが顕著である。

(第52図６～11) は甕。底部は小形化しているが明瞭な平底をとどめる。体下半部もやや丸みを帯びている。口縁部は比較的強く開く。内面ヘラ削りを施すにしても完全に上端まで達する例はない。そのため内面に明瞭な稜は認められない。体部外面はハケ調整で仕上げるが何れも叩き目を部分的に残す。

(第52図13) は大形鉢で口縁部は片口状を成す。体部はかなり丸みを帯びるが明瞭な平底をとどめる。

３．第１低地帯流路２出土資料

第１低地帯流路２からは７世紀前葉～８世紀中葉の須恵器・土師器を出土している。その出土状態については先に記したとおりであるが，そこでも示したように中心となるのはほぼ７世紀代の資料で，８世紀代に下るそれは遙かに少ない。

小片が多く厳密な個体数算定は困難であるが，図化しうる程度の大形破片でおよそ500点程度を数える。須恵器・土師器ともに該期の器種組成をほぼ網羅していると思われる。供膳・煮沸・貯蔵に関わらず，各機能を体現する器種数の増加が著しいが，特に供膳形態における形態・法量でかなり厳密に区分できる豊富な構成が注目できる。これら細別器種の構成比や形態上の特徴については後章でやや詳しく検討するが，その内容は同時期の藤原・平城宮域における構成と同様の傾向が認められる。先行する古

墳時代後期の単純な器種構成を持ち，形態・胎土の点でも6世紀段階の土師器供膳形態が全般的にかなり粗雑であるのとはかなり対照的である。杯・皿・高杯類を中心に緻密な調整・施文と粗い砂粒を含まない整良な胎土を持つ例が非常に多い。

また6世紀段階では，供膳形態は圧倒的大多数を須恵器によって賄われていたのに対して，7世紀以降急激に土師器の占める量が増加する。

煮沸形態では甑一例を除いて他はすべて土師器である。球形甕，把手付甕，長胴甕，土鍋，甑が基本構成である。こうした構成は本資料より先行する6世紀後葉段階で既に完成されていたものを引き継いでいる。器種による法量の格差は大きい。単一器種としては球形甕がもっとも多く，小法量煮沸形態はこれによって賄われると見て良い。また何れも相対的に変化に乏しい器種であるため，本流路資料の示す時間幅の中での変化はうまく把握できていない。

ここでは保存状態の良好な個体を中心に，極力全器種を網羅すべく321点を図化・掲載した。ただし明らかに流路1からの混入と思われる古墳時代初頭以前の資料は省略している。また図化点数は必ずしも器種構成比を反映していない。なおこの中には墨書土器2点・円面硯1点，土馬小片，鞴羽口の他，多量の製塩土器・飯蛸壺および若干量の真蛸壺を伴う。

（第53図1～15）は土師器杯で，底部はほぼ平坦，体部との境は比較的明瞭な一群である。外面調整には（2～4）等のように全体を磨きで仕上げるもの，（7）のように底部から下半部にヘラ削りを加えるもの，（1）あるいは（12）のようになで調整のみで終わるものなど差異がある。内面にはほぼ例外無く暗文を加えるが，単純な放射状暗文，（14・15）のようにこれに螺旋暗文を加えるもの，（6～8）のように二段の放射暗文と螺旋文を組み合わすもの等がある。口縁部形態では内面に斜行する平坦面を持つ（4），尖状で終わる（3・4）等，内面を小さく突出させる（9），あるいは小さく巻き込む（10～13）等の諸形態が見られる。これらは後に述べるように時期的な差異につながる要素である。また法量形態による差異も認められる。

（第53図17）は杯蓋である。形態は須恵器杯蓋と異ならないが外面は丁寧な磨きで仕上げる。（18～20）は高台を持つ一群。（18）は高台径と高さ，および強い張りから見て古い形態である。（19）は体部がやや外傾し口縁端部を小さく巻き込み，高台も矮小化する。（20）ではその傾向が一層進み口縁部は強く開く。

（第54図1～28）は底部平坦面が極めて小さいか，完全に丸底を呈する，基本的にはボウル状の土師器杯である。やはり形態・法量で明瞭に区分しうる。また調整，口縁部形態，内面暗文の構成などは先に示した一群と同様の諸相を持つ。以上の二形態は共に砂粒の混入が極めて少ない精良な胎土を用いる例が殆どである。

（第56図1～11）は形態的に同じくボウル状を呈するが，外面を指押さえかハケ調整で仕上げ，内面にも暗文を加えないことが多い相対的に造りが粗雑な一群である。また胎土の点でも上記二群ほどは精選されていない。口縁部形態は同様の諸形態が認められる。

（第56図13～18）は当該期の須恵器杯の形態を模倣したと思われる形態の土師器杯である。

（第56図19～第57図12）は土師器皿である。口縁部形態・調整・内面暗文の構成に関する諸相はほぼ杯類におけるそれと等しい。また全体形態では底部平坦面が不明確で浅いボウル状を呈するタイプと，体底部境が明瞭で箱形を呈するタイプとがある。また法量によって最大3群に区分することが出来る。以下法量別に説明する。

（第56図19・20）は箱形を呈し，口縁端部を小さく内側に巻き込む。全体に新しい様相を持つ小形の皿である。(21～27)は底部平坦面が不明瞭で口縁端部を外に摘み出す傾向が強い中規模の皿である。（第57図１～３）も同程度の法量の皿であるが，底部平坦面がかなりはっきりしており，全体形が箱形に近い。口縁部は丸く納めるか小さく面取りする程度である。（４～７）は完全に箱形を呈し口縁端部を小さく巻き込むタイプで（第56図19・20）と同形態を持つが法量が異なる一群である。体部の外傾具合に差がある。（８～12）は大法量の一群で，全体形状・口縁部形態・文様構成は上記の諸相を含むが，この法量群には明確な平坦面を底部に持ち箱形を呈し，口縁端部を内側に巻き込むタイプは認められない。

（第58図１～第59図６）は台付皿である。上記の皿類と異なり底部平坦面が不明瞭な体部形態は見られない。脚台は高・径共に大きく強く踏ん張るものから殆ど高台と異ならない程度の規模しか持たないものまでがある。また法量の点でも皿とほぼ対応した格差がある。

（第58図１～３）は大形の台付皿で脚台は何れも強く踏ん張り高い。（４～６）はやや小振りであるが同様に脚台は大形である。（６）の脚台は高いが他に比して張りが弱い。（第59図１～６）は低い脚台を持つ。（１・３～５）は低くかなり小形化しているが，張りは強い。（６）は高台と異ならないが，体部形態から台付皿に分類した。（２）は体部の法量・形態の点では杯類としても違和感はない程度である。

（第59図７～15）は高杯である。二種類がある。（７～13）は浅いボウル状の杯部にやや先細りの軸部から強く折れて開く裾部に至る脚部を持つ。杯部の形態・文様・調整は基本的に杯類と異ならないが，全般的にやや浅目である。また脚部は丁寧な調整を行うものの，整形段階の器表の凹凸が解消されずにややいびつな観を与えるものが多い。(14･15）は殆ど立ち上がりを持たない皿状の杯部に，丁寧に軸部を面取りした脚部を備えた高杯である。前者に比べ圧倒的に数は少ない。(14)は杯部。殆ど立ち上がりのない皿状を呈し口縁部で弱く屈曲して端部は小さく巻き込む。内面は二段の放射状と二条の連弧文状の暗文を配している。(15）は脚部で軸部から緩やかに裾部に至る。軸部外面は多角柱状に面取りする。(16）は土馬脚部片であろう。本流路資料中唯一である。

（第60図１～11）は一般的な杯類に比してやや深手である。（１～５・７）は口縁部がやや内湾気味で，外面はハケ調整を施す。(10･11）は外面に細かい磨きを加える。暗文を持つのは（６･11）だけである。このように一部に丁寧な調整を持つものはあるものの全体的に仕上げがやや粗い。

（第60図12・13）は片口鉢。この器種は形態・調整の点でかなり均質的である。外面ハケ調整，内面の下部にはケズリを残し他はハケ調整で，内湾する口縁端部は四角く面を成す。

（第60図14～16）は真蛸壺で二形態がある。何れも煮沸形態に比しても調整は簡略でまた分厚い。掲載した３例ともヘラ記号がある。(14）は内湾気味に立ち上がる口縁部を持ち肩部に二孔を穿つ。(15・16）は砲弾形の体部に短く開く口縁部を持つ。(17～19）は釣鐘形の飯蛸壺である。(20・21）は製塩土器。(20）は丸底で口縁部外面にやや崩れた格子目叩きを残す。(21）は薄手で尖底。いわゆる「倉浦式」に比定できる(2)。

（第61図１～第62図１）は球形甕。法量により最大４種に区分できるが，最小の（１・２）は小形壺の一種と見るべきかも知れない。口縁部外面横なで，内面ハケ調整，体部外面ハケ調整，内面指押さえかヘラ削りが基本的な調整方法である。口縁部形態にはややばらつきが見られる。(14)は体部の張りが弱く口縁端部を摘み上げる点で９世紀以降の甕につながる要素を持つ。

（第62図２～５）は長胴甕である。多少の法量の格差はあるが球形甕ほど顕著ではない。基本的な調整は球形甕と異ならない。（２）は体部形状からここにいれたが，形態・調整共に他との差異は大きい。

（第63図１～第64図２）は把手付甕。やや扁平な張りの強い体部の中位に舌状の把手を付す。調整はやはり球形甕と異ならない。法量により二種に区分できる可能性がある。

（第64図３～５）は土鍋，半球形の体部と強く開く口縁部を持つ。調整は他の煮沸形態とほぼ同じである。

（第65図１・２）は甑。筒状の体部で下端はやや内湾気味に終わる。中位に付された把手は把手付甕のそれと異ならない。また（１）の様に下端付近に小孔を穿つ例もまま認められる。

（第65図３・４）は不明器種。筒状の体部の上下は強く開き，体部には透かし穴がある。（４）では体部下端を粘土盤でふさぎ，したから十字に粘土紐を配す。なお粘土盤下面は煤の付着が著しい。用途不明品であるが，形態的には福岡県沖の島祭祀遺跡群出土の土師器器台に類似する部分がある。

（第65図５～７）は鞴羽口である。何れも外面は赤変し，（５・６）は先端が溶融してガラス状を呈する。

（第66図１～20）は身に返りを持つ段階の須恵器蓋杯である。口径はこの類としてはもっとも小形化し，身の返りも極度に矮小化している。また蓋頂部，身底部外面はヘラ切り後にせいぜい横なでを加える程度でヘラ削りは省略している。

(21～27)は返りを持つ杯蓋のうち口径の小さい一群である。頂部に宝珠形のつまみを付す。(28～36)は同形態であるが，口径は大形化し，つまみの宝珠形もやや退化する一群である。(37～45)は返りを喪失した杯蓋である。つまみは退化した宝珠形ないしは扁平なボタン状を呈する。(44・45）は墨痕がかすれて判読しづらいがそれぞれ「大」,「十」と推定できる墨書一文字が認められる。

（第67図１～23）は高台を持たない杯身である。法量の点では最大３群に区分しうる。また形態の点では体底部境が明瞭で箱形を呈するものと底部が丸みを帯びボウル状に近いものとがある。(15～17・20・23）は体部に一条の沈線が巡る。

（27～39）は高台を付す杯である。(27・28）は脚台と見ても良い程度の高台を有する。(24～26）に示した台付椀とは一線を画すのが困難である。また（24・25）については体部に沈線を配する点もこれらと同様である。(31～35)は高台は断面四角形でかなり小形化しているが強く踏ん張る。体部は箱形に近いが体底部境はやや不明瞭である。(36～39）は箱形を呈する杯部の底部縁辺に低い高台を付す。

（第68図１～９）は皿。形態は土師器皿にほぼ等しい。法量では最低２種類に区分できる。（１～４・９）は口縁端部を小さく内側に巻き込む。（５～７）は端部を外へ摘み出し内側に面を成す。(11・12）は脚台。恐らく皿脚部であろう。

（13～31）は無蓋高杯。浅いボウル状ないしは箱形で体底部境等に１，２条の沈線を配す杯部に緩やかに軸部から裾部に開く脚を持つ。脚高，端部形態などには差異が大きい。

（第69図１～４）は短頸壺蓋。何れも端部を小さく折り返す。箱形を呈するものと頂部が丸みを帯びたものとがある。（５～７）は短頸壺である。（８～10）は甕。(10）は低い脚台を持つ。(11）は提瓶，(14）は片口鉢である。(12）は円面硯。圏脚部に長楕円形，円形の透かしを配す。焼歪みが著しい。また上面を含めて自然釉の付着などによる細かい凹凸がその儘残っている。明らかに未使用品である。(15～17）は長頸壺で（17）に見るように肩部はかなり直線的で同下端で稜を成す。(18）は須恵器甑。筒状体部の下端には幅広の粘土帯を渡す。本遺跡では類例に乏しい器種である。

（第70図１～５）は大形の甕。（４）は肩部に輪状の耳を付す。（５）は口径が広くむしろ鍋に近い形態を持つ。体部中位には水平に配された輪状の把手を付す。

4．第1低地帯流路2南半部（国道以南）出土資料

第1低地帯流路2南半部は流路2の国道以南のほぼH22・23区部分である。同一の流路であることは間違いないが，調査が流路肩口に限られたためか出土土器を見るかぎりでは国道以北ほどの時間幅を持ちそうもない。ほぼ7世紀後半代の資料で一部8世紀初頭に下る可能性はあるが，それでも国道以北に比べかなり限定できる。遺物量は多くないが，該期の主要器種は含む。明らかに混入と思われる弥生後期以前の土器を除いて，図化しうる資料を網羅して，31点を掲載した。僅かな資料数のため細かい議論は困難であるがやはり特に供膳形態において多様に分化している傾向は確認できる。

土師器杯（第71図1～8）は箱形を呈するタイプ（1・2），浅いボール状を呈するタイプ（7），高台を持つタイプ（4・5）がある。口縁部形態では端部を内側に小さく突出させる例（1）と尖らせる例（2他）が多い。外面はヘラ削りないしは指押さえの後にミガキ，内面に暗文を施す場合（2他）が多いが，全面なで調整（8）で終わるものもある。（3）は口径がやや大きいが杯蓋であろう。

土師器皿2例（9・10）は何れも小形品で調整・施文は杯類の大多数と同様である。（9）は口縁端部内面は小さく突出し，（10）は丸く納める。

（11）は軸部を面取りして多角柱状に仕上げる高杯である。

土師器甕は球形甕（12）と長胴甕（13）がある。蛸壺は体部が砲弾形を呈し，短い口縁を持つもの（14）と口縁部が弱く内傾して直下に2孔を穿つもの（15）がある。

（16～19）は高台を持たないタイプの須恵器杯で箱形を呈する。（21～26）は高台を持つ須恵器杯類。体部が外傾し高台は比較的踏ん張るタイプ（21～25）と，箱形を呈し高台は低く底部縁辺に接して付すタイプ（26・27）とがある。（20）は須恵器杯蓋でボタン状のつまみを持つ。

（28）は須恵器台付皿であろうか。底面に脚台剝離痕を残すが，やや外側に偏り過ぎるきらいがある。

5．第1低地帯流路3出土資料

第1低地帯流路3では中央部で検出した木群2周辺およびその包含層部分で7世紀末ないしは8世紀初頭の資料を検出している。また同層準およびそれ以下では弥生時代前期・同後期・6世紀後葉の土器を出土する。第1低地帯流路2で顕著であった7世紀代前中葉の資料はここでは欠落している。出土土器の大半は小片で保存状態も余り良くない。ここでは木群2およびそれの包含層の形成時期（包含木器類の年代）を示すと考えられる7世紀末ないしは8世紀初頭と下層の6世紀後葉代の土器に限って28点を図化・掲載した。なお土馬1個体を伴出している。

（第72図1）は土師器杯で箱形を呈する。（2）は土師器杯蓋，やや矮小化したボタン状のつまみを持つ。（3・4）は軸部を面取りする土師器高杯。（4）は通常の高杯杯部ではなく，土師器台付皿との複合形態でやや特異な例である。口縁端部は小さく内面に巻き込む。

（5）は大形の土師器球形甕で最大径がかなり下がる点が特徴的である。（6）は小形の球形甕である。（7）は蛸壺で砲弾形の体部に短い口縁部を付す。（8）の把手杯甕は胴の張りが弱く口縁部は余り開かない。（9）は土鍋にしては体部が良く張るほうである。

（11・12）は同一個体と見て良かろう。頭部は比較的薄く造られる。四肢および体後部を欠損する。本遺跡出土例の中では馬具表現が顕著ではない方であるが，体背部に剝離痕があり，少なくとも鞍の表現は成されていた可能性が高い。

（第73図1～3）は身部に返りを持つタイプの蓋杯である。流路2資料に比べ口径が大きく，蓋頂部・

身底部に回転ヘラ削りを施し，より古相を呈する。（4～6）は高台を持たない杯類。箱形を呈するもの（4）と体部が外反するもの（5・6）がある。(10) は高台を持つ杯で箱形を呈し，低い高台を底部縁辺に付す。（7～9）は返りを喪失した杯蓋。ボタン状の扁平なつまみを持ち，端部を短く折る。(11) は高杯脚部，(12・13) は提瓶である。(13) は体中央をきれいに丸く欠損している。故意に打ち欠かれたかも知れない。(16) は長頸壺，体部はかなり丸みを帯び肩部には連続刺突文を配す。

6．第2低地帯土器溜り3出土資料

弥生時代後期後半から終末の資料である。出土状況から判断するかぎりでは，複次に亙る投棄とは確認できなかったが，土器の形状を見るかぎりではほぼすべての器種に亙って時期差と見成し得る差異が認められる。本土器溜りも小片が多く個体数は算定し得ていないが，土器溜り2に比べれば相対的に大形片が多い。内容的にはほぼ該期の器種組成を網羅していると見てよい。ここでは全器種および器種毎のバリエイションを極力網羅すべく99点を図化・掲載した。ただし器種別の掲載点数の差異は構成比を示すものではない。

広口壺（第110図1～20）は口縁部の発達具合，端部形状などで差異が大きい。短く直立する頸部から強く折れて開く口縁部や，口・頸部の境が不明瞭で全体としてラッパ状に開くものがある。口縁端部形状でも単純に四角く納めるもの，僅かに拡張するもの，二重口縁状を呈し外面に文様帯を持つものがある。本資料では二重口縁を成す場合には程度に差があるものの立上り部を内傾させる傾向が極めて強く，口縁部文様帯には鋸歯文を多用する。頸部は無文の場合が多いが，下端に突帯あるいは列点文を持つ例もある。（8・9）は同一個体の可能性が高く，いわゆる「雲母土器」の広口壺である。

(21) は雲母土器小形丸底壺で体部最大径は鈍い稜を持ち，扁平球状を呈する。

甕（第110図22～第111図20）は概して体部の張りが強く，球形化の進んだものが多い。口縁部は肩から緩やかに屈曲するものと鋭い稜を持つものがあるが，何れも外反して短く開く。端部は四角く納めるものが多い。体部外面は平行叩き後に縦ハケを加えるのが一般的で，ナデ調整は極めて少ない。内面は上端部が指押さえないしは横ハケ，口縁部が鋭く屈曲するタイプでも削りは上端まで及ばない。(18・19) は二重口縁甕で (18) は立上り部外面に櫛描沈線を施す。(18) は形態的には吉備南部の下田所～亀川地域の甕に酷似するが，胎土は他の甕と異ならない。(20) は雲母土器甕である。なで肩で口縁部は鋭く屈曲して短く水平に開き，端部は僅かに摘み上げる。

小形の鉢は（第111図21～第112図5）単純なボール状を呈するタイプと短く外反する口縁部を持つタイプとがある。外面調整はほぼ甕と同様であるが，削りを加える例（30・2）がある。底部は指押さえないしは小さいヘラ削り（掻き取り？）で丸くする場合 (23) と明瞭な平底を残す場合 (27) がある。大形鉢（第112図6～8）も同様にボール状と外反する口縁部の二種の形態がある。

甑は明瞭な平底を残すもの（9）と，底部平坦面が矮小化し尖底に近いもの (10) とがある。何れも底部中央に一孔を穿つ。

(11～26) は壺・甕の底部片である。底部厚・平坦部径には差異が大きいが，完全に丸底化したものは未だ出現していない。(21) は輪台状の底部で，本遺跡資料では極めて稀である。

高杯（第113図1～9）杯部は何れも中位で屈曲し上半が強く外反する形態を持つが外反度合い・深さなどで一定の差異を持つ。またそれ以上に明確なのは脚部形態で三種類を認めることが出来る。短脚で軸部と裾部の境が明確な例（5），長脚で緩やかに裾に至る例（8・9）と，裾部が大きく開き，端部を

肥厚気味に四角く納めるもの（7）である。なお最後者は雲母土器高杯である。

(10) は高杯脚部に似るが，全体にいびつで上端は丸く終わり，恰もワンタンのような形態を呈する。蓋ないしは支脚の可能性を考えている。(11) は柱状を呈する支脚で上面が傾斜する。

7．第2低地帯土器溜り4出土資料

遺物量は余り多くないが，後期中葉のほぼ単純な様相を示すと考えられる資料である。この段階では広口壺の口縁部は未だ余り発達していない。口縁端部に文様帯を持つ例はない。甕では体部外面に並行叩きをとどめる例は少なく，外面なで調整が未だ一定程度認められる。また内面ヘラ削りが上端に達する資料はなく，口縁部は比較的厚く作る。高杯では吉備地方の影響を強く受けた形態が見られる。なお甕で明らかに他地方産と見成しうる資料がある。断定は避けたいが口縁部形態について近江系の影響を想定することが可能である。全体として下川津遺跡の後期資料の中では古相に位置付けることが可能であり，土器溜り5資料に継ぐ時期に比定することが妥当であろう。

（第78図1～3）は広口壺で，口縁部は単純な形態で終わり余り大きく開かない。（4・5）は短頸壺，（6・7）は体部に比した口縁部の小形さから壺としたが，類例は多くない。（第78図8～第79図10）は甕。口縁部は体部から緩やかに折れて，やや分厚くするものが多い。（第79図10）は受け口状の口縁部を持ち外面櫛描沈線，肩部上端には同一原体による櫛描波状文2単位と連続刺突文が巡る。内面はハケ調整。形態・調整の点から見て明らかに他地方産の搬入品である。口縁部形態・文様の点で近江系の影響を想定できる[3]。(11・12) は甑，体部は余り張らず古い様相を示す。(13) は雲母土器甕底部片である。（第80図1～9）は小形の鉢。（9）は口縁部を外反させる。何れも底部は突出気味に残す。(10～12) は高杯。(11) は裾部と杯部は接合しないが，胎土・色調から同一個体と見成した。脚部は比較的鋭く屈曲して裾部に至り，軸部下端と裾部に並行沈線・列点文を持つ。また杯部も未だ口径が大きく浅い。吉備地方の影響が窺われる個体である。(12) は軸・裾部の区別が無く緩やかに開く型の高杯脚部である。調整は高杯としては比較的粗雑である。

8．第2低地帯土器溜り2出土資料

弥生時代後期終末を中心とした時期の資料である。出土状態から見るぎりでは確実に複数次におよぶ投棄の集積と断定することは出来なかったが，土器の形状では若干の時期差を指摘することができる。例えば（第75図1）は他の広口壺に比べて口縁部形状に古い様相を明確にとどめるし（第75図14）の甕は口縁部の緩やかな屈曲，器壁の厚さの点で同様に他の甕とは時期を違える可能性が高い。小片が多く，小形の鉢以外では完形品ないしは完形に復元しうる程度の破片は検出していない。投棄段階で大部分は既に細片化していた可能性が高い。このため個体数および器種構成比については確認できていない。ただし傾向として高杯が極めて少ない点は間違いない。ここでは確認し得た器種を網羅すべく63点を図化・掲載している。

壺には広口壺と短頸壺（第75図5）がある。広口壺では口縁部の発達が弱いもの（1・4）と大きく開くもの（2～7）とが見られる。後者では口縁端部を上方に短く拡張する（6・7）か，端面を拡張して強く内傾させ断面形が三角形状を呈する場合（2・3）とがある。（8）は二重口縁壺の立上り部である。

甕口縁部は全般的に薄手でやや外反気味に短く開く。口縁部の屈曲は一般に緩いが鋭く稜を持つ例

(16) も稀にある。口縁端部は尖らせるか，小さく面取りする。体部外面は平行叩き後に縦ハケを加えることが多いが，完全に消し切ることはない。内面上半部は指押さえかなで，稀に横ハケ（14・21）が加わる。削りは上端まで達することは殆ど無い。以上甕では全体としてかなり球形化が進行しているが，底部片では未だ完全に丸底化したものはない。

小形の鉢には甕同様の形態と調整を持つタイプ（第76図1・2）と単純なボール状を呈する（3～8）ものとがある。後者では体部が直線的に開く場合と丸みを帯びる場合がある。外面調整は平行叩きをその儘残すか，なで消す。（8）は下半を削る。（3）はやや突出気味の平底をとどめるが，（4・6）はかなり矮小化している。

中・大形の鉢では口縁部を短く外反させるタイプ（9～14）と単純なボール状を呈するタイプ（14）とがある。体部調整は平行叩きのまま，後に縦ハケを加える，なで調整の三者がある。

（16・17）は同一個体の高杯である。杯部は中位で鋭く屈曲して強く外反する。脚部はかなり短く裾部で低い段を持つ。(18) はいわゆる「雲母土器」の高杯脚部である。内面にヘラ削りを施し，端部は僅かに肥厚して端部に面を持つ。なお本土器群中で図化しうる程度の雲母土器は本例だけである。

甑（19・20）は著しく矮小化した底部を持ち殆ど尖底に近い。底部中央に焼成前の穿孔を持つ。製塩土器（21～23）は脚部がかなり小形化し体部の張りは弱い。外面は平行叩きを残す。

（第77図1～17）は底部片である。（1）は脚台を持つ。明瞭な平底をとどめるものと，ほぼ丸底化しているものまでがある。なお薄手で丸底化が進んだ（3・4）は形状・内面調整から見て小形鉢の可能性が高い。(15～17) は壺底部で強く開き明確な平底を残す。

9．第2低地帯流路2出土資料

本流路では先に示したように最下部に木群2があり，北半中位に斎串・人形の集中地点を確認している。ここに掲載した土器は本流路出土資料で図化しうる全てを含んでいる。大多数は9世紀代に比定することが可能な資料で流路下半，ほぼ斎串・人形検出レベル以下から出土している。時期的にある程度は下ることが予想できる黒色土器A類椀（4・5）は最上位で検出している。また鍛冶炉残骸は中位以下に分散しており，前者に伴う可能性が高い。

（第74図1・2）は土師器皿，（1）はむしろ小皿と云って良い程度の法量で（2）より下るであろう。（2）は口縁端部を小さく巻き込むなど，暗文こそ認められないものの8世紀代の同器種に認められる形態上の特徴のなごりをとどめる。（3）は土師質で高台を付す杯。無台の杯類と同形態の体部を持ち，11世紀以降の椀形態とは明らかに区別できる資料である。（4・5）は黒色土器A類椀。11世紀以降に下ると思われる。（8）は土師器杯，須恵器杯と同形態を呈する。（6・7・9～12）は須恵器杯。(10～12) は浅く皿としても良い。また (10) は他に比してやや厚手で8世紀代以来の形態を残す。なお (10～12) は底部外面に墨書が認められる。(10) が一字，(11・12) が二字である。何れも判読が困難であるが (11) は「郷長」と見る意見もある。

(13) は土師器羽釜，(14～17) は須恵器瓶である。

(18) は鍛冶炉残骸である。破砕して投棄されていた。復元径0.6m前後の円筒形を持ち，側面下端に鞴羽口がつづく。底部は貼らず筒状を呈する。内面は，羽口内面側も含めて高熱を受けて完全にガラス状を呈する。それに接する器壁芯部はひどく赤変しているが外面までは及ばない。体部は一旦筒状に整形した後に縄を巻き付け締め，その後に更に粘土を貼り付けると云う入念な造りで強度を保たせている。

10. 第1低地帯流路5下部出土資料

第1低地帯流路5北半部で，木群4包含層より下位で検出した土器群である。検出した資料の中から各器種の典型例に限って図化・掲載した。ほぼ6世紀後葉・田辺編年TK43式に比定できる資料で混入品を除いて流路5北半部の上限資料である。同一流路南半部の上限資料より僅かに後出する様であるが，本低地帯北端の流路2資料の上限より遡る事は確実である。

須恵器では蓋杯・有蓋高杯・無蓋高杯・甕・こね鉢？が，土師器では小形球形甕・甑？がある。蓋杯のうち（第85図5・7）は外面頂（底）部に回転ヘラ削りを施す。（9）は長脚二段二方透かしである。小形球形甕（13）は体部・口縁部の境が不明瞭で口縁部はほぼ直立し体部最大径は低い。（14）は円筒形の体部に突出度の高い断面方形の鍔を持つ。あたかも円筒埴輪のごとき形状を呈する類例に乏しい器形である。ここでは突帯状の鍔と円筒形の体部から取りあえず甑としたが確証はない。

11. 第1低地帯流路5木群4共伴資料

第1低地帯流路5北端部で木群4を検出している。これに伴い多量の斎串を検出した。ここに掲載するのはそれらと共伴した土器類である。低地部出土資料にしては一括性が高くほぼ7世紀後半の資料と考えることが出来よう。明らかに時期の異なる6世紀後葉の須恵器を除けば，これに共伴する須恵器は全く無い。土師器類自体も杯に比べ皿が目立つことや煮沸形態において欠落する器種が多いことなど，全体的にかなり偏った器種構成および構成比を示している。斎串類との共存という点からしても，偶発的な資料の集積ではなく特殊な目的に添った投棄の可能性がある。ここに掲載した22点は混入品を除いた木群4・斎串共伴資料中，図化しうる全てである。

土師器杯（第84図1～5）は箱形を呈するタイプ（1・2）と浅いボール状を呈するタイプ（3～5）がある。両者ともに口縁部は尖らせる。また調整・施文では外面にヘラ磨きを加え，内面に暗文を施す例（1～3）となでないしは指押さえで仕上げるやや粗い例（4）がある。（6）は土師器高杯の可能性が高い。不明確ながら内面に暗文を施す。

土師器皿（7～10）は外面に丁寧なヘラ磨きを加え，内面には横なで後に螺旋および放射暗文を加える。口縁端部は丸く納めるか小さく内面に突出する。（11）は台付皿で，低いが良く開いた脚台を持ち，斜格子暗文を施す。

鉢（12～16）は法量で3種に別れる。単純なボール状を呈する例が多いが口縁部を短く外反させる場合（15）もある。総じて整形・調整が粗いが，外面を丁寧にミガキ内面に暗文を施す例（14）もある。

（17）は片口鉢で内外面をハケ調整で仕上げ，口縁端部は面取りする。（16）も不明瞭ではあるが小さく片口を持つかも知れない。

球形甕（18・19）は2例とも小形である。長胴甕（20～22）は体部内面の調整に差異が認められる。

12. 第1低地帯流路5北半上部出土資料

第1低地帯流路5北半部および第3低地帯との合流部で，木群4およびその包含層より上位で検出した土器群である。出土総量は少なく，また小片が多いが，ここでは代表的なものを図化・掲載した。（第85図15～17）は既節に示した推定水田層包含資料である。（18～20）はそれより上位層の資料である。前者が8世紀中葉前後，後者が8世紀後半から9世紀に比定できる。

（15）は土師器皿で口縁端部をごく小さく巻き込み，内面には放射暗文が認められる。（16・17）は須

恵器杯である。共に低い高台を底部縁辺にほぼ接して貼り，(16) では口縁端部を小さく外反させる。

(18) は須恵器杯で底部縁辺に小形化した高台を貼る。底部外面には一文字の墨書がある。半ば以上を欠損して読解できない。(19•20)は須恵器皿で体底部境は明瞭，体部は外傾して短く立ち上がる。(20) は底部外面に二文字「長東」の墨書がある。

13. 第1低地帯流路6出土資料

第3微高地の北端部で確認した。同微高地の東側からまわり込む低地帯が第1低地帯流路4との合流する直前部分の下部に部分的に残されていた弥生前期包含層の資料である。第2低地帯流路1および第1微高地上で遺構中で検出した弥生前期資料よりも新しく，ほぼ前期中葉の様相を示している。

甕では，前者の大多数は1条沈線か段を口縁部直下に持ち，2条以上の沈線文は稀で最大でも3条に留まるのに対して，本資料では4条の沈線を持つ。出土地点から考えて第3微高地を含めて調査区東方外に時期を違えた弥生前期集落の存在を予想させる資料である。

(第85図1) は壺肩部片で3条の沈線と垂下沈線が認められる。(2・3) は甕で如意状の口縁部と直下に4条の沈線が認められる。(4) は壺底部で上げ底である。

14. 第3低地帯流路1出土資料

本流路は第3低地帯末端に部分的に形成された落ち込みであるが，8世紀末ないしは9世紀の流路2と重複し，半ば以上を削り取られているが，遺物量は比較的豊富である。ここでは流路2で検出されたものの，本来的に本流路に伴う可能性の高い資料も含めて掲載した。(第81図3)のように弥生前期土器も少量混えるが，大部分は後期中葉から末葉までの一定の時間幅を持つ資料である。

(第81図1) は広口壺，口縁部の開きが弱い。(2) は短頸壺で口縁端部を小さく上下に拡張する。甕は口縁部の屈曲具合，体部調整その他で区分しうる。(4～8)では口縁部は緩やかに屈曲して端部では面を成す。体部はハケ調整ないしなで調整が多い。全体にやや厚手で本遺構中では古相に属する。(9～12) の甕は全体に薄手で口縁部は比較的鋭く折れ，体部外面には並行叩きを顕著に残す。全体に新しい様相を持つ一群である。(14・15) はいわゆる雲母土器甕である。直線的な肩部・口縁端部の小さい肥厚などよくその特徴を保つ。(第81図19•20) は高杯杯部。(19) は杯部上半を直立させ端部は面を成す。更に外面下半にヘラ削りを加えるなど後期前葉の特徴を残した資料で注目できる。(3)は中位で屈曲して上半は外反するがやや短い。(4)は高杯脚部に似るが，上端が図示した形状で終わる。蓋ないし支脚の一種と見成すべきであろう。

15. 第3低地帯流路2出土資料

本流路は先行する弥生時代後期の流路1を削り込んで形成されているため，それに伴う遺物が大量に混入している。また本流路に伴う資料は極めて少なく，器種・形態が判別できるのは掲載した1点だけである。

(第85図21) は須恵器杯。箱形を呈し底部にはヘラ切り痕をとどめる。ほぼ8世紀後半に比定できる。

16. 第3低地帯流路3木群3

ほぼ9～12世紀代の時期幅を持つ資料群である。墨書土器・楠葉型瓦器椀を含む点が注目できる。供膳形態は杯・皿・小皿・椀からなり，この他大形甕，こね鉢，羽釜，土鍋が認められる。

小皿には土師質と瓦質とがある。(第82図1～4)は土師質小皿。全て底部ヘラ切りで体部の延びは普通程度である。(2)は形態的に後出するが，極端に矮小化したものはない。(5)は瓦質小皿，底部は指押さえが顕著である。(6)は深手の小皿？土師質である。

(7)は黒色土器B類皿である。本遺跡では類例に乏しい器種である。体底部境は明瞭で体部は直線的に強く開く。口縁部内面に浅い沈線を持つ。

(9・10)は薄手の須恵器杯類である。体部外面に火襷痕が顕著である。(11・12)は土師質杯で小形の高台を付す。11世紀以降の土師質椀形態とは系譜的に異なるものでそれらに先行する。(12)は見込み部内外面に「十」字墨書が認められる。

(13～15)は土師質椀，(17)は黒色土器A類椀，(16・18)は同B類椀である。(18)は高台形態および，調整技法の特徴の点で，西村遺跡資料に酷似する。(19)は畿内産瓦器で，形態・調整から楠葉型に比定できる。

(21・22)は瓦質のこね鉢，(23・24)は長胴甕に鍔を付けた形態の，当地方では平安時代前半に盛行するタイプの羽釜である。(25・26)は土鍋，(第83図1・2)は須恵質甕である。

17. 第1低地帯土器溜り5出土資料

先に述べたように低地帯出土資料としては数少ない良好な一括資料で，下川津遺跡における弥生後期資料の中では最も古い段階のもので，後期前葉末ないしは中葉前半に比定できる。本土器溜りの共存資料として捉えられる土器のほぼすべてを掲載している。

器種構成では貯蔵形態の中・大形壺19個体18%，甕41個体，甑5個体で煮沸形態45%，小形壺3個体小形鉢22個体，大形鉢4個体，高杯7個体，器台2個体で供膳形態は37%となる。既にこの段階で小形供膳形態の著しい増加，その中でも鉢類のめざましい増加と対象的な高杯の減少が認められる。また既に甕とは区別でき，定形化した独自の器形として甑が出現している点は注目できる。

また壺では既に長頸壺は殆ど姿を消しており僅かに頸部が間延びしてその痕跡を残すもの(第86図6)が見られるに過ぎない。また大形器台や体部の張りが強く口縁部の発達の弱い球形の甕(第91図1～9)はこの段階のみに見られる器形である。

(第86図1～3)は細頸壺。頸部は緩やかに外反して外面はハケないしはヘラ磨き，内面には指押さえを顕著にとどめる。(3)は細身の脚部を持ち，体部は扁平球状を呈し最大径はやや下がる。(4～10)は広口壺。大形の(4・5)では口縁部を拡張する。(6)は頸部がやや長く長頸壺の形態を僅かにとどめている。(9)は雲母土器広口壺で口縁部は強く折れて端部を弱く摘み上げる特徴が既にあらわれている。ただし頸部は未だ内傾していない。頸部・口縁端部に竹管文を付す。(第86図11・12・第87図1～8)は短頸壺。体部は強く張り，口縁部は小形である。頸部の立ち上がりは殆ど無く，強く外反して短い口縁部にいたる。体部内面にヘラ削りを施さない例が多い点が甕と異なる。

甕(第88図1～第91図10)は法量，形態で最低3種に区分することが出来る。(第88図1～第89図7)は中形の甕である。肩は余り張らず，最大径は体中位ないしはやや高い位置に来る。下半部はシャープにやや外反気味に立ち上がる。口縁部は肩部から緩やかに屈曲して開き，明瞭に端面を形成する。(第88

図6）のように弱く下に摘み出して，内傾する広めの端面を形成する場合もある。体部外面はハケ調整を施すものとナデ調整とが半々である。内面はほぼ最大径付近まで削り上げ，以高に指押さえを顕著に残すものが多い。叩き目を器表に残す例はない。内面体部上端の粘土帯接合部付近は，ヘラ削りが及ばないためかやや厚く残すことが多い。

（第89図5～7）は雲母土器甕である。肩部は比較的直線的で下半部はシャープである。底部平坦面は明瞭で薄い。口縁部は強く屈曲するが未だ明瞭な稜線はない。水平に短く開き端部を弱く摘み上げる。体部外面細かい丁寧な縦ハケ後に下半部はヘラ磨きを加える。ミガキは底部外面にも施される。内面最大径以下はヘラ削り，以上は顕著に指押さえをとどめる。

（第90図1～15）は小形甕である。口縁部は同様に短いが，中形甕に比べてより直線的に開き，端部形状も単純に終わるものが多い。体部外面の調整はハケとナデとがある。（6）は体部外面に並行叩きを明瞭にとどめる例である。ただし口縁部が鋭く折れることやヘラ削りがかなり上まで及ぶなどより新しい要素が多すぎる。混入品の恐れも捨て切れない。内面は下半がヘラ削り，上半が指押さえ，稀にハケ調整を加える。（7）は底部が円盤状に突出するこの時期の甕としては特異な例である。（10・15）は体部下端に明瞭に指押さえをとどめる。（10）は僅かに上げ底状となる。

（第91図1～10）は器高の割りには体部が張る球形の甕。また口径が大きくある種の鉢に近いが，二次的な加熱痕をとどめる例（3・8）があるので煮沸形態・甕とした。体部外面は何れもナデ調整で仕上げ内面はヘラ削りとナデ調整ないしは指押さえの場合がある。（3～5）は高台状ないしは脚台状の底部を持ち，体部下端には明瞭な指押さえを残す。

甑（第92図20～第93図2）には2種が認められる。（20）は尖底で短く口縁部が開く。体部外面縦ハケ，内面ヘラ削りを施す。口縁部直下には2孔一組の円孔を二方に穿ち，尖底頂部に穿孔する。（1・2）は深鉢形の体部で小さな平底を持つ。口縁部の二方には環状把手を付す。外面ナデ調整，内面下半ヘラ削りで底部中央に穿孔する。

（第93図3～6）は大形鉢。（3）はヘルメット状を呈しほぼ丸底に近い。片口を有し内面上半横ハケ，下半はヘラ削り，外面には籠目状圧痕を明瞭にとどめる。類例に乏しい異形の鉢である。（4～6）は何れも短く外反する口縁部を持つ。（5）は体部が直線的に開く。（6）は口縁部が体部から緩やかに屈曲して開き端部は肥厚する。

小形鉢（第94図1～25）には口縁部が短く外反するもの（1・2）と浅いボール状を呈するもの（3～25）とがある。何れも底部平坦面は明瞭に残すものが多く，中には円盤状に突出させるものもある。体部の開き方には直線的なものと丸みを帯びたものとが見られ，内外面ともナデ調整で仕上げる場合が多い。（6・15）等のようにハケ調整を加える例は多くない。稀に下端付近に叩き目を残す例がある。（23～25）は浅いボール状を呈し完全に丸底化している。特に（24・26）では底部外面にヘラ削りを加える。これらは他の鉢とは明らかに異質で全体にかなり新しい様相を備えている。混入品の恐れがある。

高杯（第95図1～8）は3種に区分できる。（1～3）は雲母土器の高杯で円盤充填法で整形する。杯部は中位で鋭く屈曲して上半は外反する。更に口縁部で外反を強め直下内面に凹線1条が巡る。杯部外面下半はヘラ削り，内面は横方向の断続的なヘラ磨き，上半は内外面とも横方向のヘラ磨きを加える。脚部はラッパ状に開き端部は僅かに肥厚して端面を持つ。二段に小円孔を配し，外面ヘラ磨き，内面は横方向のヘラ削りを施す。（4）は杯部中位で強く折れて上半部は外反気味に長く開く。内外面ヘラ磨き。（5～8）は杯部中位の屈曲が弱く，上半部は短く開く。口縁端部は薄く尖らせ内外面ヘラ磨き。脚部

は緩やかに外反して開き，軸・裾部の境は不明瞭である。

（9・10）は大形器台。（9）は中位で強くくびれ，口縁部は大きく開く。口縁端部は三角形状に肥厚させ，外傾する面を持ち，円形浮文を貼る[4]。(10）は吉備南部でしばしば見るタイプの大形器台である。中位で強くくびれ脚部は内湾気味に緩く開き下端は僅かに肥厚する。口縁部は直線的に大きく開き端部は高く立ち上がる。外面には鋸歯文を配す。体中位には並行沈線・刺突文と共に円孔4段を四方に配す。

18. 第1低地帯流路5出土資料

第1低地帯流路5南半部では6世紀後半から7世紀の資料を多量に出土しており，該期の構成器種の大要を含んでいる。第1低地帯では北部の流路2に次いで遺物の集中する地点で，後述するように鞍・壺鐙・斎串など多量の木器も伴っている。この中には7個体分の土馬を伴っている。下川津遺跡全体で11個体の土馬を検出しているのでその過半以上が本地点から出土していることになる。しかしそれらが木器も含めて他のどの器種と伴うのか，など厳密な共伴関係は十分に確認出来なかった。なお先行する弥生時代後期の流路4を削って形成されているため，多量のそれに伴う遺物を混入している。ここでは6世紀後半から7世紀代資料の全器種を網羅するように66点図化・掲載した。ただし掲載点数は器種構成比率を反映しない。

土師器杯（第96図1～12）には箱形を呈するタイプ（1・6）と浅いボウル状を呈するタイプ（3～5他）がある。更に前者ではある程度の高さを持つもの（1）と浅く寧ろ皿類に近いもの（6）とがある。また口縁部形状では丸く納めるか尖らせる場合（1・5他）と弱く外方に摘み出す場合（4・6他）とがある。内面の暗文は螺旋文と放射状文の組み合わせが基調で螺旋文を欠く場合（5他）もある。また内外面をなでもしくは指押さえで仕上げる相対的に粗い杯（10～12）もある。（2）は低いが強く踏ん張った脚台を持つ杯で本遺跡では類例に乏しい。（9）は鉢である。

皿類（第96図13～17・第97図1）は法量で少なくとも二種に別れる。口縁部を丸く納める例，小さく内面に突出する例，斜めに面取りする例がある。調整は外面ヘラ磨きを施すかなでで仕上げるのが一般的であるが，(15）はハケ調整を加える。台付皿（第97図2・3）も法量で最低2種に区分しうる。

煮沸形態に球形甕（6・7）・長胴甕（8・9）・把手杯甕（10・11）・土鍋（12）が揃っている。第1低地帯流路2ではこうした煮沸形態についてもそれぞれ一定の法量区分が可能であるがここでは資料の僅少さもあって明瞭な形では確認できていない。

（第98図1～12）は身部に返りを持つタイプの蓋杯である。口径が大きく箱形を呈するもの（1～9）とやや小振りで丸みを帯びるもの（4～11），小形化が頂点に達して返りもひどく矮小化して低いもの（12）とがある。前二者は蓋頂部，身底部に回転ヘラ削りを施すが，後者はヘラ切りのままである。

(13～17）は高台を持たない須恵器杯類で浅いボール状を呈するもの(13～16）と箱形に近いもの(17）とがある。特に前者は6世紀代の杯蓋に良く似るが概して調整が丁寧なこと，内面が平滑であることによって区別しうる。(18～22）は高台を持つ杯で体部の外傾具合，高台の規模・位置で差異が認められる。（18・19）のように体部形態が箱形と云うよりも，体底部境が不明瞭でボウル状に近く高台が強く踏ん張るものと，(21・22）のように底部縁辺に低い高台を付すものとがある。

高杯には長脚二段二方透かし（24）と脚部が短小化したもの（25～28）がある。本低地帯流路2では確認できない前者が存在することは，本流路に伴う須恵器蓋杯が流路2のそれよりもやや古い型式を含むことと矛盾しない。短頸壺（30・31）は肩部がかなり直線的になっている。広口壺（33）の肩部はか

なり直線的で体部最大径で鋭い稜を持ち強く屈曲するが，これに比して長頸壺（34～36）では肩部はかなり丸みを残す。

（第100図１～７）は土馬である。故意に破壊したかどうかは確認出来ないが，完形品は一例もない。また頭部片２例を除いて他は馬具表現が比較的丁寧である。

（１）は須恵質の土馬。もっとも保存状態が良好な資料であるが，左後肢１本を除いて足部を欠損する。薄い粘土帯を貼り付けて手綱等を表現する。また遺存していないが，剝離痕から鞍表現があったことが判る。（２）は馬具表現の一部を簡略化し手綱等は認められ無いが鞍表現はある。また体部後端下面に２孔を穿つ。おそらく排泄・生殖器官の表現であろう。（３）は頭部および四肢を欠損する。粘土帯貼付および列点文で革帯その外を表現する。また鞍表現と体部側面には鐙表現と見られる隆起が認められる。なお鞍後部の革帯表現の交差部分の隆起は雲珠かも知れない。なお本例は製作手法の点で他と異なる。体部は粘土板を筒状に丸め，背に当たる部分で綴じ合わる。このため体部は中空となる。また四肢はその後に貼付するため，根元から剝離している。（４～７）は頭部片である。（５）は沈線で（６）は（３）同様に粘土帯貼付と列点文で手綱を表現する。（７）の顔面下端の沈線は口の表現と思われるが簡略化した手綱表現の可能性もある。なお（５・７）は頭部表現が他に比べかなり抽象化されている。

19. 第１低地帯流路５南半部上部出土資料

第１低地帯流路５南半部の上部（セクション９II～III層）出土資料である。遺物総量は多くなく，また小片が大多数を占める。ここでは図化しうる程度の資料から代表的な諸例を抽出・掲載した。ほぼ第１低地帯流路５北半部の推定水田層上位層（セクション７II層）と同様の８世紀末から９世紀に比定できる資料と考えている。

（第99図１）は土師器高杯，軸部は長大で面取りを加える。（２～４）は須恵器杯で，（３）は体部外面，（４）は底部外面にそれぞれ墨書がある。（４）の墨書はかなり崩れているが，「足」ないしは「疋」逆字の可能性がある。（５）は須恵器瓶口縁部か。（６）は須恵器甕口縁部で端部を短く折り曲げる。（８）は土師器羽釜で口縁部を外反させる。

20. 第２低地帯流路１出土資料

第２低地帯VII層（セクション10参照），すなわち流路１堆積層は純粋な弥生前期包含層である。これ以高VI層以上では弥生時代後期以降の遺物と混在する。VII層は（第26図）に示したように最大16層に細分することが可能である。調査に当たってはVII層を上中下３層（VII１～４層　上部，VII５～７層　中部，VII８～14層　下部）に区分し，更に当該部分に４m方格の小区を設定してそれ毎に遺物を取り上げた。其れによればVII層中部の出土量がもっとも多く，上下層はこれに遙かにおよばない。先に触れたように出土総量はコンテナ200箱を越える膨大な量で大半は細片化し，全形を復元しうる資料は殆ど無かった。残念ながらその全てに亙って検討・報告することは出来なかった。より密集度の高かく，相対的に遺物の残りの良い16ライン以北からGライン以西の地点に限り，口縁部・底部など形態的特徴を最もとどめている部位の破片を抽出して器種構成比を検討した。更にそれらの中から保存状態の良好な資料を中心に各器種および同一器種内の形態差を網羅すべく198点を掲載している。

ここで検出した弥生前期資料は，その中でも古相に位置すると考えられる形態を持つものが圧倒的に多い。壺・甕類で口縁部直下を無文とするか，段もしくは１条の沈線を持つタイプが主流を占め，これ

に後出的な要素である2条以上の沈線を加えるタイプが少量伴う。第5表に示したように後者は甕類の中で僅かに7％弱を占めるにすぎない。またこれらと共に多量の突帯文系深鉢および小数の精製された浅鉢が確認できる。特に突帯文系深鉢（これ自体は突帯形状その他で細分することが可能である。）は煮沸形態全体の18％に当たる。

最大の焦点はこれらが共存して下川津遺跡弥生前期集落における一時期の土器組成を示すものか，無文・有段あるいは1条沈線タイプと複条沈線タイプが，もしくはこれらと突帯文系深鉢・精製浅鉢とが時期的に分離することが可能かと云う点にある。結論的には，第5表に示したように，少なくとも層位的には分離することは困難である。確かに僅かながら上・中部を比較すれば前者ではより新しい様相，すなわち壺・甕類の無段タイプ，甕の二条沈線含有率の微増が指摘できるが，逆に縄文系の浅鉢はⅦ層中部でみられるなど明瞭に分けることが難しい。またこの所見は微高地上の弥生前期遺構群中における出土状態と矛盾しない。下川津遺跡ではこれらの諸様相を積極的に時間差として把握する材料はない。

中・小形の壺（第101図1～29，第102図12～14，第109図24～44）では内外面をナデ調整で仕上げるものとヘラ磨きを加えるものとがある。また口・頸部に段・沈線を持たずに短く口縁部が外反するタイプ，口縁部直下に段を持つタイプ，一条の沈線を配すタイプ，二条以上の沈線を配すタイプに別れる。（第101図1～13）は沈線・段を持たないタイプである。頸部は内傾して立ち上がり口縁部は短く開く。口縁部は緩やかに開く例が多いが，（2・4・7）では比較的鋭く屈曲する。（2）は4条一単位の平行沈線を「ハ」字状に頸部に配す。（14～20）は口縁部直下に段を持つタイプである。観察し得た範囲ではこの段は粘土帯の接合時に形成されている。（21～24）は口縁部直下に一条の沈線が巡る。また（24）は4条一単位の平行沈線を垂下させる。（第101図25～29，第102図13・14）のようにこの部分の沈線が多条化する例は多くない。壺体部（第109図24～44）には肩部下端及び最大径に沈線を巡らせ，その間ないしは上位に連弧文・山形文・木葉文を施すものがある。（第109図36・39）は木葉文が認められる。（第102図12）は肩部下端に段を持ち，それに接して沈線3条と連弧文を配す。（14）は最大径に3条の沈線と山形文がある。

大形壺（第102図1～11，第103図1・2）は口縁部直下に段を持つものが多いが，中・小形壺同様に整形時に形成された段と，ヘラ磨きなど調整時に加えられたと考えられる低い段（第102図3・4・第103図1・2）とがある。（1）は段の代わりに小さい突帯を持ち頂部に刻みを持つ。（2）は口縁端部を四角く納め上下に刻みを付す。持ち，扁平球状を呈する。

甕（第103図3～第106図15）でも段・沈線を持たないタイプ，口縁直下に段を持つタイプ，口縁直下に段を持ちそれに刻み目を付すタイプ，1条の沈線を持つタイプ，2条以上の沈線を持つタイプがある。またそれぞれについて口縁端部に刻み目を付す場合と付さない場合があるが，圧倒的に前者が多い。稀に局部的に刻みを施す例（第104図4）がある。また口縁端部を丸く納めその頂部に施す場合と，四角く終わり下端に施す場合とが

第5表　地帯流路1出土　弥生前期土器器種構成一覧

層位	壺						甕								鉢	突帯文	浅鉢	総点数
	大形		小形				有段			無段								
	有段	無段	有段	沈線文	削り突帯	無文	有刻	有刻有線	無刻	無文	一条沈線	二条沈線	三条沈線	沈線間刺突				
Ⅶ4層	46						107								6	25	2	186
	16		30				15			92								
	9	7	6	8	1	15	4	1	11	74	12	6	0	2				
Ⅶ5/8層	82						218								9	45	0	354
	18		64				53			165								
	17	1	15	10	2	37	15	4	34	135	19	5	1	5				
Ⅶ9層	11						26								0	9	0	46
	3		8				6			20								
	3					8	1	0	5	19	1	0	0	0				
総計	139（24％）						351（60％）								15（3％）	79（13％）	2	586
	37		102				74			277								
	29	8	21	18	3	60	20	5	50	228	32	11	1	7				

ある。体部調整は圧倒的にナデで仕上げる例が多く，ハケ・磨きを加える例は稀である。なお甕の場合は壺のように多様な文様を持つことは殆ど無い。(第109図23) で口縁部直下の段上に山形文を配し，直下に平行線を施すのが唯一の例である。

(第103図3～第104図17) は段・沈線を持たないタイプである。上記の差異のほか，口縁部の外反度合，体部の張りについても差異は認められる。(第104図18～第105図13)は段を持つ。観察し得たかぎりではこの段は粘土帯接合時に形成されたものばかりであった。段の位置は口縁部直下にほぼ接しているものから体部上半の比較的低い部分まで下がるものまである。(第104図18・19，第105図13) は珍しく磨きで仕上げる。(第104図15，第105図11) はハケを施す。

(第105図14～22) は刻み目を持つ段を付す。この場合も段の位置は口縁部直下からほぼ体部最大径まで下がるものまである。段はやはり粘土帯接合に起因するようである。(第106図1～7) は1条の沈線を持つ。沈線は口縁部直下に巡らすことが多いが，段同様に下がる例 (7) もある。また (4) は施文方法が他とは異なり，板状原体で外表をナデ付けた際に，原体の縁を連続的に押し付けて沈線としている。(8～10) は2条の沈線を巡らす。(10) は他に比べ著しく沈線が太い。復元された傾きから見て壺の可能性も捨て切れない。(13・14) は3条の沈線を配し，線間に刺突文を施す。(15) は3条の沈線を巡らせる。体部はこの時期の甕にしては良く張るようである。

突帯文系の深鉢 (第106図16～第107図21) は多様な形態を持つ。弱く外反する口縁部に2条突帯を貼るタイプ，ほぼ直立する口縁部の直下に突出度の高い台形状の突帯を1条配すタイプ，外反する口縁端部にほぼ接して低い突帯を1条付して，一見したところ有段甕に酷似しているタイプ，口縁部に突出度の低い断面かまぼこ形の突帯を付し，稀に直下に垂下沈線を加えるタイプ，以上は何れも突帯頂部に刻み目を加えるがこの他，口縁端部に接してかなりだれて縦にやや引き伸ばされた低い突帯を持つタイプがある。

(第106図16・17) は外傾する口縁部に断面三角形の突帯を2条ほぼ接して貼る。(17) は頂部に細い刻み目を持つ。(第107図1～4)はほぼ直立する口縁部の直下に突出度の高い断面台形状の突帯を付す。調整はナデが多いが，(3) は部分的に条痕文様の擦痕をとどめる。(5～7) は外反する口縁部直下に悔い突帯を持ち，口縁端部・突帯頂部に刻み目を付す。特に (5) は有段甕で段部に刻み目を持つタイプに酷似するが，断面観察では明らかに突帯を貼り付けているのでそれとは区別した。(9～11)はほぼ直立する口縁部直下に低い突帯を持つ。(13～15)は突帯の形状は上記の4例と同様であるが，口縁部は内傾するか弱く外反して反りを持つ。(13) は突帯直下に3条一組の細い垂下沈線を施す。(15) は直下に太い沈線で複線山形文を描く。(16～21)は口縁部に接して薄く突帯を貼り，口縁部は断面三角形状を呈する。刻み目はない。

鉢には縄文晩期以来の波状口縁を持つ浅鉢とやや深めのボール状を呈するタイプ，口縁部を短く外反させるタイプなどがある。(第108図1・2) は波状口縁を呈する浅鉢。(1) は波頂部の両側に浅い刻みを持ち内面に2条の平行沈線を配す。内外面ヘラ磨き。(4～10)はボール状を呈するタイプ。総じて調整は丁寧でヘラ磨きを加えるものも多い。(4) は外表に並行沈線・連弧文・山形文を複雑に組み合わせた文様を持つ。(5) は口縁部を強く内湾させて中位に連弧文を配す。(11～13) は短く口縁部を外反させるタイプ。(11) は体部最大径で強く屈曲して鈍い稜を持つ。(16) は脚台を持つ。

(第109図1～12) は底部片。明瞭に円盤状に突出するタイプと通常の平底を持つタイプがある。底部厚にも差異は大きい。(10・11) は倒杯形の脚台。(12) は高杯か，ミニチュア土器 (17) と同様に結合

部に突帯を持っている。(13～14) は蓋，(15～17) はミニチュア土器である。

(18～20) は土製紡垂車，(21) は不明円盤状土製品，(22) は管状土垂であろう。土製，石製を問わず漁網錘の出土例は多くない。

21. 第3低地帯最下部出土資料

第3低地帯最下部では点的に川底直上から弥生前期土器を検出している。量は極めて少ないが第2低地帯流路1あるいは第1微高地上の弥生前期遺構群で検出したものと同様に前期前葉に比定できる資料である。

(第114図9～12) は壺で，何れも口縁部直下に粘土帯接合に起因する明瞭な段を持つ。(13) は甕口縁部片，如意状を呈し端部に刻み目を付す。

22. 第4低地帯流路1出土資料

遺物出土量は極めて少なく，検出資料にはかなりの時期幅がある。第2低地帯・第3低地帯合流部を削り本流路が形成された直後から完全に埋没して上面に遺構群が形成される直前までの各期の遺物を含むと考えられる。

(第115図1) は土師器皿，大きく外傾し口縁端部を小さく巻き込み暗文はない。(4) は体部が直立する深手の須恵質杯である。本流路の形成時期に近い8世紀後半～9世紀初頭の資料である。(2) は土師質椀，(3) は黒色土器A類椀である。これらは上層から出土し最終埋没時期をほぼ反映する資料であろう。

23. 第4低地帯流路3出土資料

出土遺物量は極めて少ない。第4低地帯流路2を切り7に切られる流路であるが，包含遺物の時期幅は大きい。10～13世紀代の資料を含むが，十分に層位的に区分して取り上げることは出来なかった。

(第110図1) は土師質杯，(2) は須恵質瓶口縁部片である。(3) は土鍋で口縁部を分厚く作る。(4) はほぼ10世紀以前に比定できる羽釜である。(5) は恐らく三足羽釜の口縁部であろう。鍔は矮小化し口縁部に接して付く。

24. 第4低地帯流路4出土資料

極めて僅かな資料を検出したにとどまり，出土土器の点から本流路の存続期間を更に限定することは困難であろう。またこれだけの資料を見るかぎりでは先行あるいは後続する流路との間に大きな時間差は見られない。第4低地帯南半部の流路4～7がかなり限定された時間幅の中で継起的に形成・埋没を繰り返した可能性を示している。

(第116図6) は土師質椀で器高は高く高台径も大きい。(7) は須恵質瓶である。

25. 第4低地帯流路5出土資料

遺物は余り多くない。土師質椀の器高・高台径の点で古い様相が認められるが，瓦器椀の形状および煮沸形態として内耳鍋と羽釜が認められる点からすれば下限は13世紀後半と見て良いであろう。したがって包含遺物の点では流路6上層堆積層との時間差は殆ど無い。

この点および土層観察所見から総合的に判断すれば本流路の形成後，埋没以前に流路6が形成され，その最終的な埋没時期と本流路のそれとはほぼ等しいことになる。

土師質小皿（第116図8・9）は底部ヘラ切りで立ち上がりはかなり矮小化している。土師質椀（11・15）は高台径は未だある程度の大きさを保つが，やや低くなっている。(16)の瓦器椀はかなり浅く高台は退化している。こね鉢（17・18）は瓦質である。煮沸形態としては内耳鍋（19）と羽釜（20）がある。羽釜は鍔突出度は低いが口縁端部からの距離が未だ大きい。口縁部が外反するタイプや直立して三角形状の厚い鍔を持つタイプはない。

26. 第4低地帯流路6出土資料

流路6湾曲部の北岸付近で集中的に出土した資料を中心に掲載している。概報掲載時には上中下3層に区分して報告し，その間に時期差を認める評価を示したが，その後の整理で必ずしも明瞭に時期差を指摘し難いことが判明したため以下では一括して報告する。全体的には11世紀末～13世紀におよぶ資料群である。

これだけの時期幅を持つ資料であるのでその性格を一概に論ずることは危険であるが，凡その目安として供膳形態の土師質椀，同杯，小皿，黒色土器A類椀，瓦器椀，在地系瓦質土器椀の構成比は8：8：8：1：2：1となる。杯・皿形態はほぼすべて土師器によって賄われ，椀形態については土師器，黒色土器，瓦器，在地系瓦質土器が共存する。土師質のそれ最も多いわけであるが，更に細かく見ればこれ自体吉備南部の早島式，讃岐のいわゆる西村産土師器など確実に複数の生産地が想定できる。こうした検討はより厳密に進められなければならないが，下川津遺跡の本流路資料によれば畿内産瓦器の予想外の健闘など，一つの消費地において複数生産地の製品が距離の遠近に係わらず互角に認められる。

その外の器種ではこね鉢は大部分が瓦質からなり，大形甕では須恵質である。両者とも極めて小数にすぎない。煮沸形態では土鍋と三足羽釜が多い。輸入陶磁器類では龍泉・同安両窯の青磁が白磁類を圧倒している。白磁では太宰府編年1．2類の椀を含んでいる。また図化し得ない程度の小片であっだ若干量の褐釉，越州窯系青磁も確認できた。後者は混入品であろう。

小皿（第117図1～12）には土師質・須恵質・瓦器がある。もっとも多いのが土師質である。須恵質小皿は瓦器のそれにも及ばない。(第117図1～9）は土師質小皿である。何れも底部ヘラ切りである。立ち上がりがひどく矮小化したものとやや長く延びるものがある。(10～12)は瓦器小皿。底面部は僅かに丸みを帯び外面指押さえが顕著である。(13）は須恵質小皿で底部糸切り。(14～16）は台付小皿で何れも土師質である。

（17～39）は杯である。すべて土師質で（39）が底部糸切りである以外は全てヘラ切りで板目をとどめるものも多い。内外面を横ナデで仕上げる例が殆どで（18）の外面下半指押さえや（28）の外面カキ目調整のような例は極めて稀である。口縁部の立ち上がり方，器高には微妙な違いが多い。

高台付椀（第117図40～第118図6）は，土師質，黒色土器A類，瓦質，瓦器，輸入陶磁から成り立つ。もっとも多いのが土師質椀で大半を占める。瓦質・瓦器の量には殆ど差が無い。黒色土器A類・輸入陶磁はこれらよりもかなり少ない。(40～65）は土師質椀である。(40・63）のようにヘラ磨きを加える例は多くない。多くは内面及び外面上半は横ナデで仕上げ，外面下半に指押さえをとどめる。(62)は土師質椀にしては珍しく外面に横ナデに起因する横方向の凹凸が顕著である。器高・高台形状の点で差異が認められる。(第118図1～4）は黒色土器A類椀である。外面は強い横ナデを加え横方向に走る凹凸が

顕著である。更にこの凸部を潰すように粗いヘラ磨きを加える。内面は不定方向のヘラ磨きで仕上げる。高台は断面四角形で低いが良く踏ん張る。本地点出土の黒色土器A類椀はここに示したように量は少ないが，極めて類似した形態・調整を持つ。他器種に比べ移入期間が限定されるのであろうか。（5～10）は瓦質土器椀。形態・外面調整は黒色土器A類椀に酷似するが，内面のヘラ磨きはそれらほど丁寧ではない。器高・高台形状には一定の差異が認められる。（11～18）は瓦器椀である。（11）のように器高・高台径が大きく，内面暗文も丁寧なタイプから，（17･18）のように極めて浅く，高台も矮小化し暗文も粗雑になるタイプまでがある。楠葉型の瓦器椀は含まない。

輸入陶磁（第118図19～第119図6）には青磁同安窯・龍泉窯系小皿・椀，白磁椀・小皿等がある。この他図示し得ない程度の小片であったが，褐釉系壺や時期は異なるが越州窯系青磁小片が含まれていた。（25）は鏑蓮弁文を持つ青磁椀でやや時期が下るであろう。（第119図2）は僅かに黄濁した白磁で太宰府編年白磁2類に比定できる可能性が高い。

（第119図9・10）は瓦質こね鉢。（11）は須恵質，（12）は瓦質の甕である。（13・14）は土師質三脚羽釜で鍔の位置は低く突出度も高い。（15～17）は土師質土鍋である。（15・17）は前代の土鍋に比して口縁部が分厚くなっている。（18）は瓦質の風字硯，硯面はひどく磨耗している。（8）は逆L字状口縁を持つ弥生前期後葉の甕である。磨耗が著しく，口縁部の刻み・体部の沈線の有無は不明である。明らかに混入品であるが付近に前期末の遺跡の存在を推定する資料して掲載した。

27．第4低地帯流路7出土資料

第4低地帯流路6を切る，同低地帯南半部の最新流路である。包含遺物は先行する流路6の下限資料と時期差がない。最終埋没時期がかなり近接していることが予想できる。遺物量は比較的多く，12世紀後半から13世紀に比定できる。煮沸形態はこの段階では三足羽釜と土鍋のみが認められる。

（第120図1）は土師質杯，（2）は瓦質土器椀である。（3）は土師質椀，体部は箱形に近い。（4・5）は瓦器椀。（4）は内面暗文が極めて密である。また外面上半にもかなり細かい暗文が認められる。（6～8）は輸入陶磁器，（8）は青磁で見込みに精緻な文様を施す。（9～11）は三足羽釜，何れもこのタイプにしては鍔の突出度が高くかつ低い。古い様相を示す。（12）は土師質土鍋である。

28．SXIII11

検出した土器は混入品と思われる煮沸形態各種の小片を除けばすべて土師質小皿である。計16枚が一括出土しているがすべて形態・法量に差はない。

（第120図13～16）は何れも底部ヘラ切り痕および板目圧痕を明瞭にとどめる。底部は体部に比べやや厚いが差異は余り顕著ではない。また体部の矮小化は然程進行していない。11～12世紀代で捉えることが出来るであろう。また此のことは別に示した共伴銅銭の年代観と矛盾しない。

29．第2低地帯水田関連資料

第2低地帯部分の水田1北半部およびその上位の水田2延長部分の存在が想定できる層位（セクションIV10 1～2層）出土の土器である。両者とも水田域と云う性格のため検出遺物量は極めて少ない。むしろそれに先行する時期の遺物が混入している方が遙かに多い。水田1耕作土層では弥生前期資料が，水田2推定層では弥生時代後期から古墳時代後期の資料がそれぞれかなりの量混在している。ここでは

各々の下限を示す資料の代表例を図化・掲載した。

（第114図１）は水田１耕作土層直上で検出した。比較的薄手の作りで体部から口縁部まで並行叩きをとどめる。弥生時代後期末の甕である。

（２～８）は水田２推定層出土資料である。（２）は土師器杯で口縁部は小さく巻き込み，内面には暗文を施す。（３～７）は須恵器杯で体底部境は明瞭で箱形を呈し，低い高台を底部縁辺に付す。（８）は円面硯。大形で方形の透かしを持つ。土師器杯でみれば８世紀前半に限定できる。

30．第３低地水田関連資料

第３低地帯部分の水田１・２に係わる資料であるが，別地点の水田資料同様に検出量は非常に限られている。また水田２では比較的多くの７世紀以前の資料も検出したが，ここでは水田耕作土層直上ないしは直上被覆層中の下限資料を図化・掲載した。水田１では弥生時代後期末ないしは古墳時代初頭の土器を伴い，水田２では８世紀前半までの土器を伴う。

（第114図14）は先述の通り耕作土層直上で確認した浅い窪みに横倒しで納められていた完形の甕である。出土状態から見て何らかの祭祀行為に係わる可能性がある。小形化した底部を明瞭に残すが体下半部までかなり丸みを帯びている。（15）は製塩土器脚部片，（16）は甕，体部の球形化が進み全体に薄手となる。口縁部は体部から鋭く折れて内面に明瞭な稜を持つ。

（第114図18～23）は水田２耕作土直上出土資料である。（18）は土師器杯，（19）は皿で内面に暗文が認められる。（20～23）は須恵器杯。杯蓋はボタン状のつまみを持ち，杯身では底部縁辺に低い高台を付す。（24）は円面硯で硯面と墨池の境界が不明瞭，長方形の細身の透かしを穿つ。（25）は須恵器水瓶体部であろうか。類例の乏しい器種である。（26）は土馬尾部片であろう。

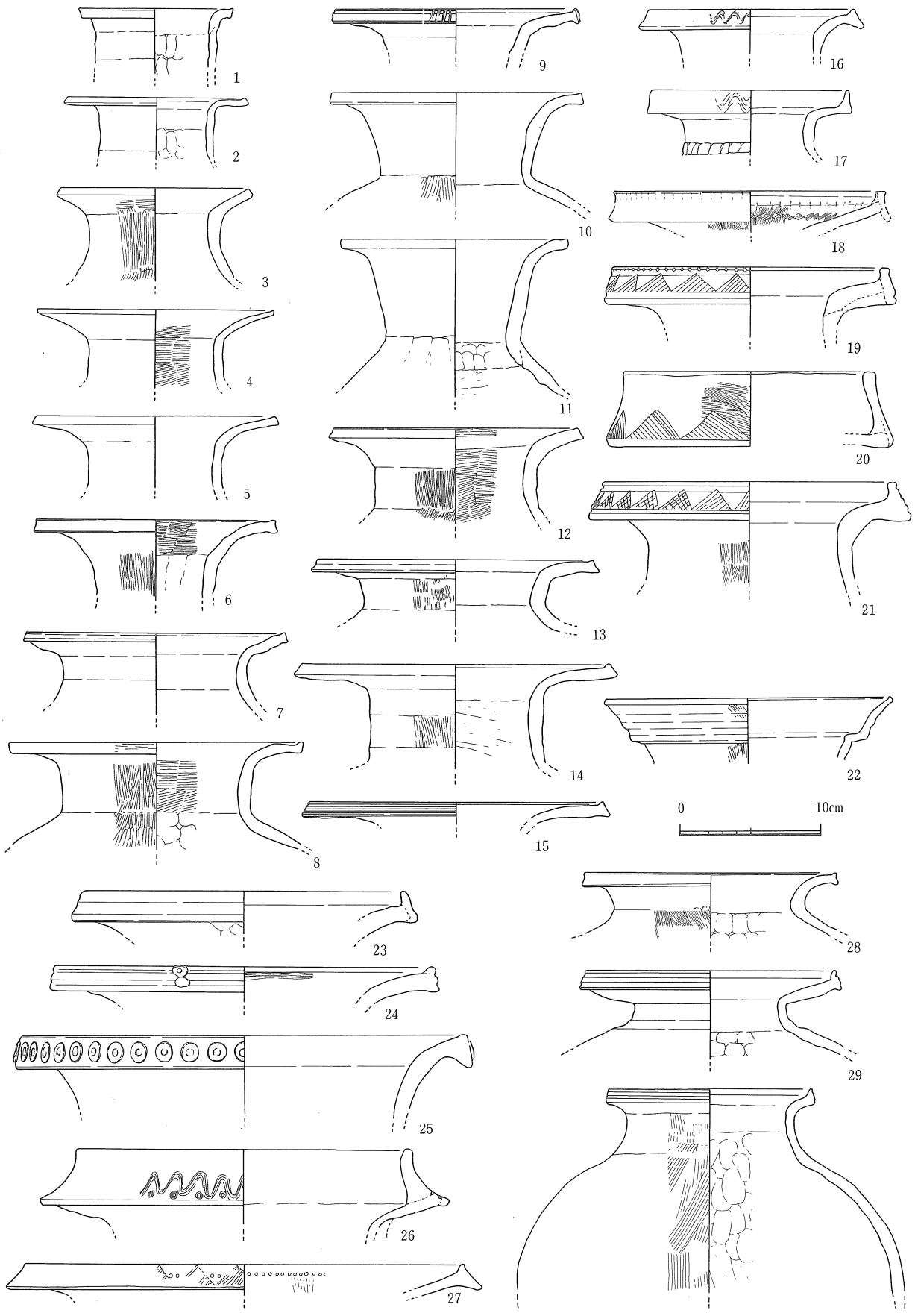
31．水田３及び第４低地帯流路２関連資料

遺物量は決して多くない。また水田面および水田下位層ではむしろ混入品と思われる先行する時期の資料が大半を占めている。水田面直上および下位層の資料でほぼ11世紀前半，上位層の資料では12世紀代までを含むと考えられる。この点からすれば水田３は11世紀前半代と見て良いであろう。

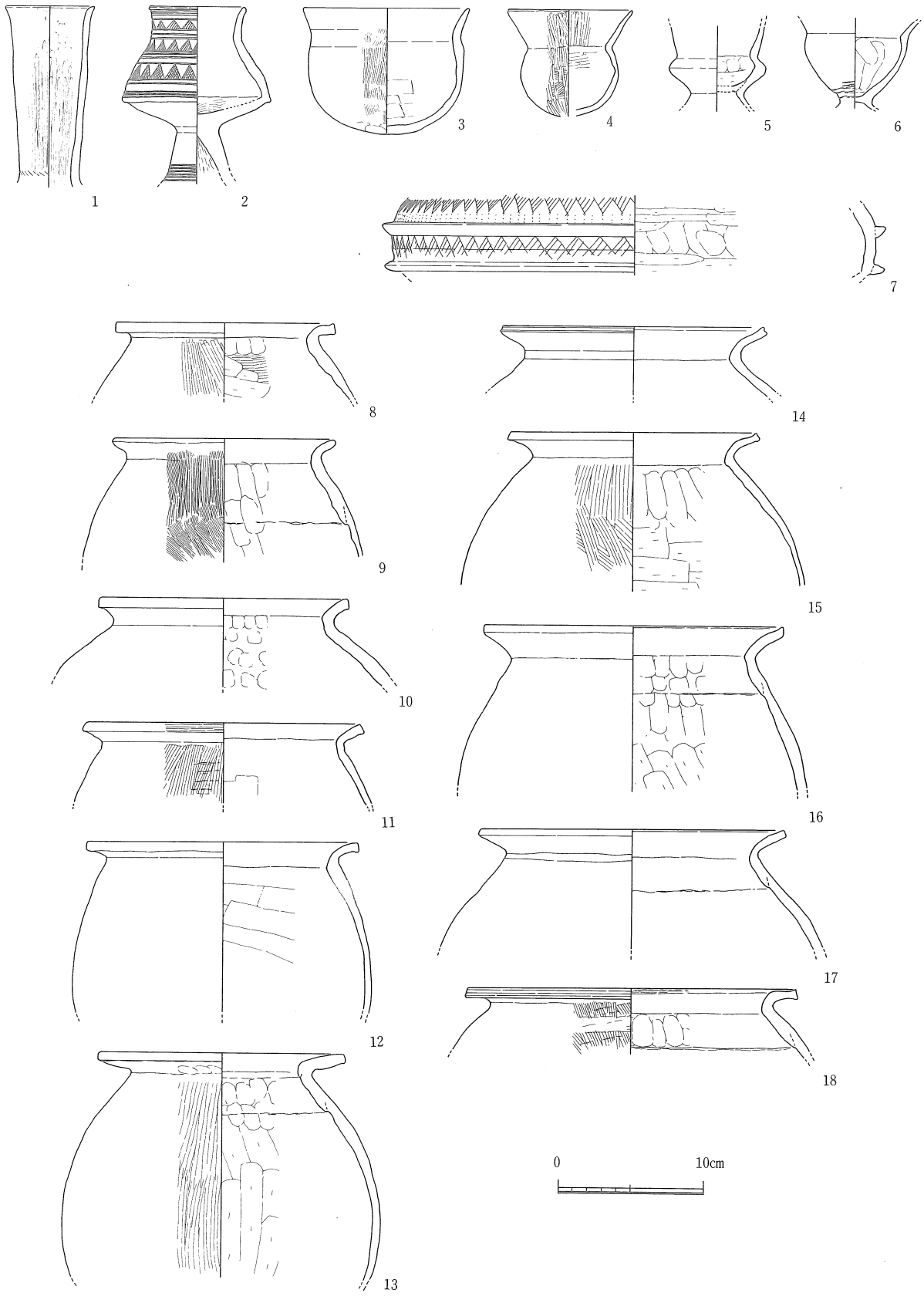
（第115図５～16）は第１微高地西斜面に堆積し，一部水田層を覆う淡黒色粘質土層に包含される遺物である。（５）は土師質杯，（６・９）は同椀である。高台は高く安定している。（７・10～13）は黒色土器Ａ類椀，（８）はＢ類である。（13～15）は瓦質こね鉢で口縁部を弱く折り曲げる。（16）は土師質土鍋で，口縁部を分厚く作る。

（17～21）は水田面直上で検出した資料である。（17）は平高台の土師質杯。比較的突出度が高い。（18）は黒色土器Ｂ類，（19・20）はＡ類である。（21）は羽釜で体部が直立し，分厚い鍔を持つタイプである。

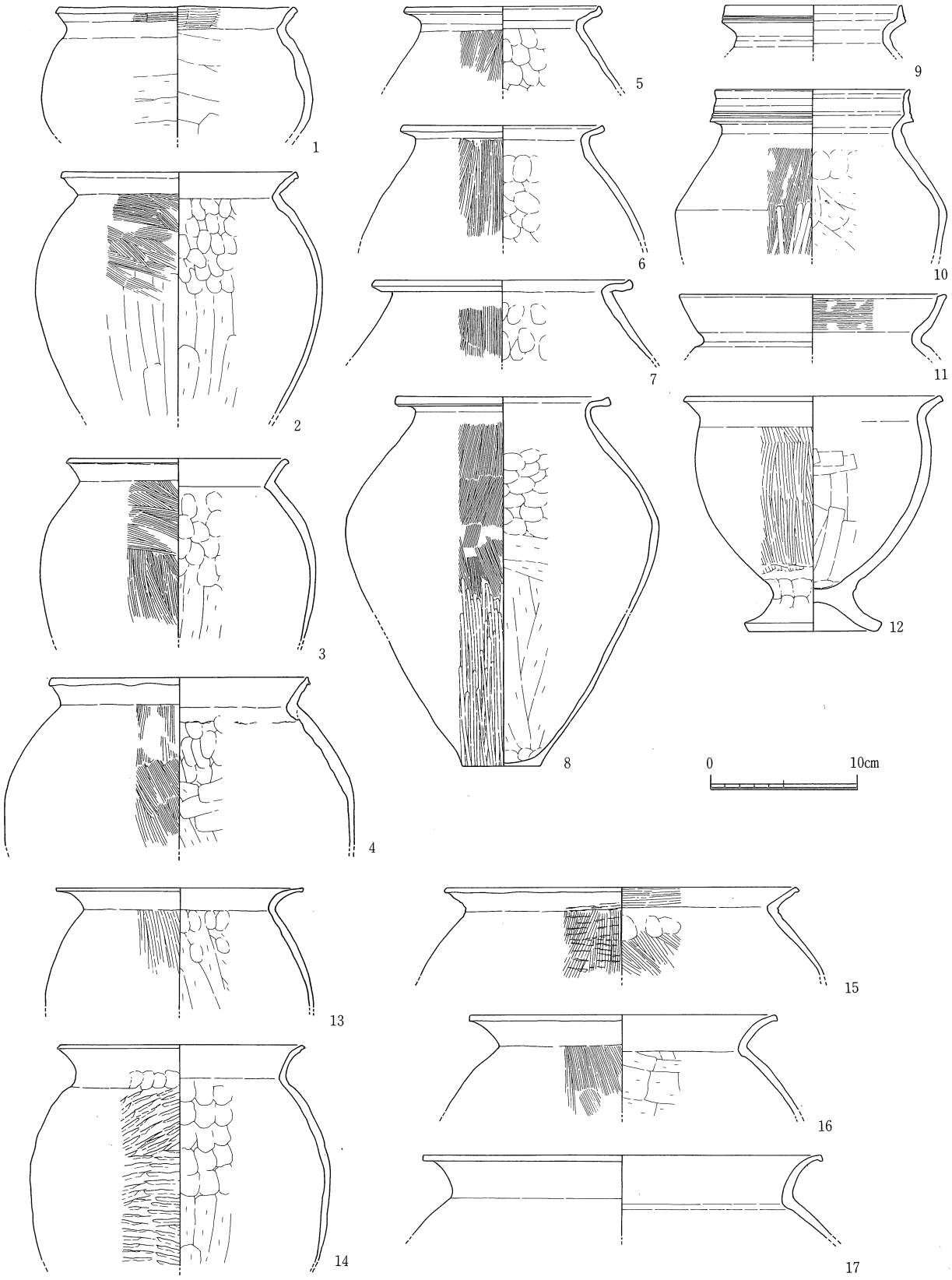
（22～24）は水田層より下位で検出している。（22）は土師質椀，（23・24）は須恵質こね鉢。（23）は口縁部を強く屈曲させ，端部を摘み上げる。（24）より先行する形態である。　　（大久保）



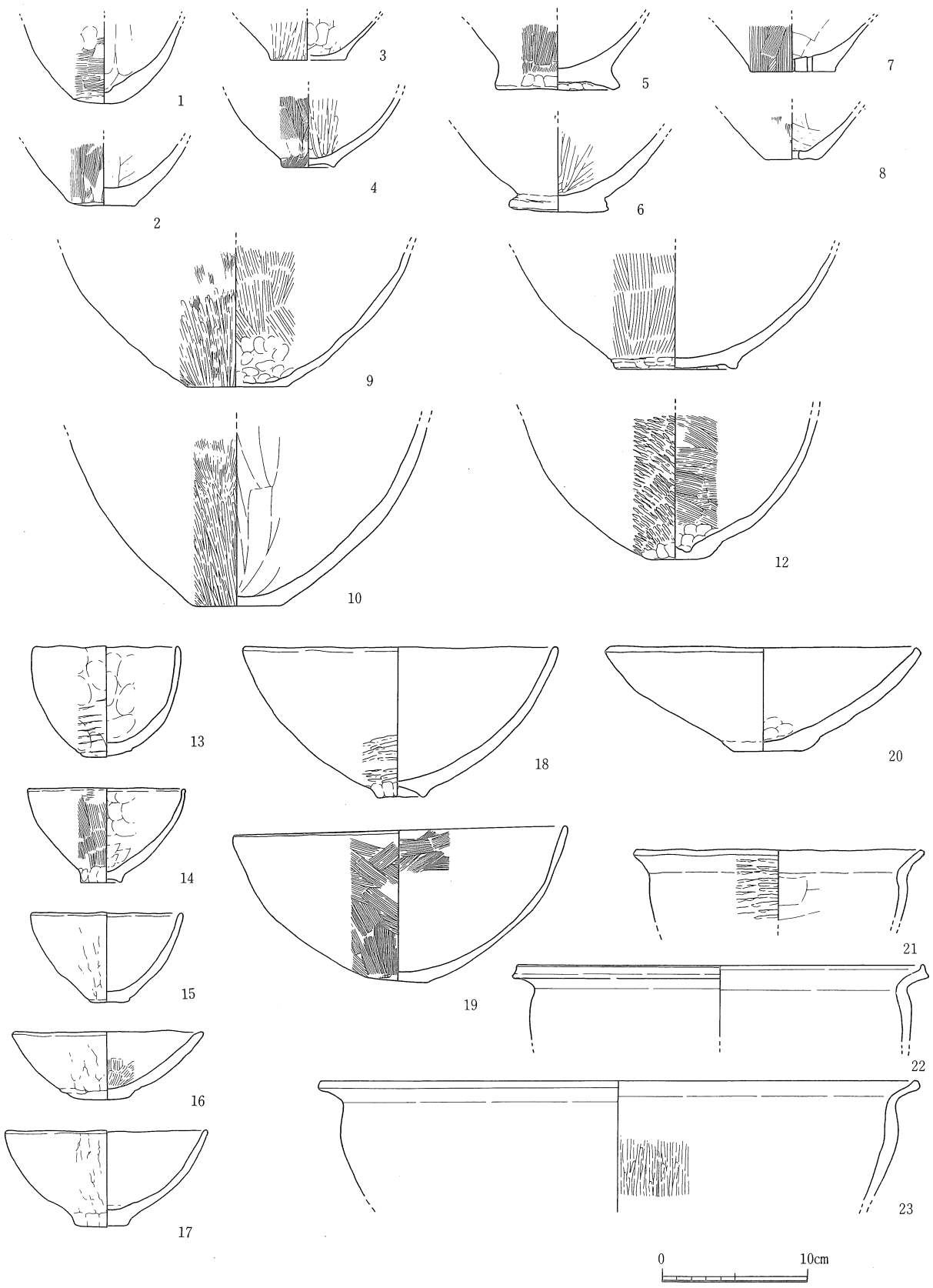
第47図　第１低地帯流路１　出土土器



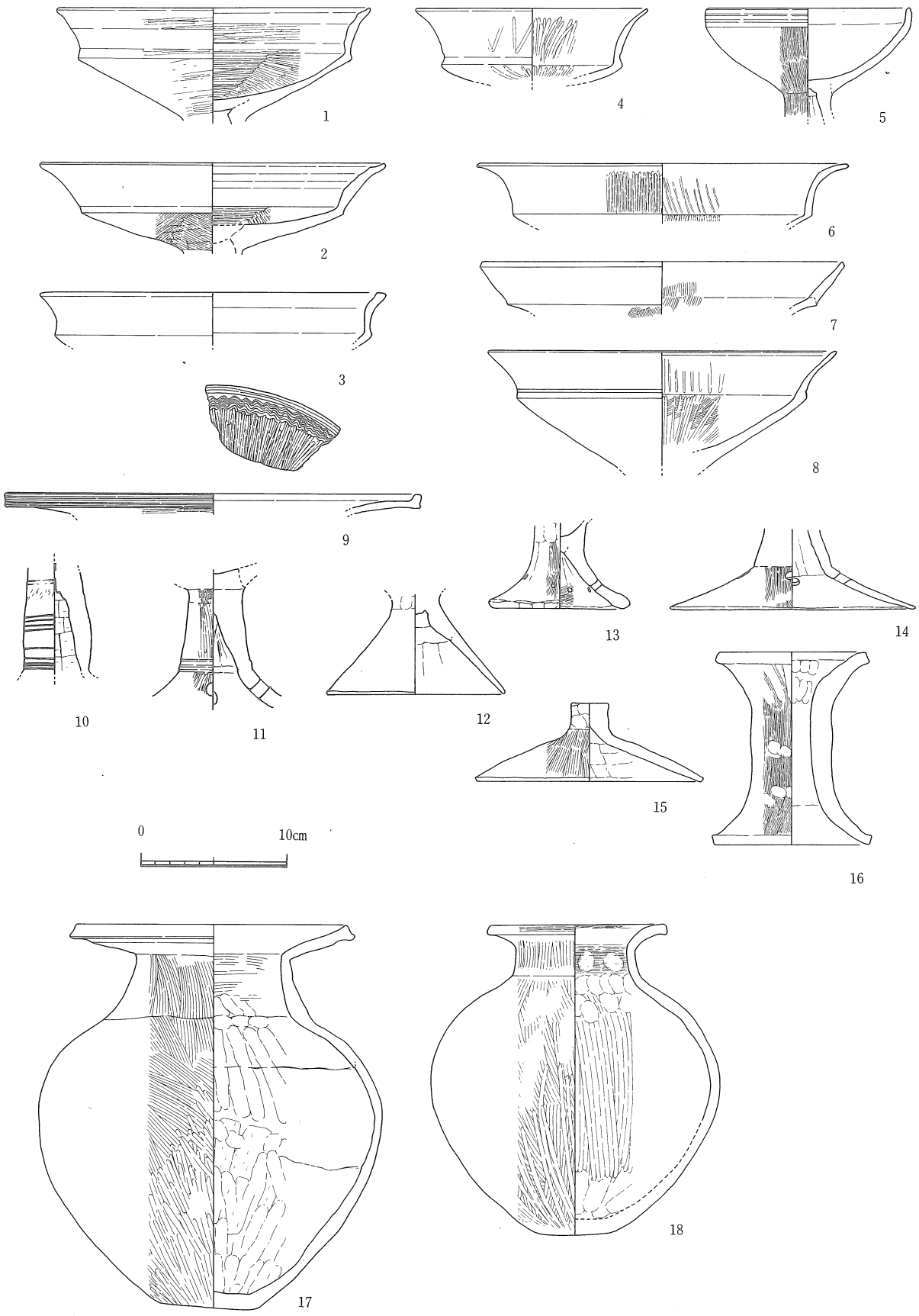
第48図　第1低地帯流路1　出土土器



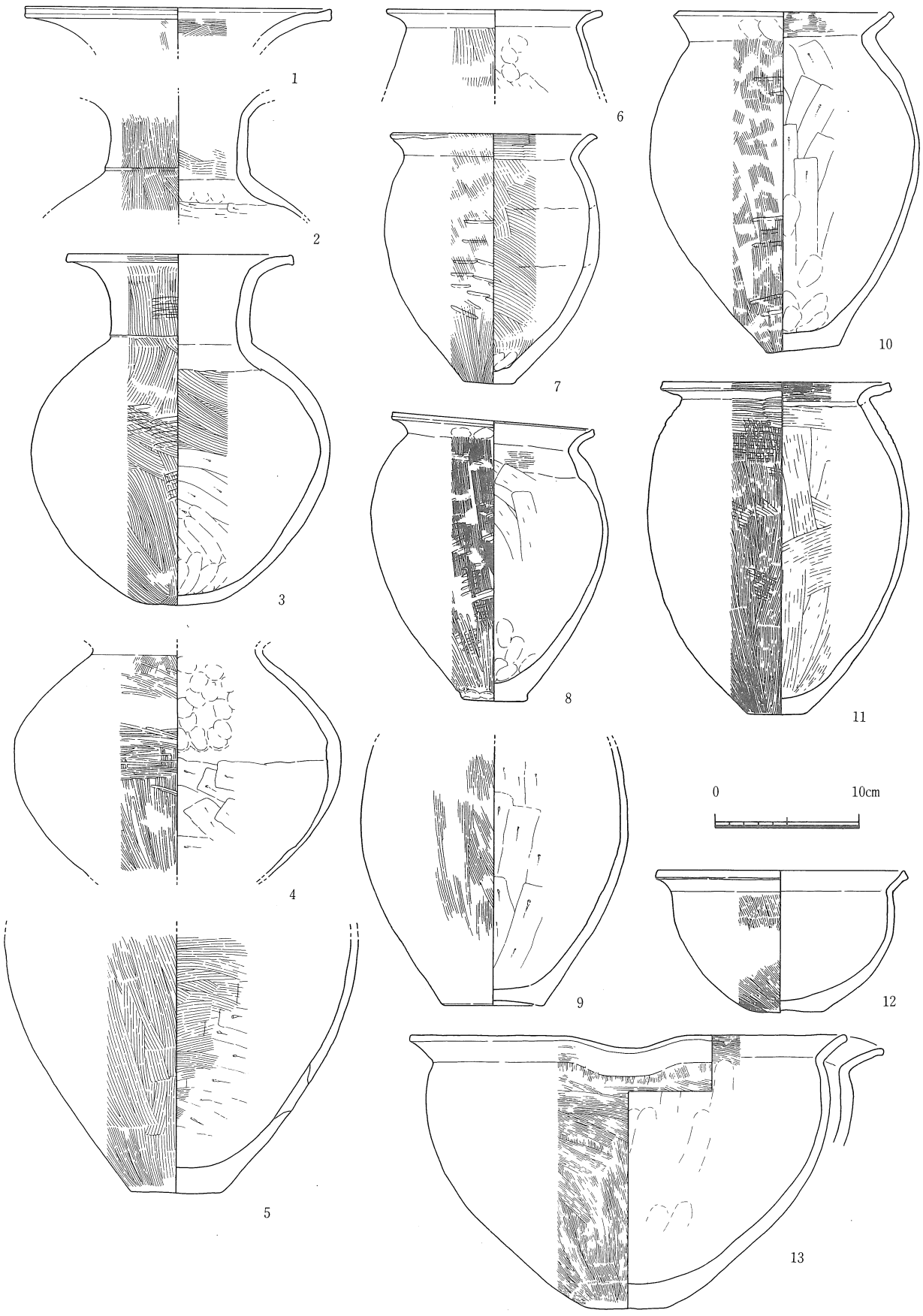
第49図　第1低地帯流路1　出土土器



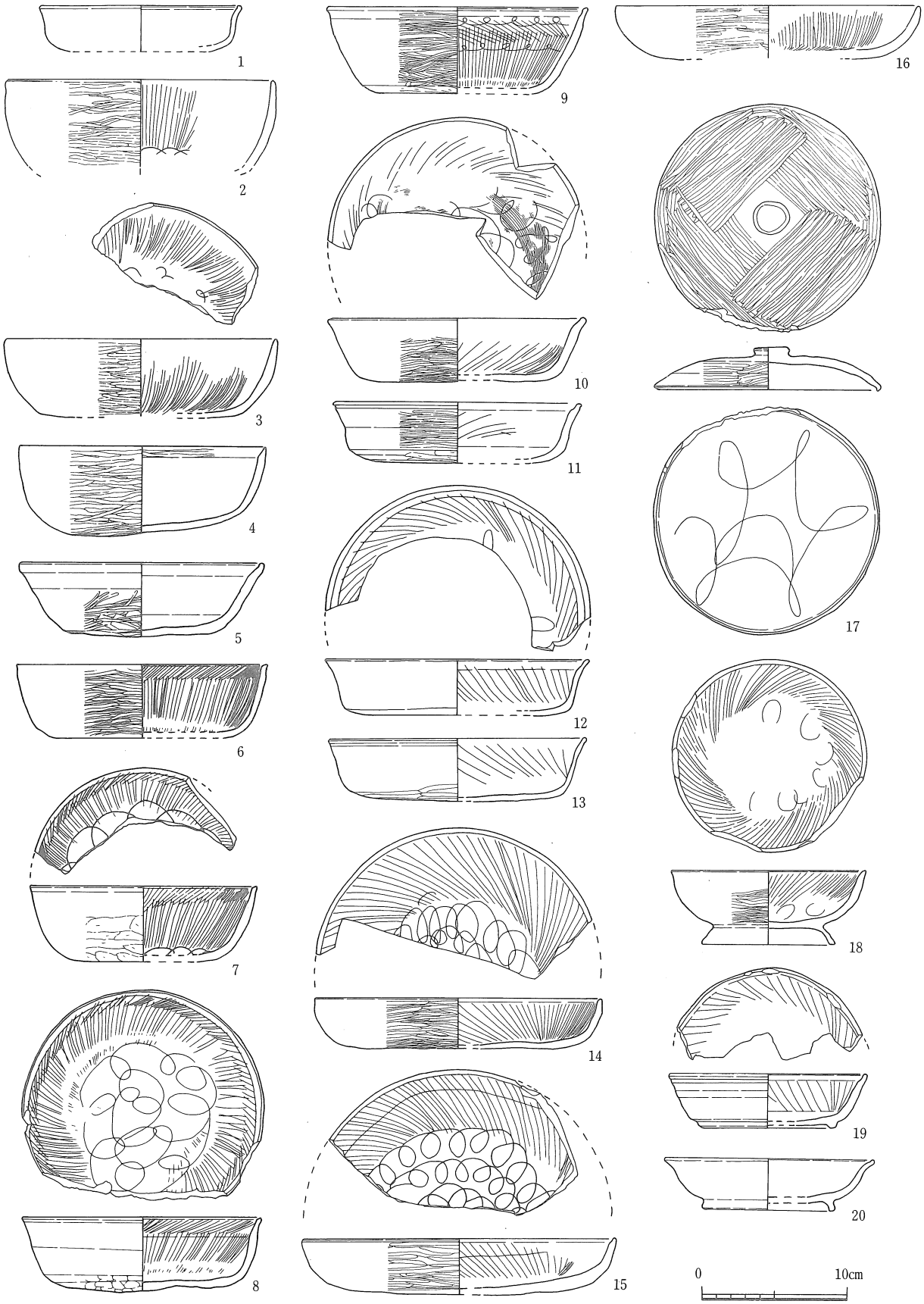
第50図　第1低地帯流路1　出土土器



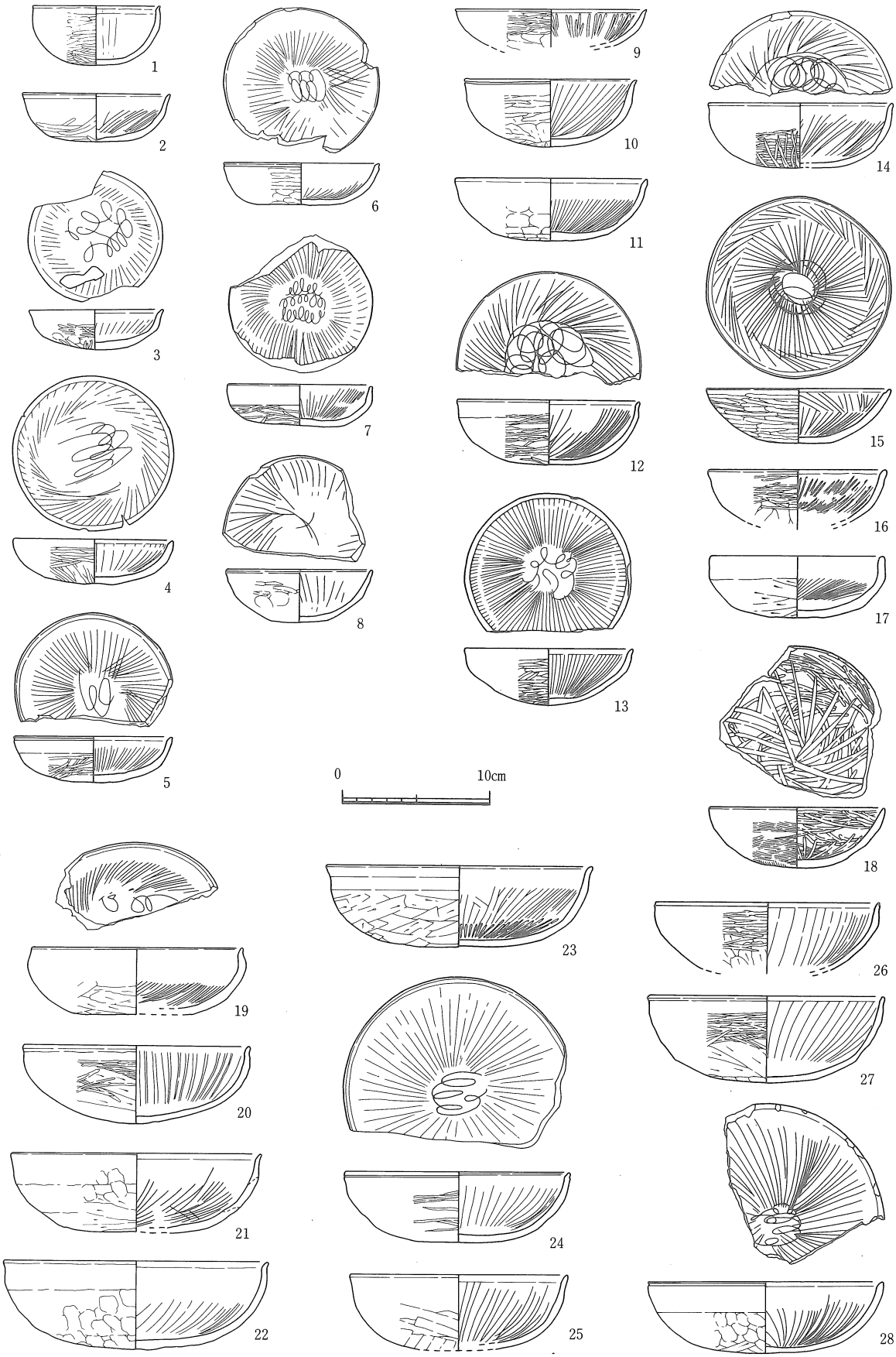
第51図　第１低地帯流路１及び弥生土器溜り１　出土土器



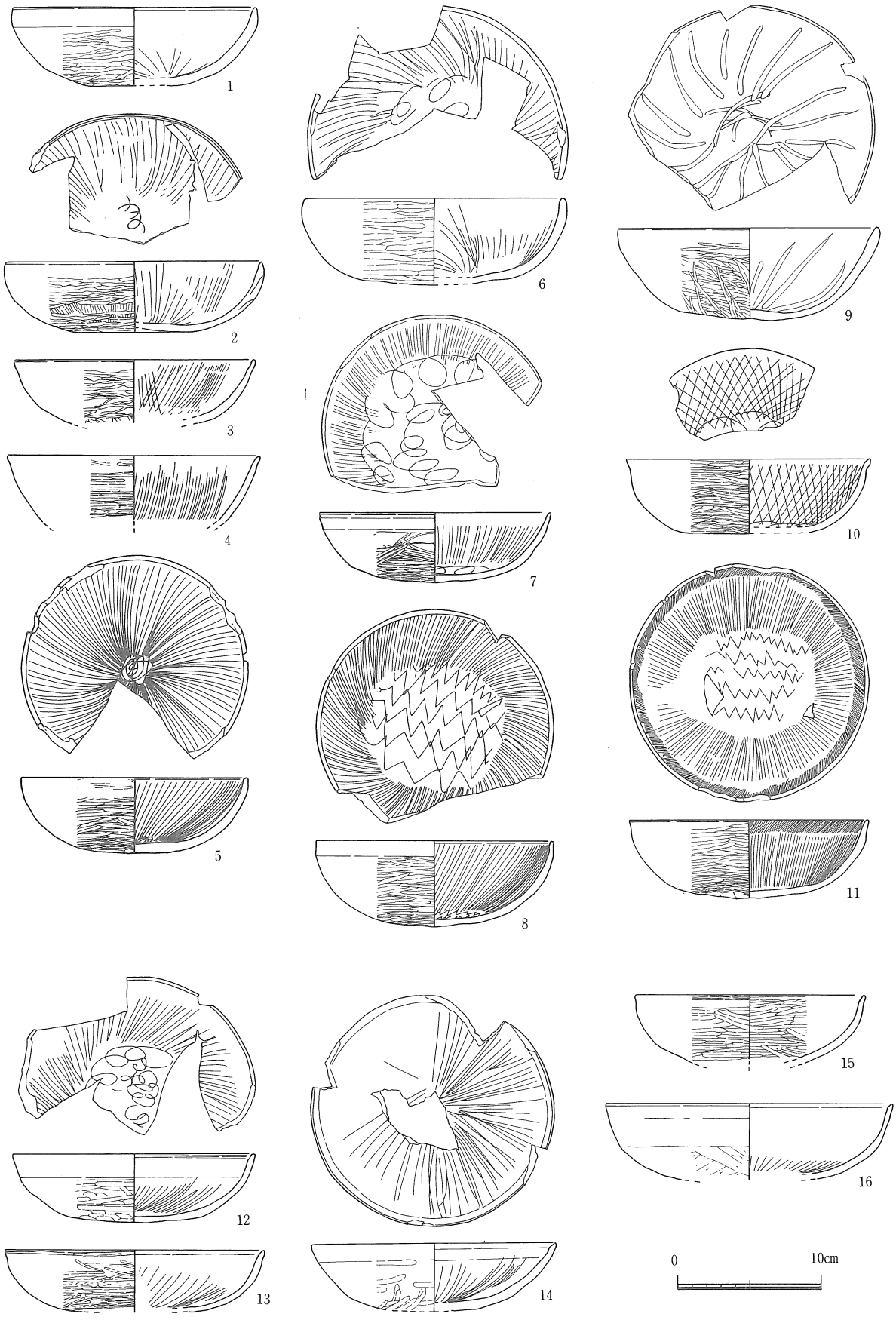
第52図　弥生土器溜り1　出土土器



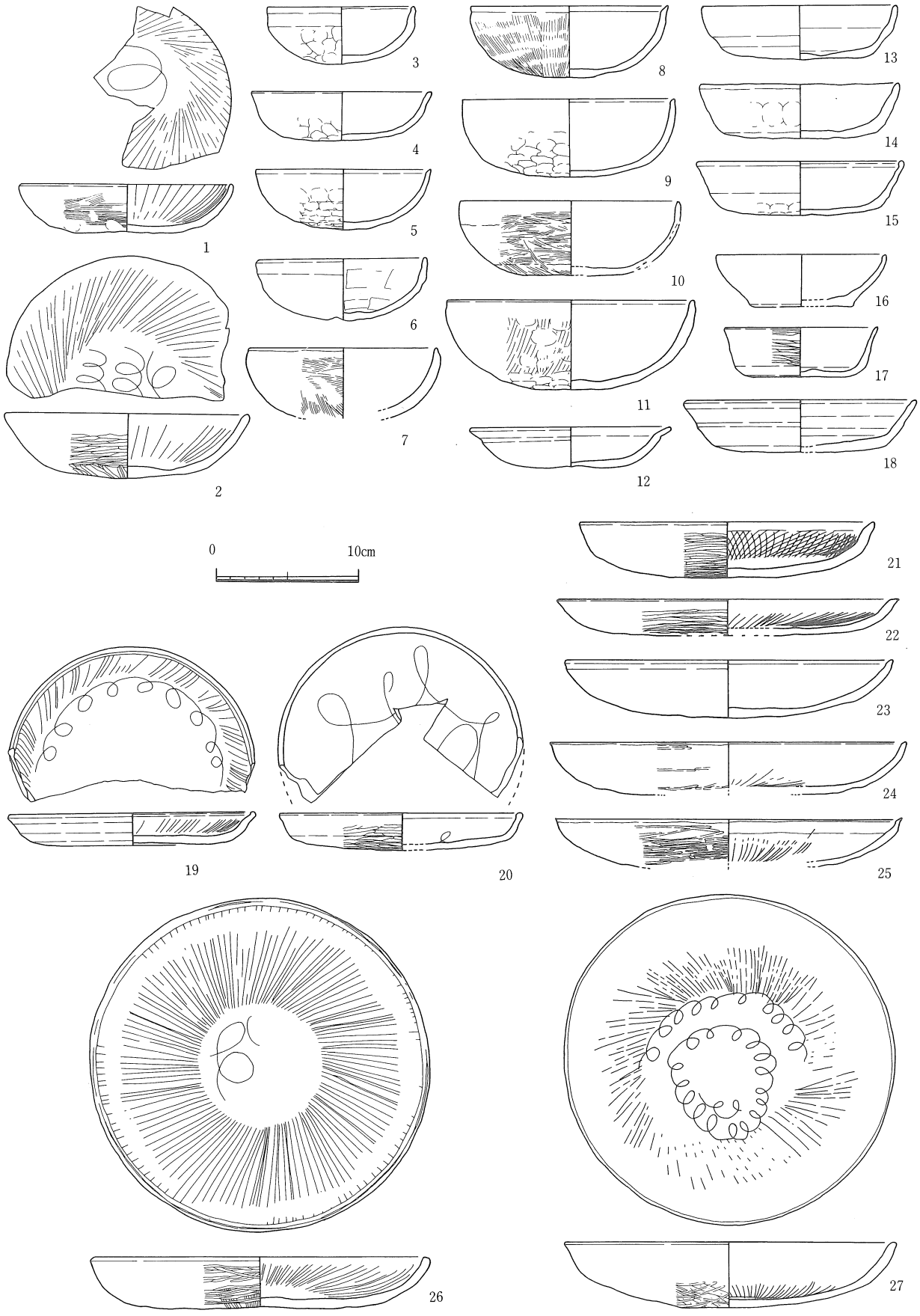
第53図　第1低地帯流路2　出土土器



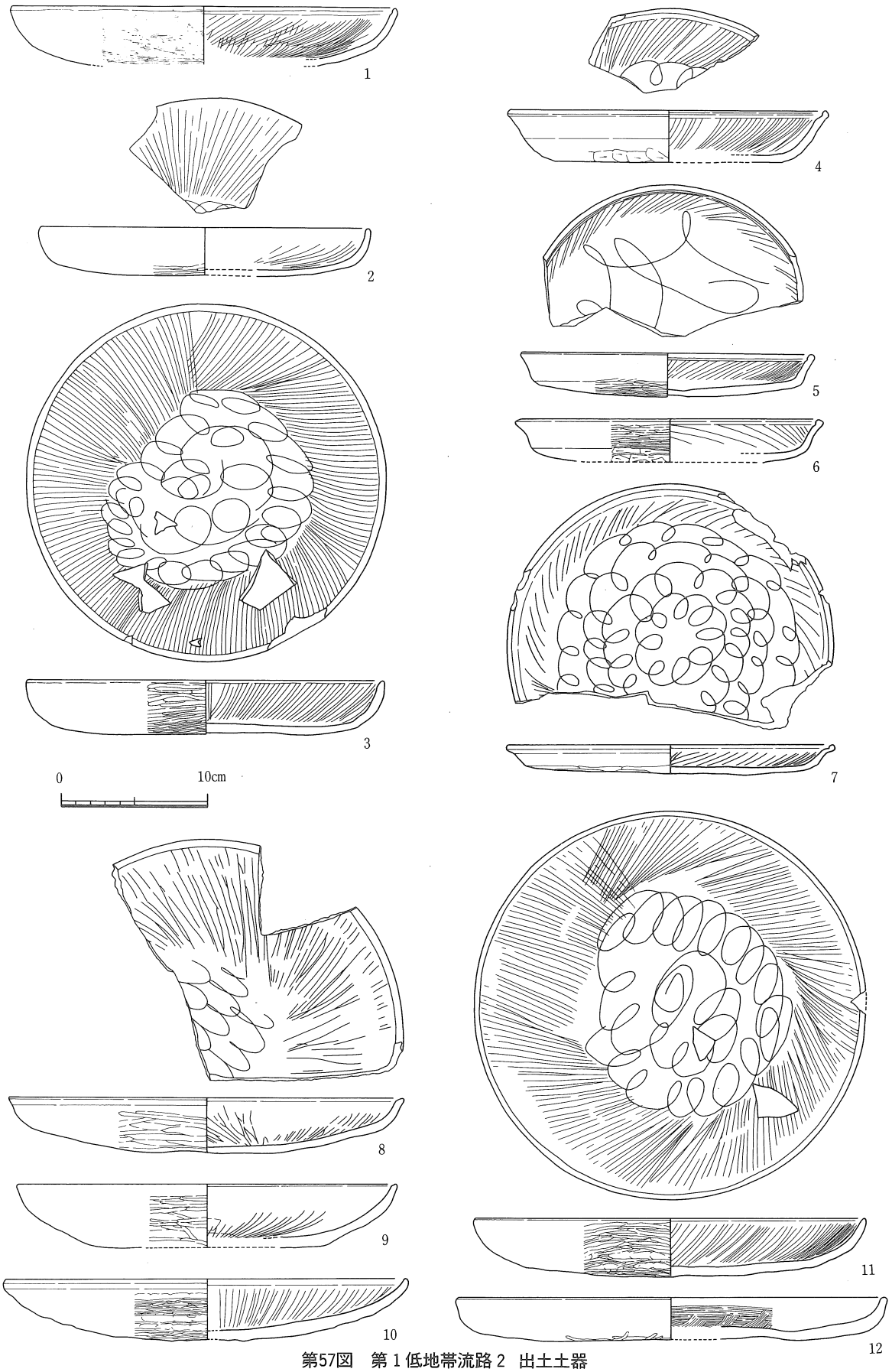
第54図　第１低地帯流路２　出土土器



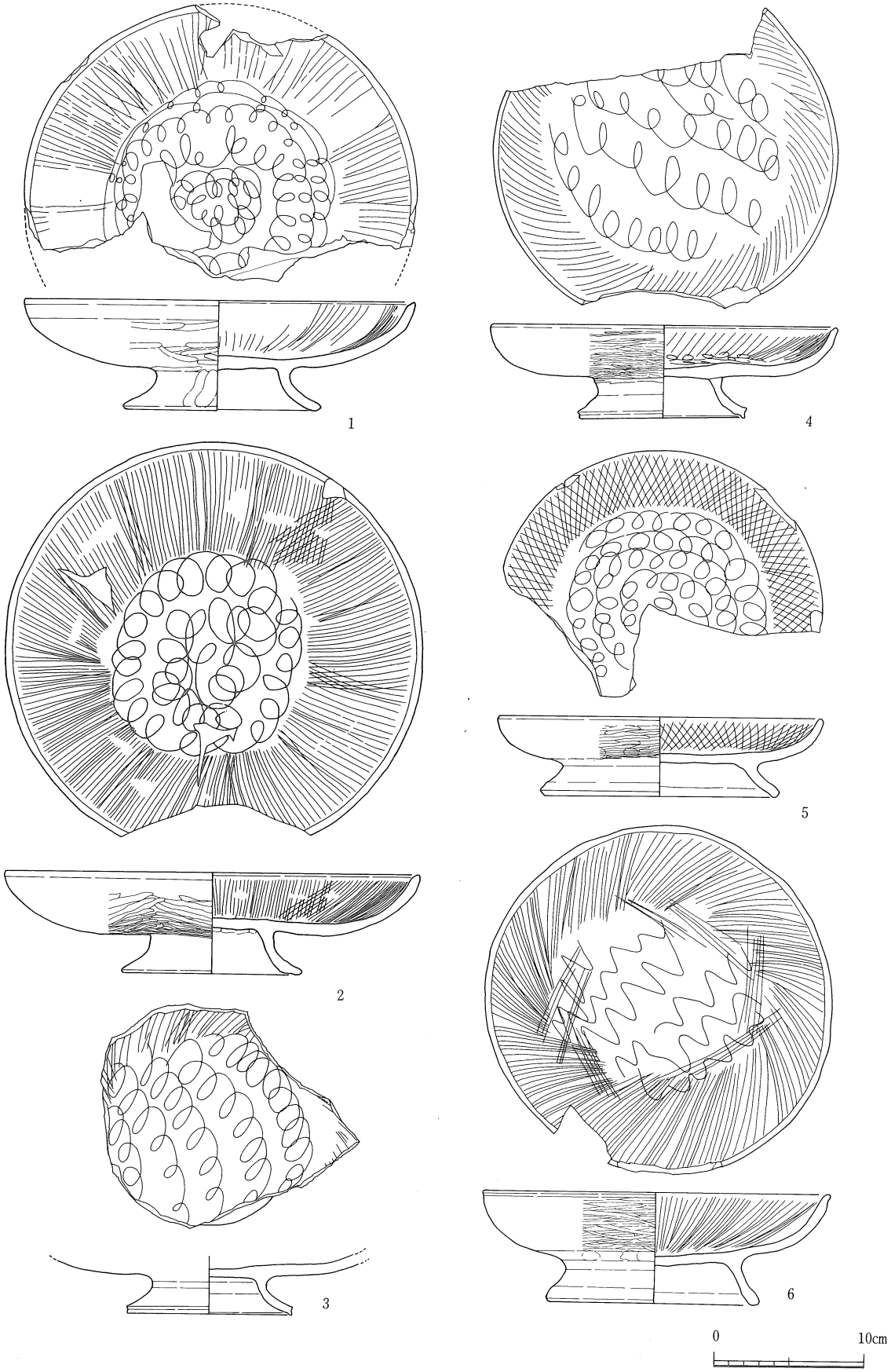
第55図　第1低地帯流路2　出土土器



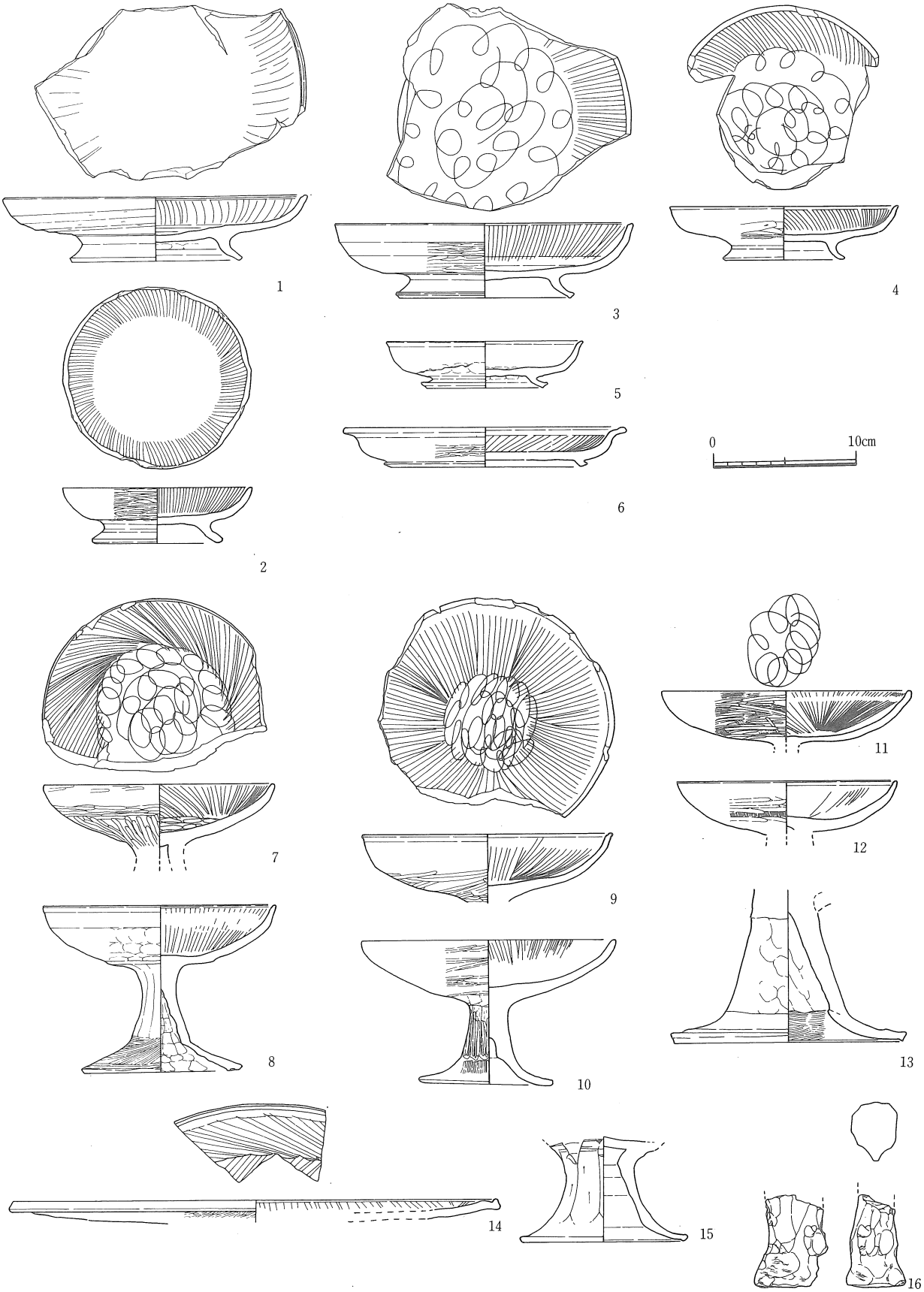
第56図　第1低地帯流路2　出土土器



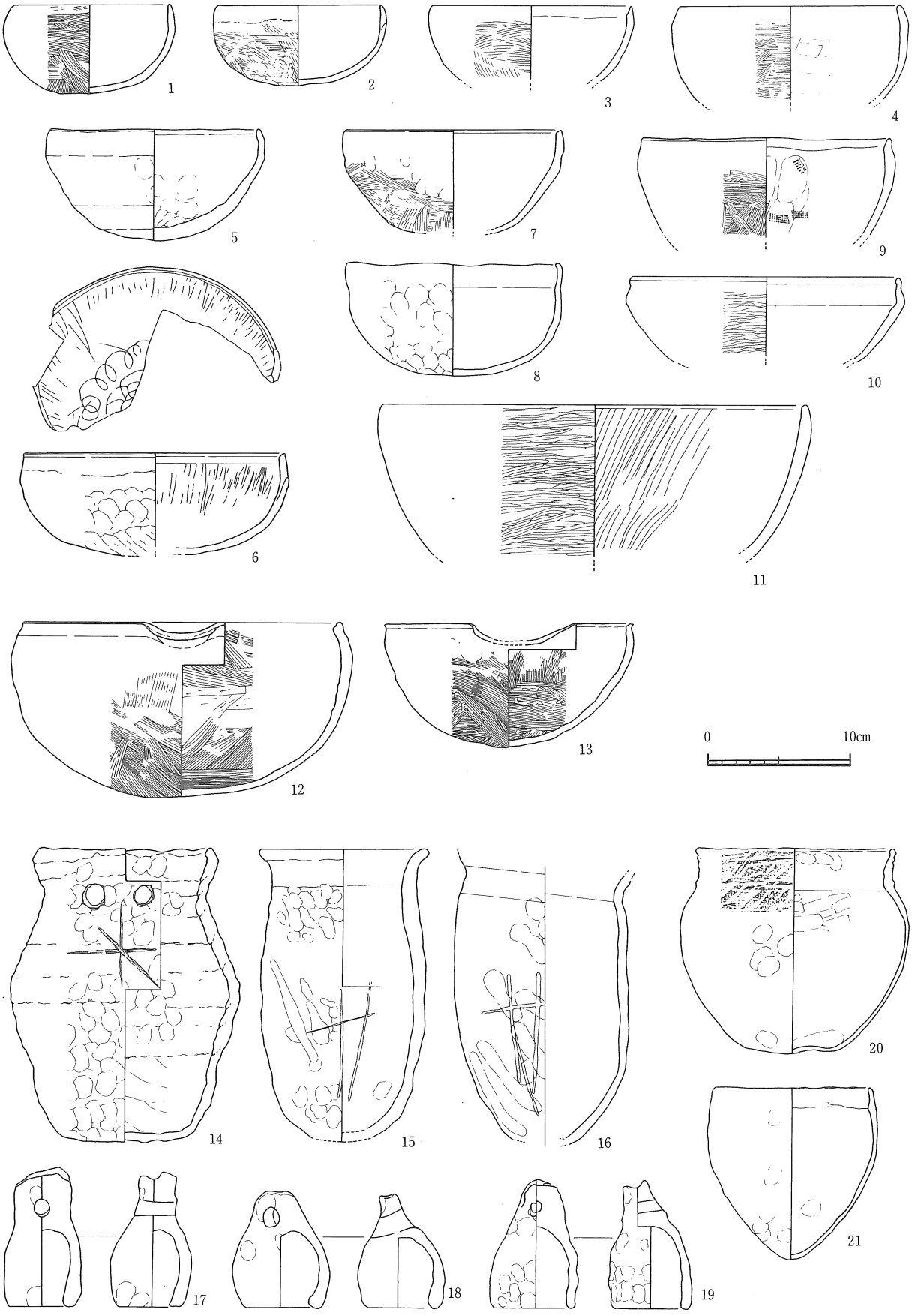
第57図　第１低地帯流路２　出土土器



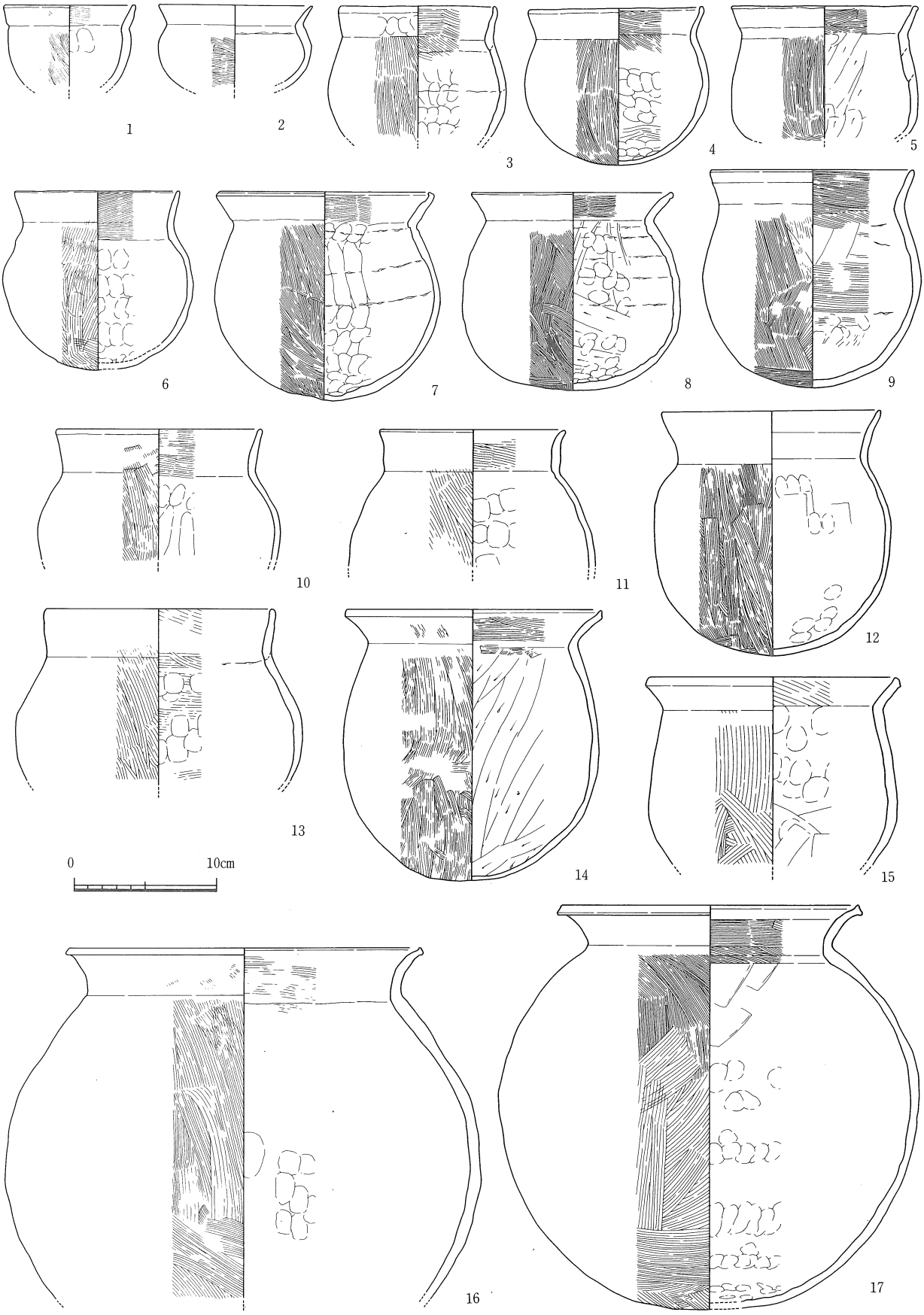
第58図　第1低地帯流路2　出土土器



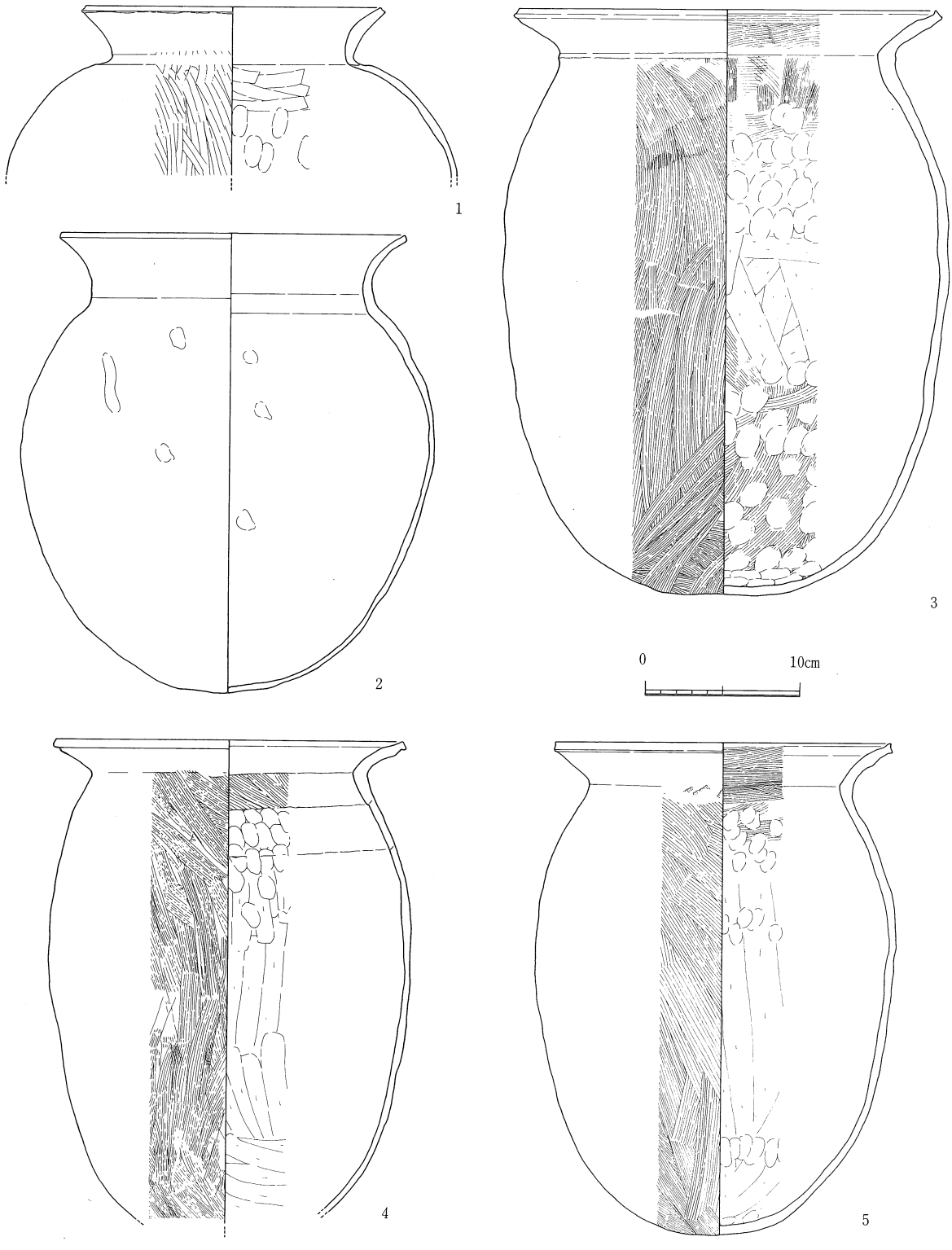
第59図　第１低地帯流路２　出土土器



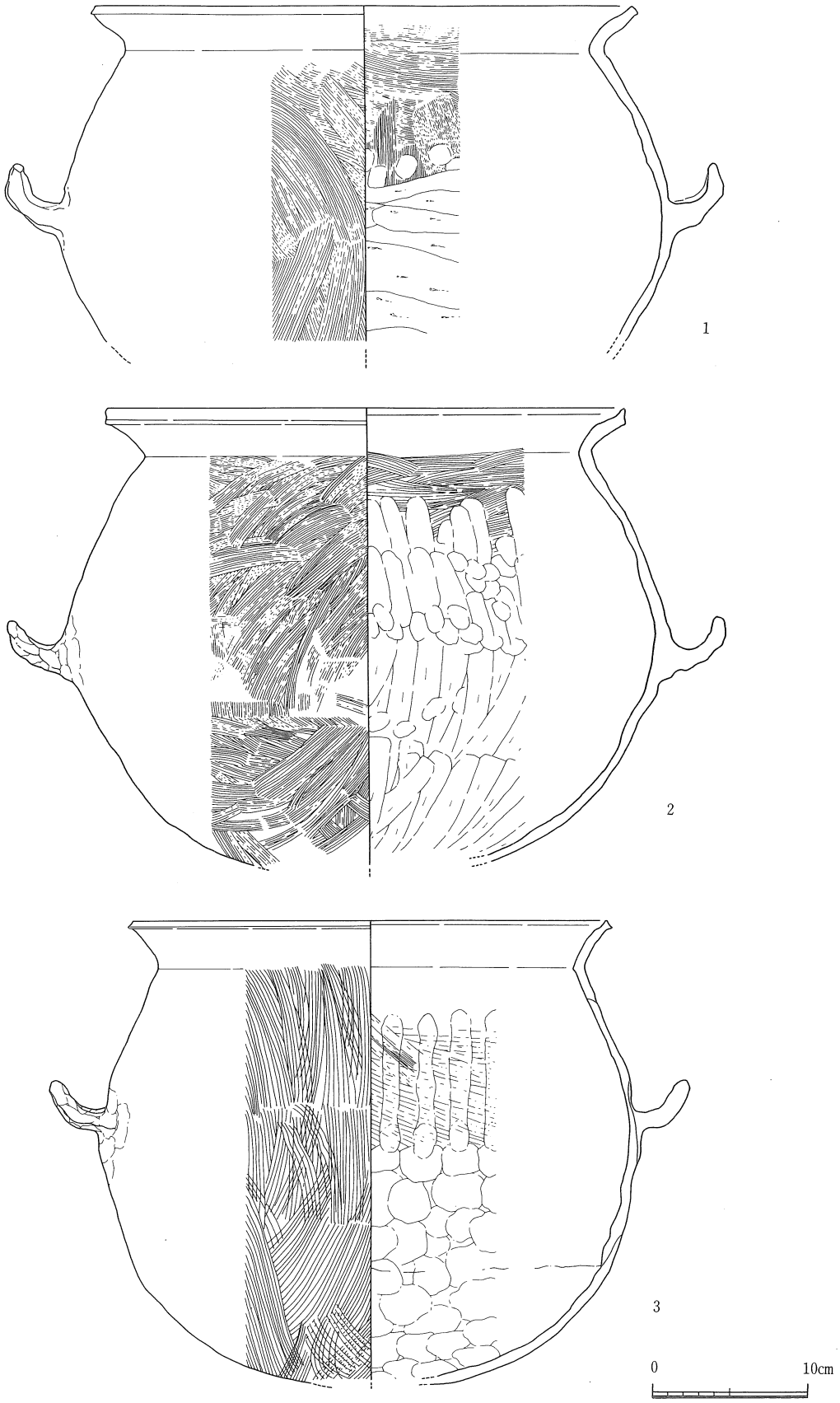
第60図　第1低地帯流路2　出土土器



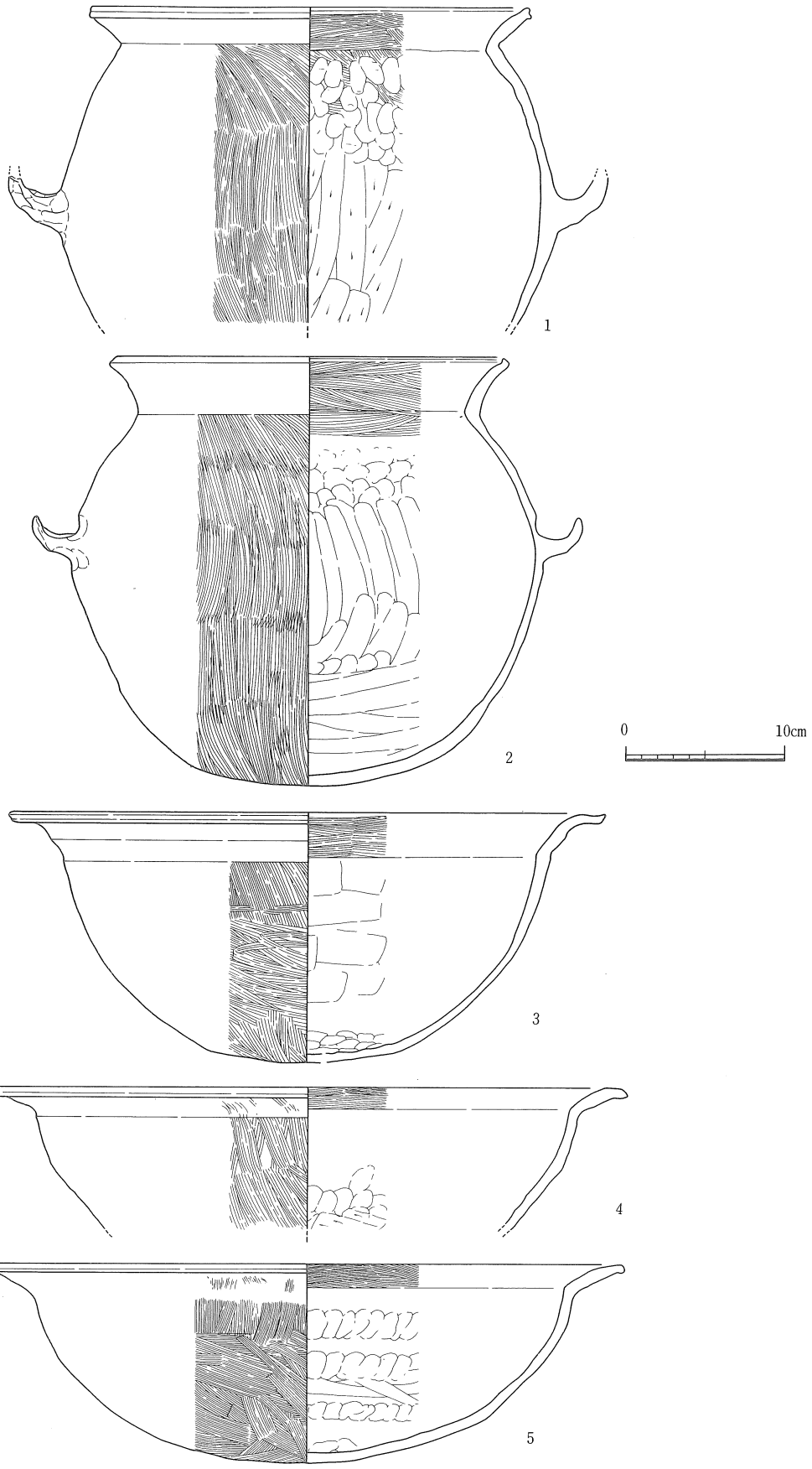
第61図　第１低地帯流路２　出土土器



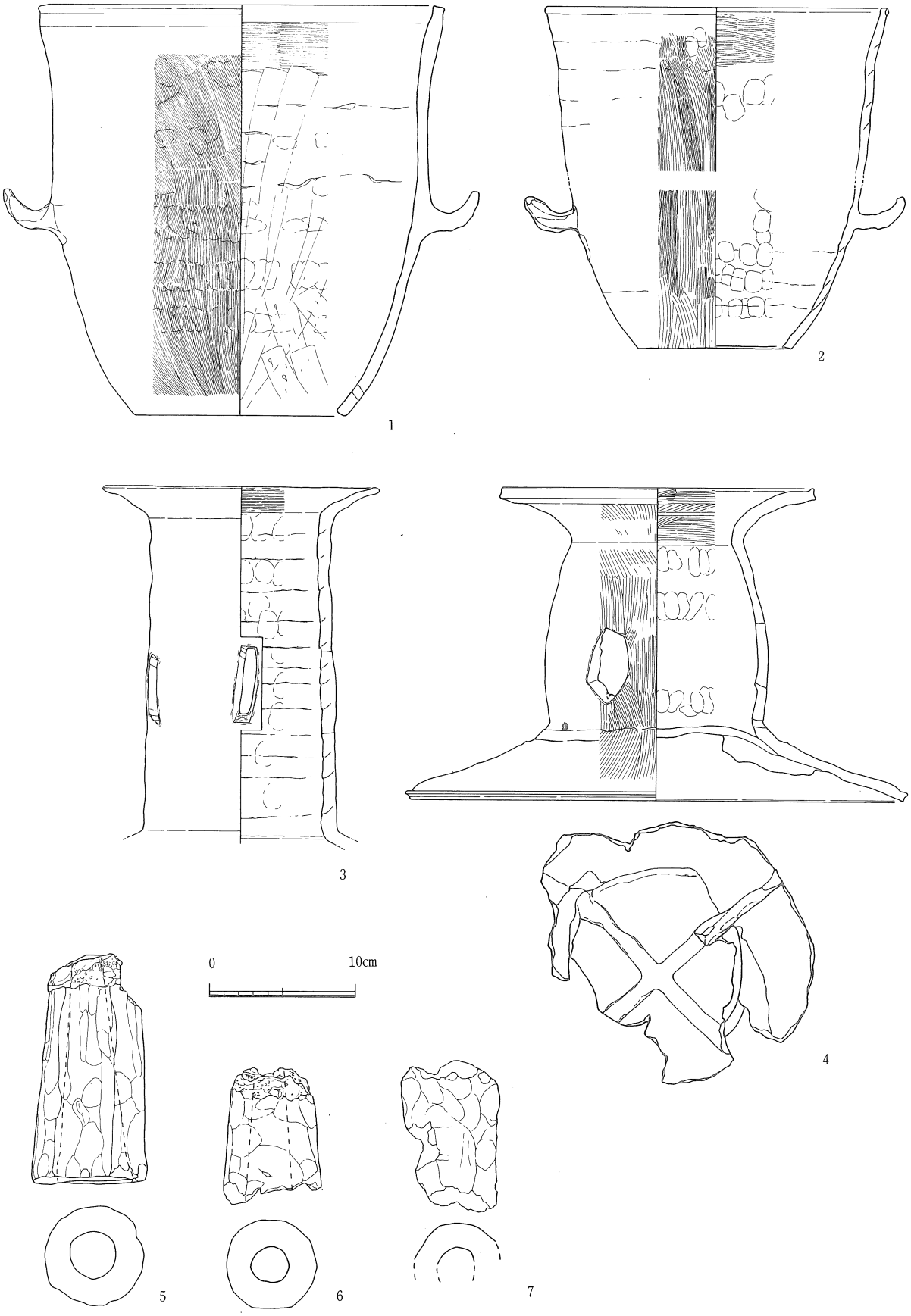
第62図　第１低地帯流路２　出土土器



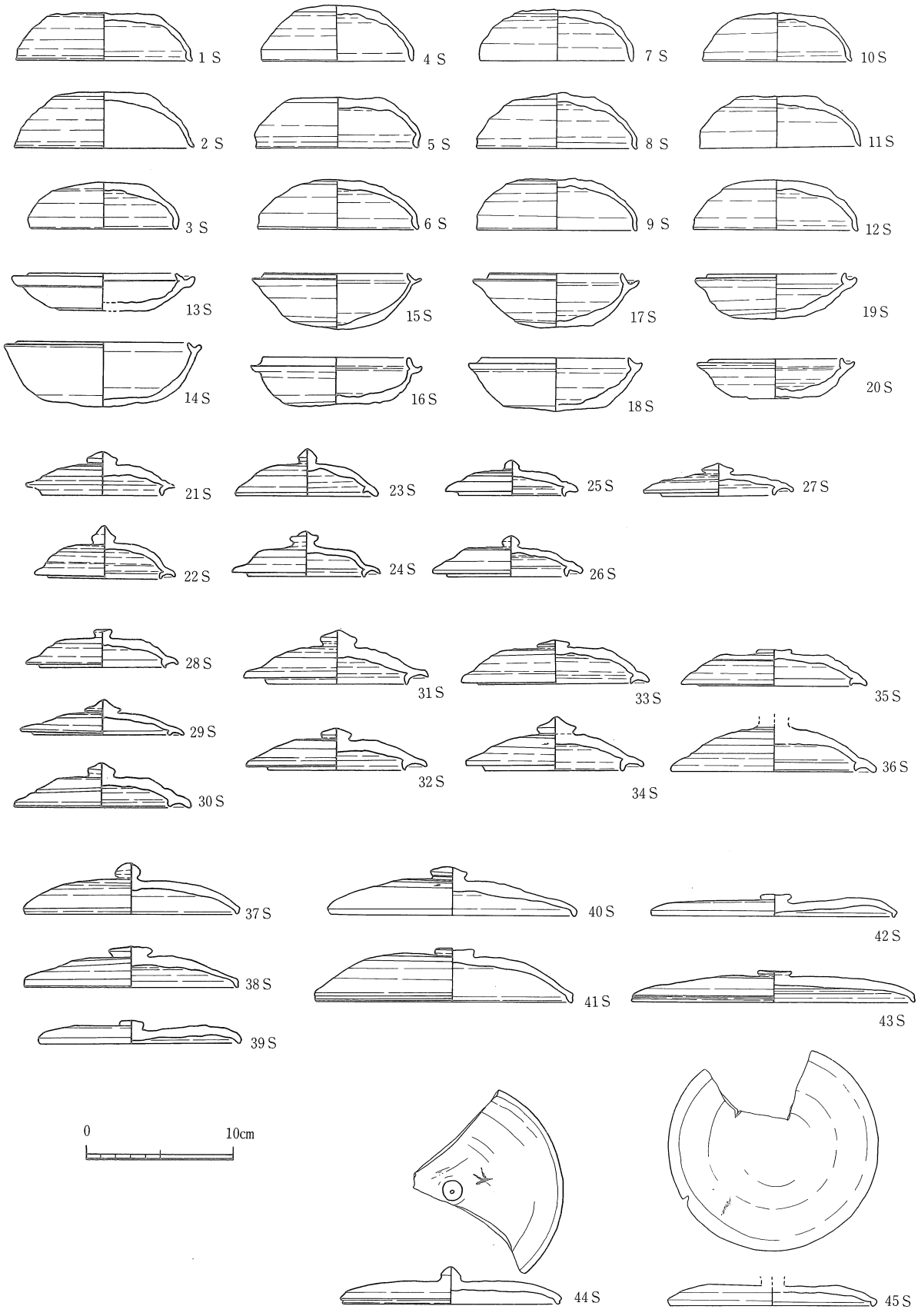
第63図　第１低地帯流路２　出土土器



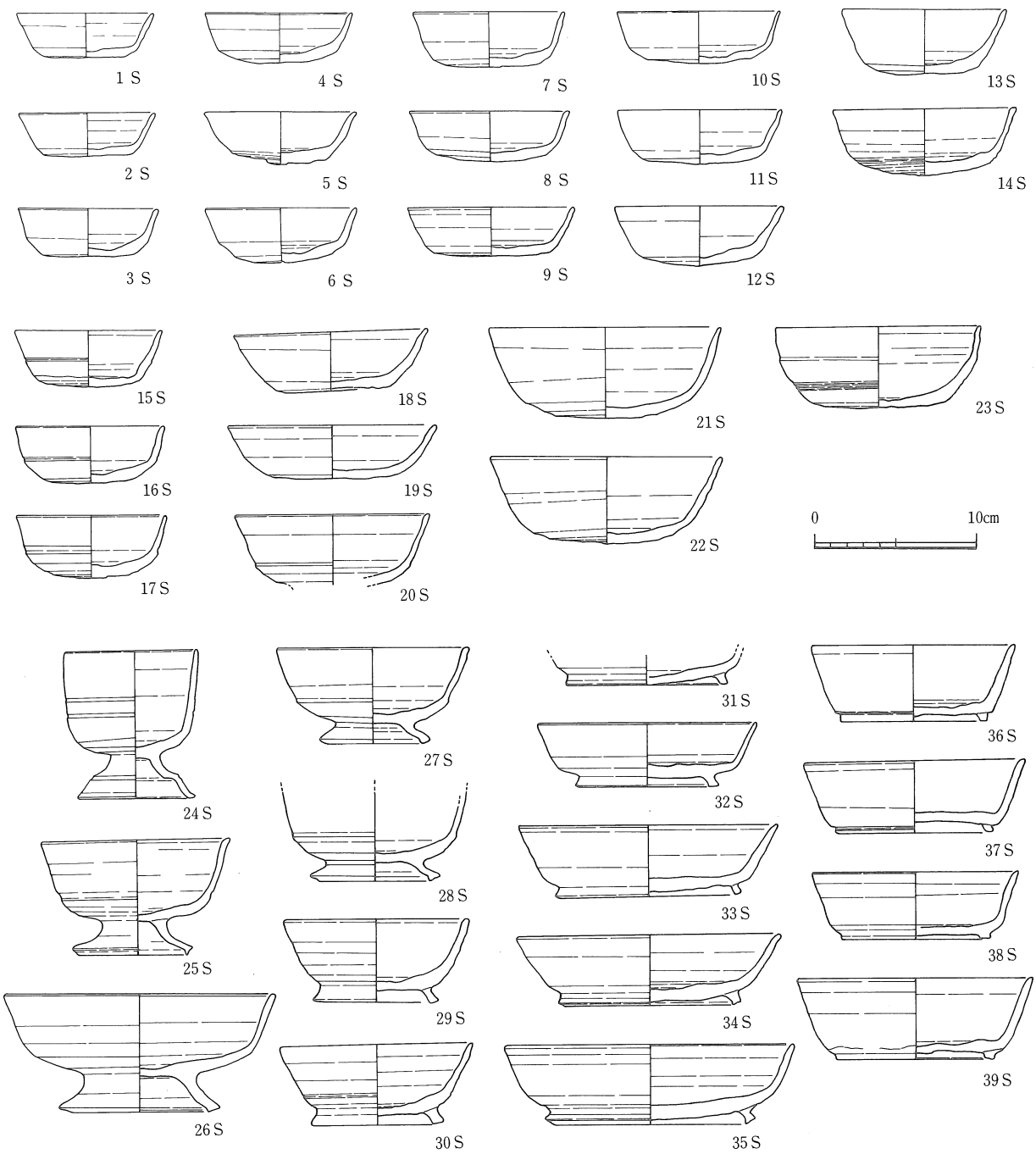
第64図　第１低地帯流路２　出土土器



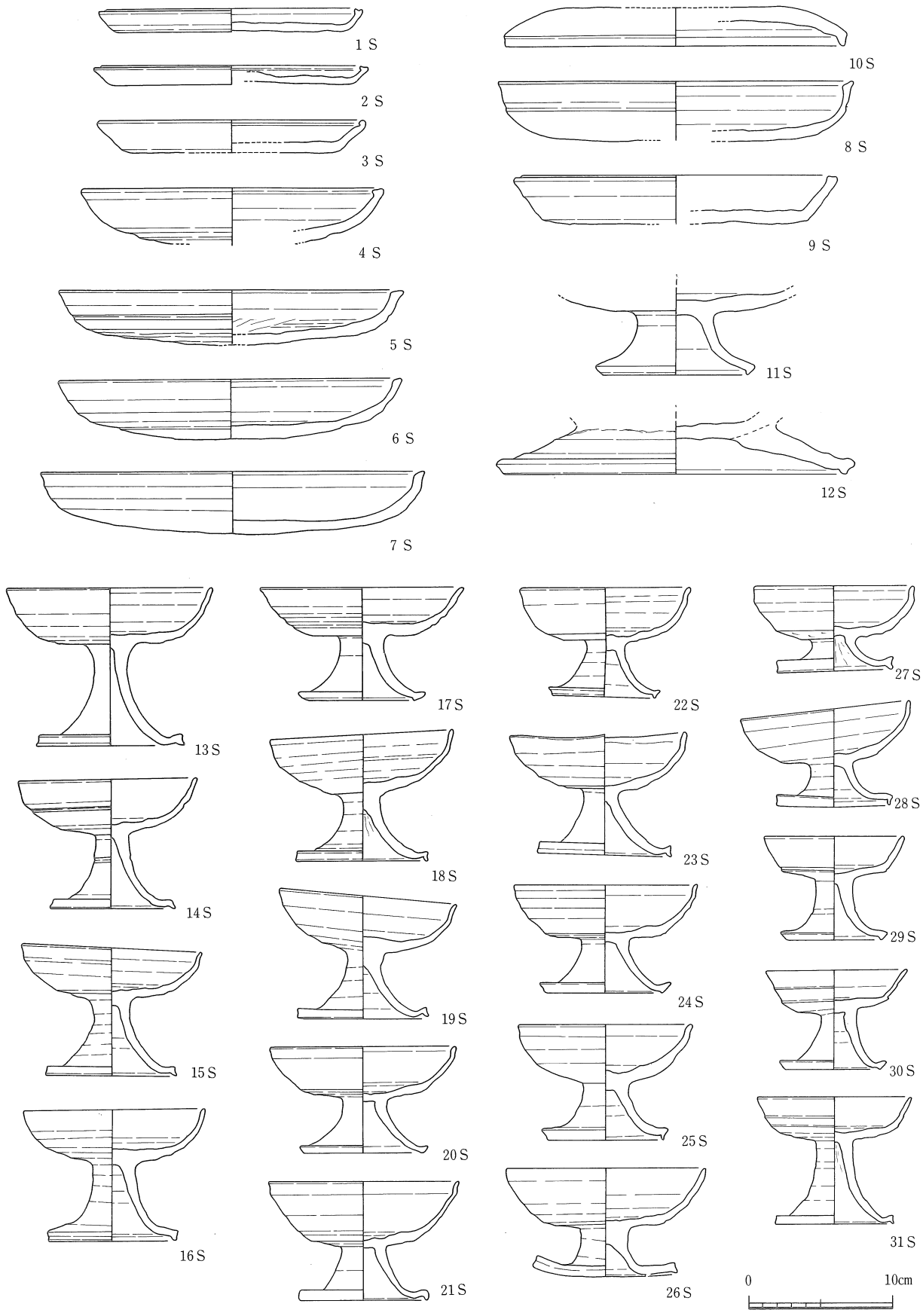
第65図　第１低地帯流路２　出土土器



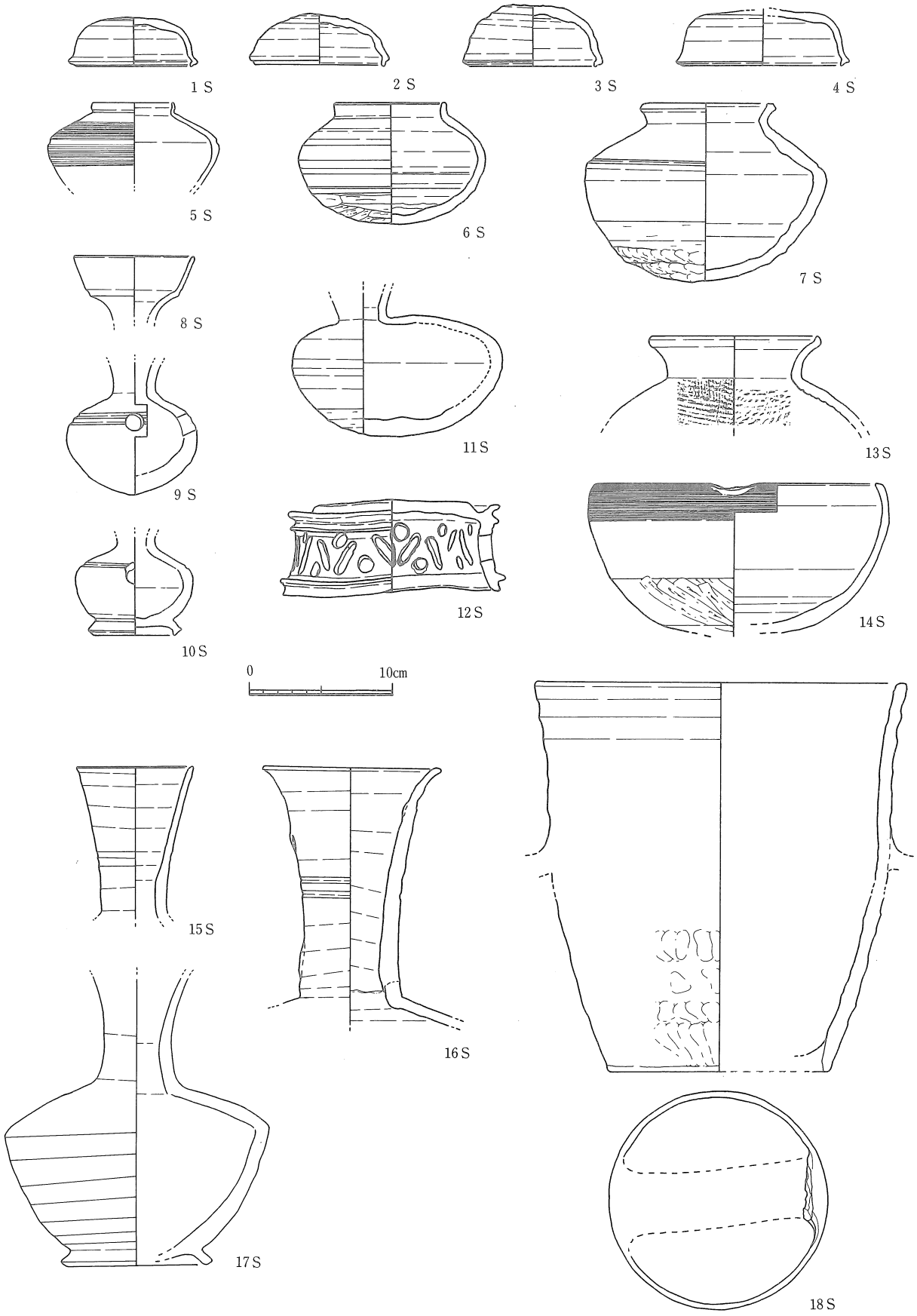
第66図　第1低地帯流路2　出土土器



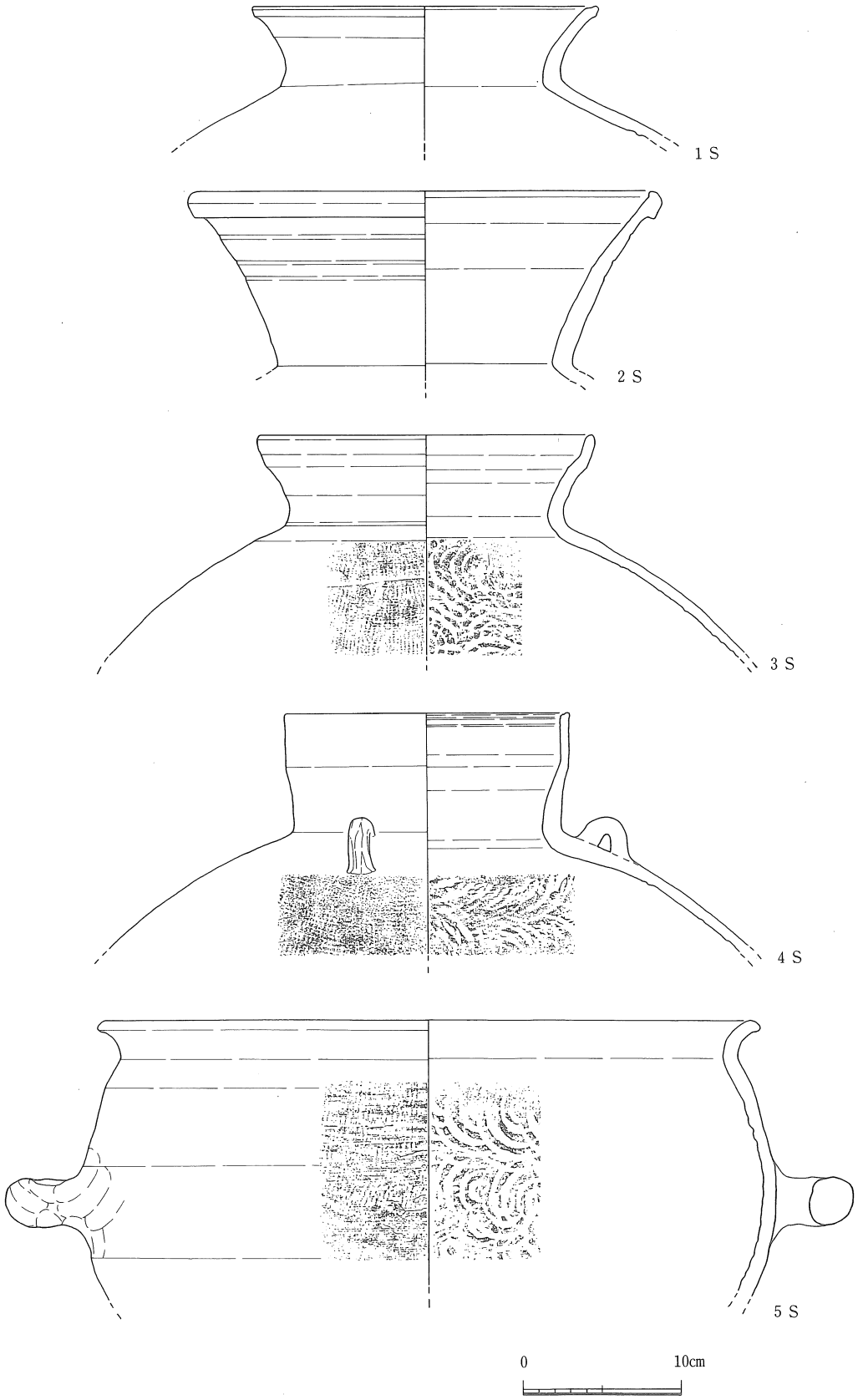
第67図　第１低地帯流路２　出土土器



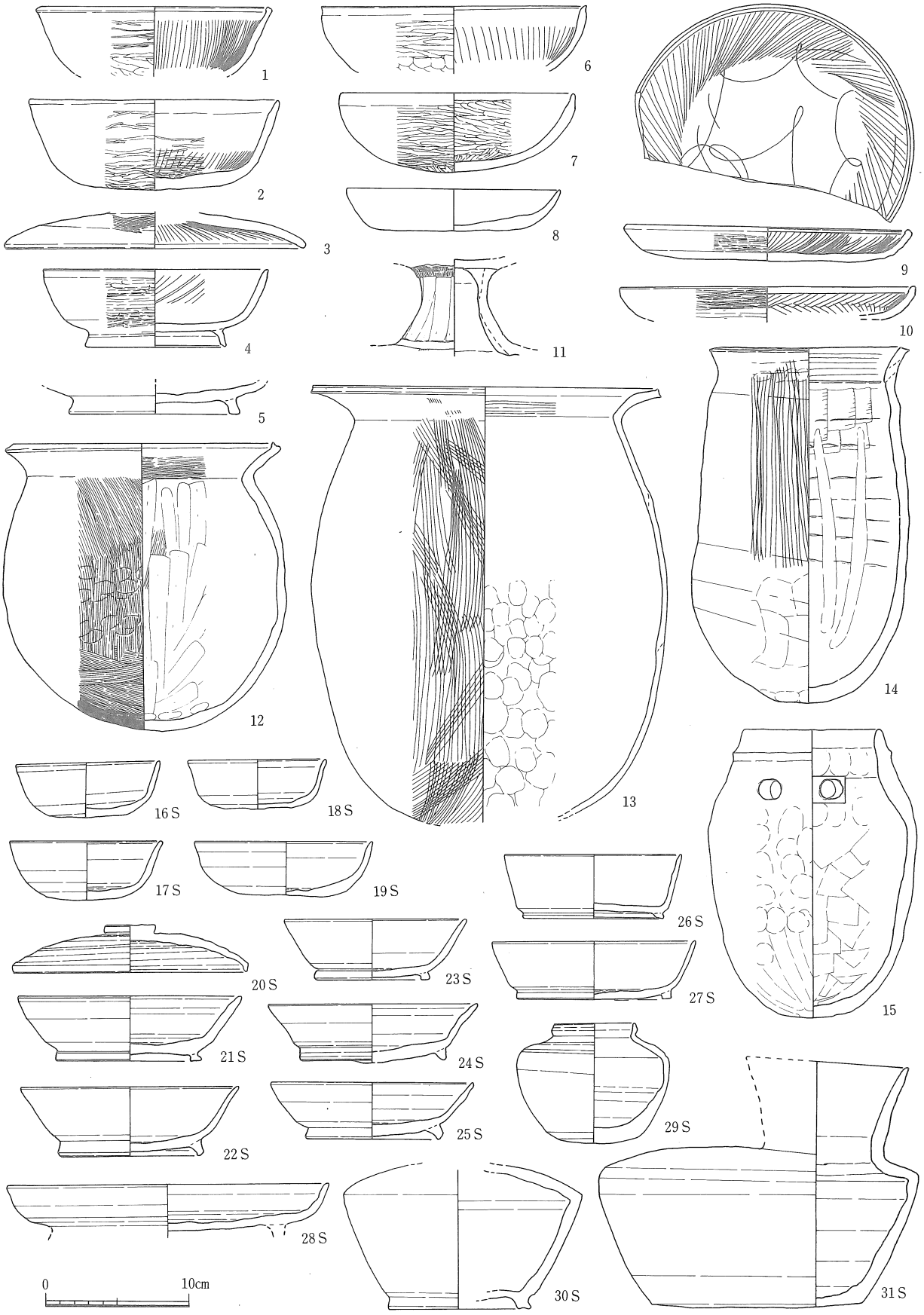
第68図　第1低地帯流路2　出土土器



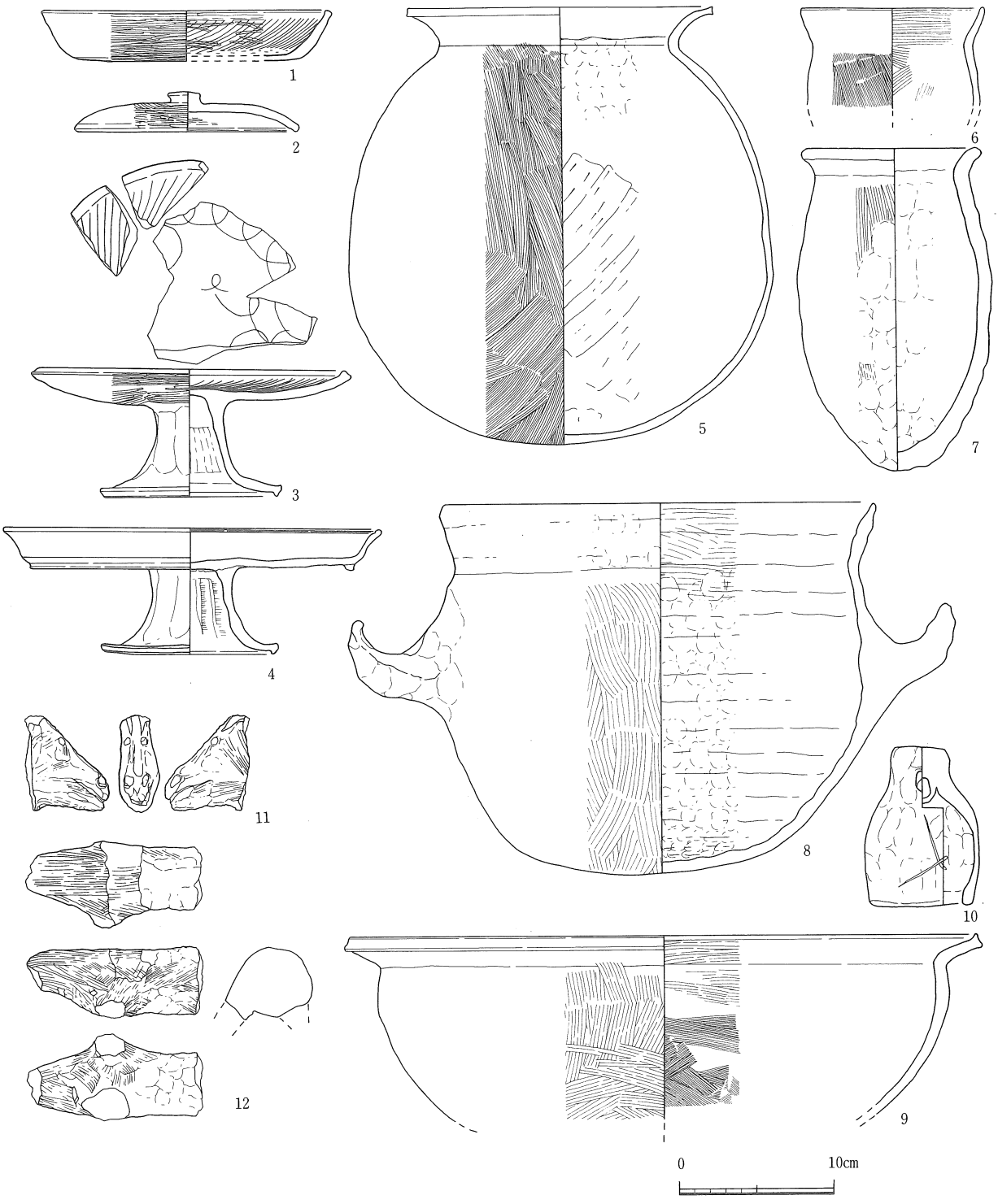
第69図　第１低地帯流路２　出土土器



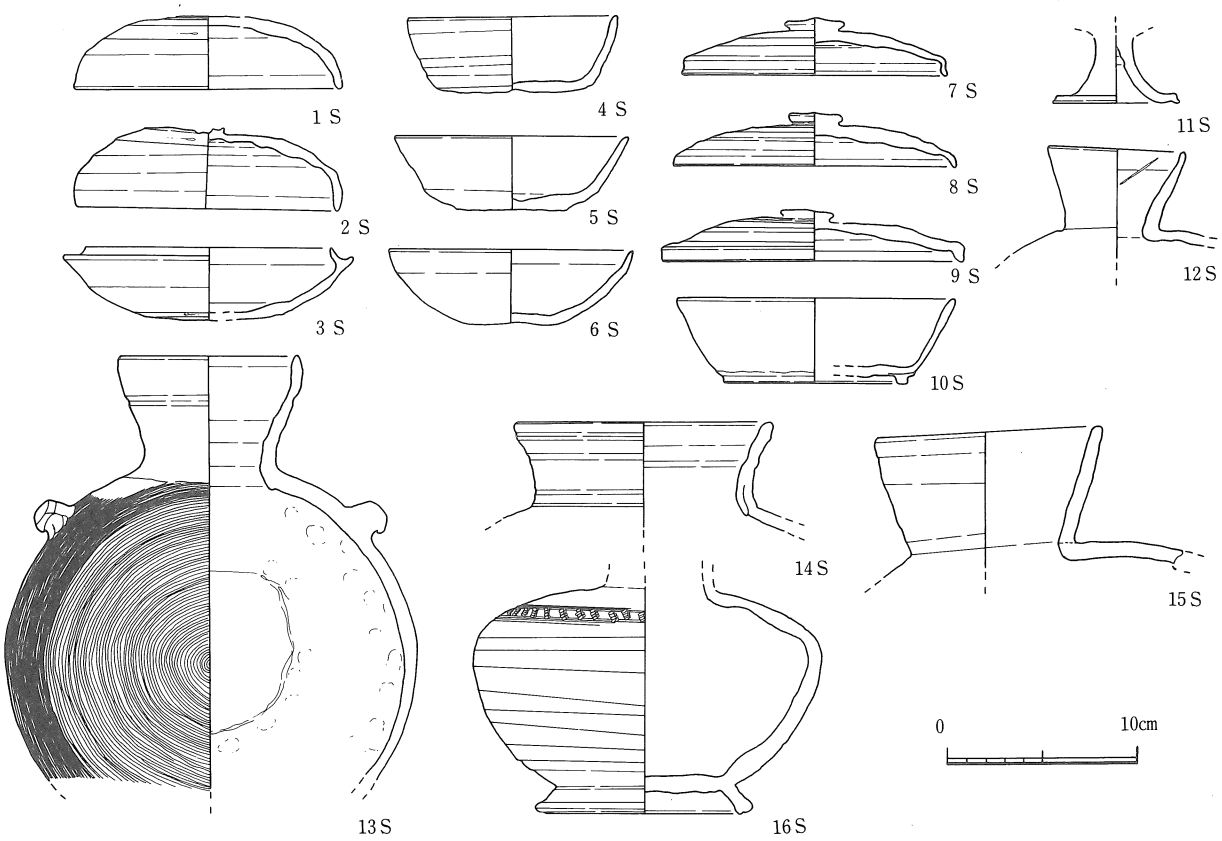
第70図　第１低地帯流路２　出土土器



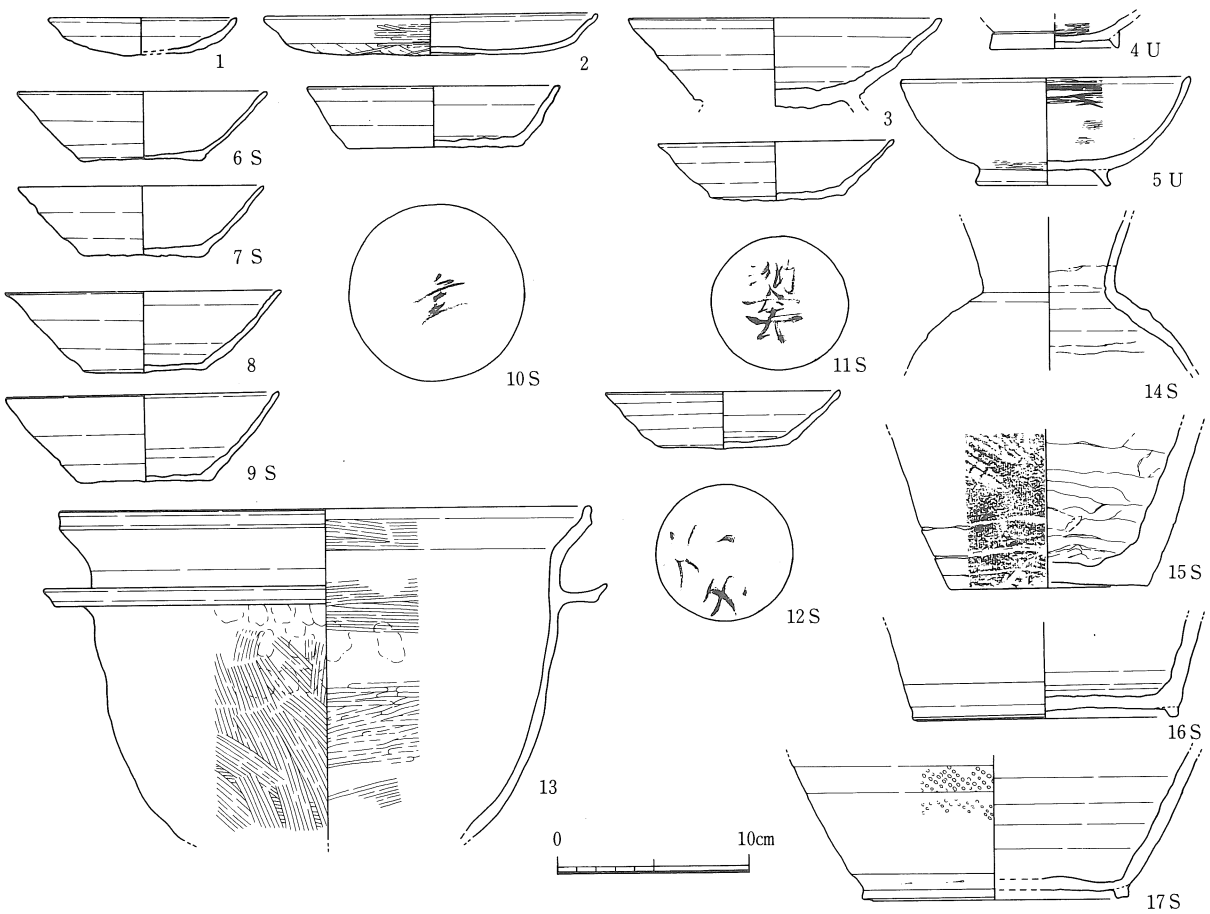
第71図　第1低地帯流路2（国道以南）出土土器

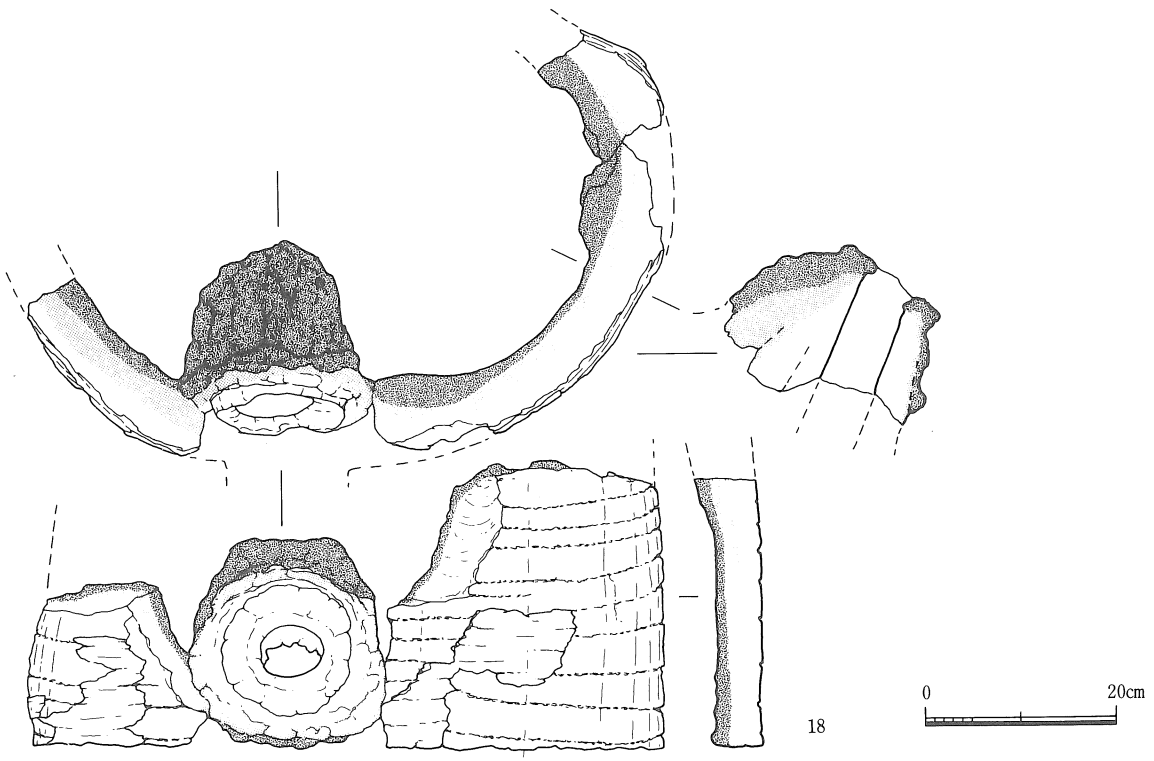


第72図　第１低地帯流路３　出土土器

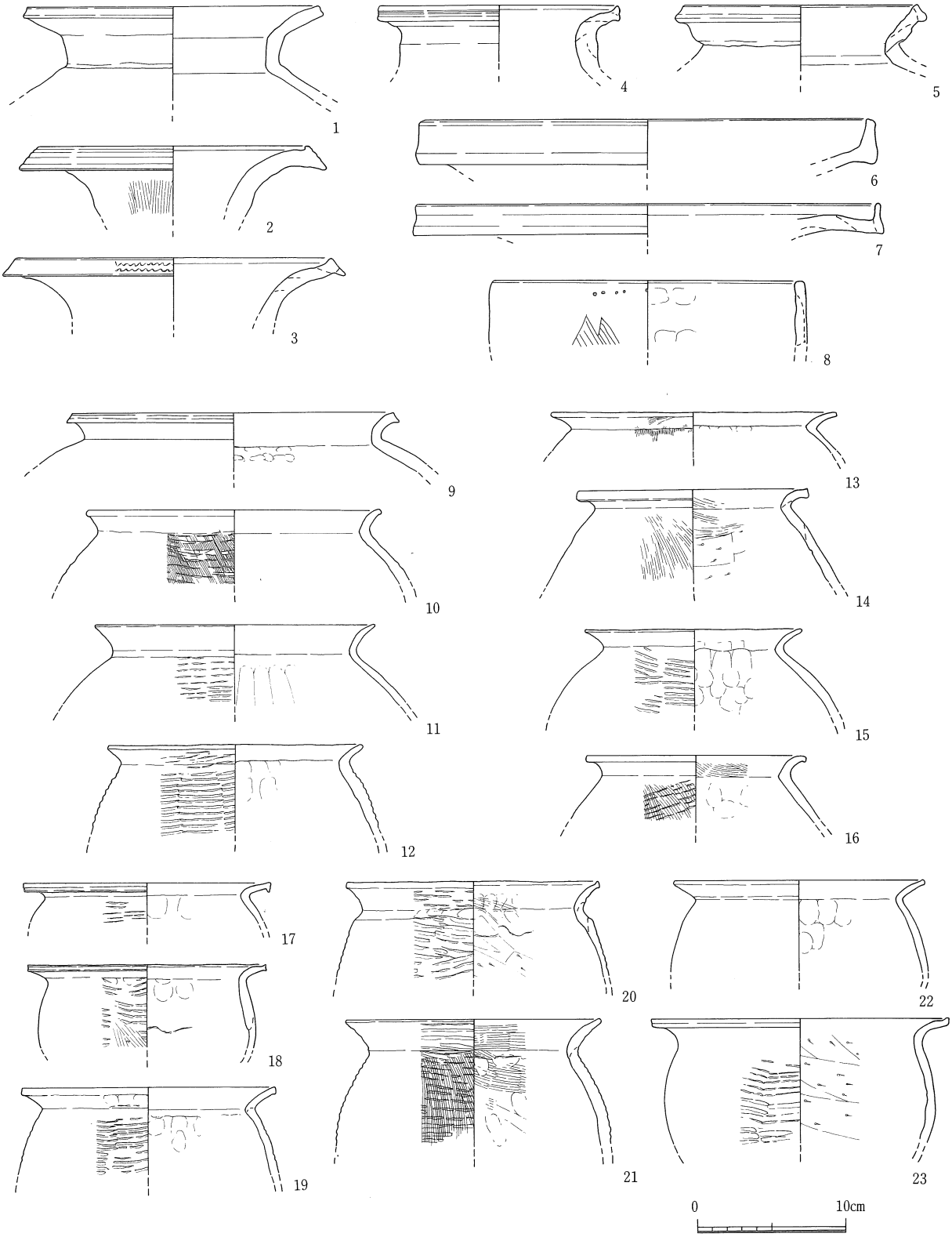


第73図　第１低地帯流路３　出土土器

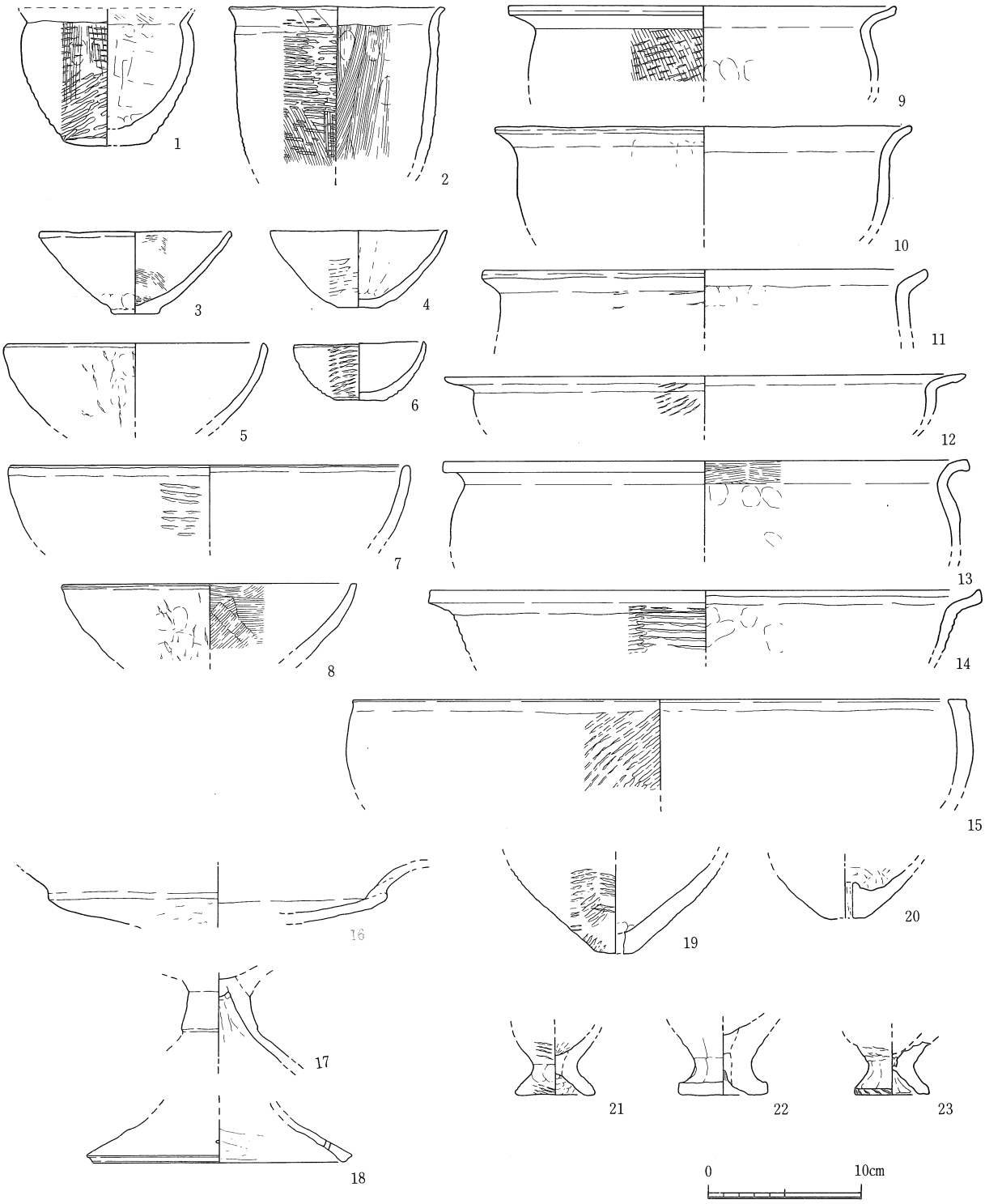




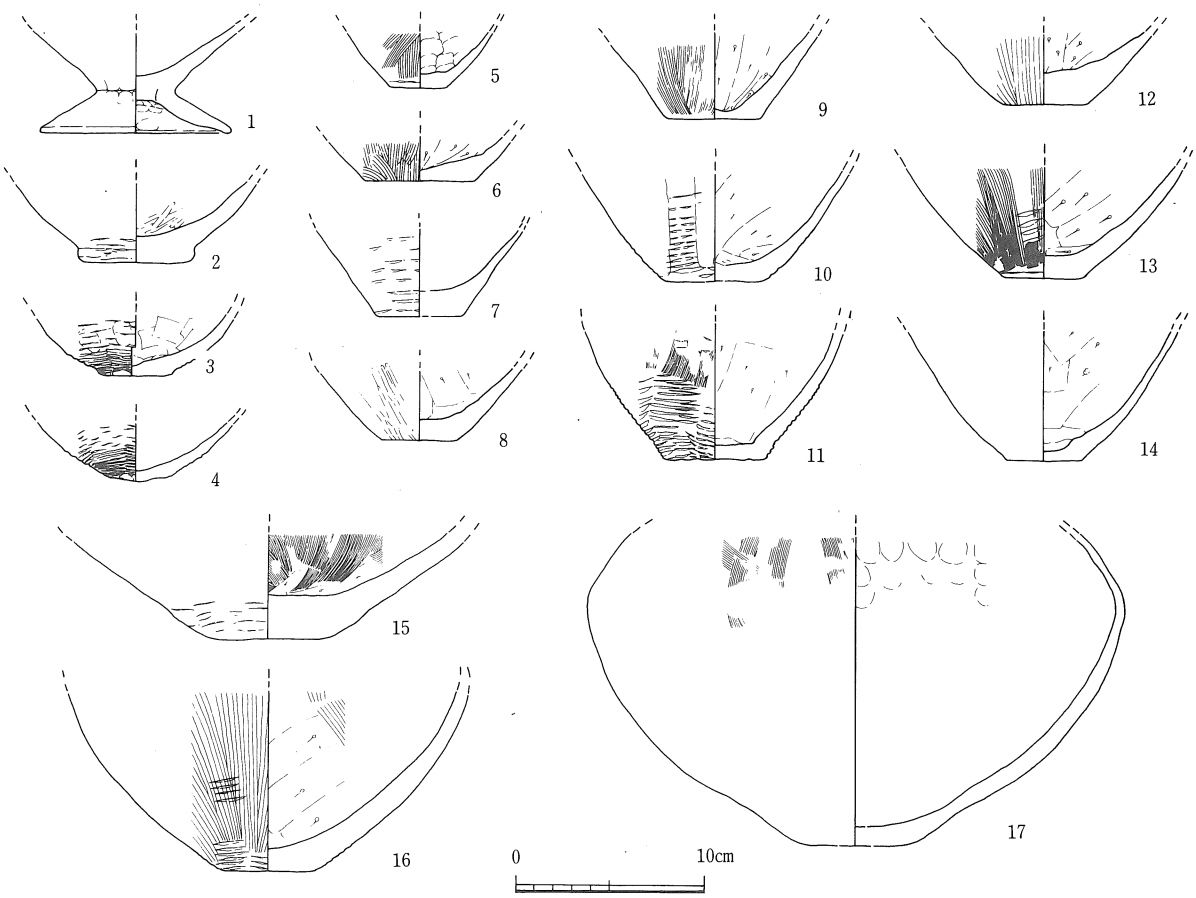
第74図　第２低地帯流路２　出土土器



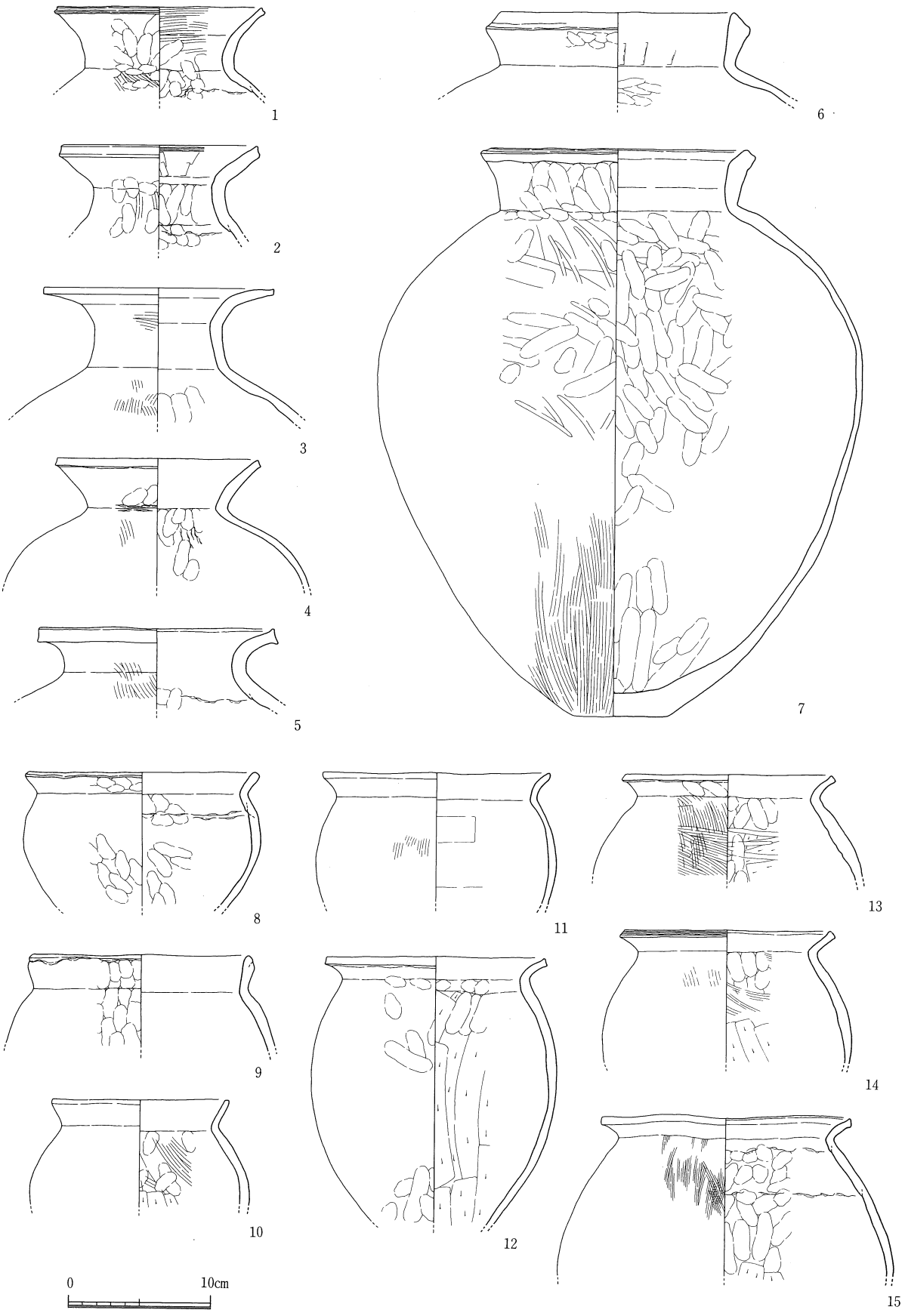
第75図　弥生土器溜り 2　出土土器



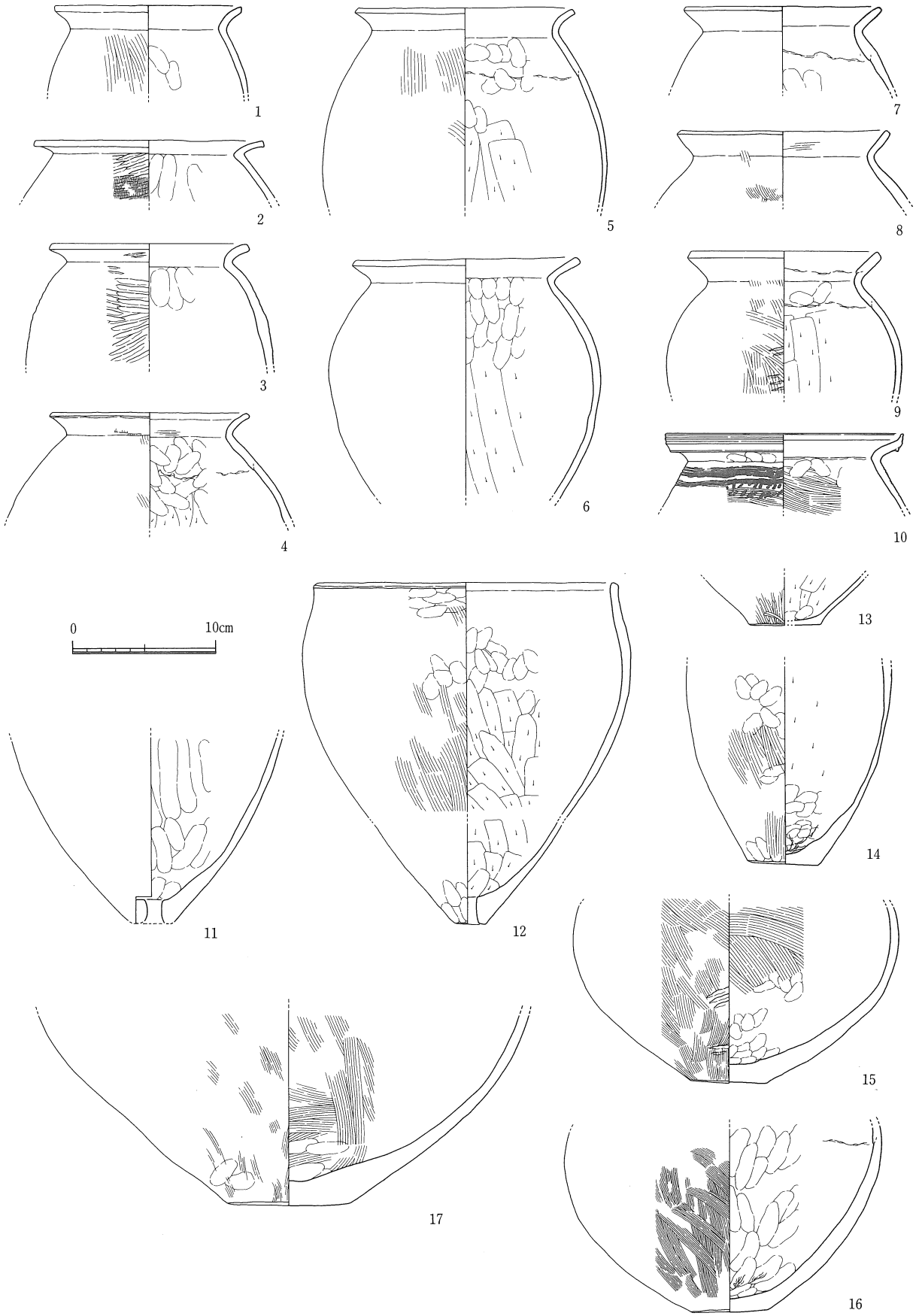
第76図　弥生土器溜り２　出土土器



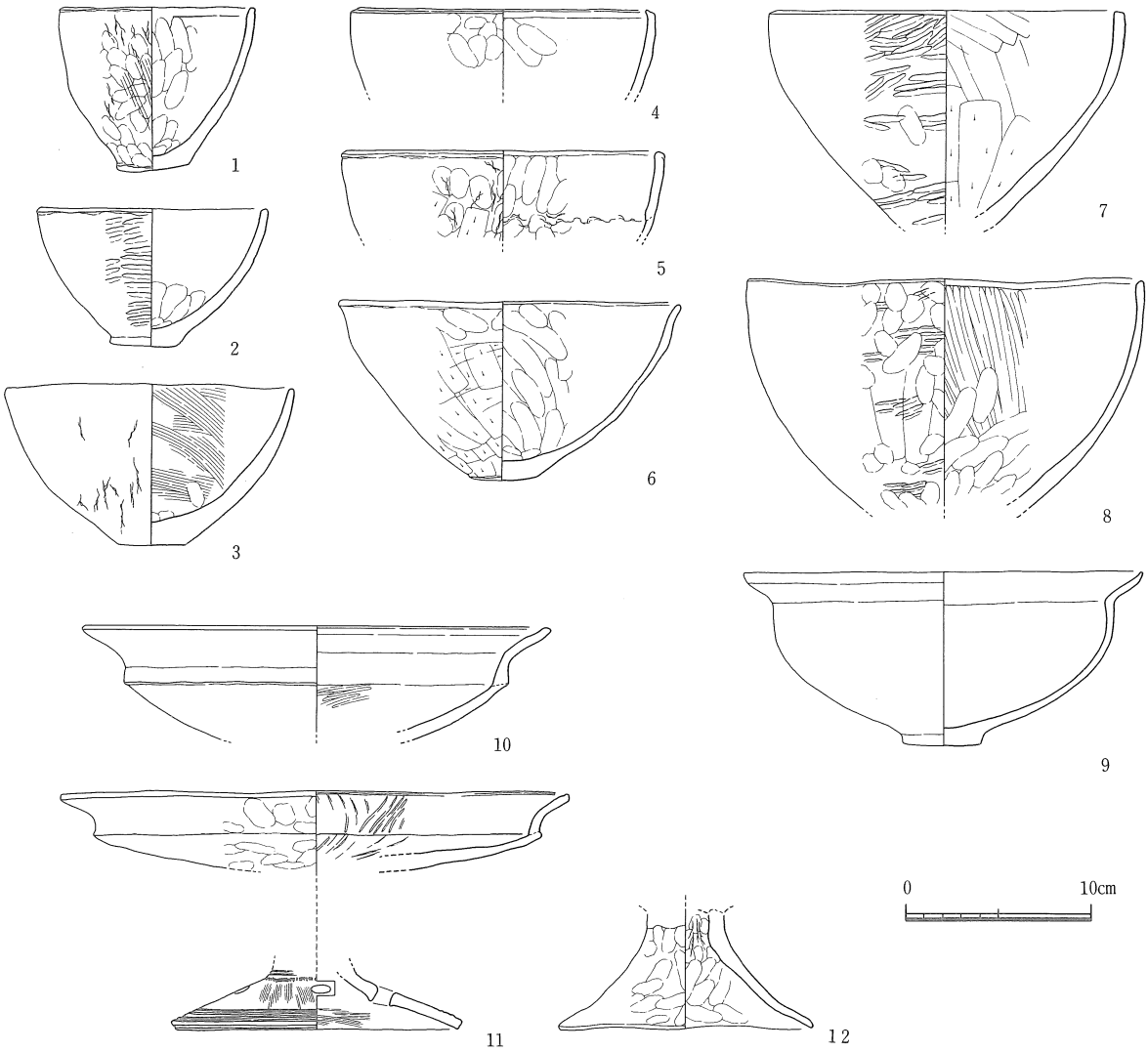
第77図　弥生土器溜り 2　出土土器



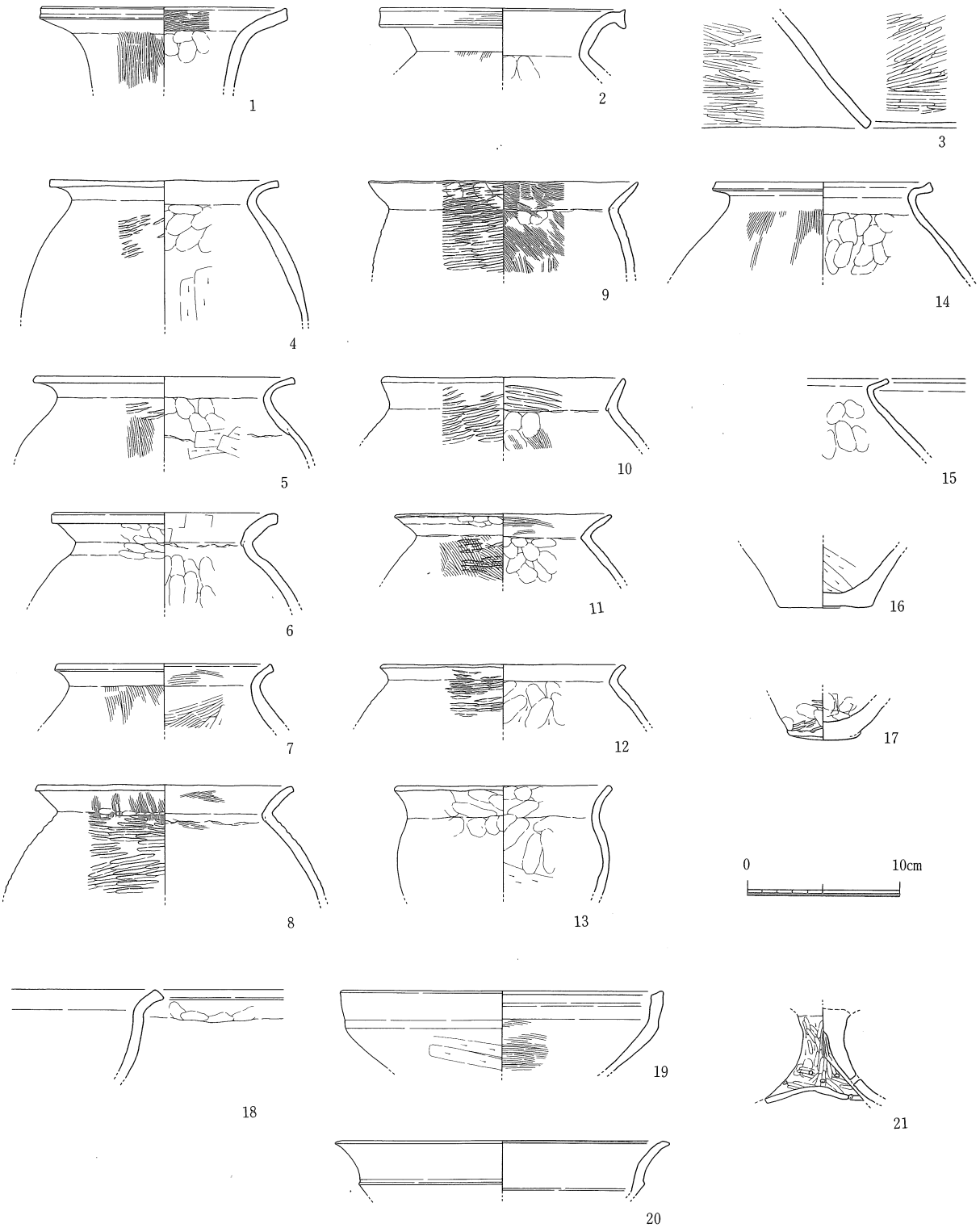
第78図　弥生土器溜り 4　出土土器



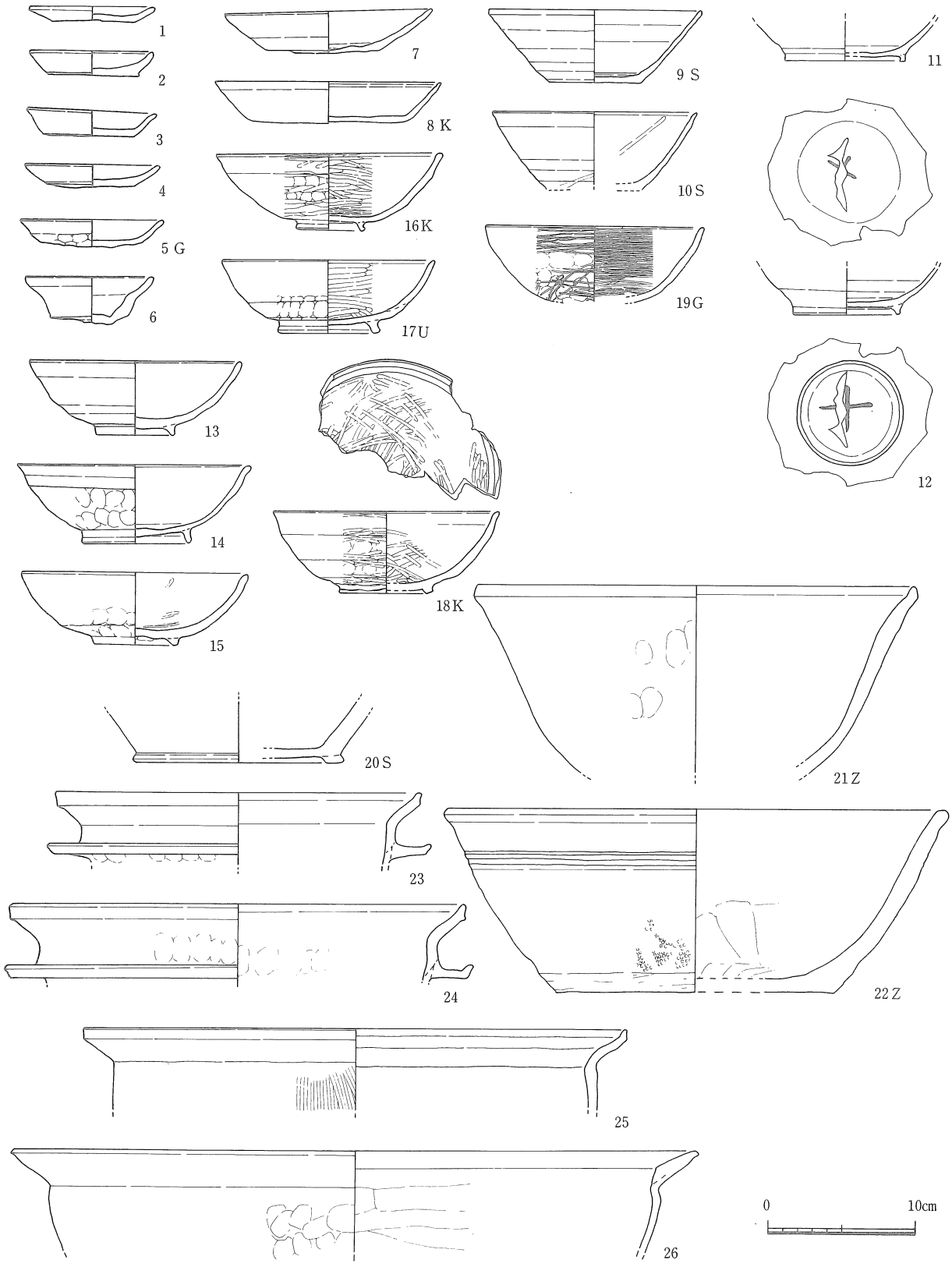
第79図　弥生土器溜り4　出土土器



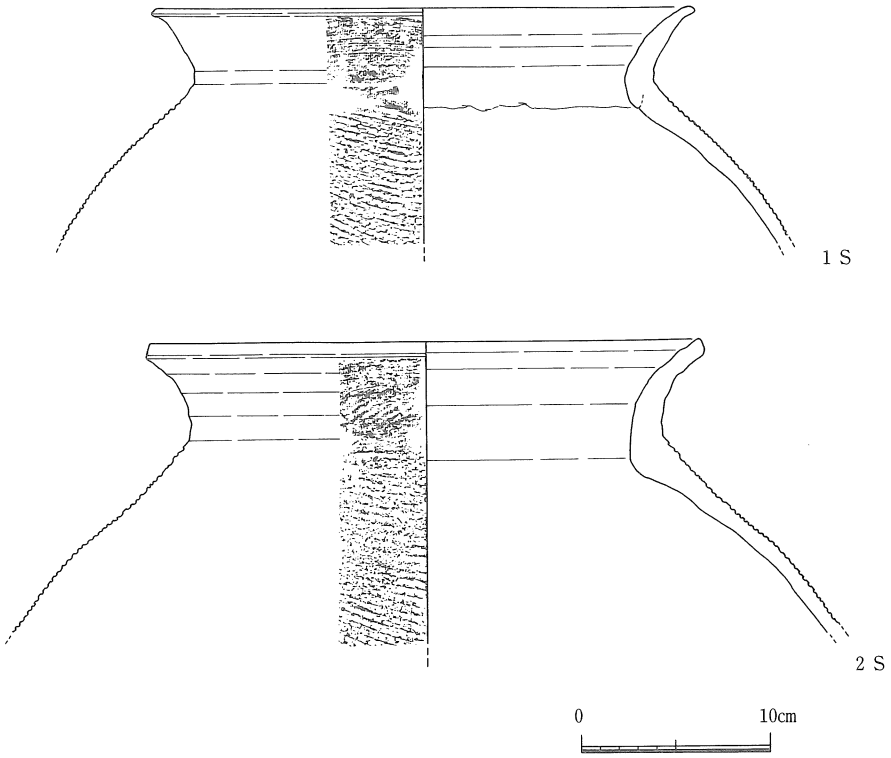
第80図　弥生土器溜り4　出土土器



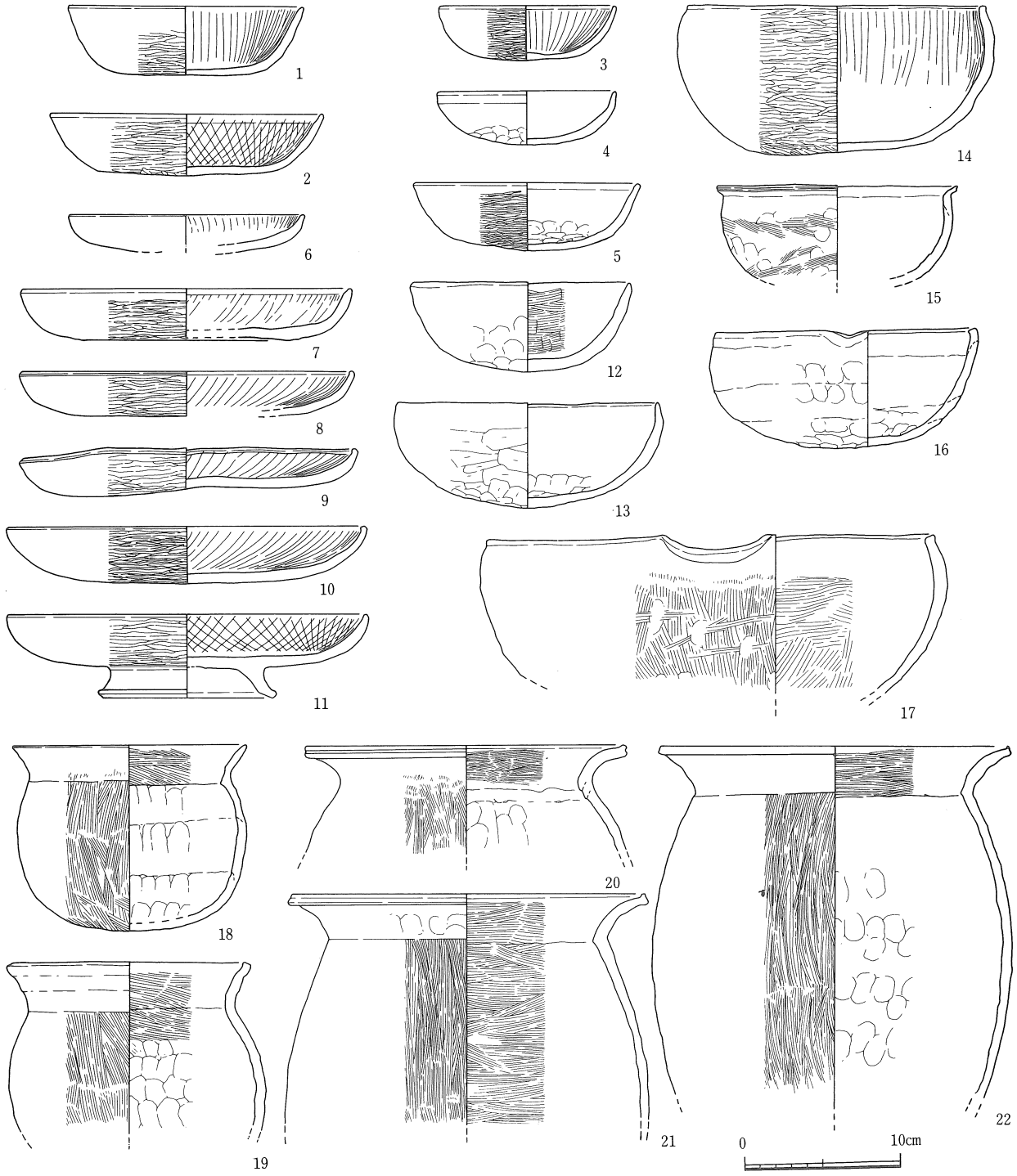
第81図　第３低地帯流路１　出土土器



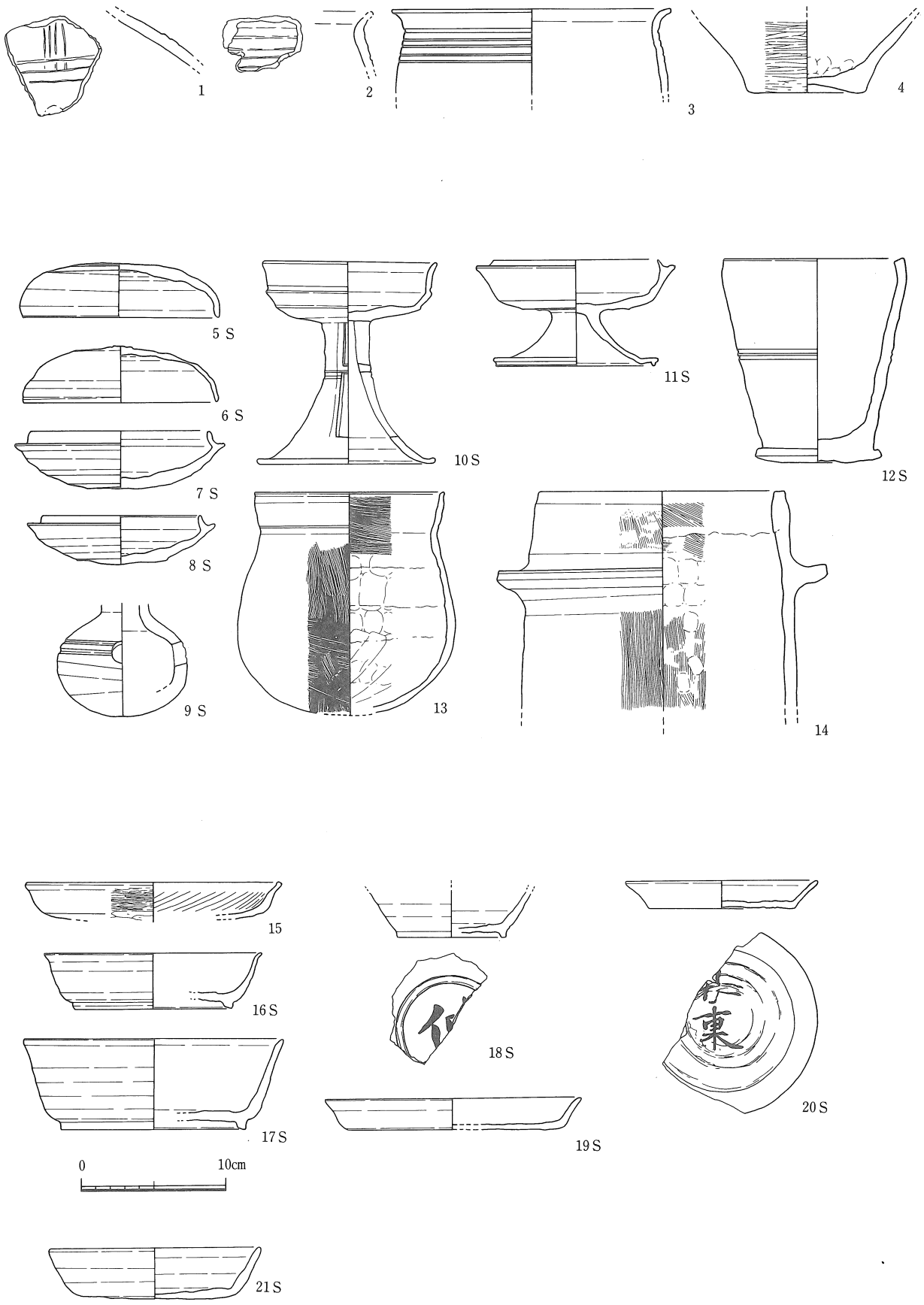
第82図　第３低地帯流路３　出土土器



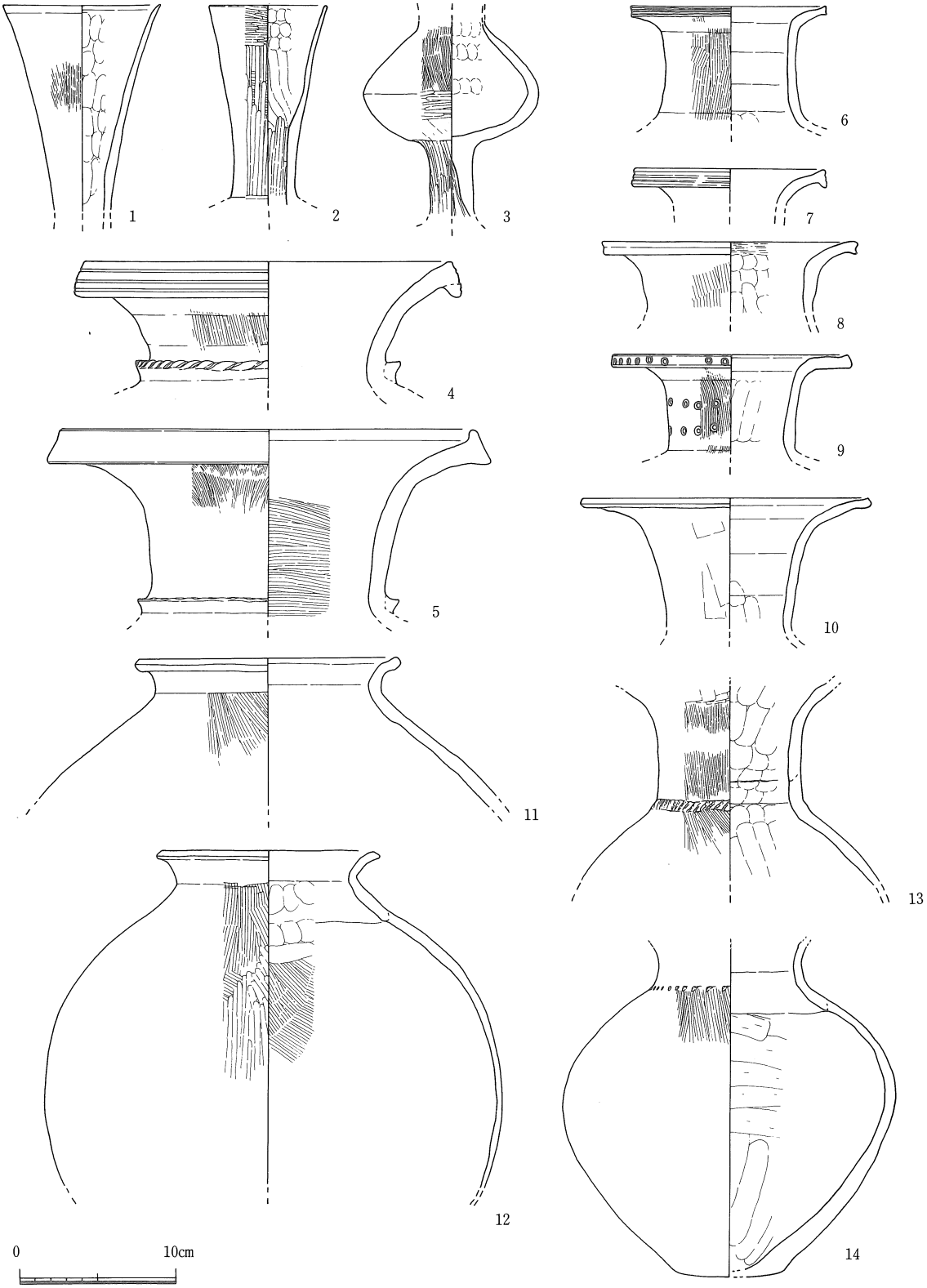
第83図　第３低地帯流路３　出土土器



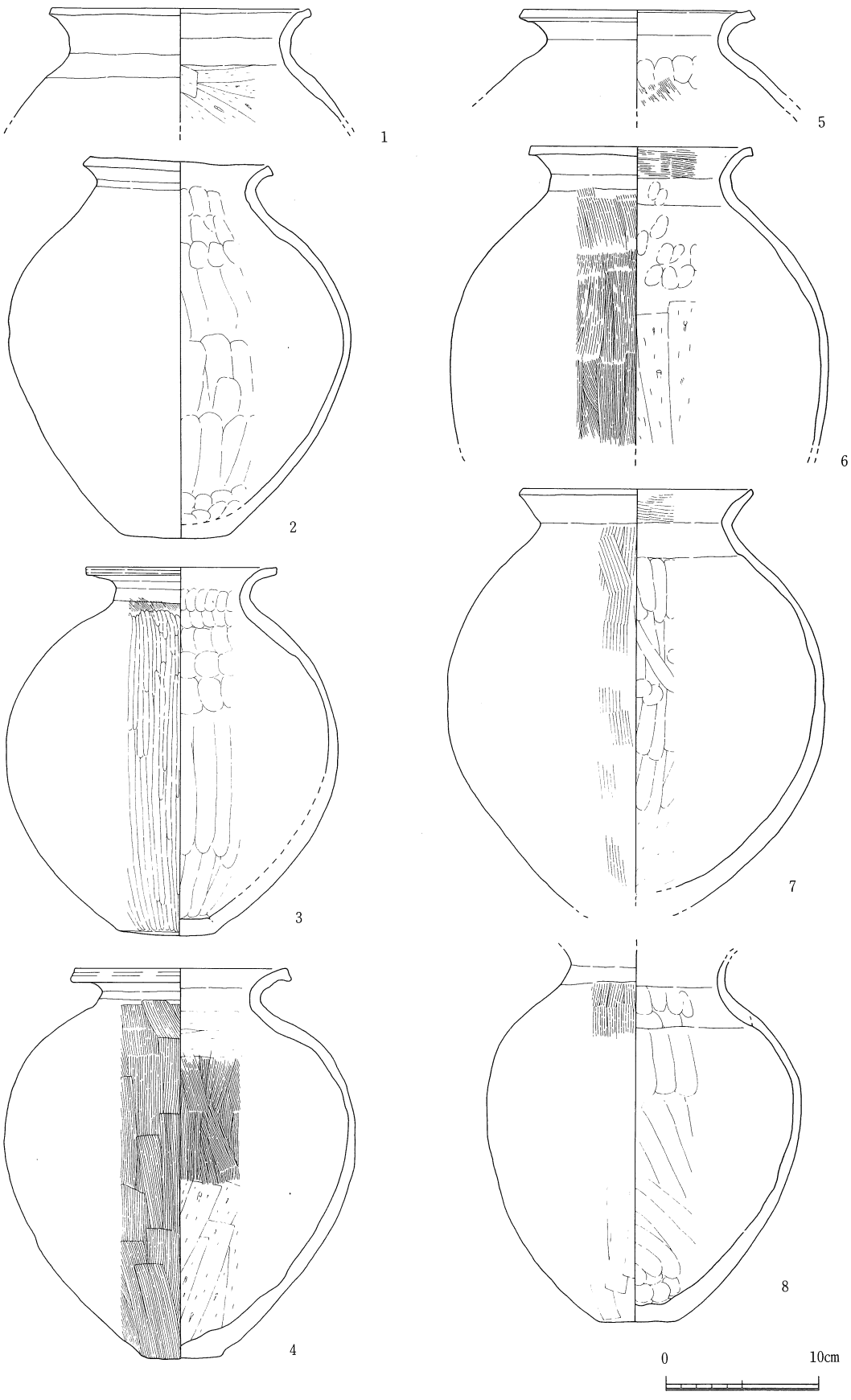
第84図　木群4　共伴土器



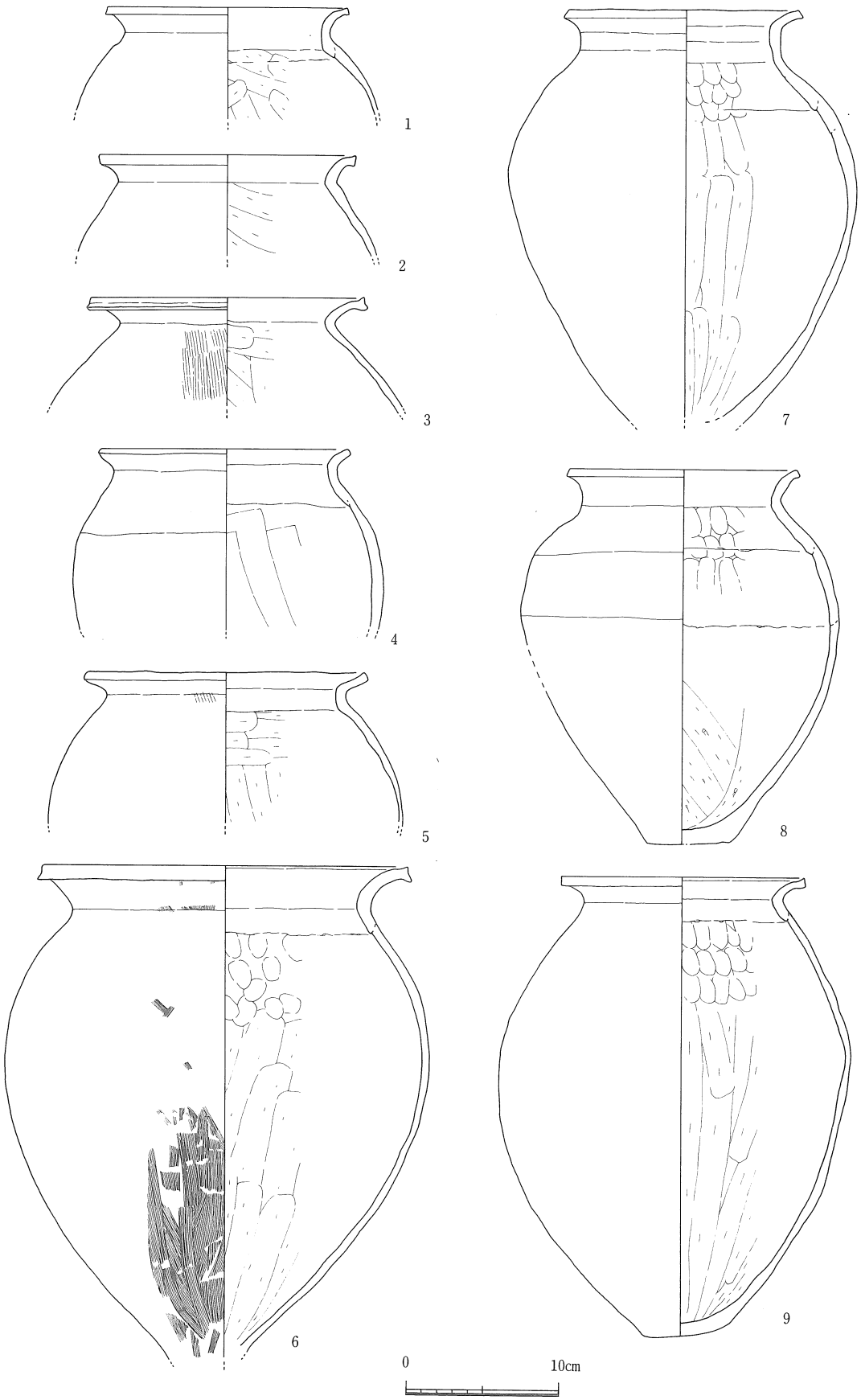
第85図　第1低地帯流路6・5北半部下層・同上層・第3低地帯流路2　出土土器



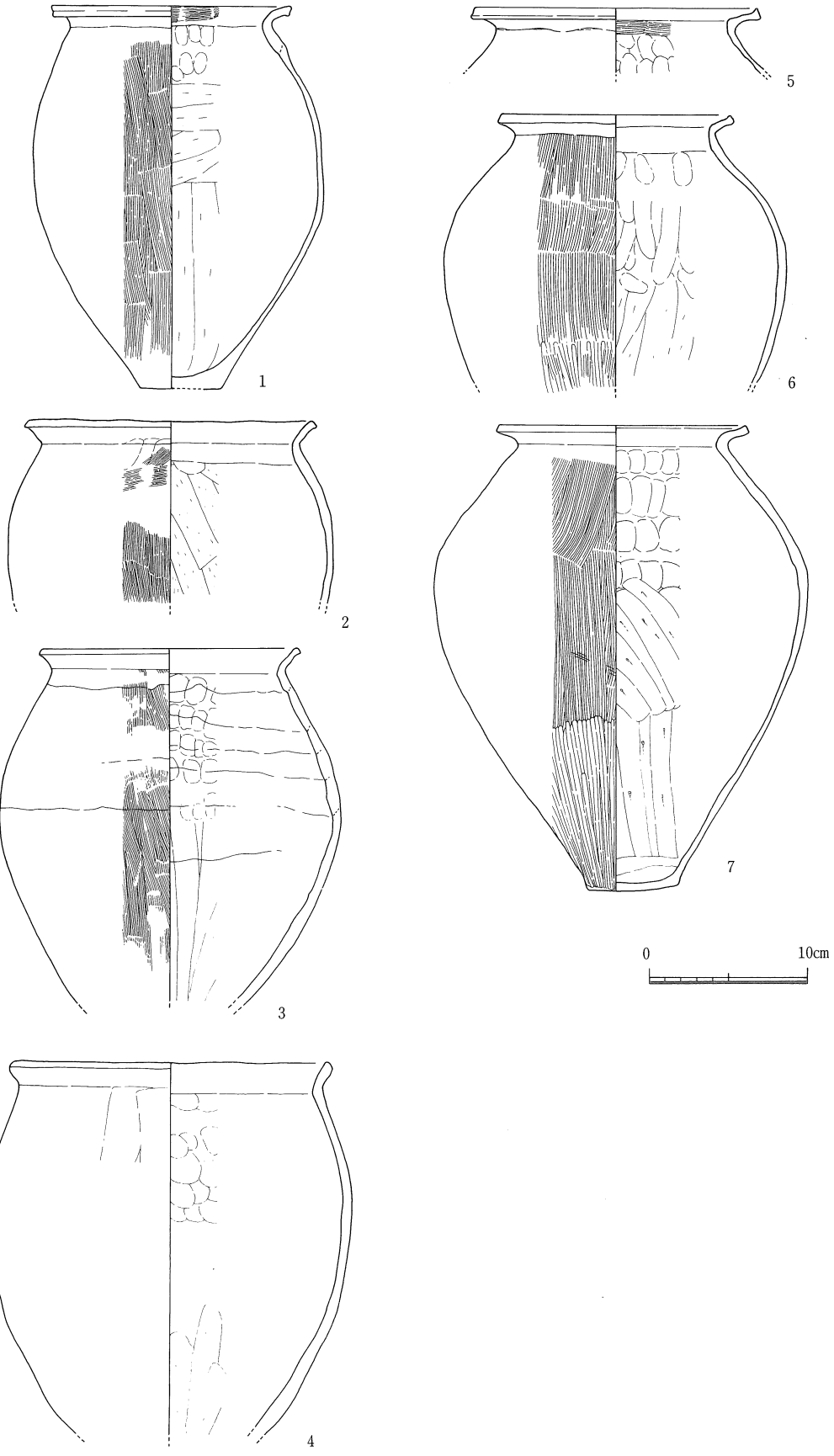
第86図　弥生土器溜り5　出土土器



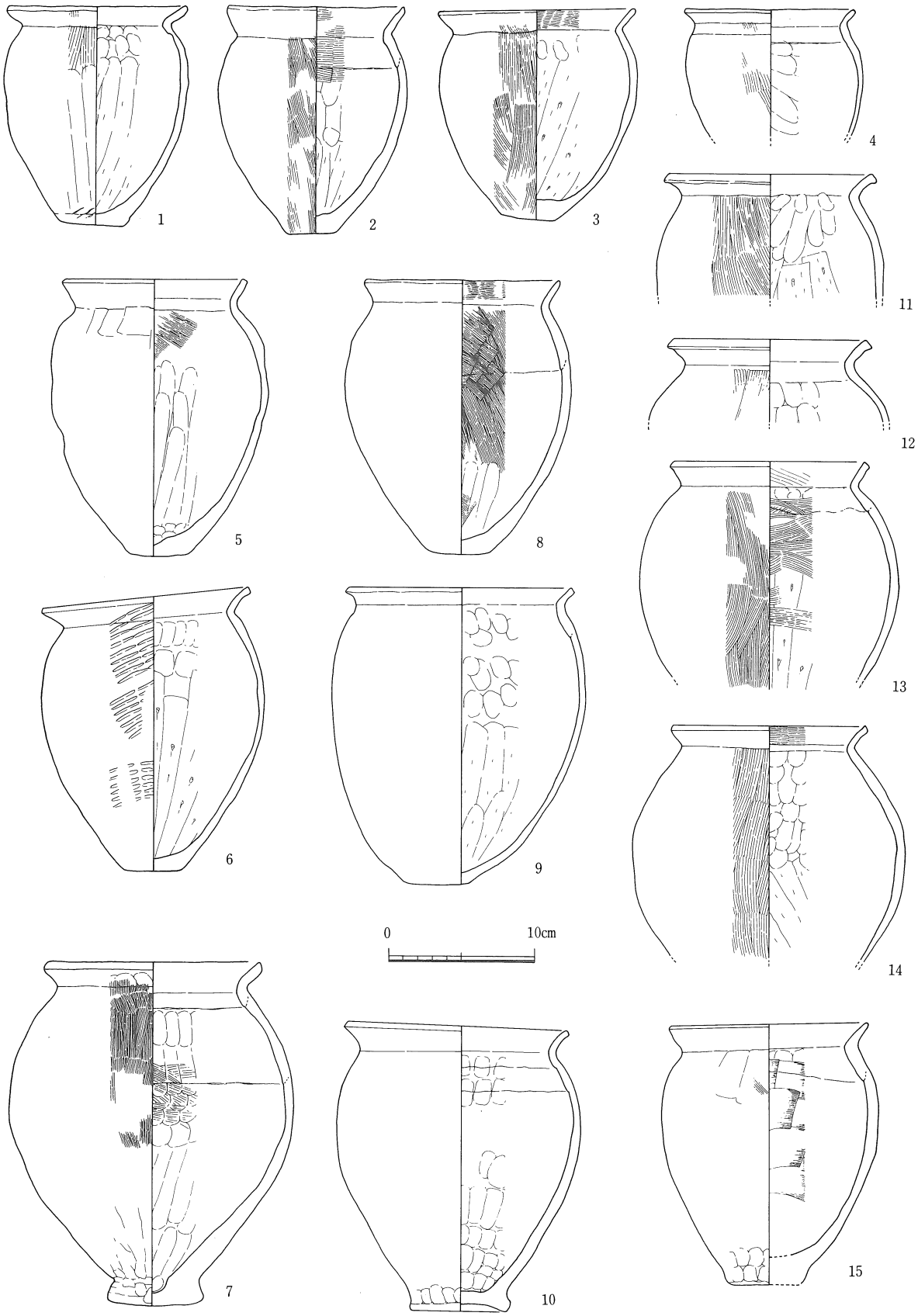
第87図　弥生土器溜り5　出土土器



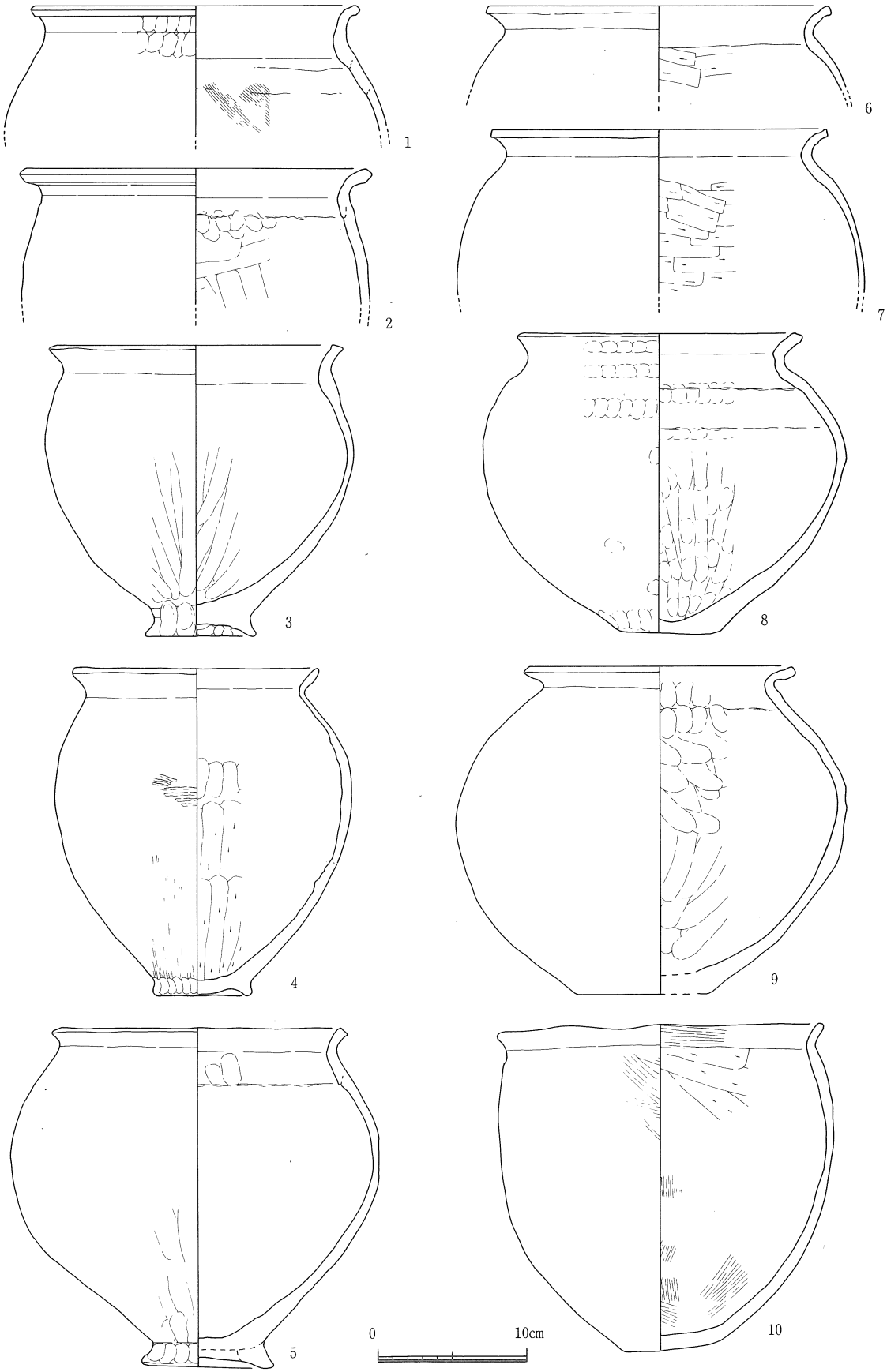
第88図　弥生土器溜り5　出土土器



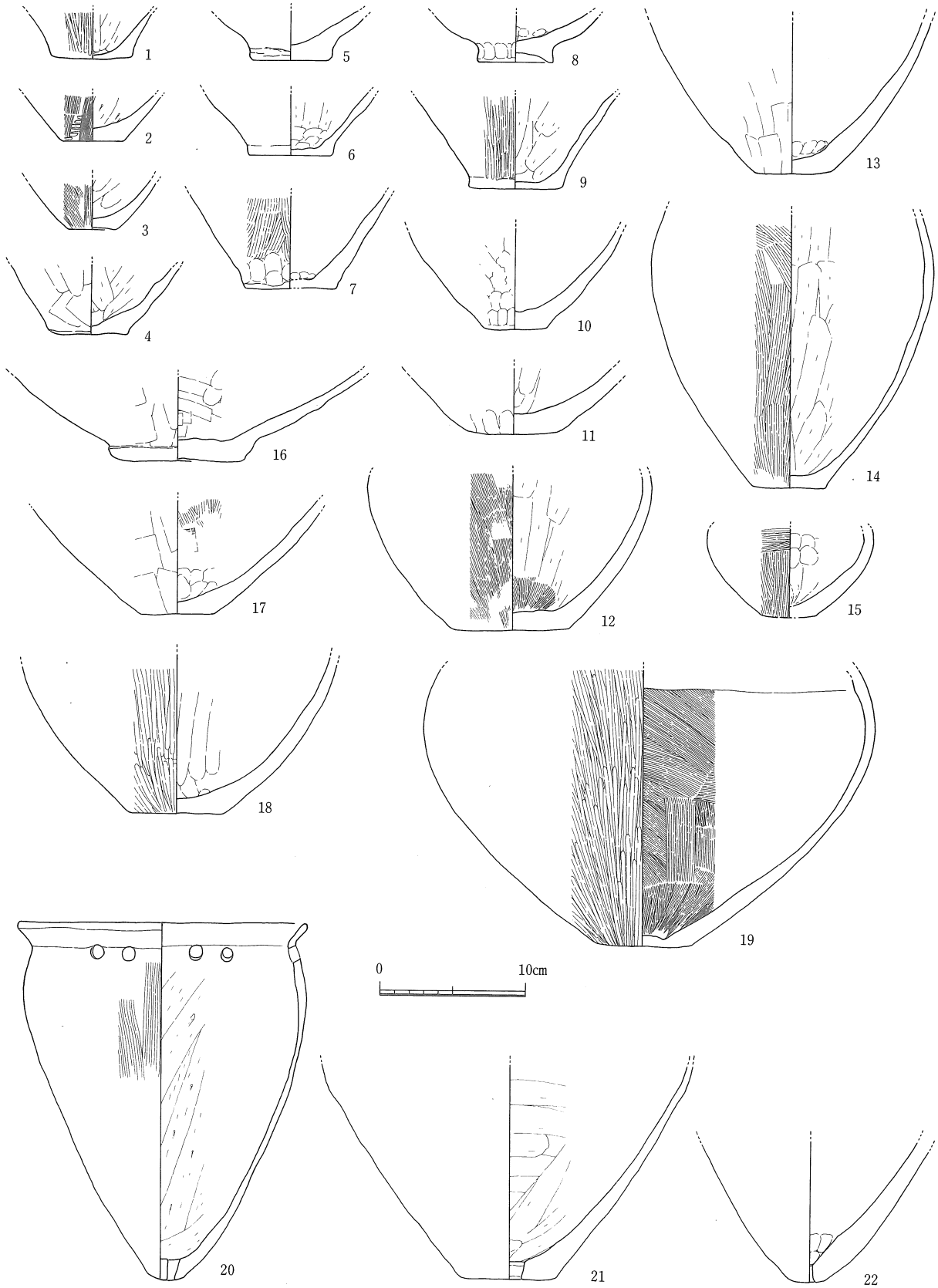
第89図　弥生土器溜り5　出土土器



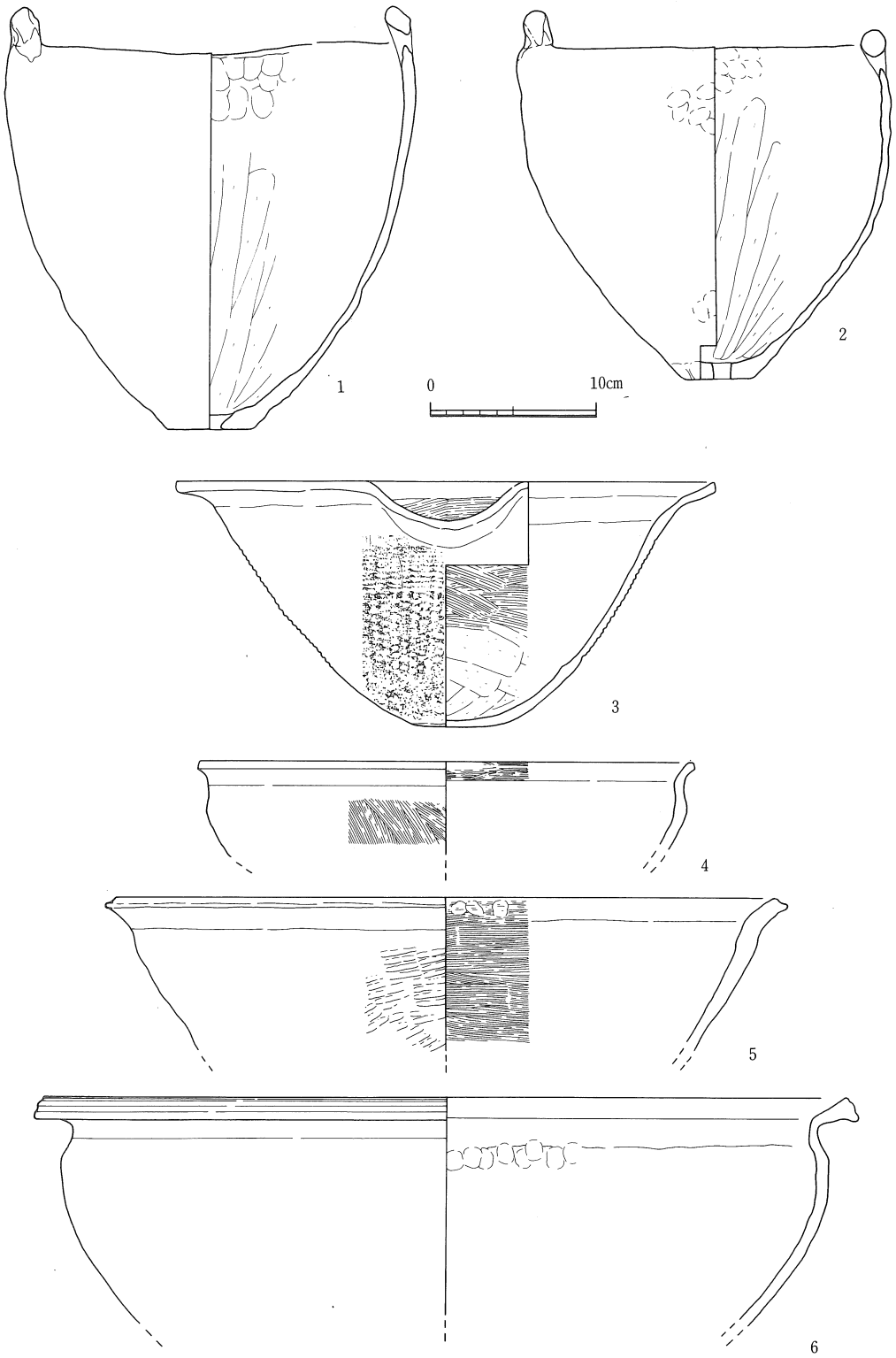
第90図　弥生土器溜り 5　出土土器



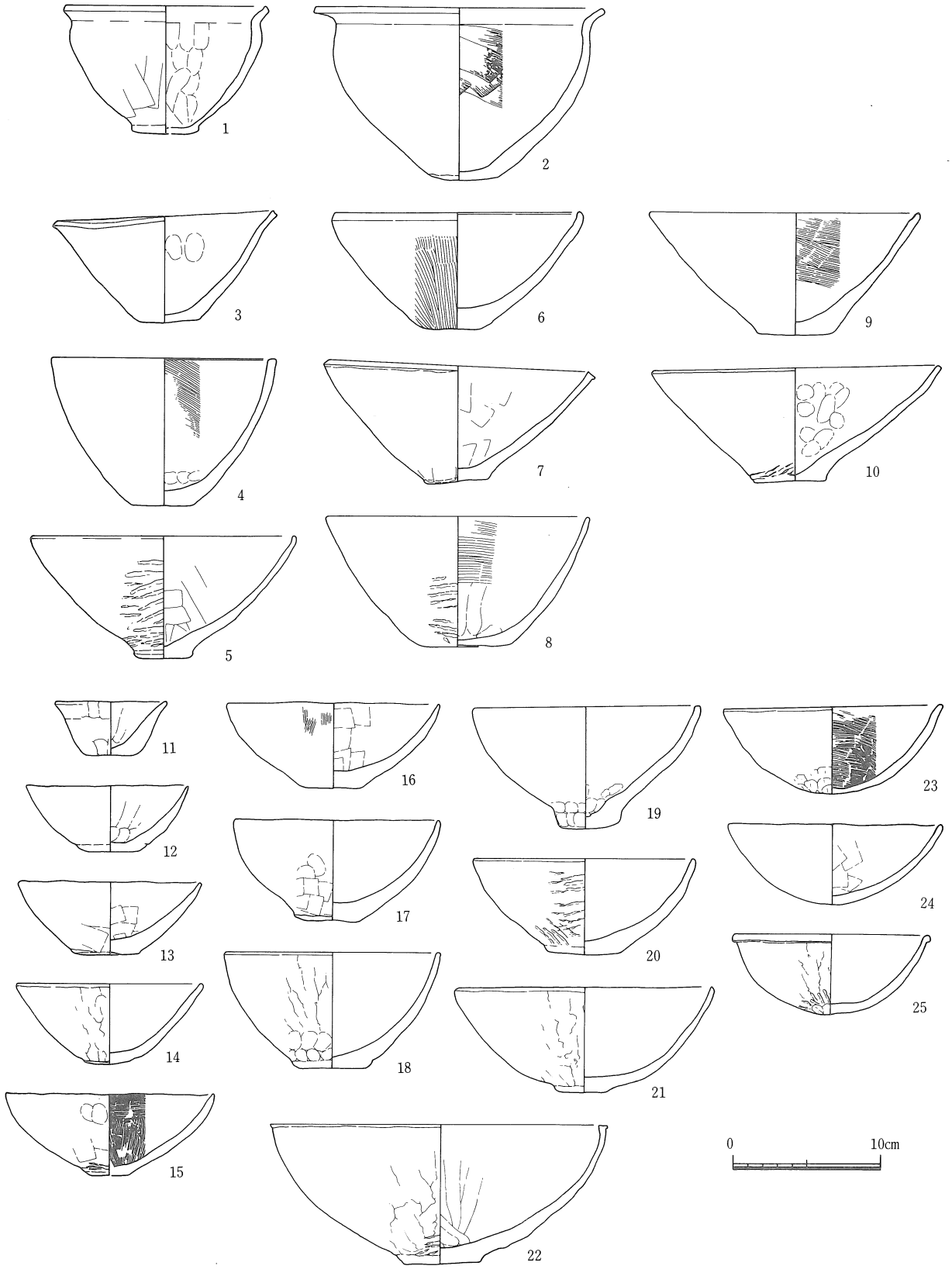
第91図　弥生土器溜り5　出土土器



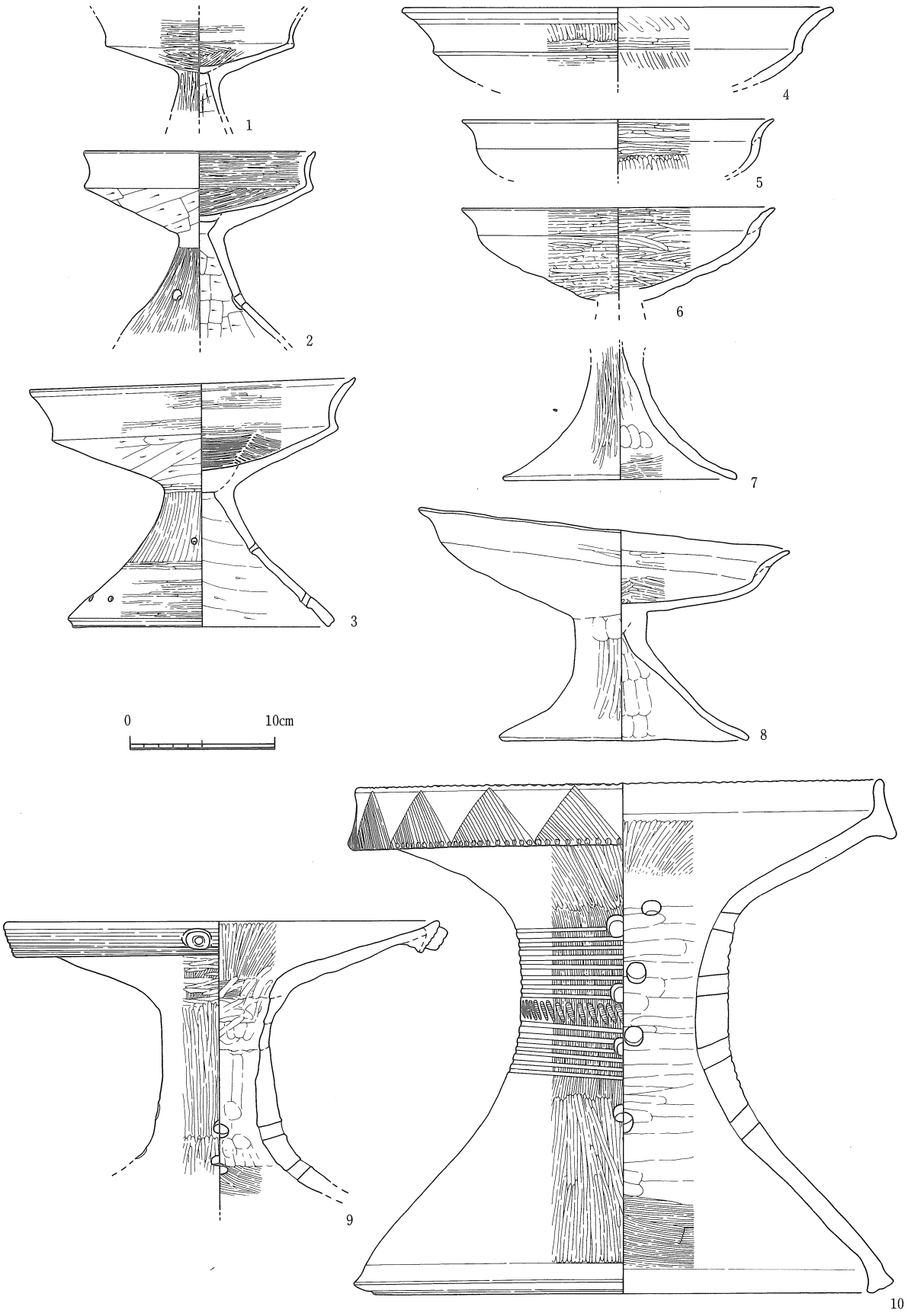
第92図　弥生土器溜り5　出土土器



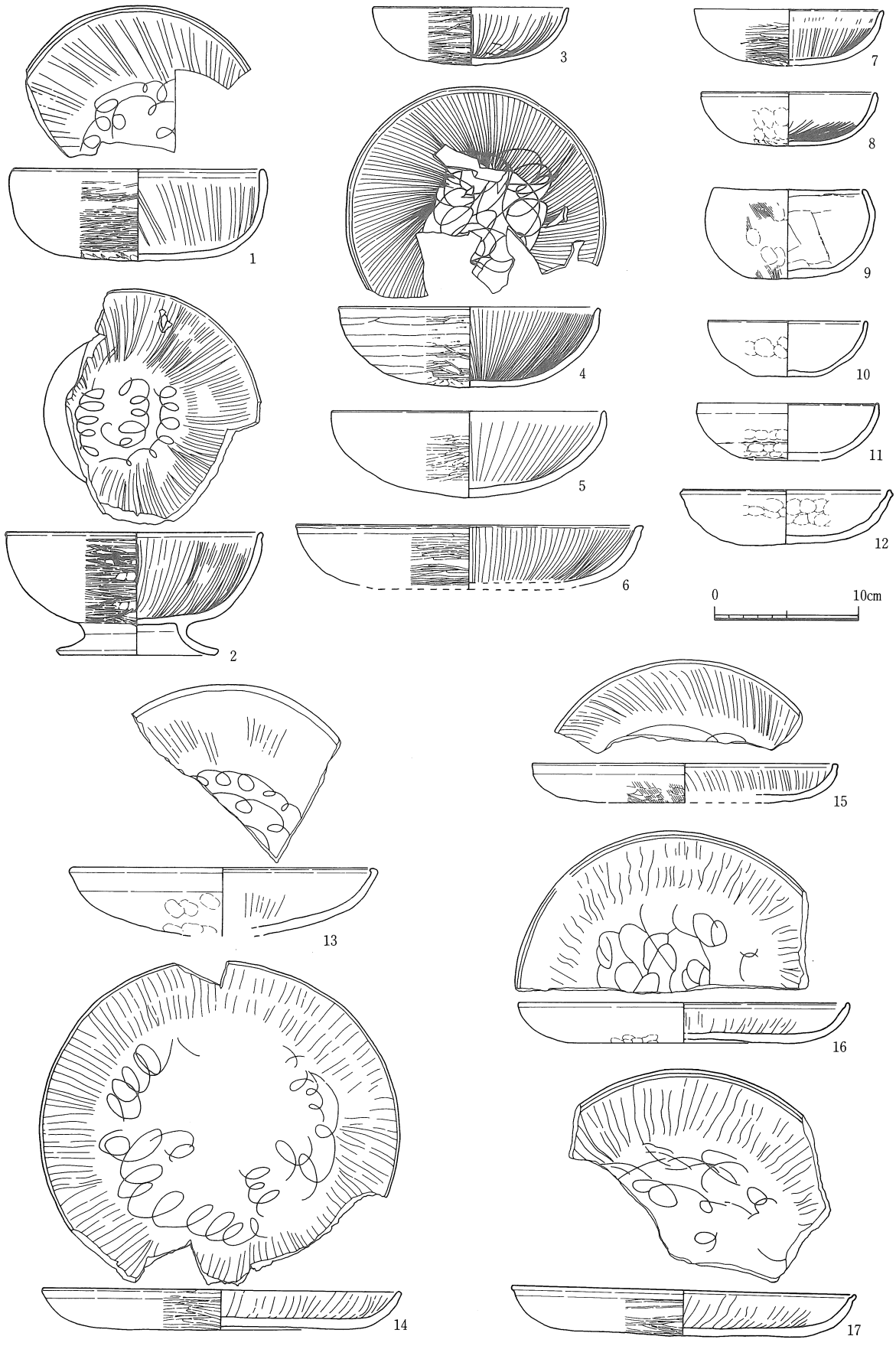
第93図　弥生土器溜り5　出土土器



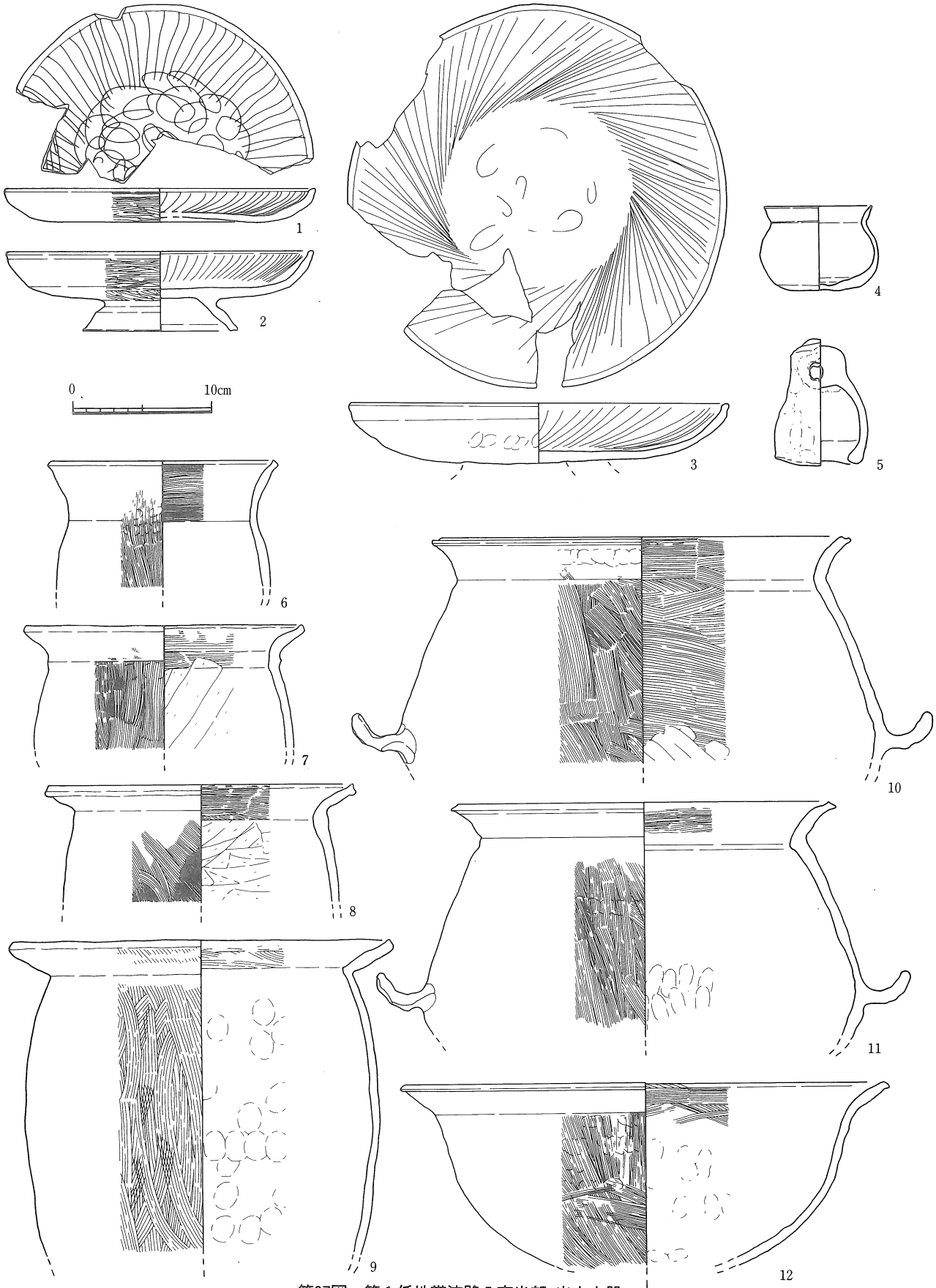
第94図　弥生土器溜り5　出土土器



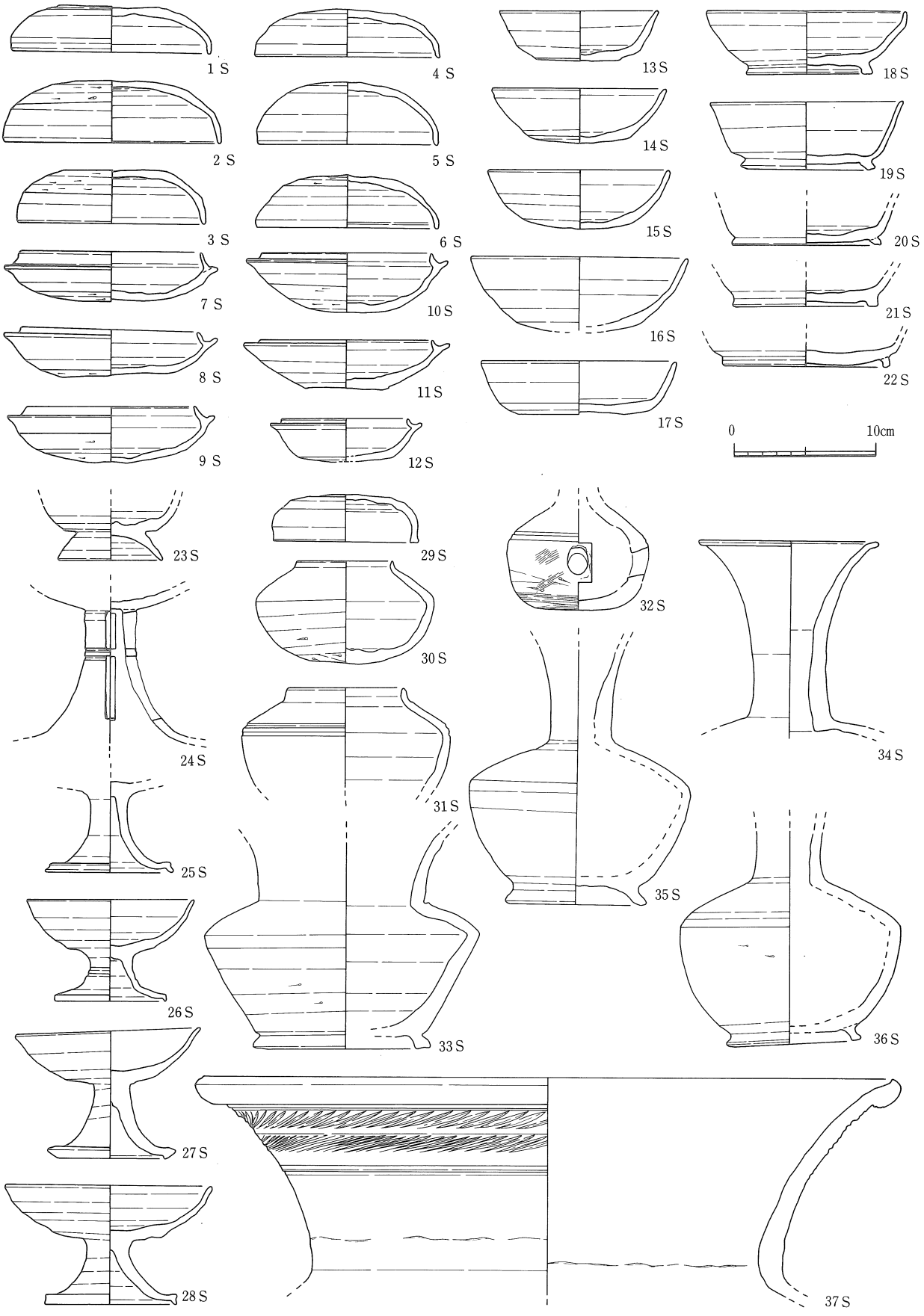
第95図　弥生土器溜り5 出土土器



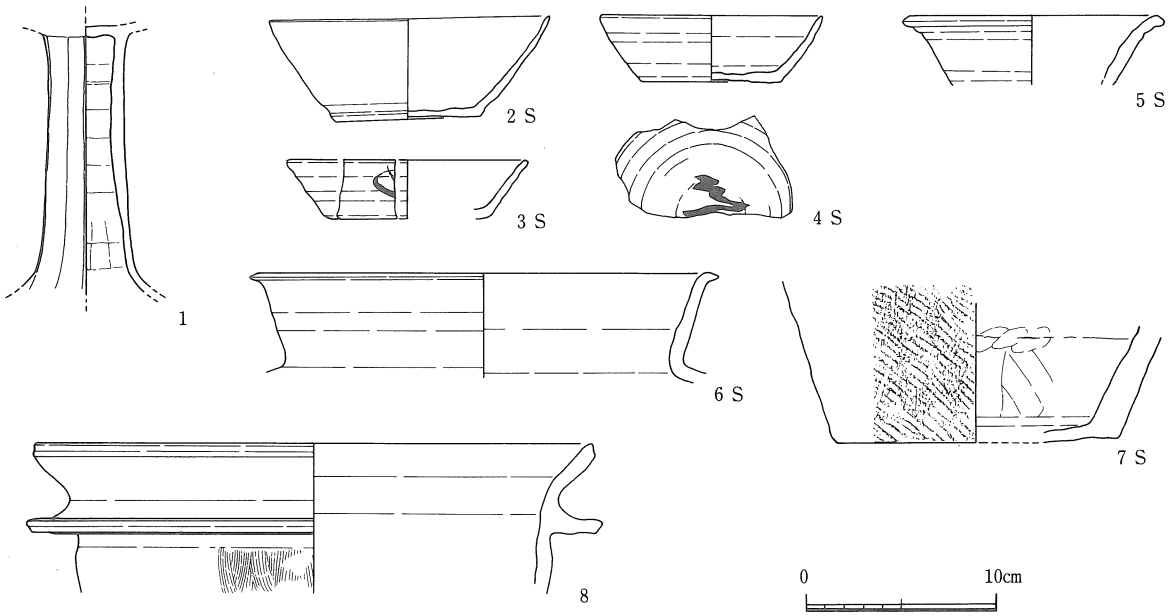
第96図　第1低地帯流路5南半部出土土器



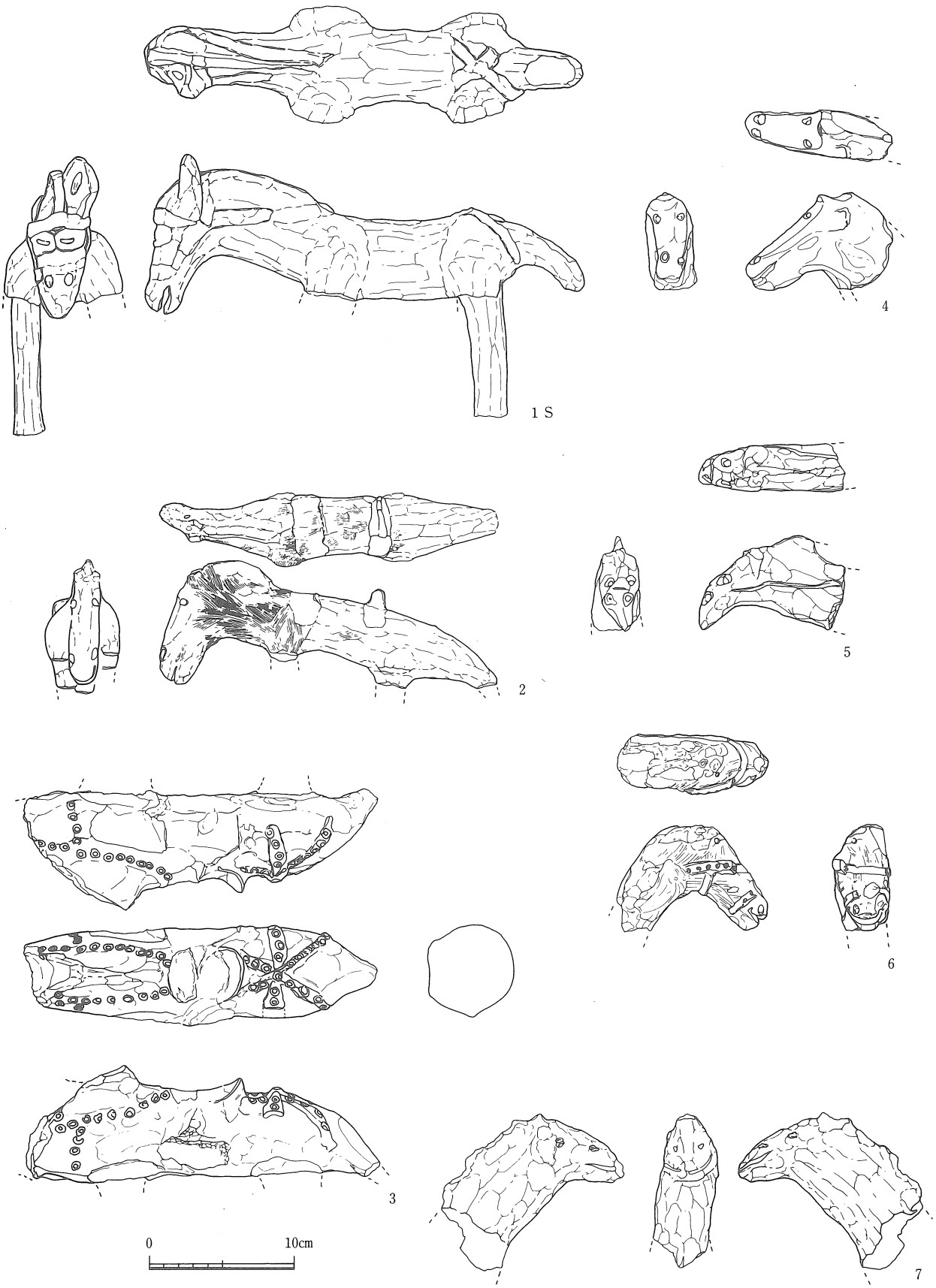
第97図　第1低地帯流路5南半部 出土土器



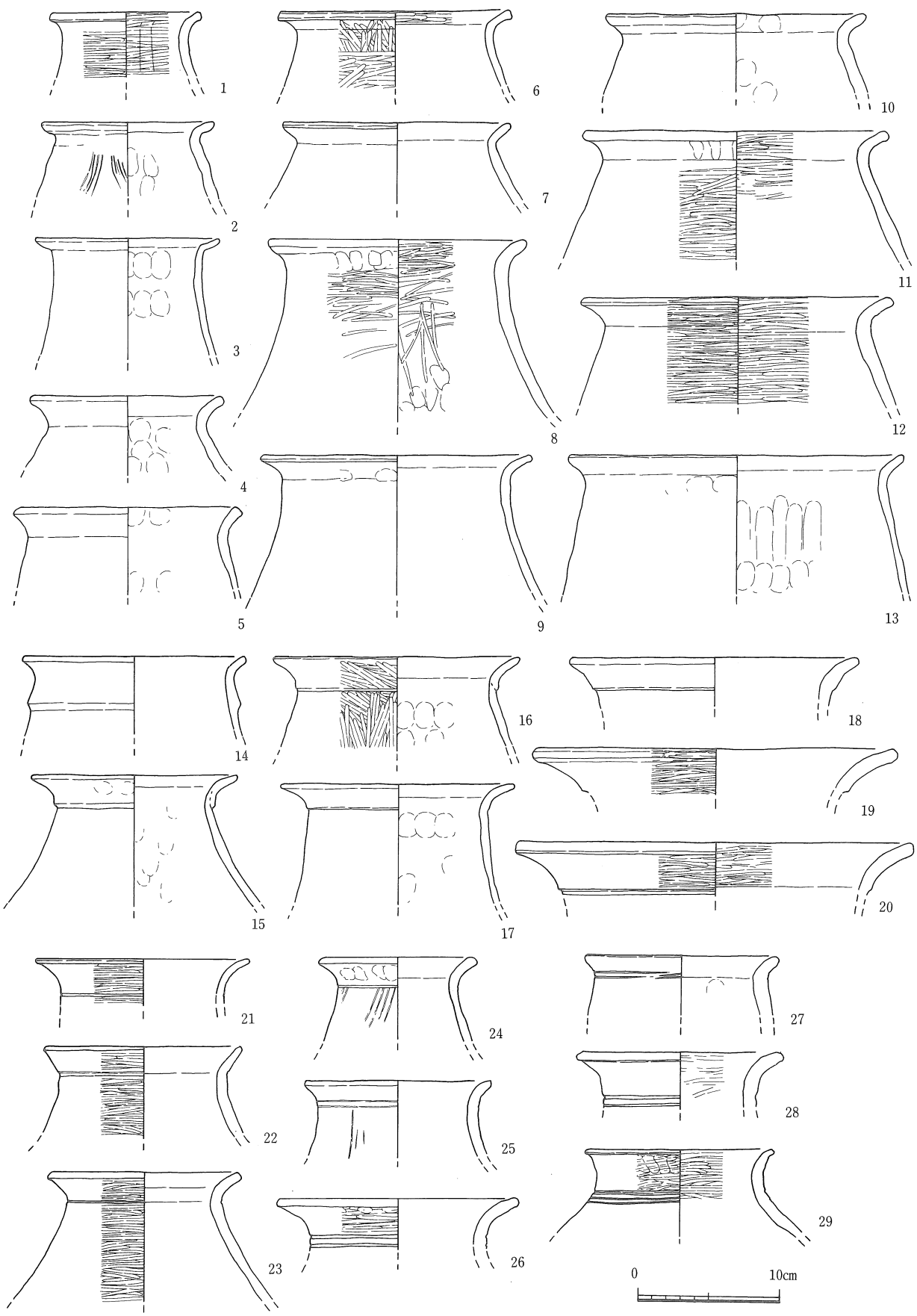
第98図　第1低地帯流路5南半部 出土土器



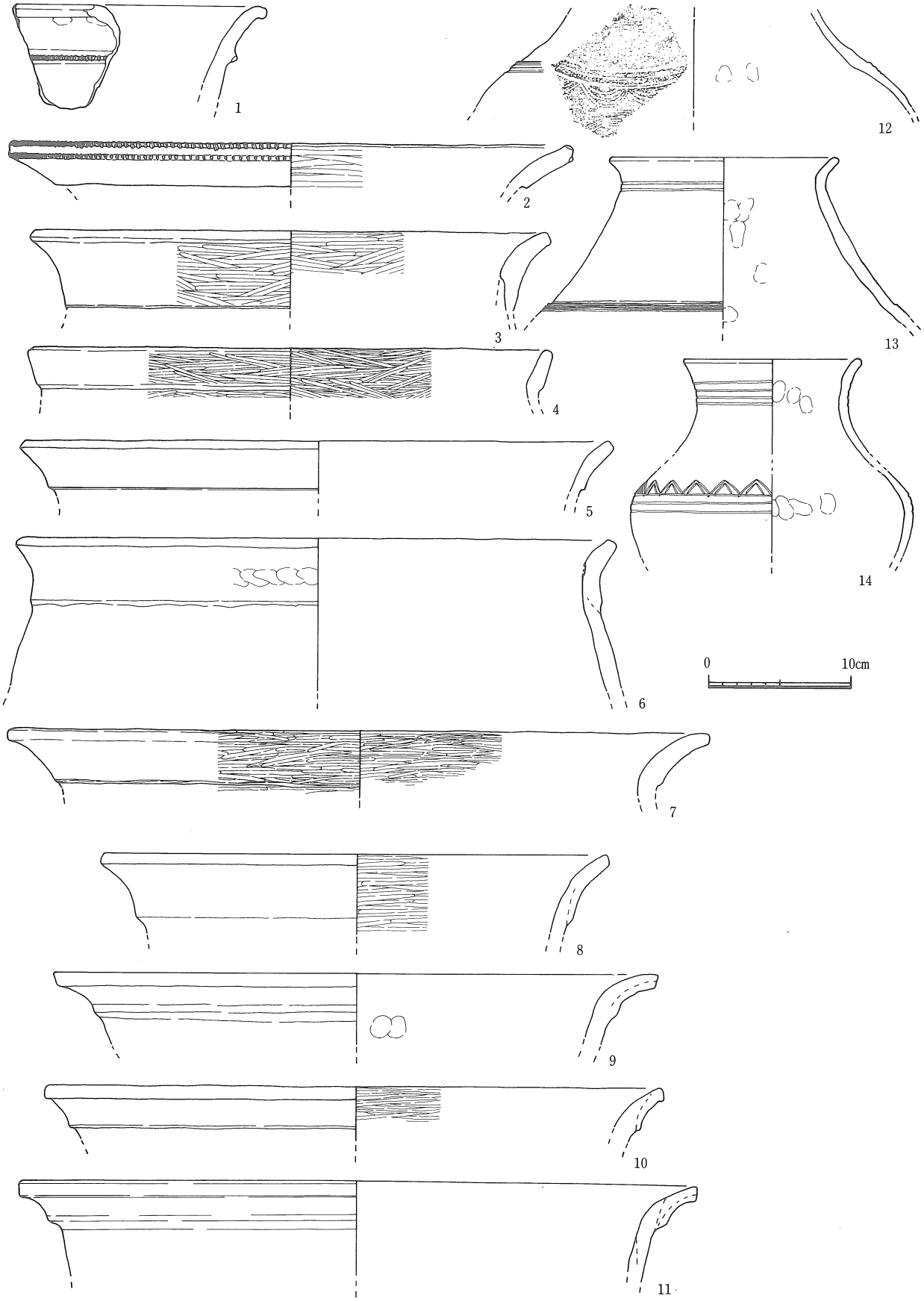
第99図　第１低地帯南半部上層 出土土器



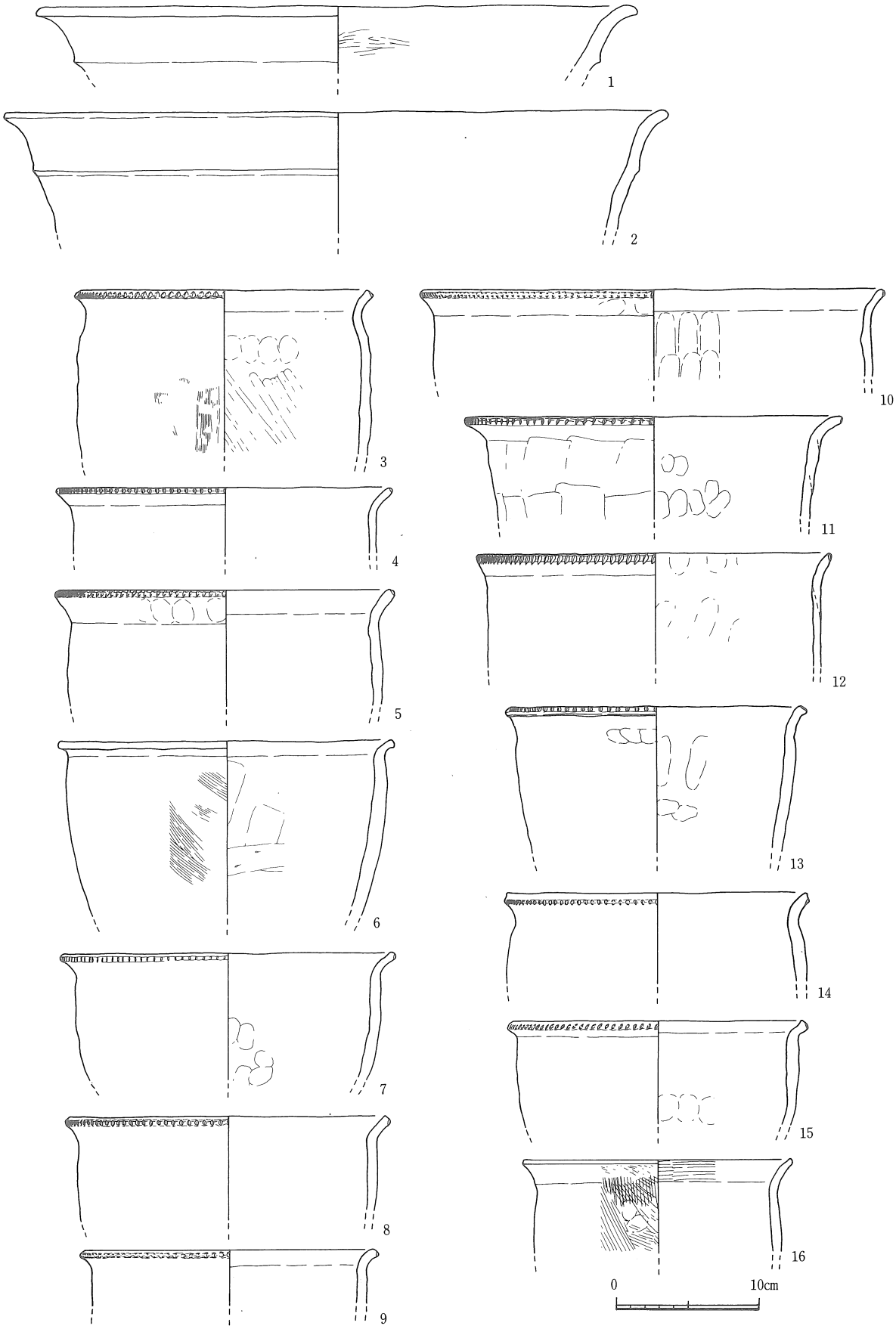
第100図　第１低地帯南半部上層 出土土馬



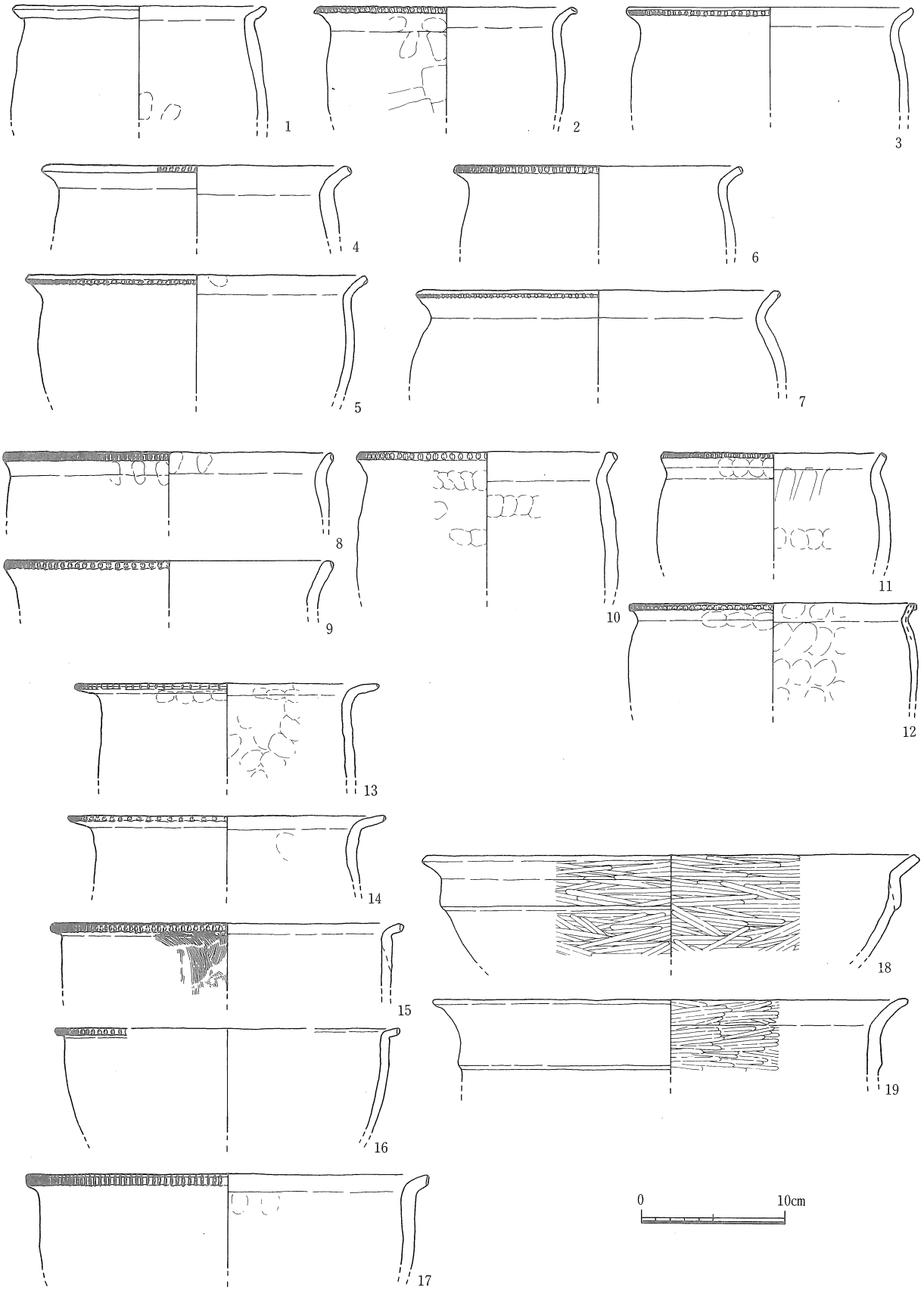
第101図　第２低地帯流路１　出土土器



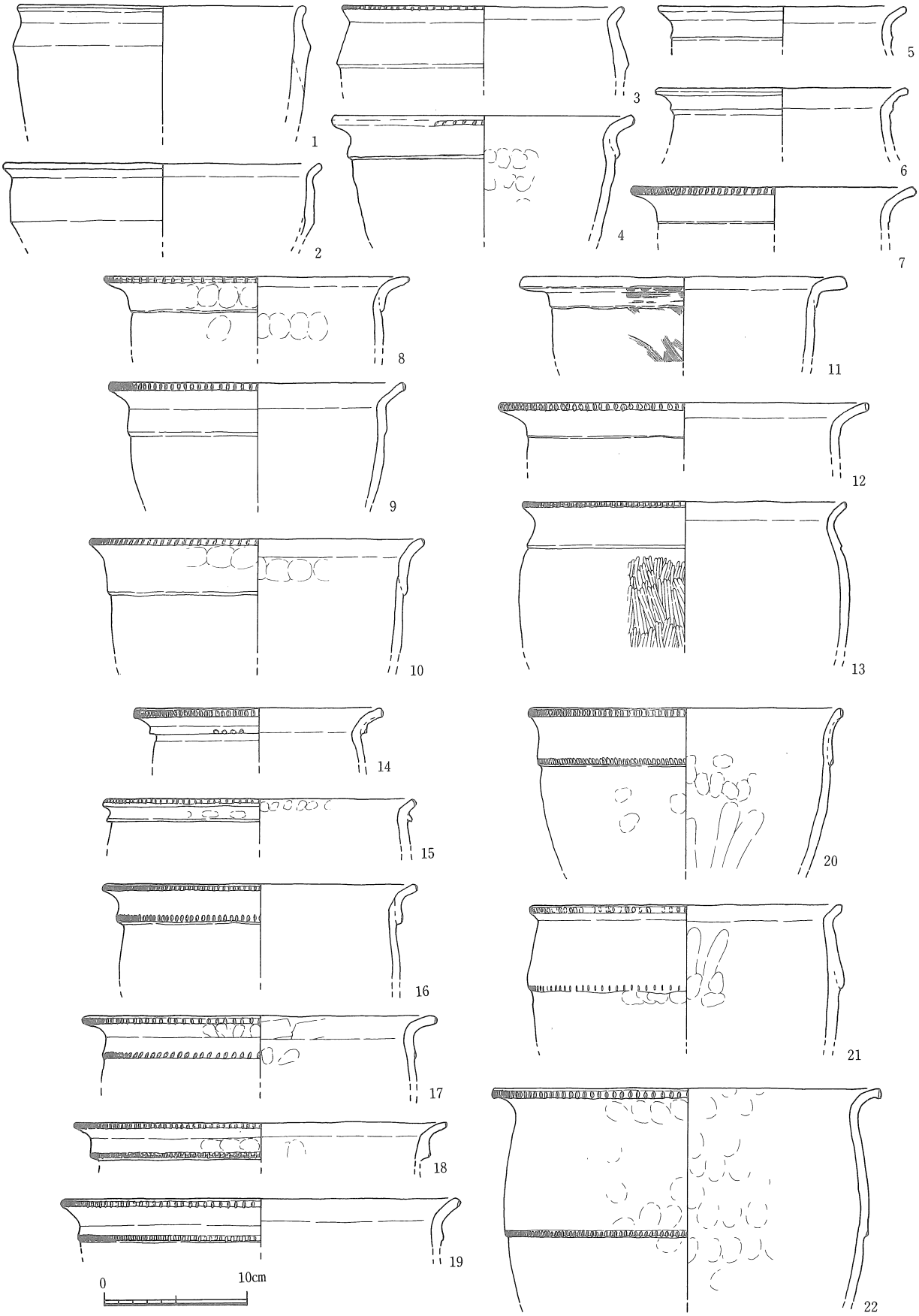
第102図　第２低地帯流路１　出土土器



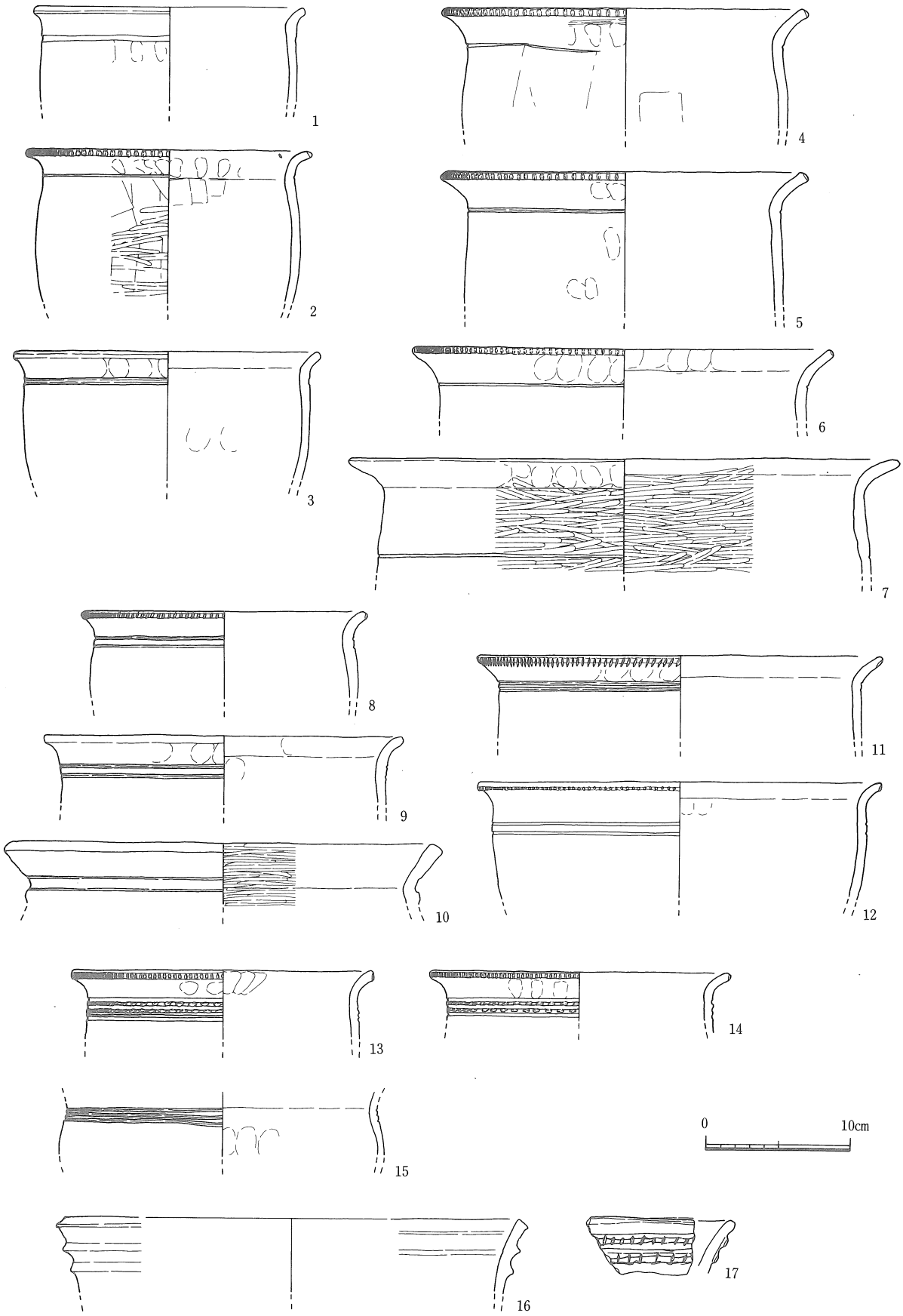
第103図　第２低地帯流路１　出土土器



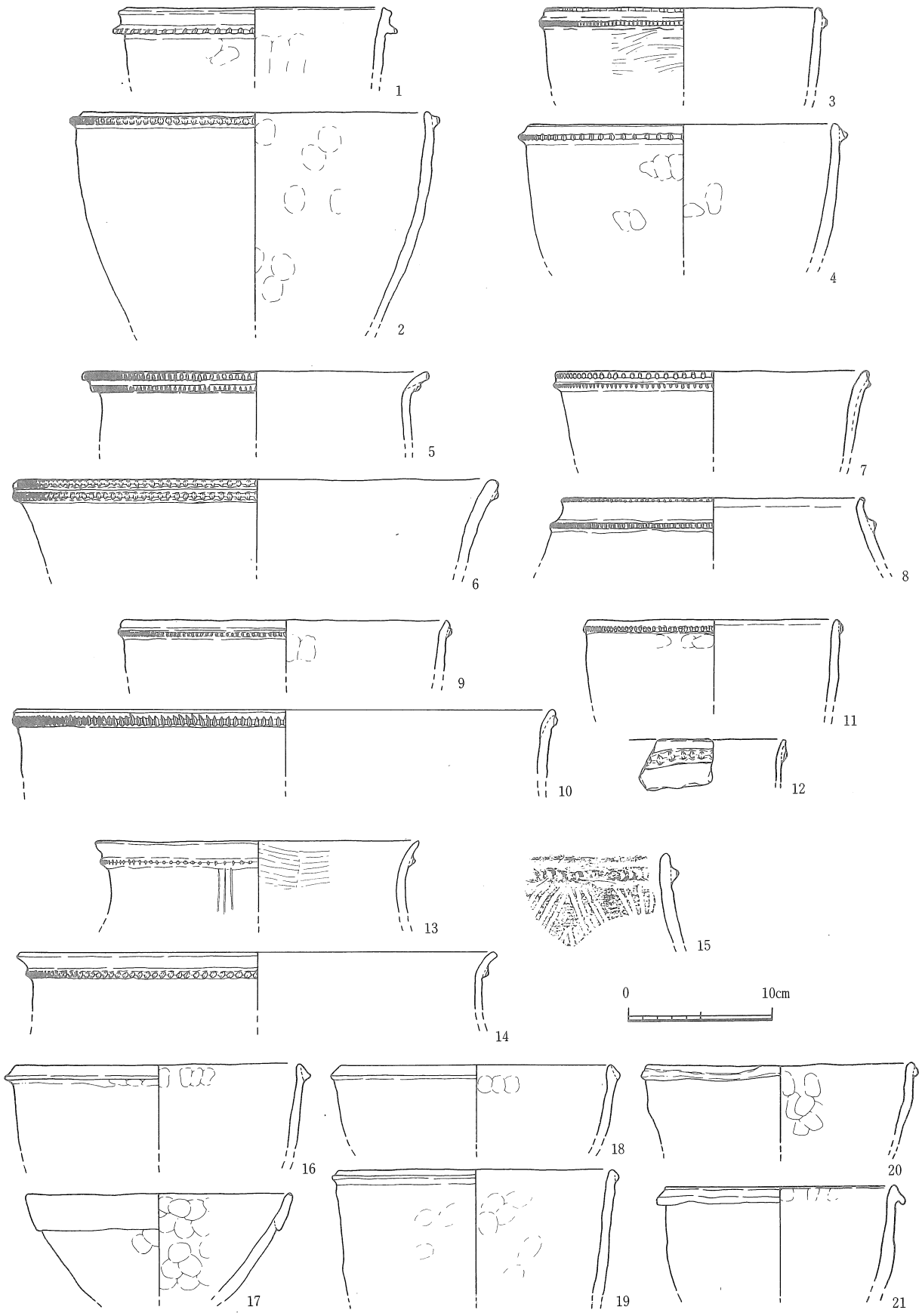
第104図　第２低地帯流路１　出土土器



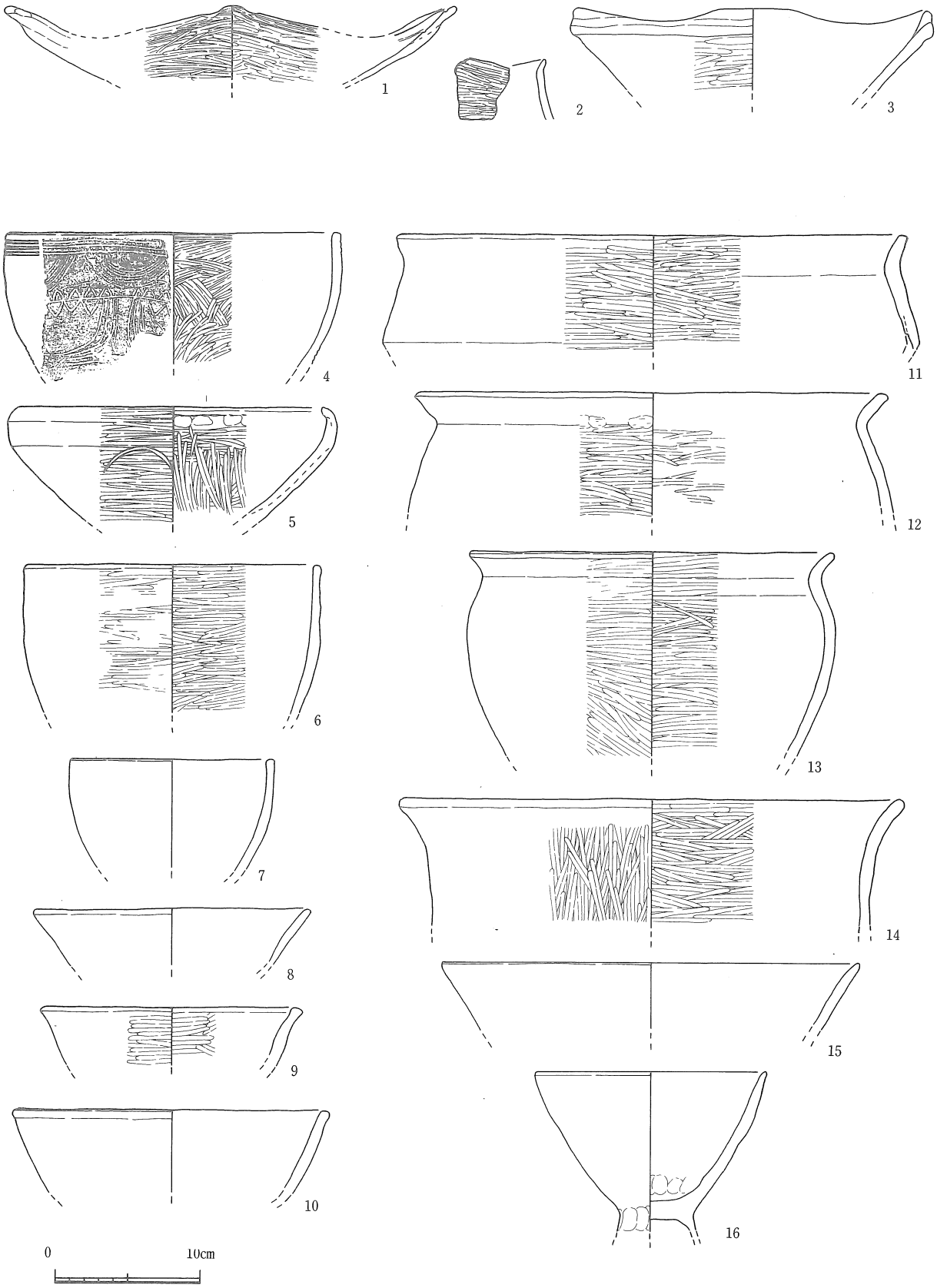
第105図　第２低地帯流路１　出土土器



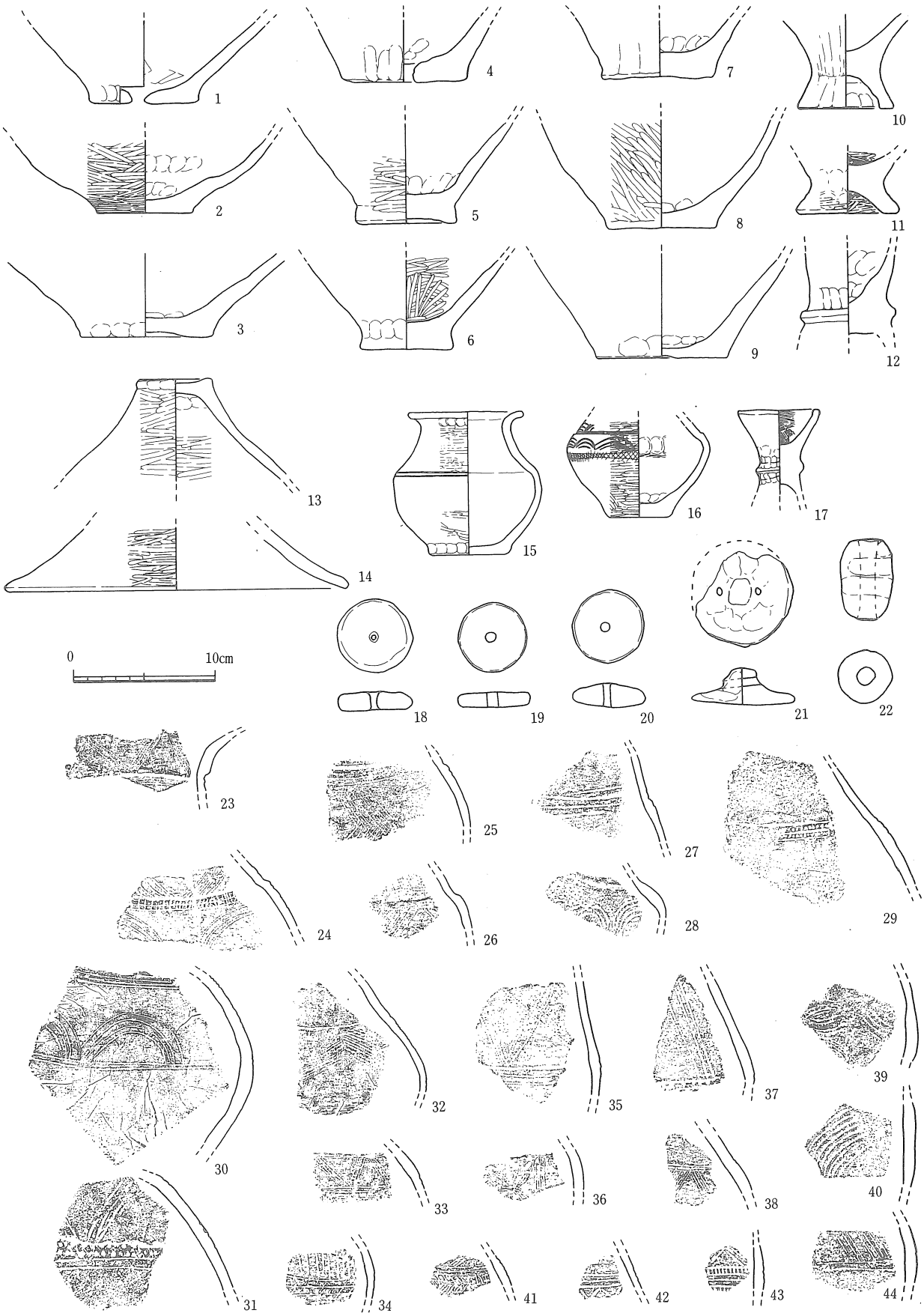
第106図　第２低地帯流路１　出土土器



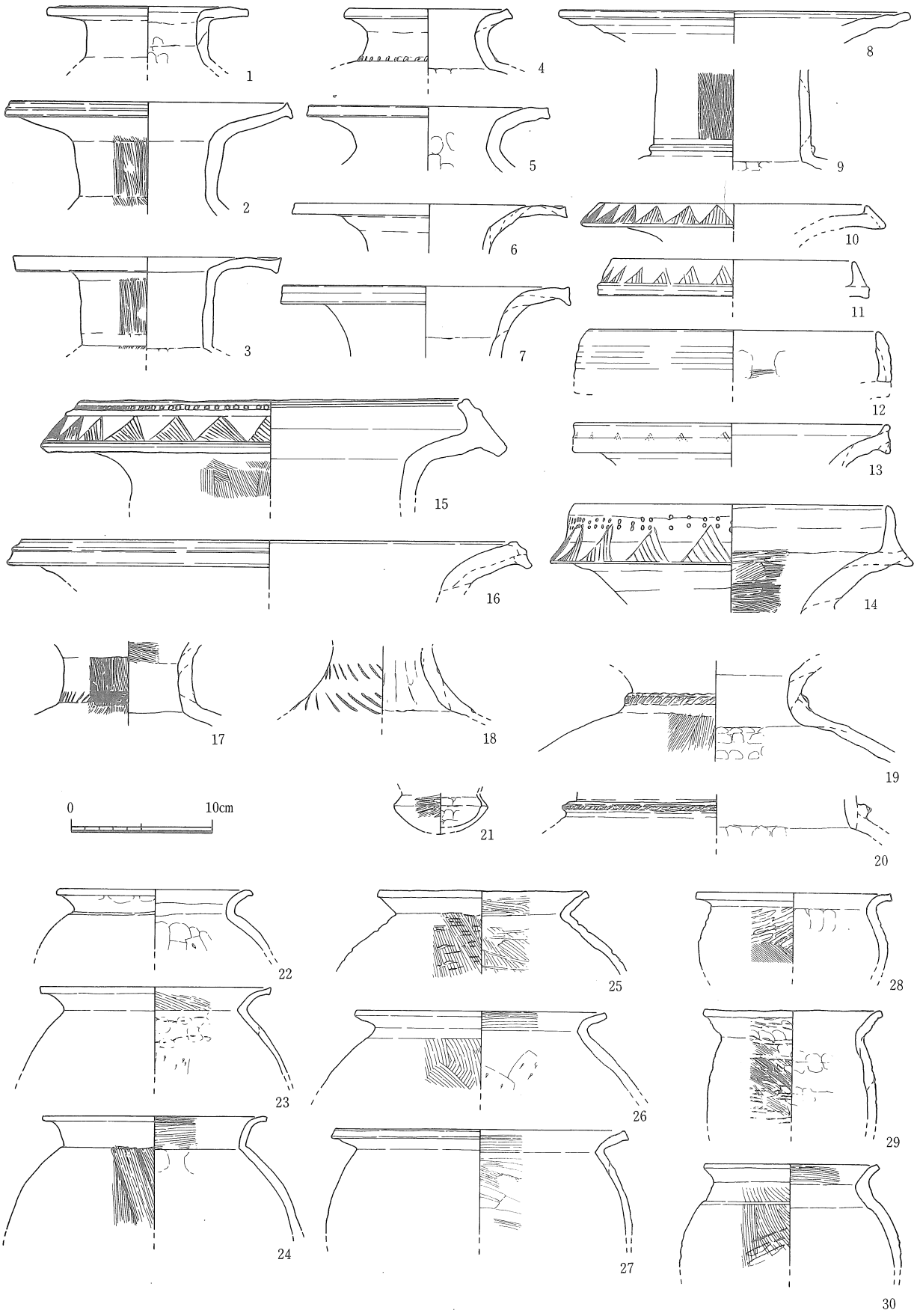
第107図　第２低地帯流路１　出土土器



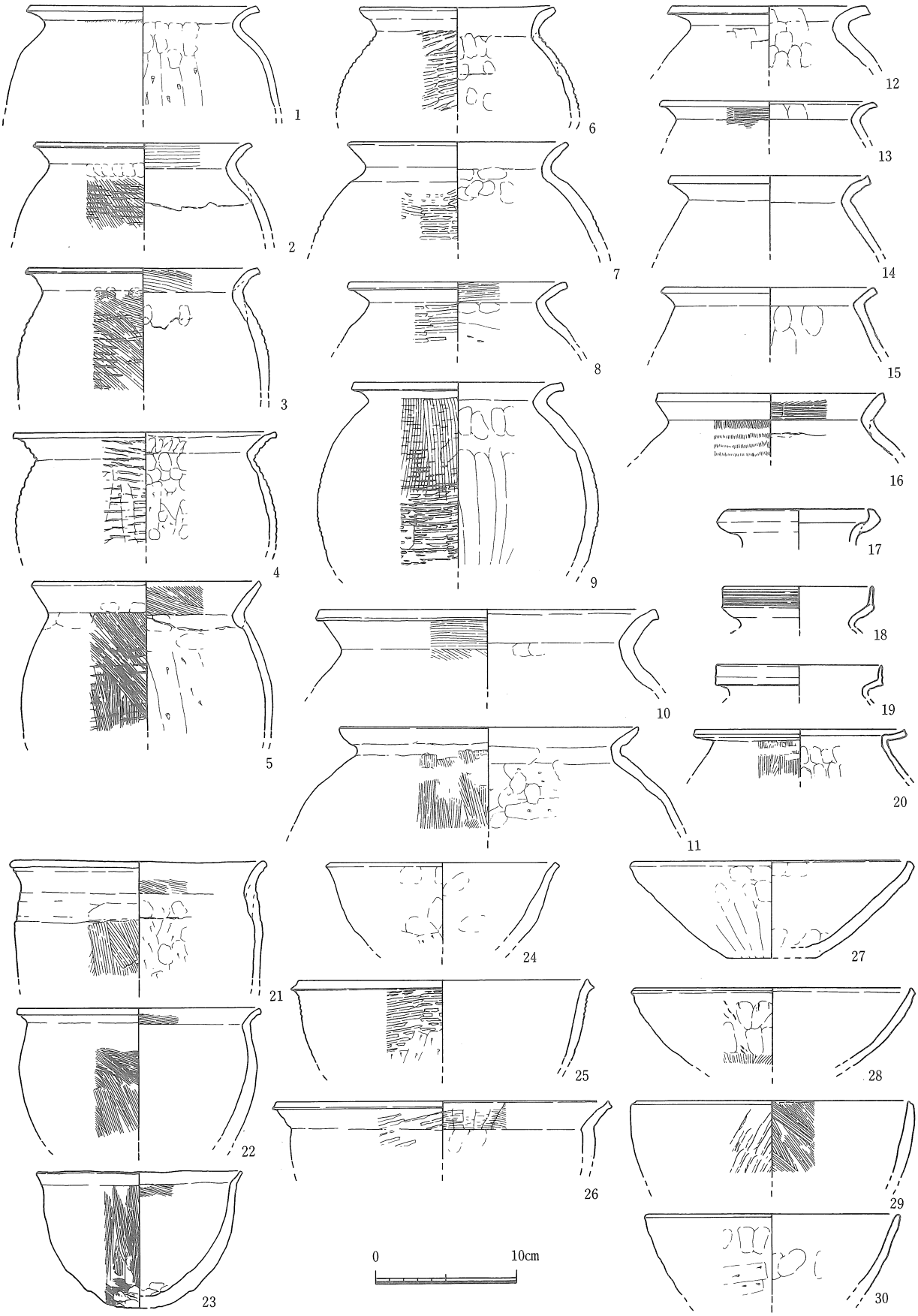
第108図　第２低地帯流路１　出土土器



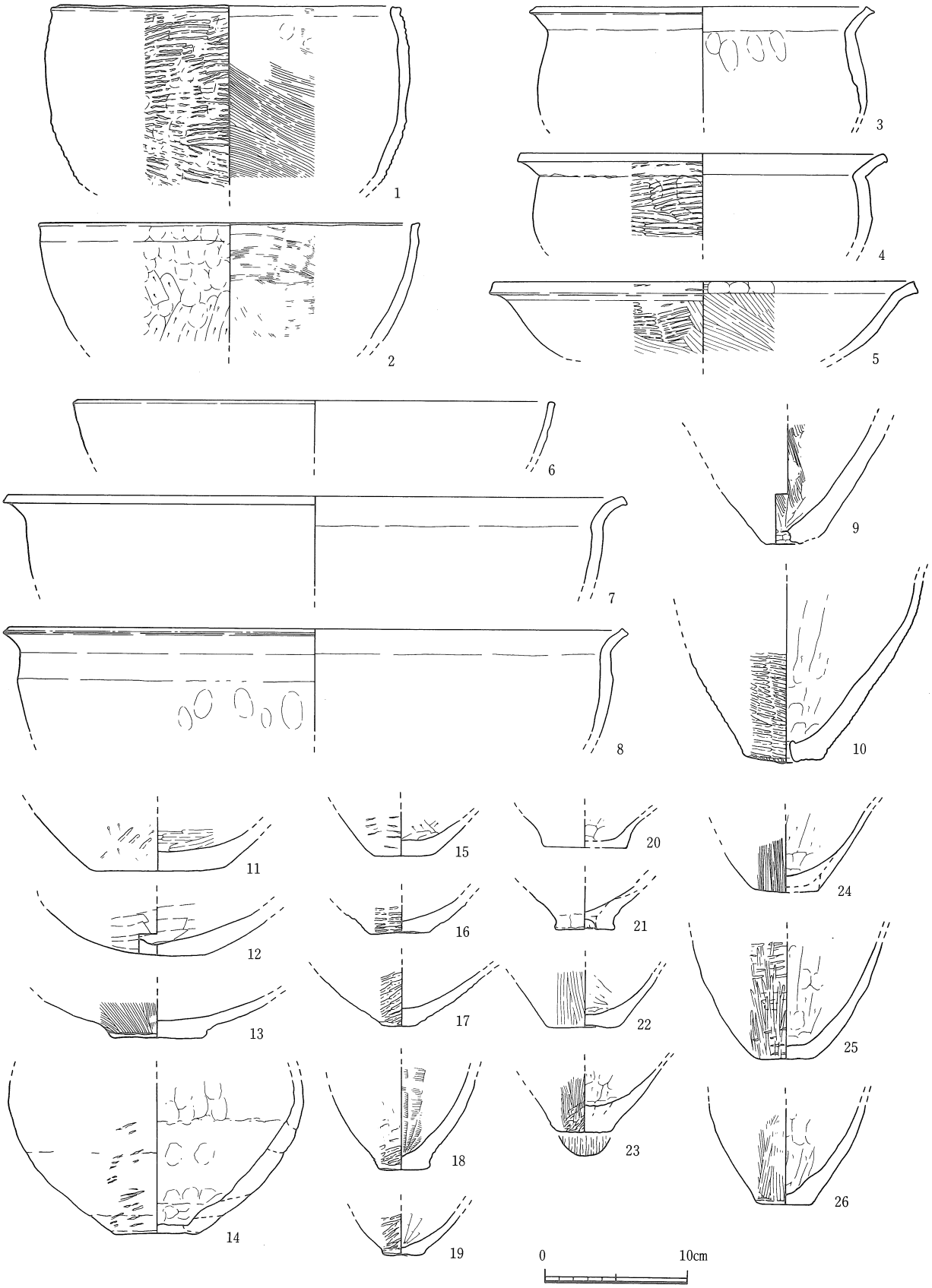
第109図　第２低地帯流路１　出土土器



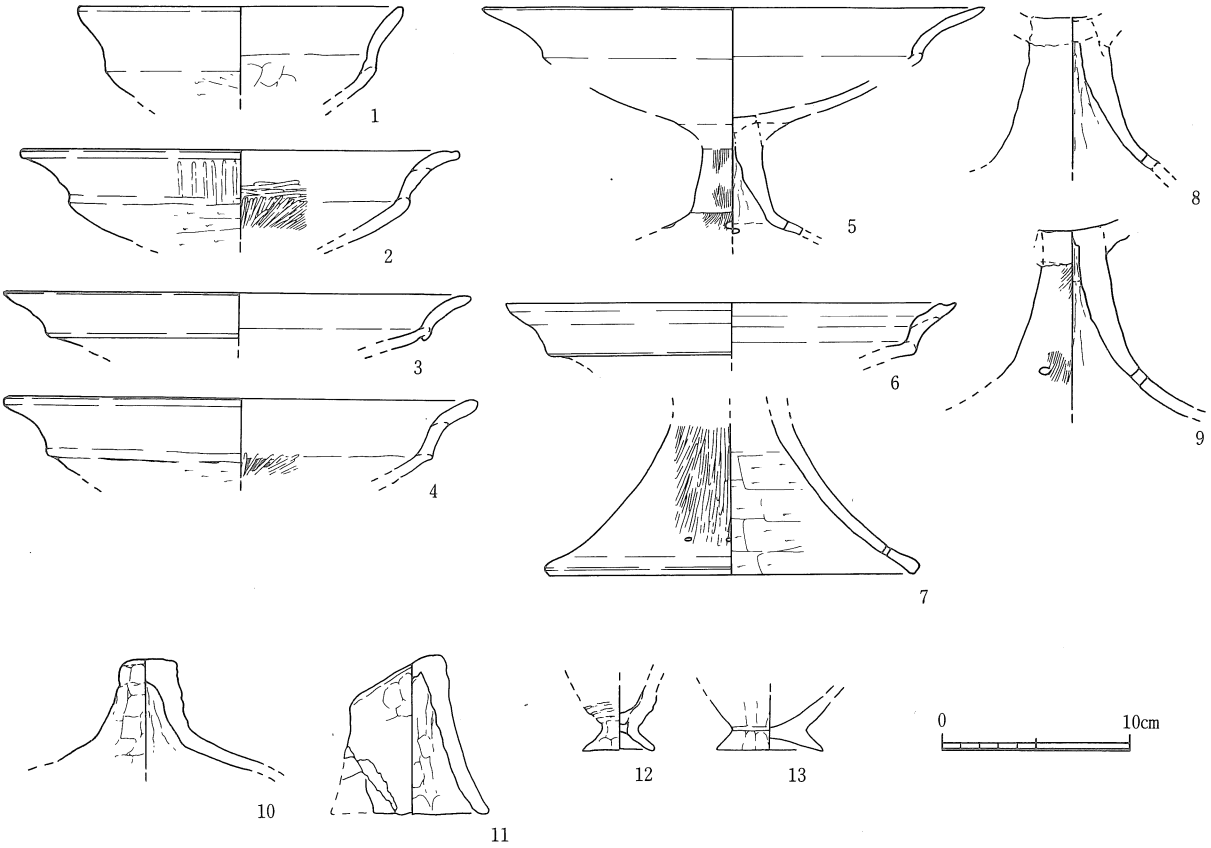
第110図　弥生土器溜り３　出土土器



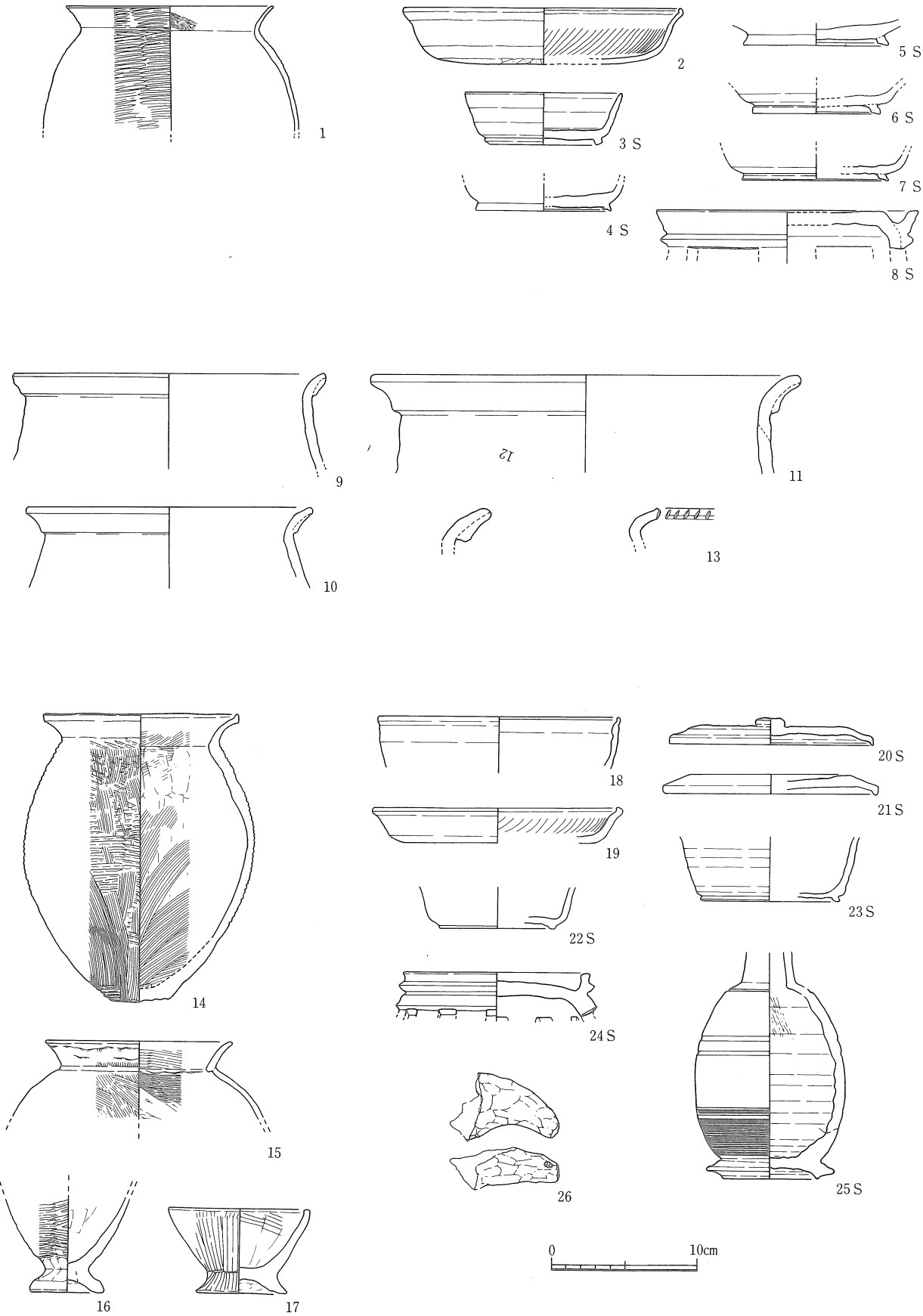
第111図　弥生土器溜り３　出土土器



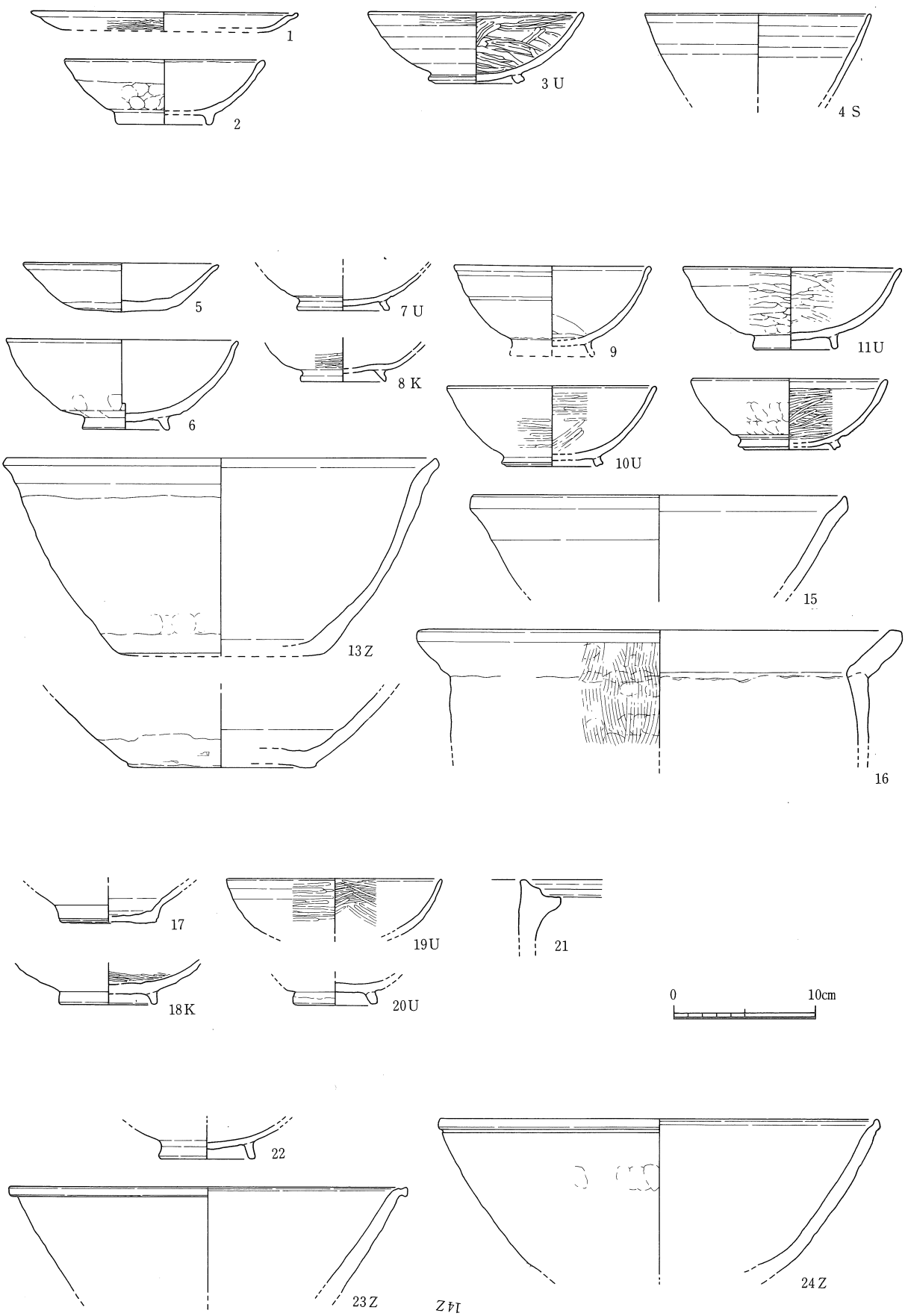
第112図　弥生土器溜り3　出土土器



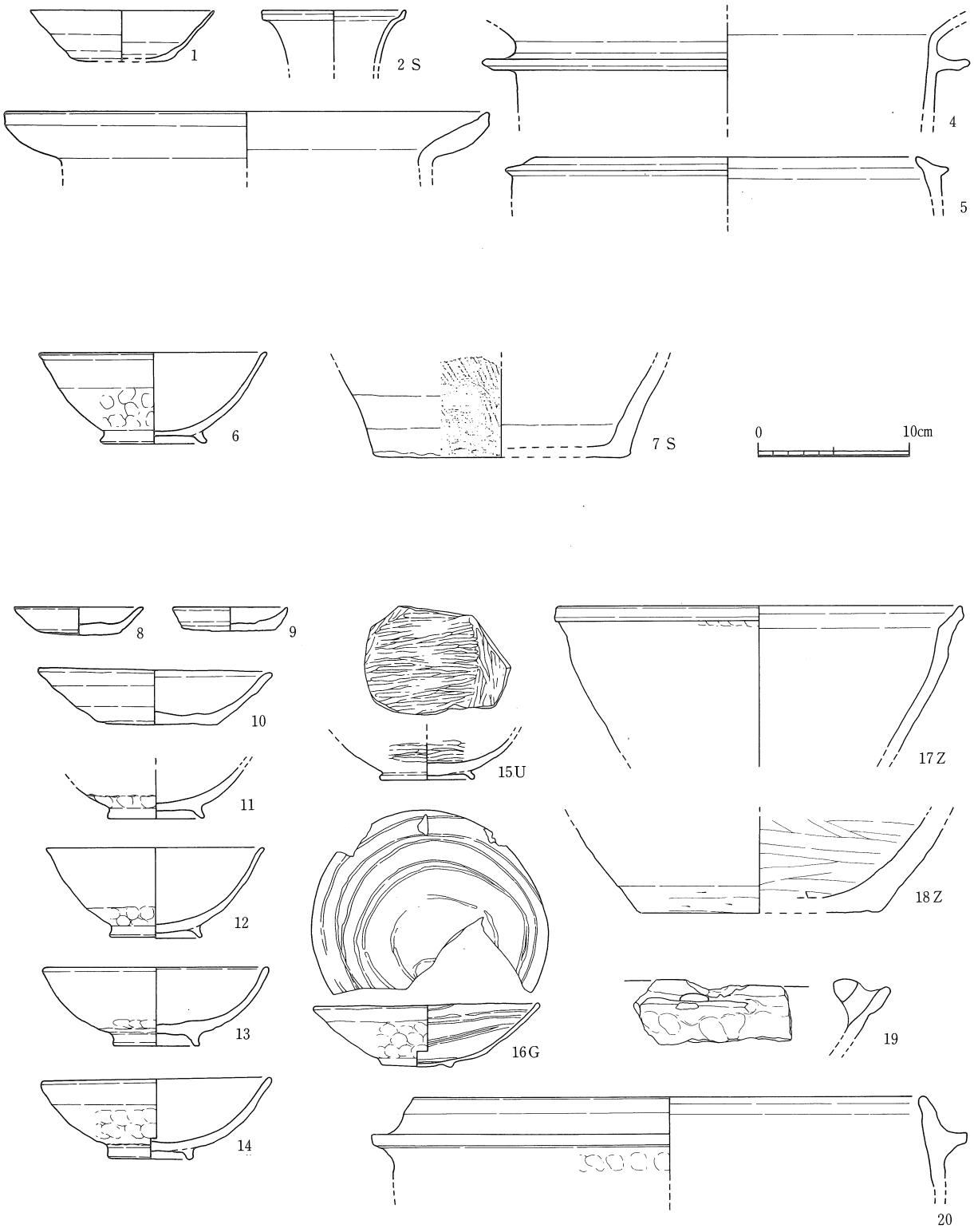
第113図　弥生土器溜り3　出土土器



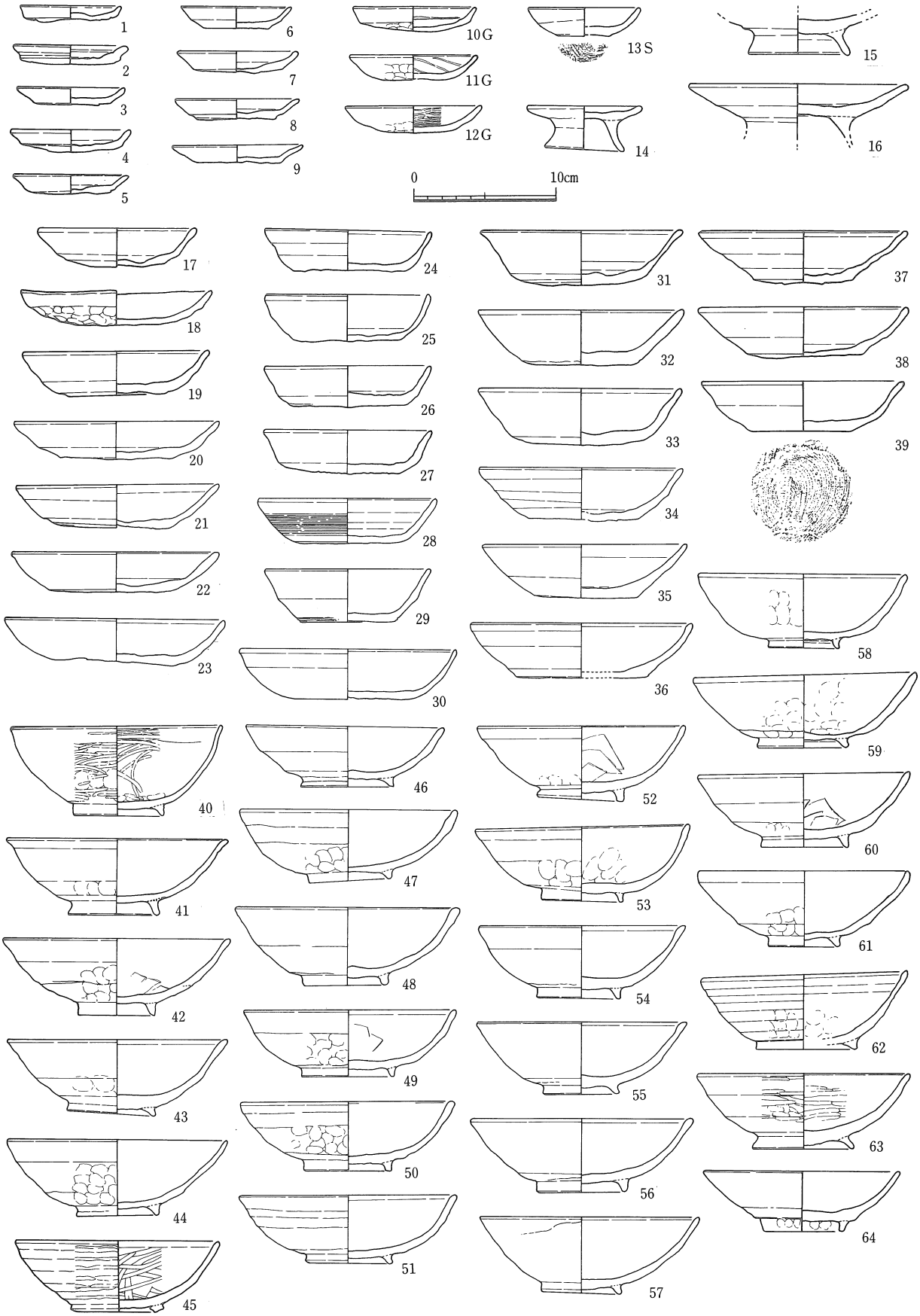
第114図　水田１・２，第３低地帯最下層　出土土器



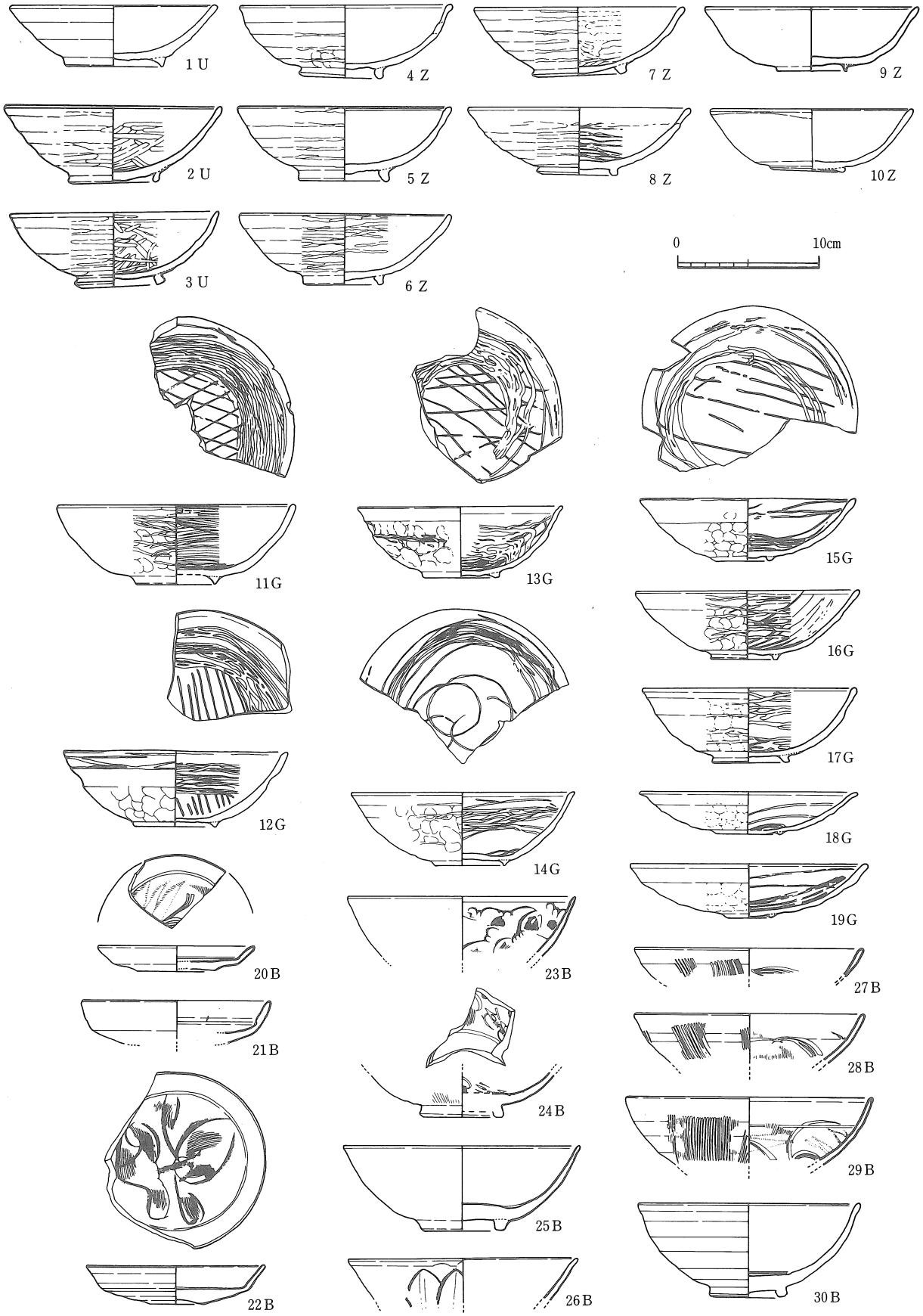
第115図　第4低地帯流路1・2上層3及び水田3直上層 出土土器



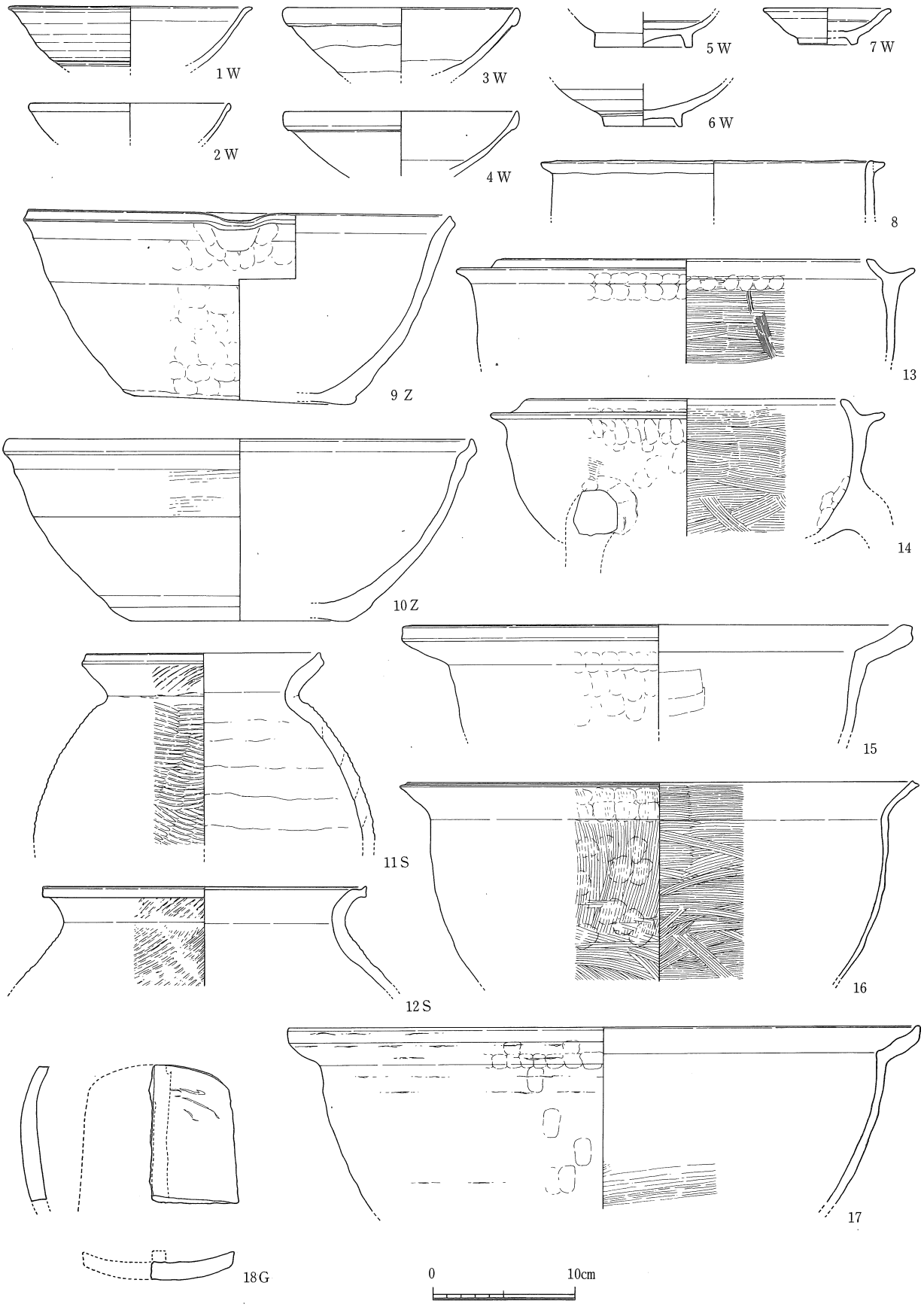
第116図　第４低地帯流路４・５　出土土器



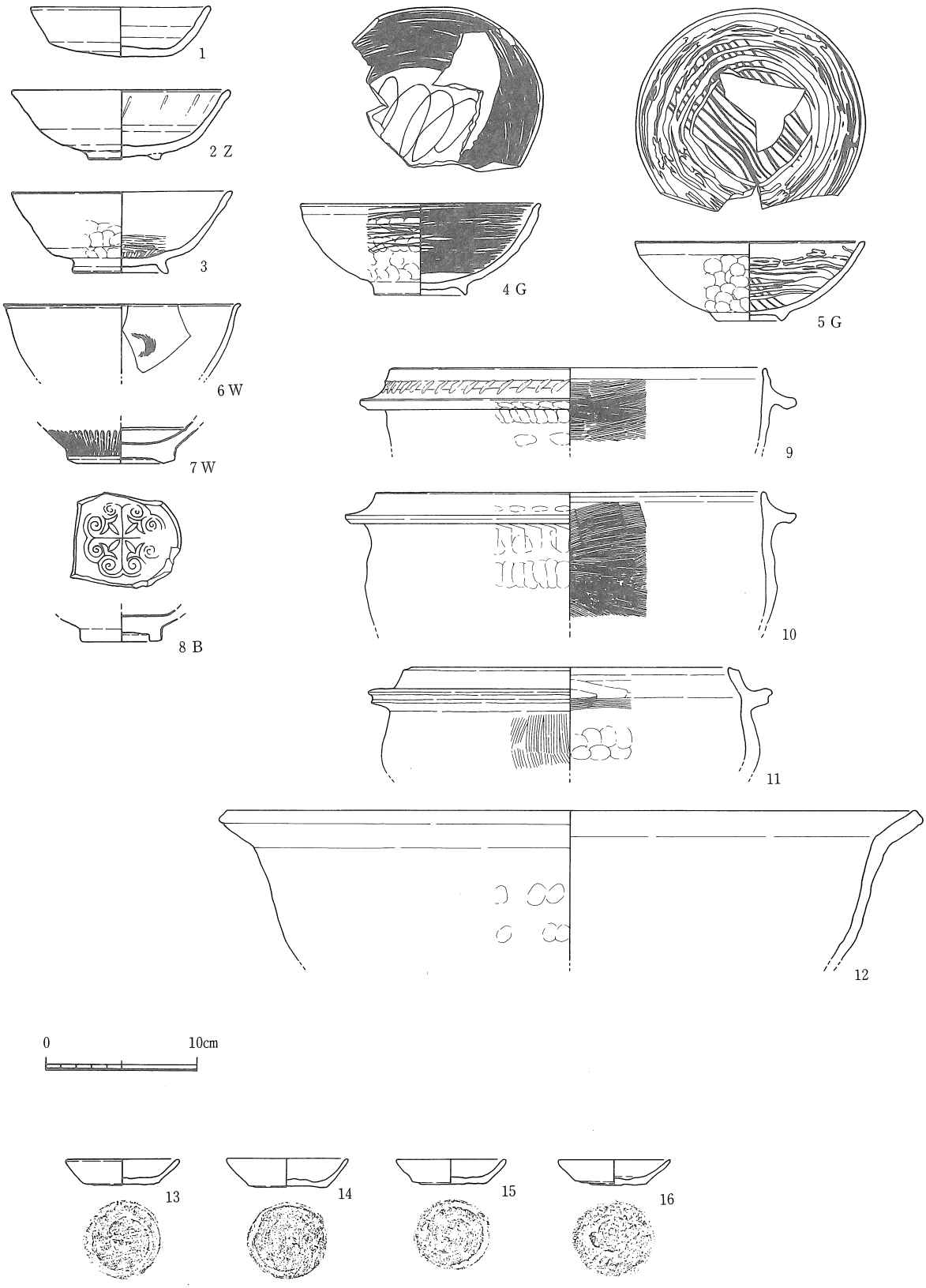
第117図　第4低地帯流路6　出土土器



第118図　第4低地帯流路6　出土土器



第119図　第４低地帯流路６　出土土器



第120図　第４低地帯流路７及びＳＸⅢ11　出土土器

第5節　石　　器

低地帯中からは，コンテナにして130箱の石器類が出土している。これらの中で約半分は，古墳時代以降の流路の中に混入している資料である。そのため整理作業に際しては，これら混入資料を除き，比較的良好な出土状態を示す，第1低地帯流路1，第2低地帯Ⅶ層・Ⅴ・Ⅵ層出土遺物に限り資料操作を実施した。次に各流路より出土した石器類を紹介する。

1．第1低地帯流路1出土石器（第121・122図　図版351）

第1低地帯流路1より出土した石器は，サヌカイト製のものを主体にして合計66点を数える。内訳は石鏃1・楔形石器類2・削器10・磨製石斧2・砥石3・敲き石2・二次加工ある剝片10・剝片34・石核2である。代表的なもの9点を抽出した。

（第121図1）は剝片である。（1）は安山岩製の剝片である。かなりローリングを受けた，縦長状の剝片である。背面には，先行して剝ぎ取られた剝片剝離痕が見出せる。打面は点状打面を呈する。（第121図2）はチャート製の小形の石核である。（第121図3）はサヌカイト製の石鏃である。（第121図4）はサヌカイト製の楔形石器の素材である。表・裏面供に自然面を残し，素材が扁平な小礫であることが解る。（第121図5・6）はサヌカイト製の削器である。（第121図7）は安山岩製の扁平片刃石斧である。片側面及び基部は欠落している。（第121図8）は砂岩製の砥石である。角柱状を呈し砥石面は四面ある。砥石面には溝状の凹みが数条認められる。（第122図）はサヌカイト製の分割礫である。表・裏面には自然面を多量に残し分割面は折れ面よりなる。

2．第2低地帯Ⅶ層出土石器（第123～145図　図版352～369）

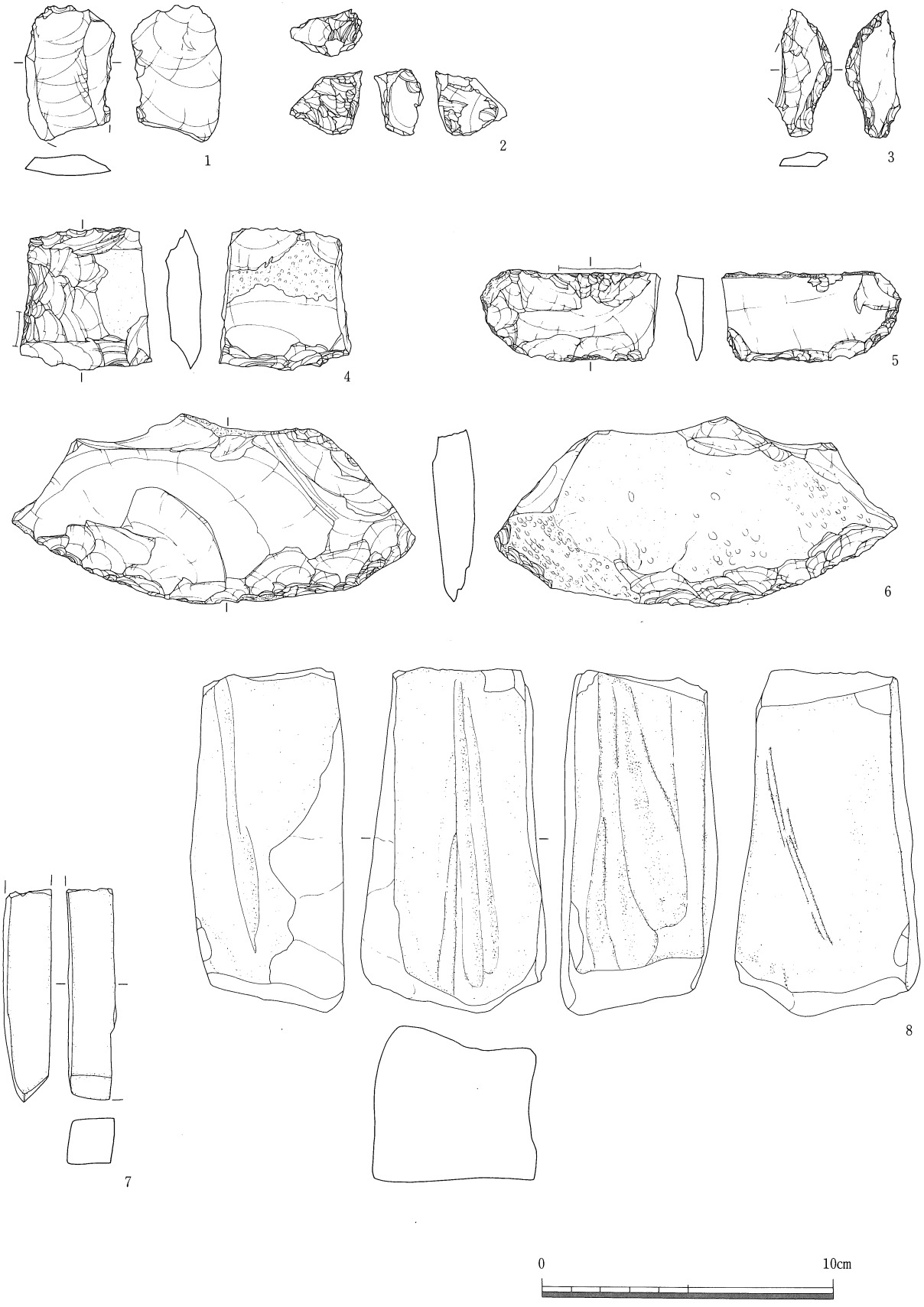
第2低地帯Ⅶ層中からはコンテナにして約30箱の石器及び石器類が出土した。これらの石器類を整理するに当り次のような方法を取った。①出土資料の比較的豊富で，層位的に検証の行ない易いG・H18区に限定し，その二区画に限り，全出土石器類を対象に器種組成表を作った。②また同区画に限り図化資料を抽出た。なお，他区画の特徴的な石器類については，任意に図化資料中に含めた。そのため次に紹介するⅦ層出土石器類は，主にG・H18区出土の石器類を選んでいるが，幾分他地区の資料も含まれる。

G・H18区Ⅶ層から出土石器類は合計2,059点を数える。出土石器の内訳は，石鏃22・石錐5・楔形石器類16・石匙1・削器244・打製石包丁17・磨製石包丁3・石鎌3・打製石斧68・磨製石斧3・石錘2・砥石3・敲き石34・磨石6・石皿2・台石2・二次加工ある剝片352・剝片1,254・石核11・その他11である。これらの中より，代表的なもの165点を図化した。

これらの石器類はサヌカイトを素材とするものが圧倒的に多いが，磨製石器を中心として約3%前後サヌカイト以外の石材を用いている。なお，器種組成と石材の関係に付いては第7表にまとめた。次に抽出した個々の石器類を紹介する。

石鏃（第123図　図版352）

第2低地帯G・H18区Ⅶ層から出土した石鏃は合計22点を数える。その内1点は磨製石鏃である。石材は磨製石鏃を除き全てサヌカイトである。代表的なもの20点を抽出した。



第121図　第１低地帯流路１　出土石器(1)

（第123図１）は結晶片岩製の磨製石鏃である。先端部と中茎は欠落している。下川津遺跡からは，この資料を含め合計3点の磨製石鏃が出土している。（第123図２～20）は打製の石鏃である。平基無茎鏃・凹基無茎鏃・凸基有茎鏃の順に並べた。（17）はロケット状の形態を呈し，比較的まれな資料である。

石錐（第123図　図版352）

第２低地帯Ｇ・Ｈ18区Ⅶ層から出土した石錐は合計５点を数える。石材は全てサヌカイトである。Ｇ・Ｈ18区以外の資料を加え７点抽出した。

（第123図21～27）は石錐である。いずれも剝片を素材に用い，錐部を中心に調整を施し基部の調整はさほど施していないが，（27）の調整は比較的精緻で，平面形態を逆五角形状に整形している。

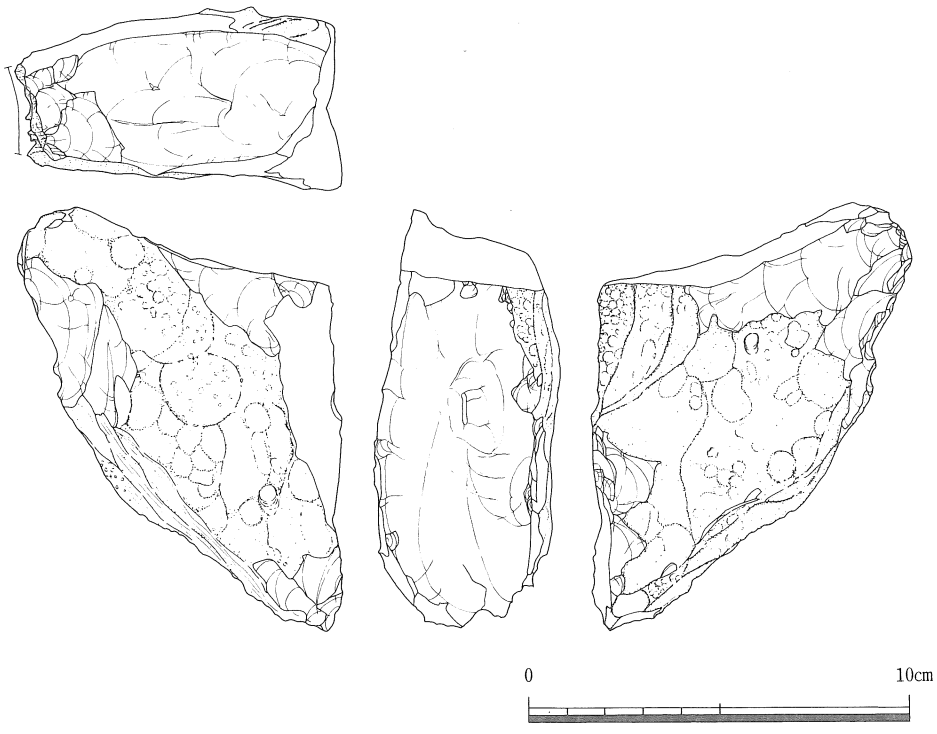
楔形石器類（第124図　図版352）

第２低地帯Ｇ・Ｈ18区Ⅶ層から出土した楔形石器類は合計16点を数える。楔形石器類とは，楔形石器及び楔形石器に関連するもの全ての総称であり，楔形石器の削片・楔形石器の素材等も含む。なお楔形石器とその素材の分離基準は，潰れ及び截断面の認められないものを，楔形石器の素材とした。

楔形石器類の出土点数の内訳は，楔形石器９・楔形石器の削片４・楔形石器の素材３を数える。石材は全てサヌカイトである。代表的なもの10点を抽出した。

（第124図１～７）は楔形石器である。剝片を素材に用い，その分割面を器面に残すものが多い。（２・３）の楔形石器には截断面が認められ，他の物には明瞭な截断面は認められない。側縁部の潰れ痕は全ての楔形石器に見出せる。

（第124図８～10）は楔形石器の素材である。素材の分割面をいずれかの個所に残し，側縁部の潰れ，截断面等は認められない。また側縁部の短辺が折れ面を呈するものがある。



第122図　第１低地帯流路１　出土石器(2)

石匙（第124図　図版352）

第２低地帯Ｇ・Ｈ18区Ⅶ層から出土したは石匙はわずか１点出土したのみである。石材はサヌカイトである。Ｇ・Ｈ18区以外の資料を加え２点抽出した。

（第124図11・12）はいずれも横型の石匙である。（11）の石匙は比較的細身の横長形で，刃部はわずかに外湾する。表裏面供に素材面を残す。（12）の石匙は約三分の一失われている。（11）に比べ，小形で横に短い石匙である。

削器（第125～130図　図版353～358）

第２低地帯Ｇ・Ｈ18区Ⅶ層から出土したは削器は合計244点を数え，全体の中でも11.9％を占める。石材は244点中１点を除き全てサヌカイトである。

いずれの削器も器面調整をさほど施さずに，不定形な素材剝片のエッジ部分を有効に利用し，軽度の刃部調整のみで削器を形成している。そのため形態的には様々な形態を取る。刃部は一側縁に付されるものが大多数であるが，まれに複数の個所に付されるものや，ほぼ全周に巡る削器もある。刃部の形態を大別すれば，①直刃状　②外湾刃状　③内湾刃状等に分けられるが，中間的なものもありその区別は難しい。これらの中より代表的なもの41点を抽出した。

（第126図２）は安山岩製の削器である。サヌカイト以外の石材を用いた削器はこの資料だけである。この削器には風化面が二種類ある。素材剝片面がかなり古い風化面を持ち，刃部の調整痕が新しい風化面を呈している。このような類例は他器種でも少数みられる。

（第128図６，第130図１・２）等の削器は刃部がほぼ全周する削器である。中でも（第130図３）は，比較的器面調整を精緻に施し，円盤状の形態に整形している。

石包丁（第130図　図版358）

第２低地帯Ｇ・Ｈ18区Ⅶ層から出土したは打製石包丁は17点，磨製石包丁は３点，合計20点を数える。石材は磨製石包丁を除けば全てサヌカイト製である。代表的なもの６点を抽出した。

（第130図４～６）は打製石包丁である。いずれも抉れ部のみ残存したもので，完全なものは検出できなかった。（４・６）の外周には潰れ痕が見出させる。特に折損面の縁にも認められ，楔形石器等の他の石器に転用されたものと思われる。

（第130図７～９）は磨製の石包丁である。いずれも半分位しか残ってなく，完全なものは検出できなかった。（８）の直刃の石包丁を除けば，他は外湾刃の石包丁である。（９）の刃部には，研磨された刃先を切り込む小刻みな調整痕が認められ，削器に転用されたことが伺える。

石鎌（第131図　図版359）

第２低地帯Ｇ・Ｈ18区Ⅶ層から出土したは石鎌は，全て打製のもので合計３点を数える。石材はサヌカイト製である。Ｇ・Ｈ18区以外の資料を加え４点抽出した。

（第131図１・２）は比較的細身で，器面調整が精緻な石鎌である。（１）の基部は装着を意図したものか中間部が屈曲し，屈曲点の上部を肥厚させている。また（２）の基部では上下に肥厚させている。なを両者とも側縁部に明瞭な潰れ痕が認められる。（第131図３・４）の石鎌は扁平な剝片を素材に用い，器面調整もさほど施さず，刃部の調整も軽度である。

石斧（第131～139図　図版360～366）

第２低地帯Ｇ・Ｈ18区Ⅶ層から出土したは石斧は，打製石斧68点，磨製石斧３点，合計71点を数える。石材は３点の磨製石斧と１点の打製石斧を除いたら全てサヌイト製のものである。

打製石斧は，形態上において大別して三種類に分類できるが，完全なものはかなり少なく絞り込めないものが多い。次に打製石斧の特徴の一つとして側縁部の潰れ痕が挙げられる。この痕跡は，柄の装着に関連して生じる可能性が強く，多数の打製石斧で確認された。これらの石斧の中より代表的な打製石斧38点，磨製石斧３点を抽出した。以下分類順に説明する。

Ⅰ類　（第131図５・６，第132図１・２・４～７，第133図１～３）は幅が細く長身の石斧で，所謂「短冊形」の打製石斧である。完形の（第131図５，第132図２）の石斧を除けば，いずれかの個所を欠いている。また（第132図２・７，第133図１）を除く石斧の側縁部には，潰れ痕が見出せる。なお潰れ痕は，左右二側縁に認められる場合が多い。

Ⅱ類　（第133図６，第134図１～４，第136図１・３・４）は幅広で扁平な石斧で，所謂「撥形」の打製石斧である。

（第135図１～５）は扁平で楕円形状の打製石斧である。これらの石斧の側面部にも潰れ痕が認められるものがある。側縁調整を精緻に施し断面レンズ状に形成するものⅡａ類（第133図６，第134図４，第136図１・３）等と，素材の形状を有効に利用し，主に刃先だけに調整を行ない，断面長方形を呈するものⅡｂ類（第134図１～３，第136図４）等に細分出来る。

Ⅲ類　（第132図３，第133図４，第136図２，第137図１，第138図２～３）は体部中央付近に抉れをもつ所謂「分銅形」に類似する。なお（第138図１）は抉れ部は無いが（第138図２・３）等の石斧と形態的に類似するため，このグループに入るものかもしれない。やはりこれらの石斧の側面部にも潰れ痕が認められるものがある。

Ⅰ～Ⅲ類に含まれない石斧は，残りが悪いため区分できないものである。

なお，打製石斧の中には使用痕と考えられる痕跡が，少数見出せる。（第138図２，第137図３～５）の刃先には，表・裏面供に主軸に対して平行方向の使用痕が，顕著に認められる。

（第139図１～４）は磨製石斧である。（１～３）は太型蛤刃石斧である。（１・２）は砂岩製（３）は緑泥片岩製である。（１）の刃先には潰れ痕が認められ，他の石器に転用された可能性がある。（第139図４）は結晶片岩製の，小形の磨製石斧である。両側縁部には装着を意図してか，わずかに内湾気味に調整剝離を加えている。

砥石（第139図　図版366）

第２低地帯Ｇ・Ｈ18区Ⅶ層からは砥石が３点出土した。代表的な１点を抽出した。

（第139図７）砂岩製の砥石である。砥石面は四面あり浅い溝状のみ凹がある。

石錘（第139図　図版366）

第２低地帯Ｇ・Ｈ18区Ⅶ層から出土した石錘は，合計２点を数える。全て図化した。

（第139図８・９）は石錘である。（８）は緑泥片岩製で，扁平な長方形状のものである。（９）は結晶片岩製で，扁平な楕円形状のものである。

敲き石（第140図　図版366・367）

第２低地帯Ｇ・Ｈ18区Ⅶ層から出土した敲き石は，合計34点を数える。石材は９点を除けば全て砂岩製のものである。代表的なもの8点を抽出した。

（第140図１～４）は縦長状の素材の一端に敲打痕が見出せるもので，（１・４）が砂岩製（２）が安山岩製（３）がサヌカイト製である。（第140図５～８）は敲打痕がほぼ全周に認められ，楕円形状を呈する敲き石である。（６）の砂岩製を除けば全てサヌカイト製である。

磨石（第141図　図版367）

第２低地帯Ｇ・Ｈ18区Ⅶ層から出土した磨石は，合計６点を数える。代表的な３点を抽出した。

（第141図２・３）は花崗閃緑岩製の磨石で，円礫の外周を使用したものである。（第141図４）は砂岩製の，棒状の磨石である。敲打による整形痕が，顕著に認められる。（第141図５・６）は結晶片岩製の磨石である。扁平で縦に長い形態を呈している。外周には磨き面が一巡する。

石皿（第142図　図版368）

第２低地帯Ｇ・Ｈ18区Ⅶ層から出土した石皿は，合計２点を数える。全て図化した。

（第142図１・２）は砂岩製の石皿である。約半分欠いたもので，中央部にはみ凹がある。

台石（第142図　図版368）

第２低地帯Ｇ・Ｈ18区Ⅶ層から出土した台石は，合計２点を数える。１点抽出した。

（第142図３）はサヌカイト製の台石である。約半分欠いたもので，中央部には敲打痕が認められる。

石核（第143・144図　図版369）

第２低地帯Ｇ・Ｈ18区Ⅶ層から出土した石核は，合計11点を数える。石材は全てサヌカイト製である。

出土した石核は，いずれも肉厚な剝片を素材に用い，打点を任意に移動させながら剝片剝離を行なっているものが多数を占める。極端な場合ほぼ全面に剝片剝離痕が及び，残核形態が円盤状を呈するものある。これらの石核の中より，Ｇ・Ｈ18区以外の資料を加え５点抽出した。

（第143図１・２，第144図１・２）の石核は，肉厚な剝片を素材に用い，打点を任意に移動させながら剝片剝離を行なっているものである。中でも（第144図２）の石核は，剝片剝離作業が最終段階にまで到達したものであり，他に比べ小形で断面レンズ状の円盤型をしている。（第144図３）は流紋岩製の石核である。

その他の石器（第144図　図版368）

その他の石器として分類したものは，何れの器種にも含まれない性格不明の石器及び，主体を占めない極少数の器種を総称してその他の石器としてまとめた。

第２低地帯Ｇ・Ｈ18区Ⅶ層から出土したその他の石器は，合計11点を数える。代表的なもの８点を抽出した。

（第145図１・２）は扁平な安山岩製の自然礫を素材に用い，側縁部に主軸に対して直交する使用痕が認められる石器である。（第145図３・４）は砂岩質の石材を素材に用い，下端部が尖り気味に整形された不明石器である。（３）は上半部に敲打によって整形を施し，下半部は尖り気味に整形を実施しているが，（４）に比べ不整形である。また，使用痕は見出せない。（４）は敲打により全体整形がなされた後磨きにより調整している。敲打痕は主に上半部と側面部にかけて残り，上端部ではこの調整により平坦に整形されている。磨きによる調整は主に下半部で顕著であり，この調整により面取りがなされている。磨きによる面取り調整は，特に下半部先端部周辺に顕著に残り断面四角形状を呈している。なお，使用痕は見出せない。（３・４）はその形状と使用痕が認められない点より，穿孔具の未製品である可能性がある。（第145図５）は翡翠製の不明石器である。かなり小形の楕円形状を呈しており，外周は磨きにより面取りされている。形状より装身具の未製品と思われる。（第145図６）は松脂岩製の不明石器である。剝片を分割した後に，周囲に調整剝離を施している。形状より楔型石器の素材の可能性がある。

（第139図５・６）は紡錘車の未製品である。第２低地帯Ｇ・Ｈ18区Ⅶ層から出土した紡錘車は，製品は見出せず未製品で２点出土しただけである。（５）は結晶片岩製で，外周を調整剝離により大まかに整

形している。中央には円孔が認められるが，裏側まで貫通していない。(6)はサヌカイト製で，かなり厚みがある。外周を粗割り整形をした段階のものである。

3．第2低地帯Ⅴ・Ⅵ層出土石器（第146図　図版370）

第2低地帯Ⅴ・Ⅵ層中からはコンテナにして約15箱の石器及び石器類が出土した。これらの中より代表的なものを任意に14点抽出した。

（第146図1～7）はサヌカイト製の石鏃である。（第146図5～7）はサヌカイト製の石錐である。（第146図8）はサヌカイト製の楔型石器である。（第146図9～13）はサヌカイト製の打製石包丁である。（9～11）は上下両側縁部に刃部をもつ打製石包丁であるが，（12）の打製石包丁は，素材剝片の一側縁のみに軽度の調整を施し刃部を形成している，片側縁刃部の石包丁である。（第146図14）はサヌカイト製の打製石斧体部片である。（西村）

第6表　第1低地帯流路1出土石器組成表

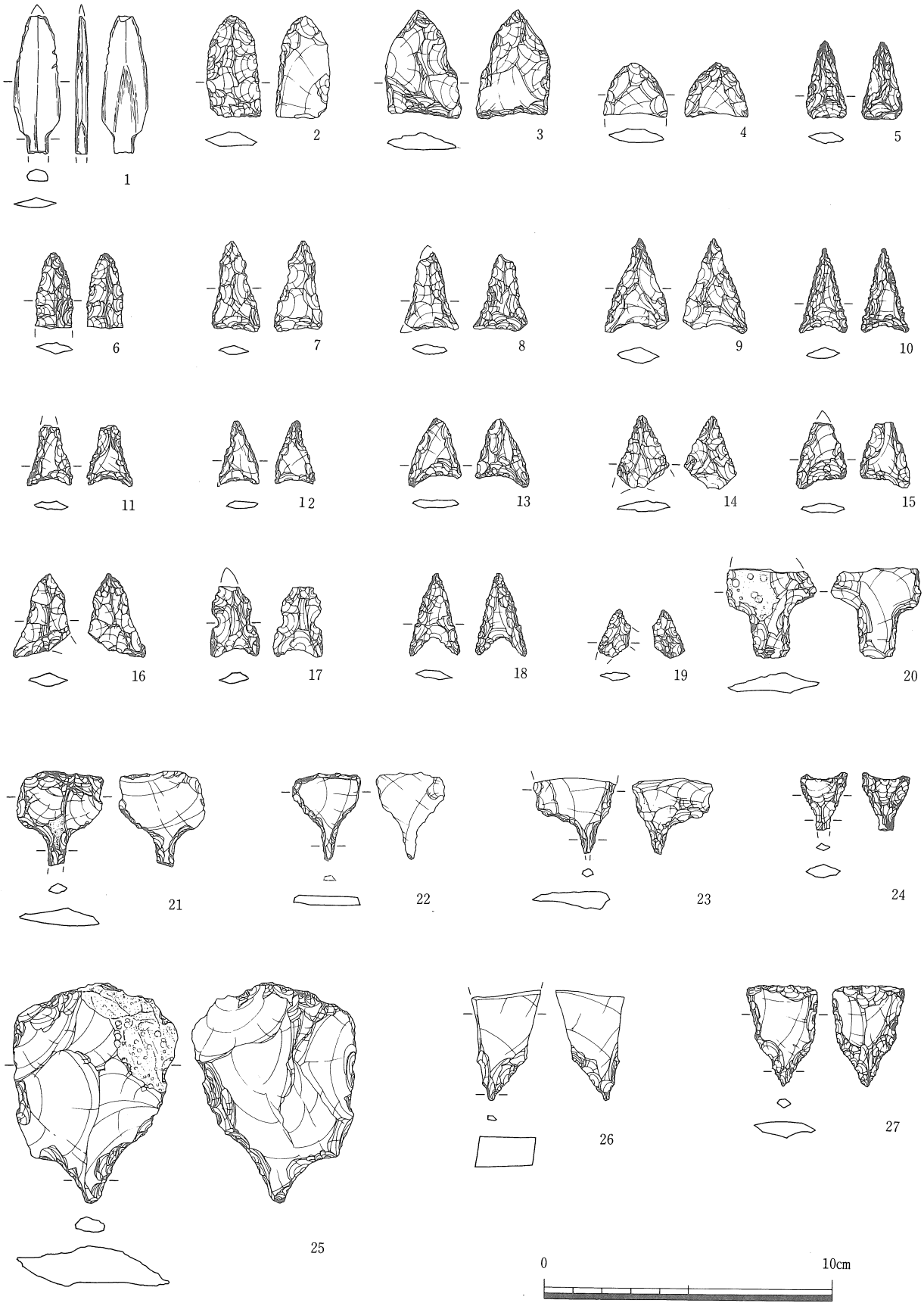
石材	石鏃	石錐	楔形石器			石匙	削器	石包丁		石鎌	石斧		石錘	砥石	敲石	磨石	石皿	台石	二次加工剝片	剝片	石核	その他	合計	%
			楔	削	素			打	磨		打	磨												
サヌカイト	1		1		1		10												10	27	1		51	77.3
砂岩														2	1					8			9	13.6
安山岩												1								1			2	3.0
チャート																					1		1	1.5
その他												1		1	1								3	4.6
合計	1	0			2	0	10		0	0		2	0	3	2	0	0	0	10	34	2	0	66	
%	1.5	0			3.0	0	15.2		0	0		3.0	0	4.6	3.0	0	0	0	15.2	51.5	3.0	0		100

※楔：楔形石器　削：楔形石器の削片　素：楔片石器の素材　打：打製石器　磨：磨製石器

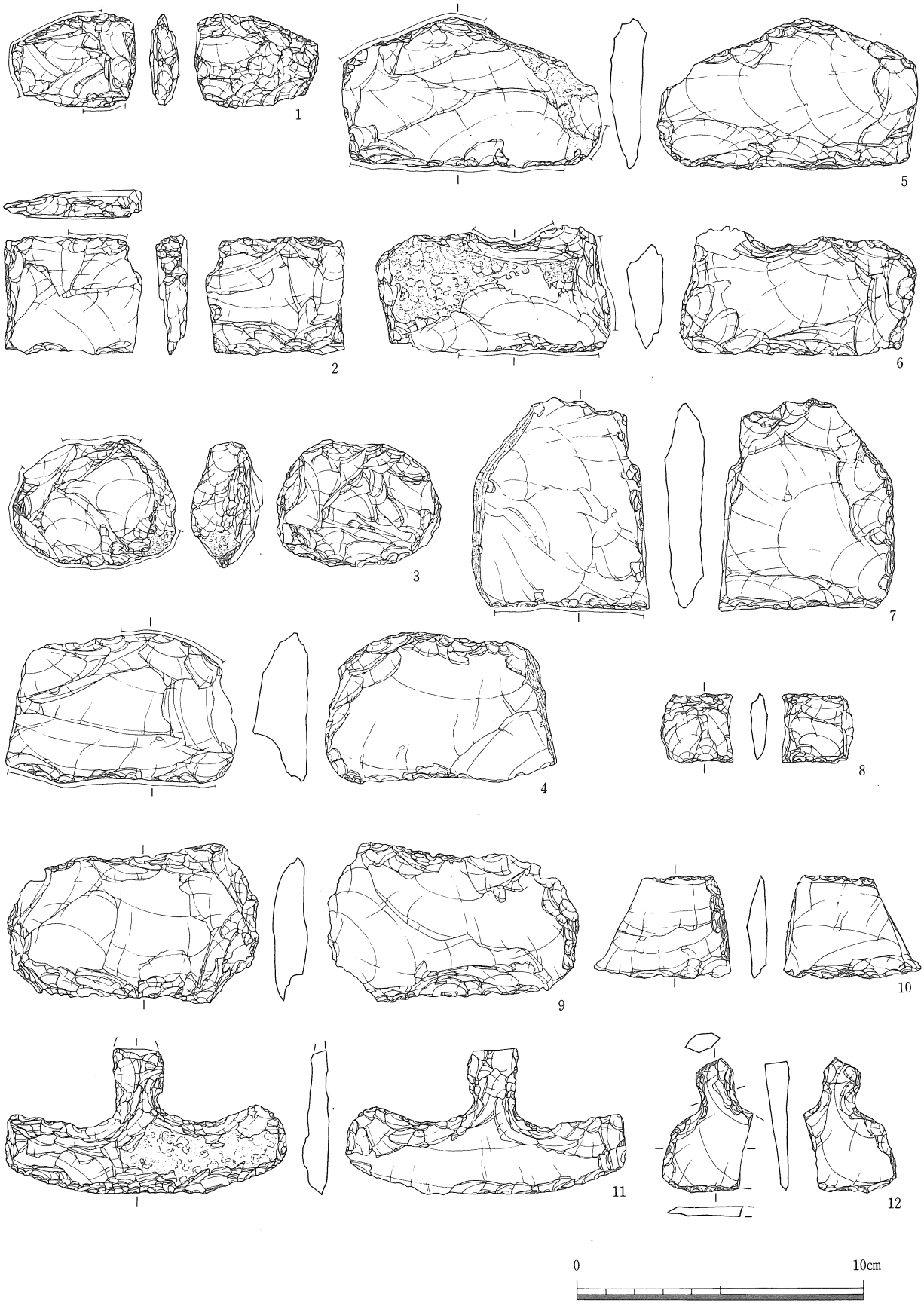
第7表　第2低地帯Ⅶ層出土石器組成表

石材	石鏃	石錐	楔形石器			石匙	削器	石包丁		石鎌	石斧		石錘	砥石	敲石	磨石	石皿	台石	二次加工剝片	剝片	石核	その他	合計	%
			楔	削	素			打	磨		打	磨												
サヌカイト	22	5	9	4	3	1	243	17		3	67				7			2	351	1252	11	1	1988	97.0
砂岩												1		2	25	2	2					1	33	1.6
結晶片岩									1		1	1	1			2			1			2	9	0.5
緑泥片岩									2			1	1			1							5	0.2
安山岩							1															3	4	0.2
その他														1	2	1				2		4	10	0.5
合計	22	5	9	4	3	1	244	17	3	3	68	3	2	3	34	6	2	2	352	1254	11	11	2059	
%	1.1	0.2			0.8	0.0	11.9		1.0	0.1		3.5	0.1	0.1	1.7	0.3	0.1	0.1	17.1	60.9	0.5	0.5		100

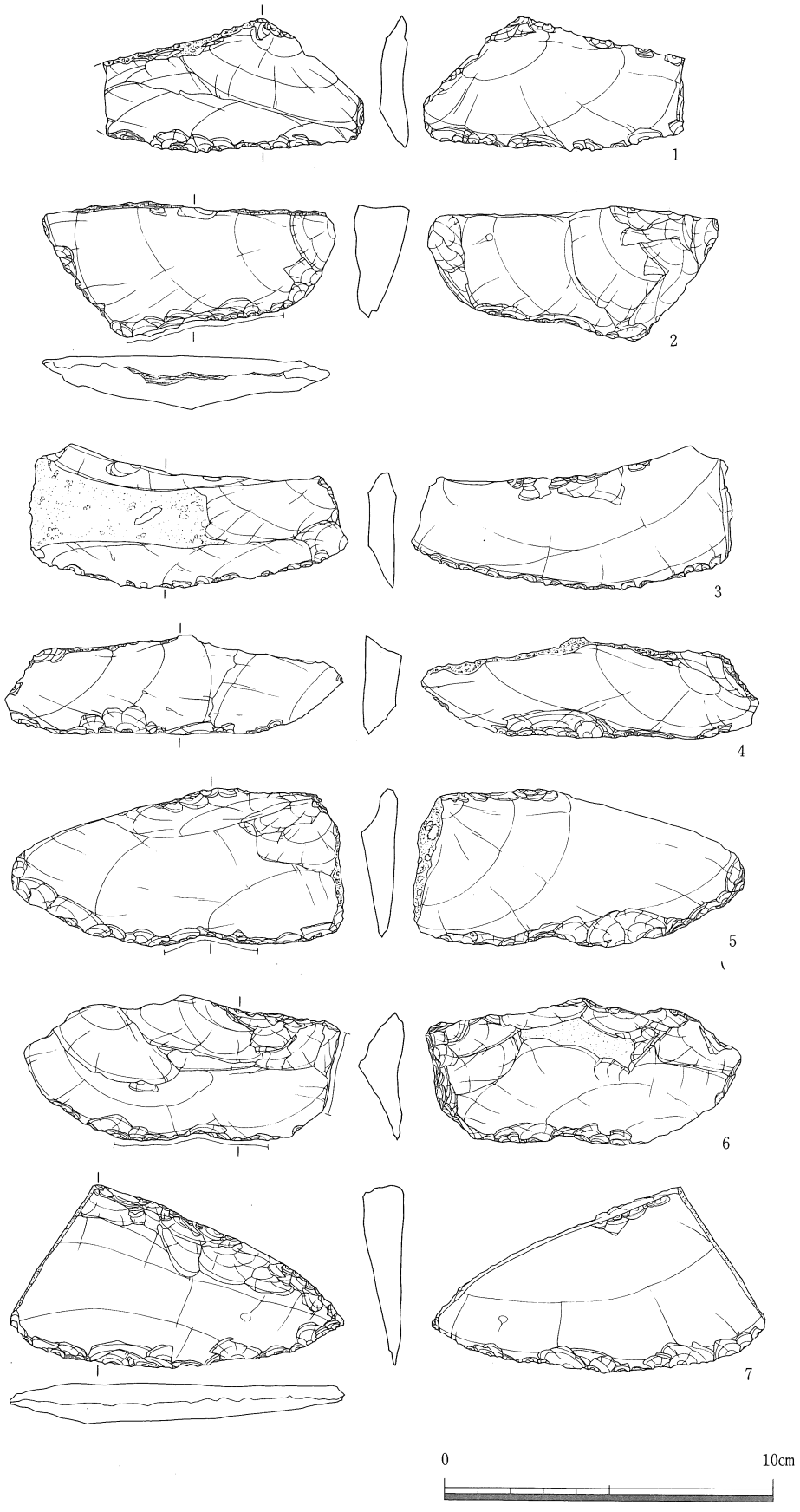
※楔：楔形石器　削：楔形石器の削片　素：楔片石器の素材　打：打製石器　磨：磨製石器



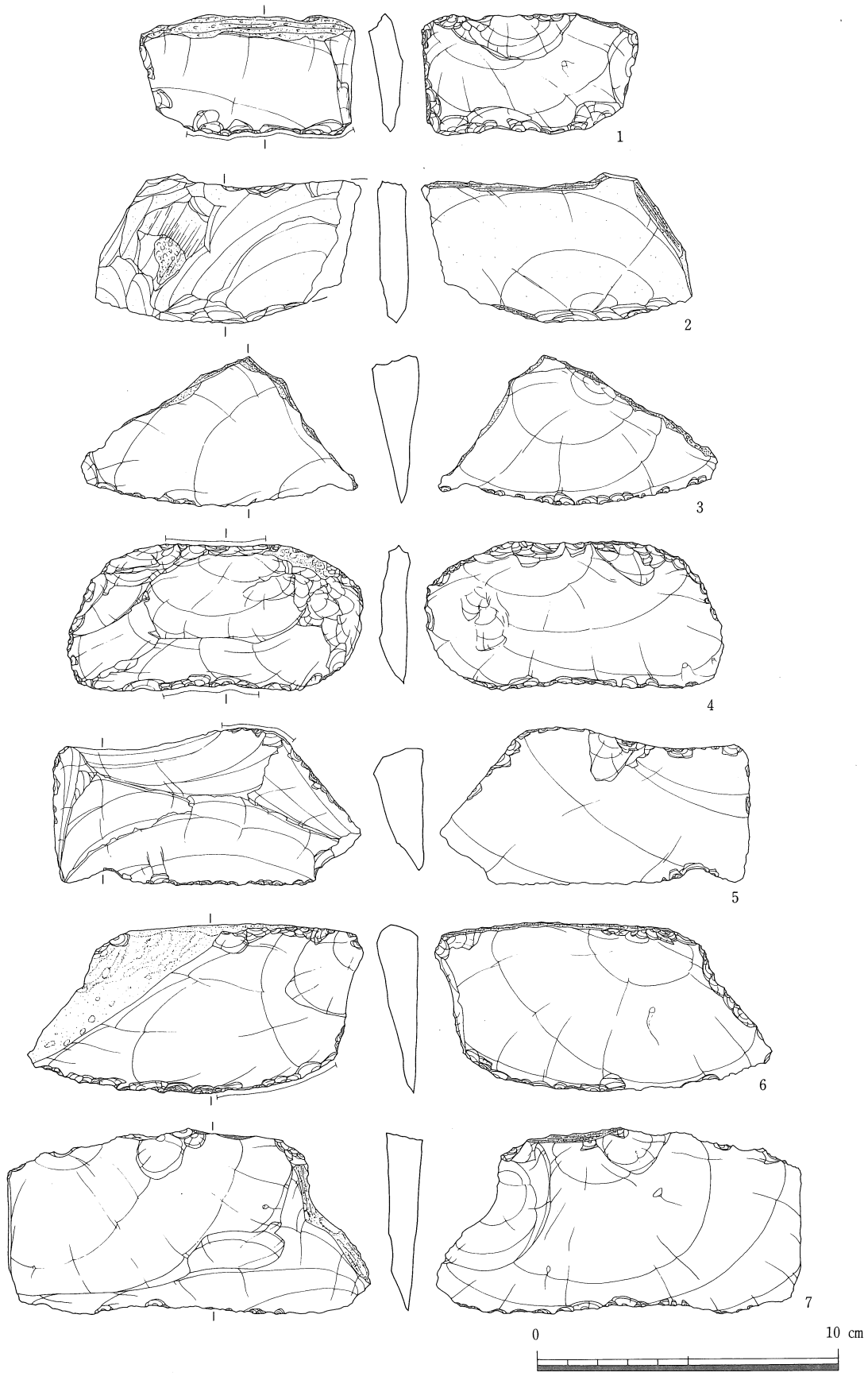
第123図　第２低地帯Ⅶ層 出土石器(1)



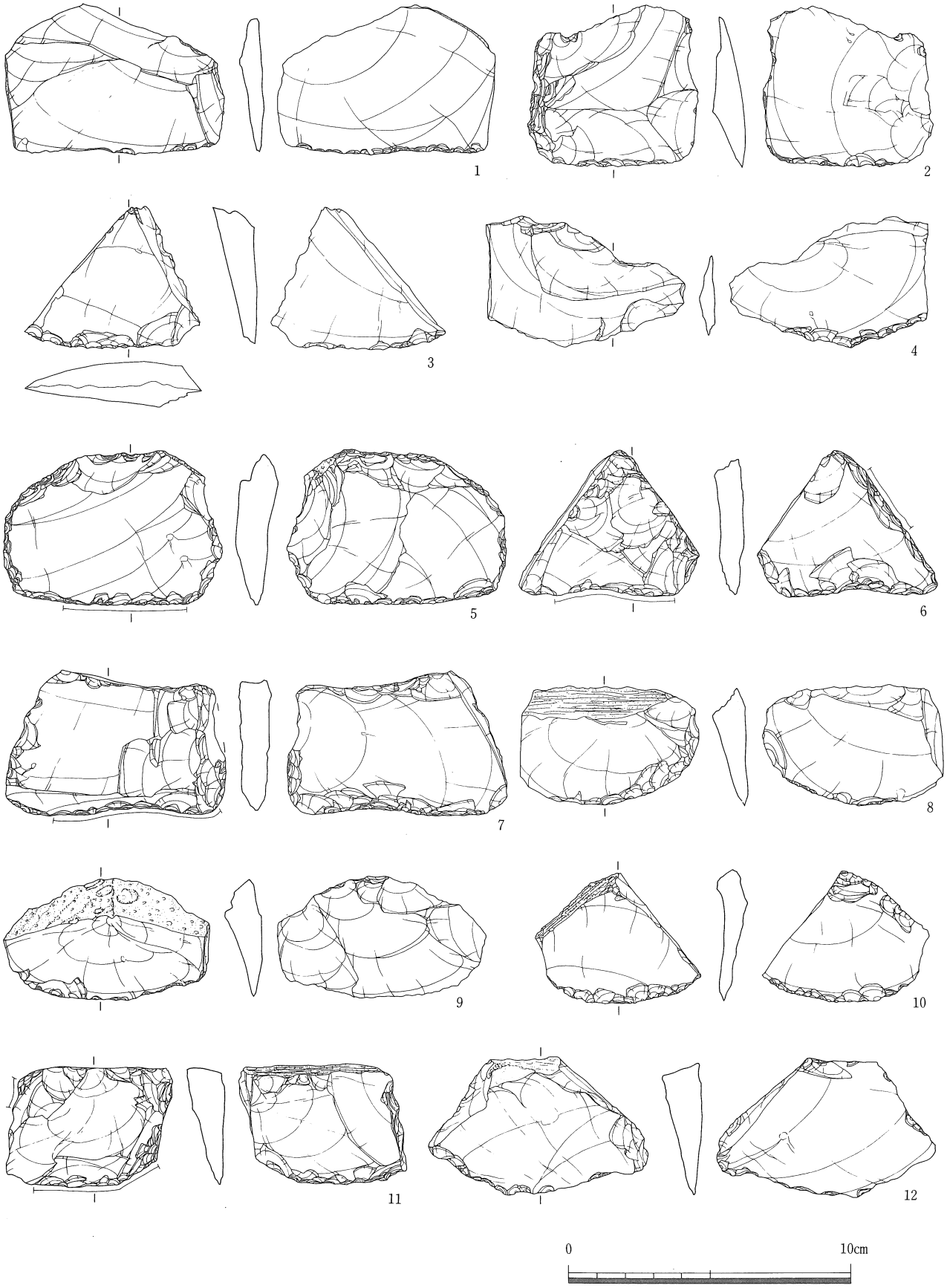
第124図　第２低地帯Ⅶ層 出土石器(2)



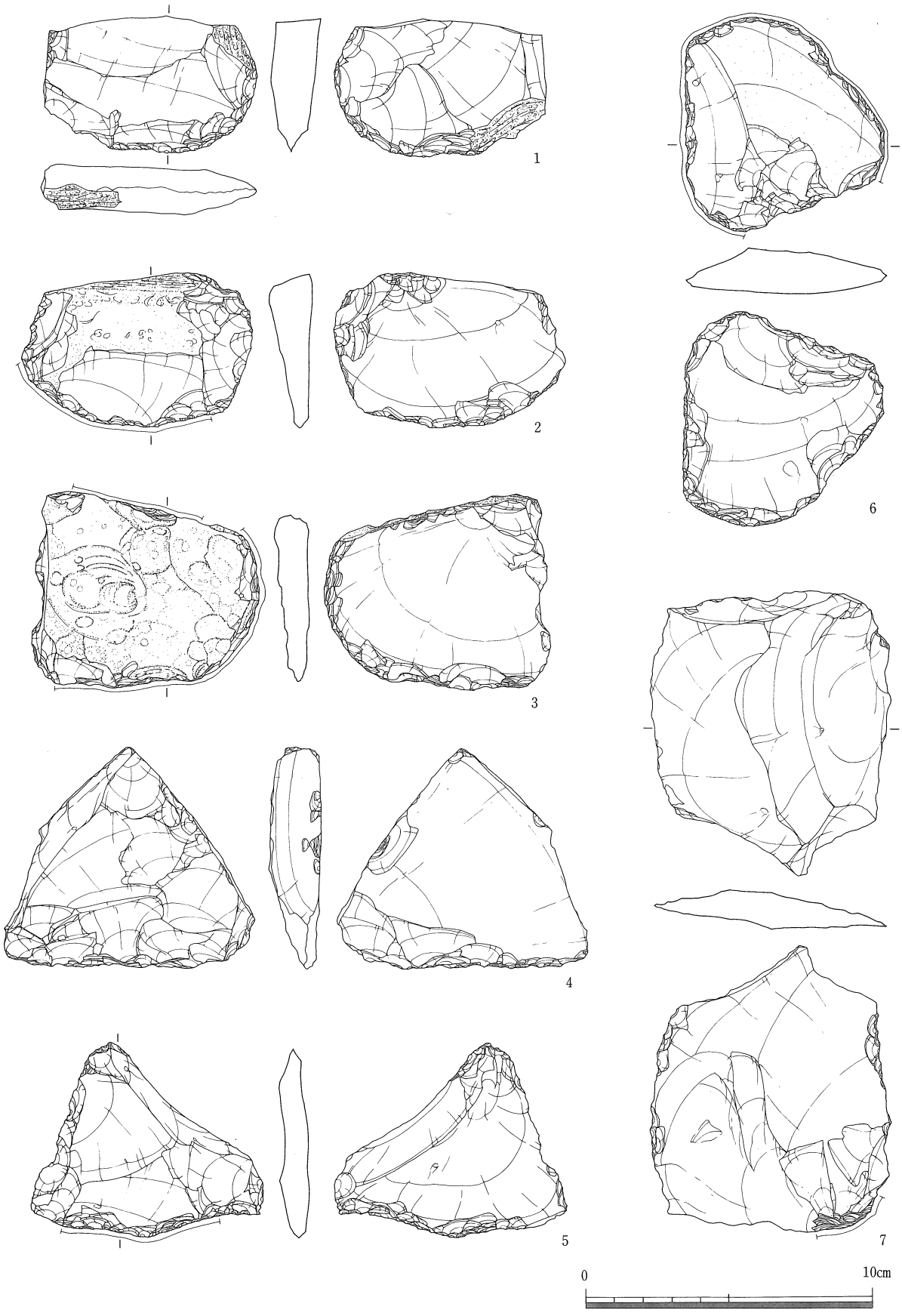
第125図　第２低地帯Ⅶ層 出土石器(3)



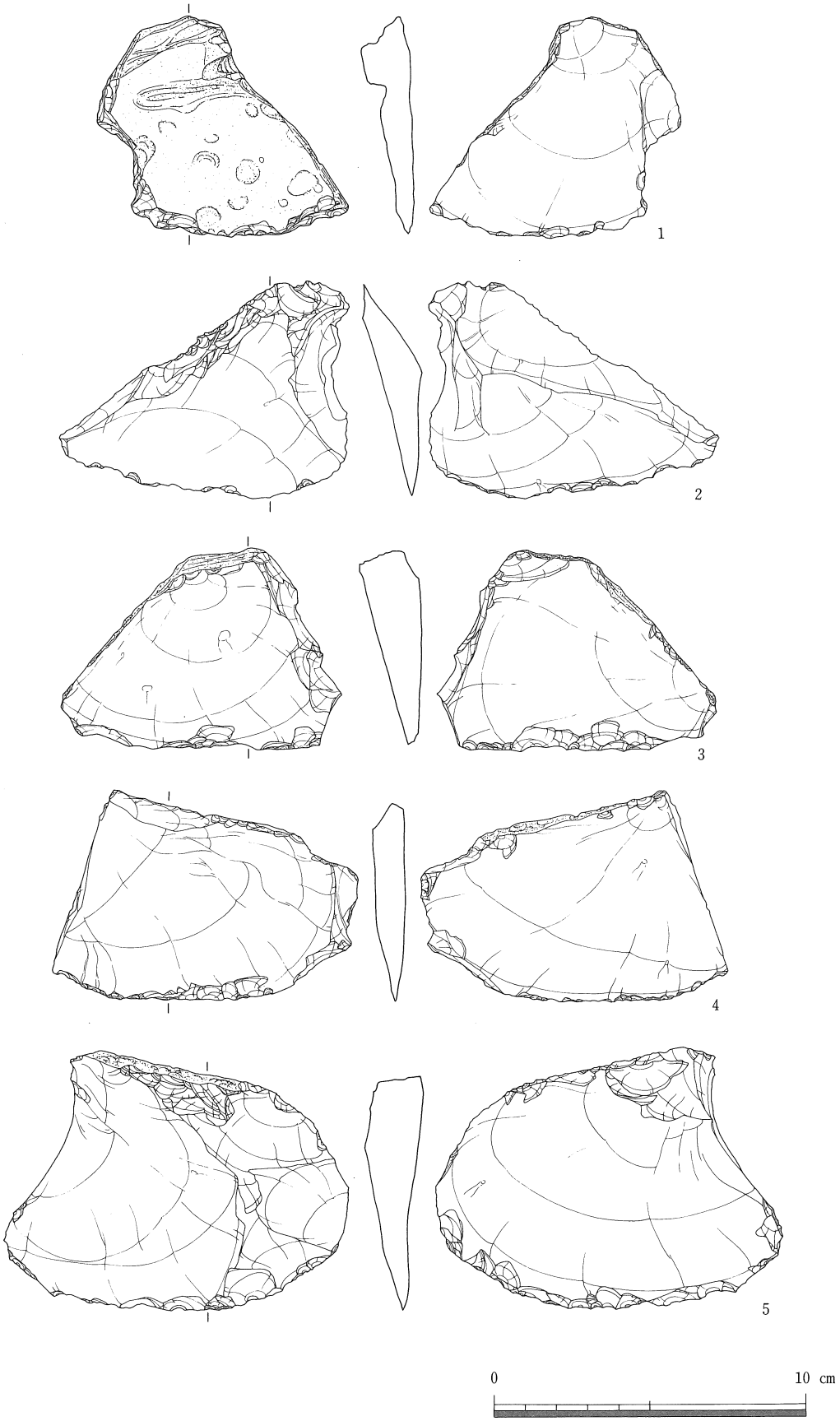
第126図　第２低地帯Ⅶ層 出土石器(4)



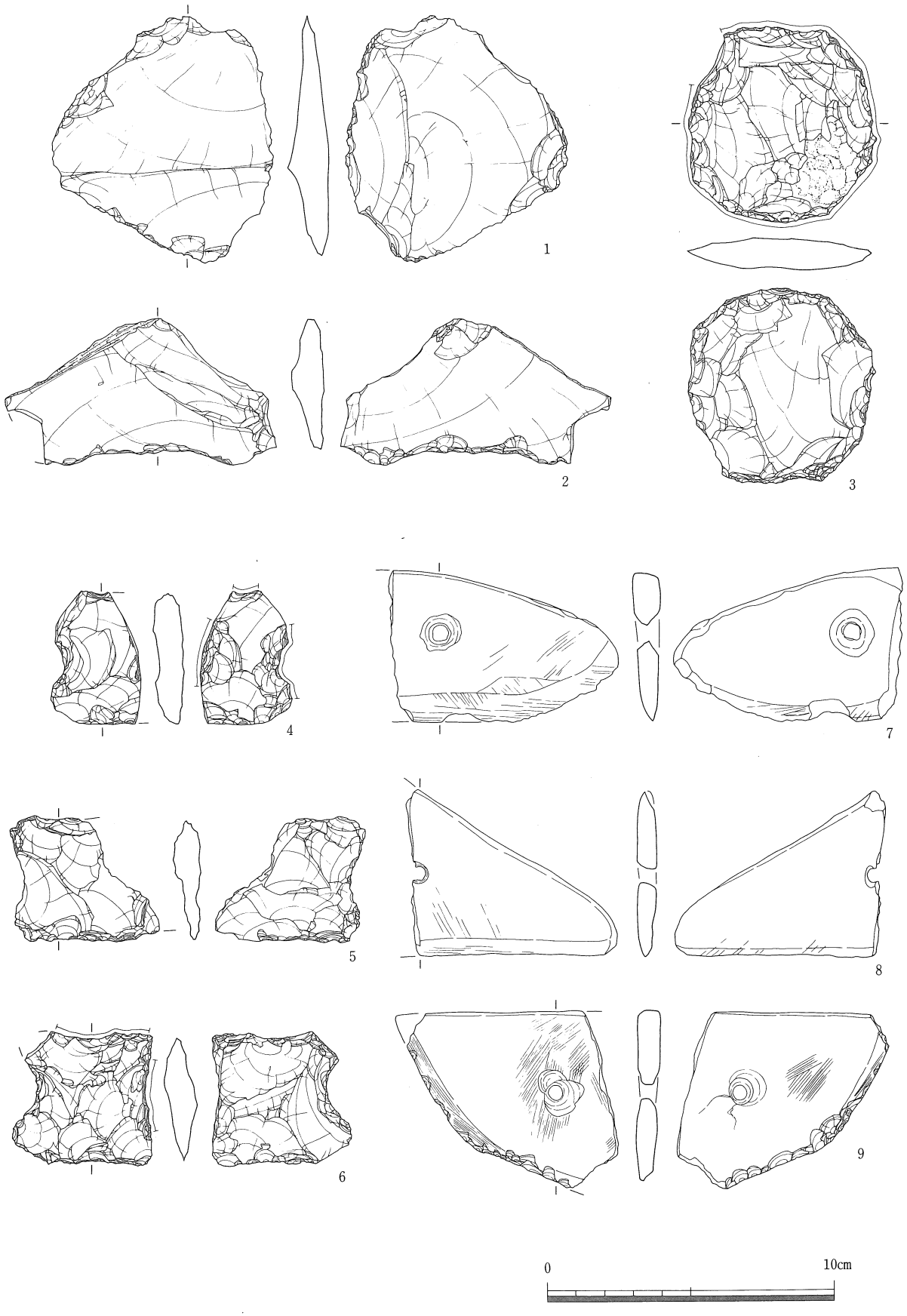
第127図　第２低地帯Ⅶ層 出土石器(5)



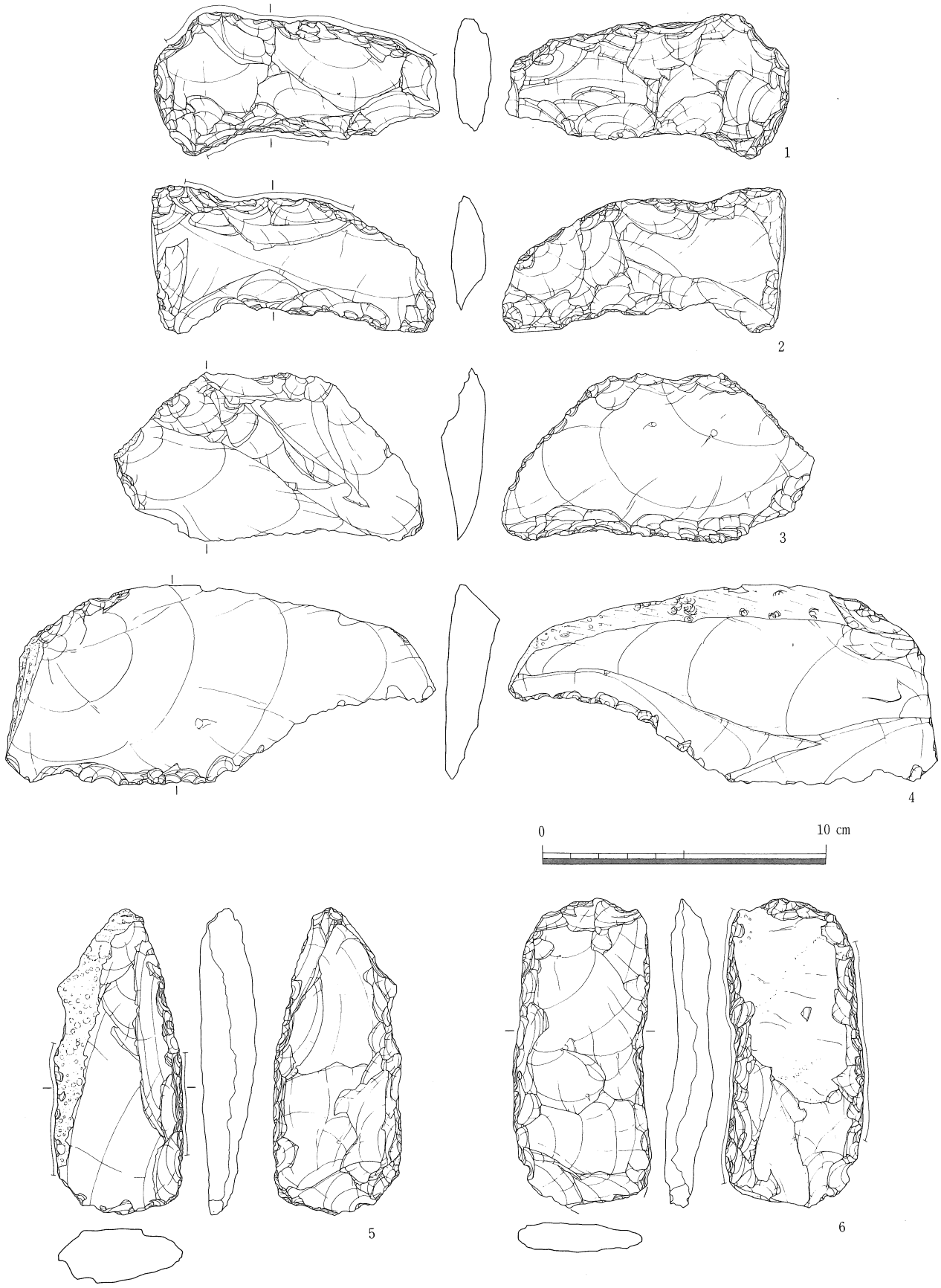
第128図　第２低地帯Ⅶ層 出土石器(6)



第129図　第２低地帯Ⅶ層 出土石器(7)

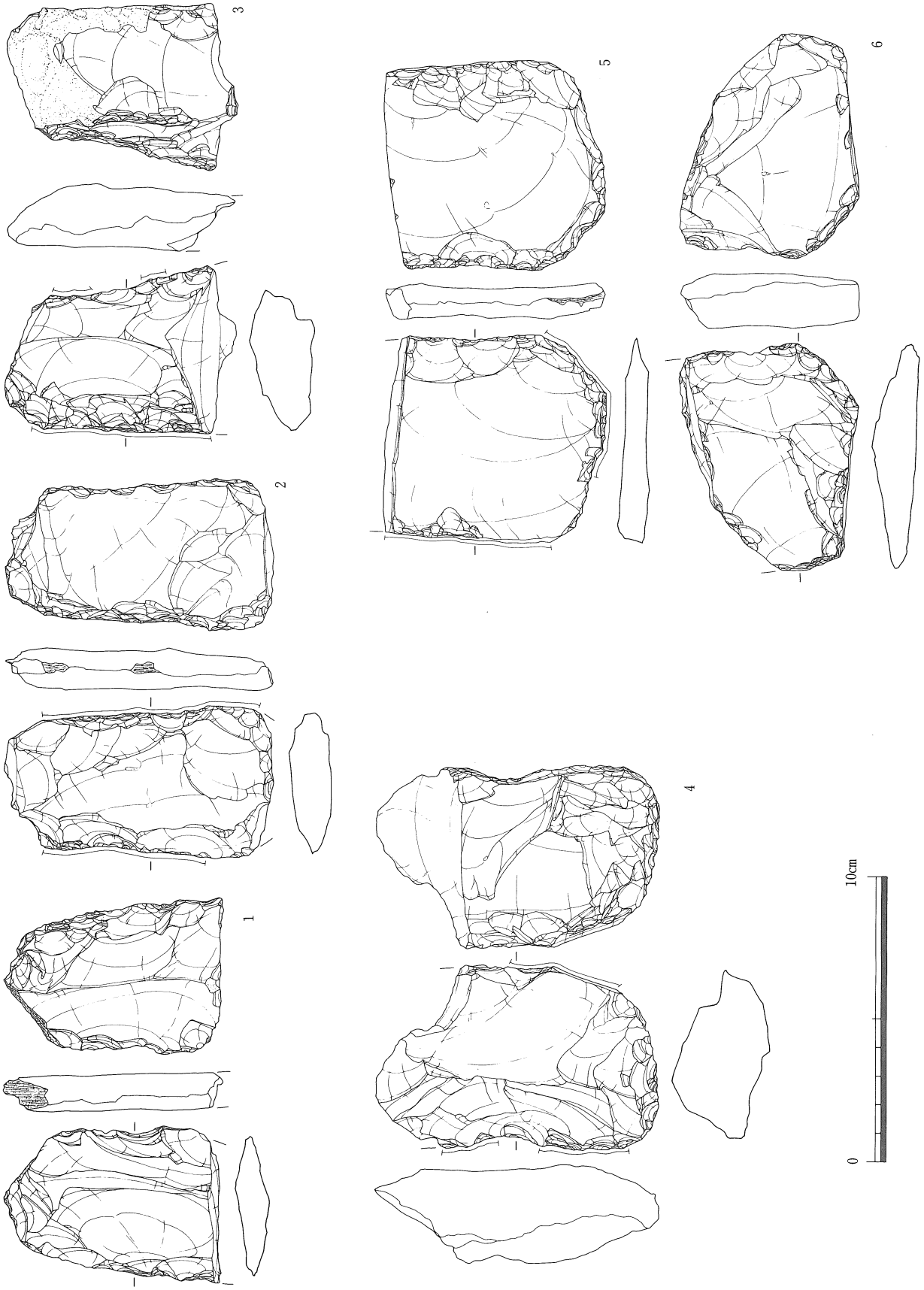


第130図　第２低地帯Ⅶ層 出土石器(8)

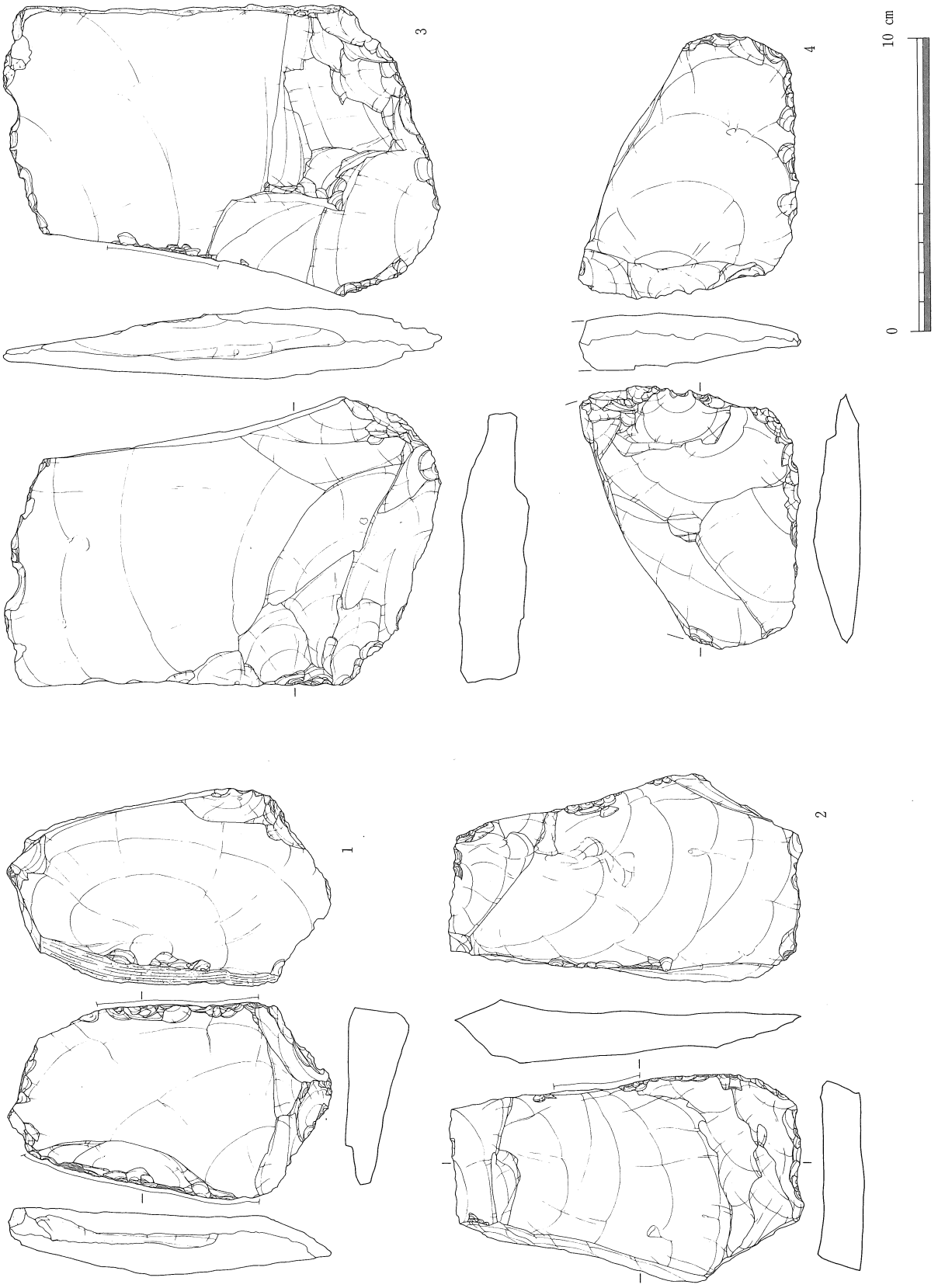


第131図　第２低地帯Ⅶ層 出土石器(9)

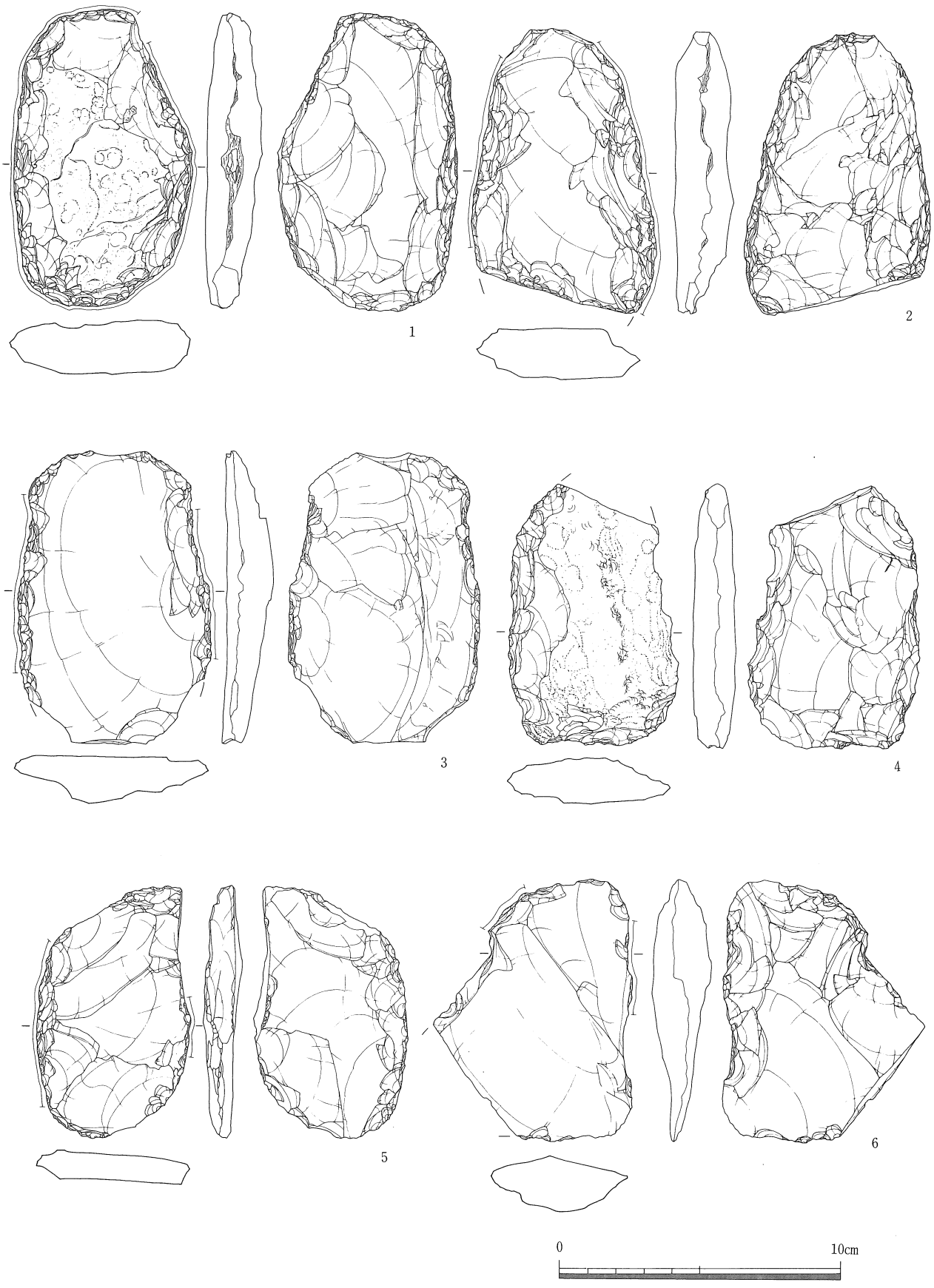
第132図　第２低地帯Ⅶ層 出土石器(10)



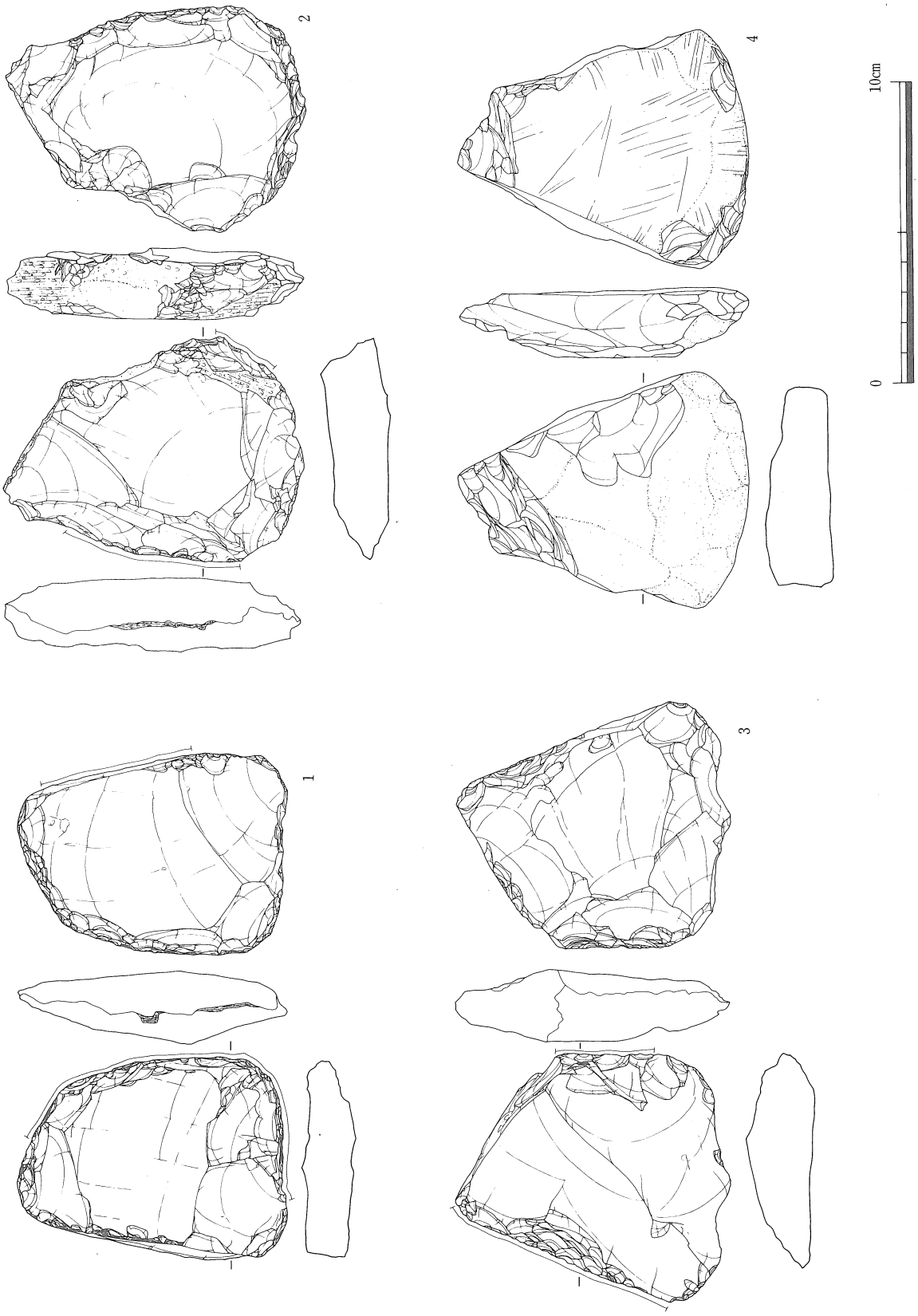
第133図　第２低地帯Ⅶ層 出土石器(11)



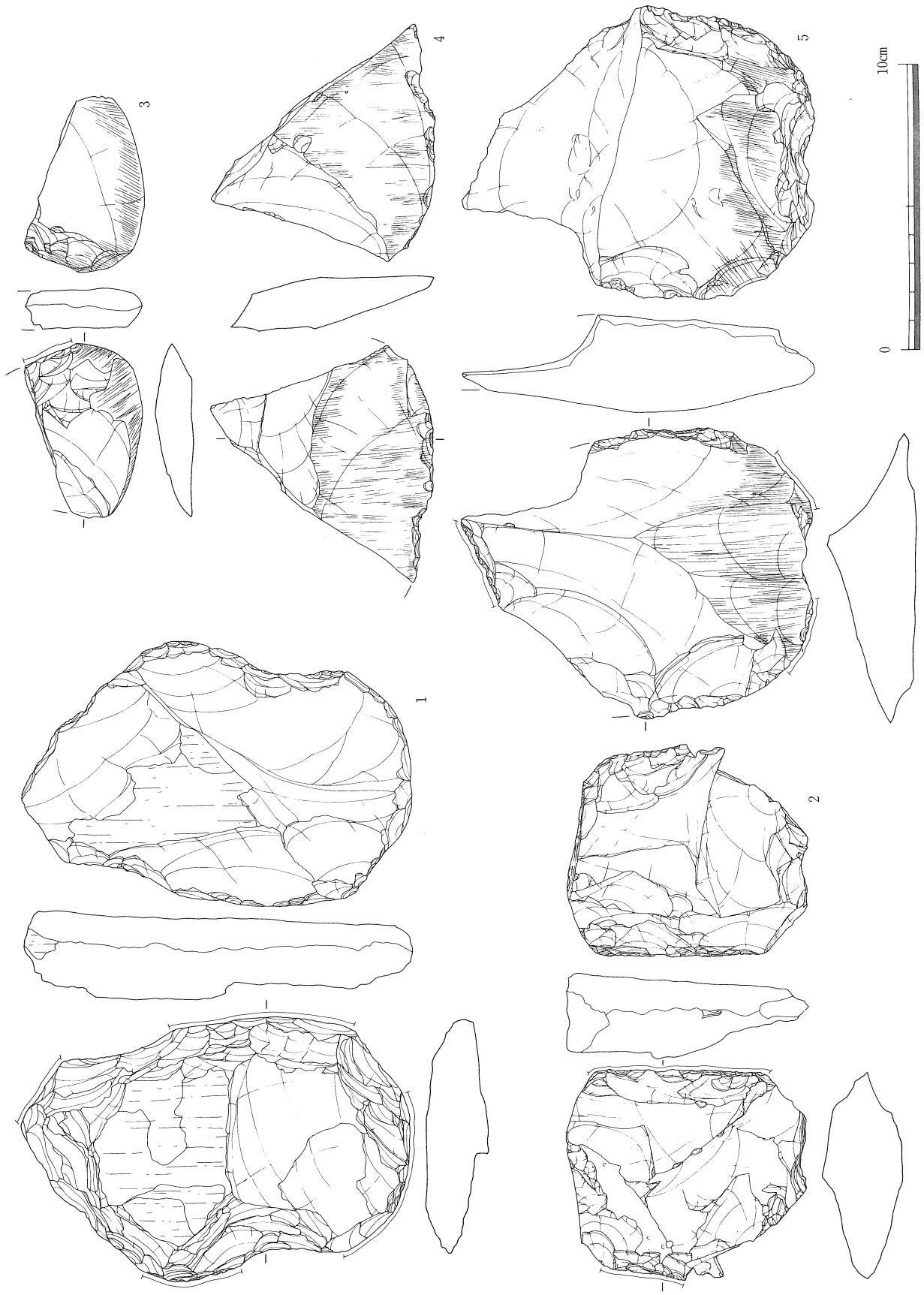
第134図　第２低地帯Ⅶ層 出土石器(12)



第135図　第２低地帯Ⅶ層 出土石器(13)

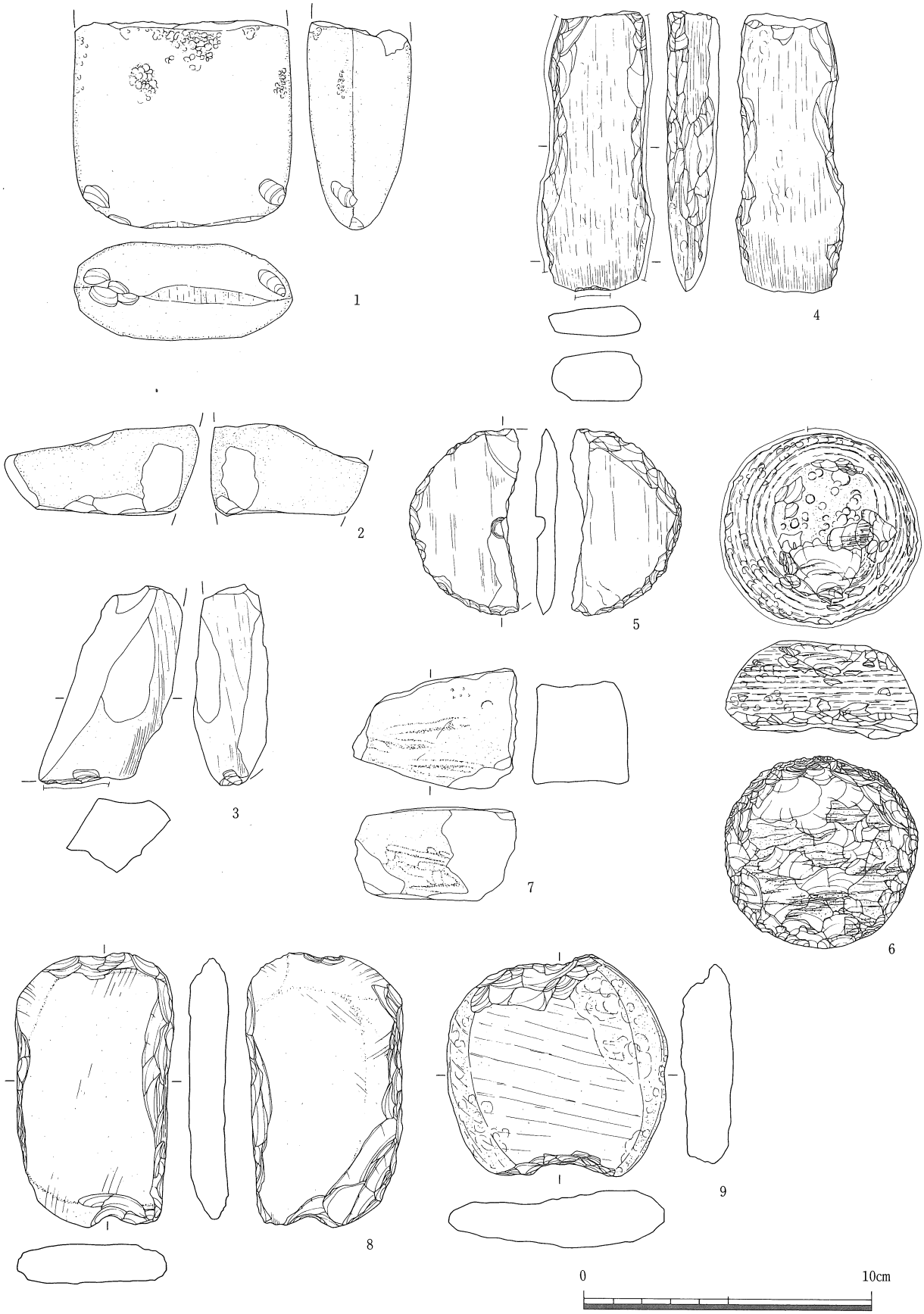


第136図　第２低地帯Ⅶ層 出土石器⑭

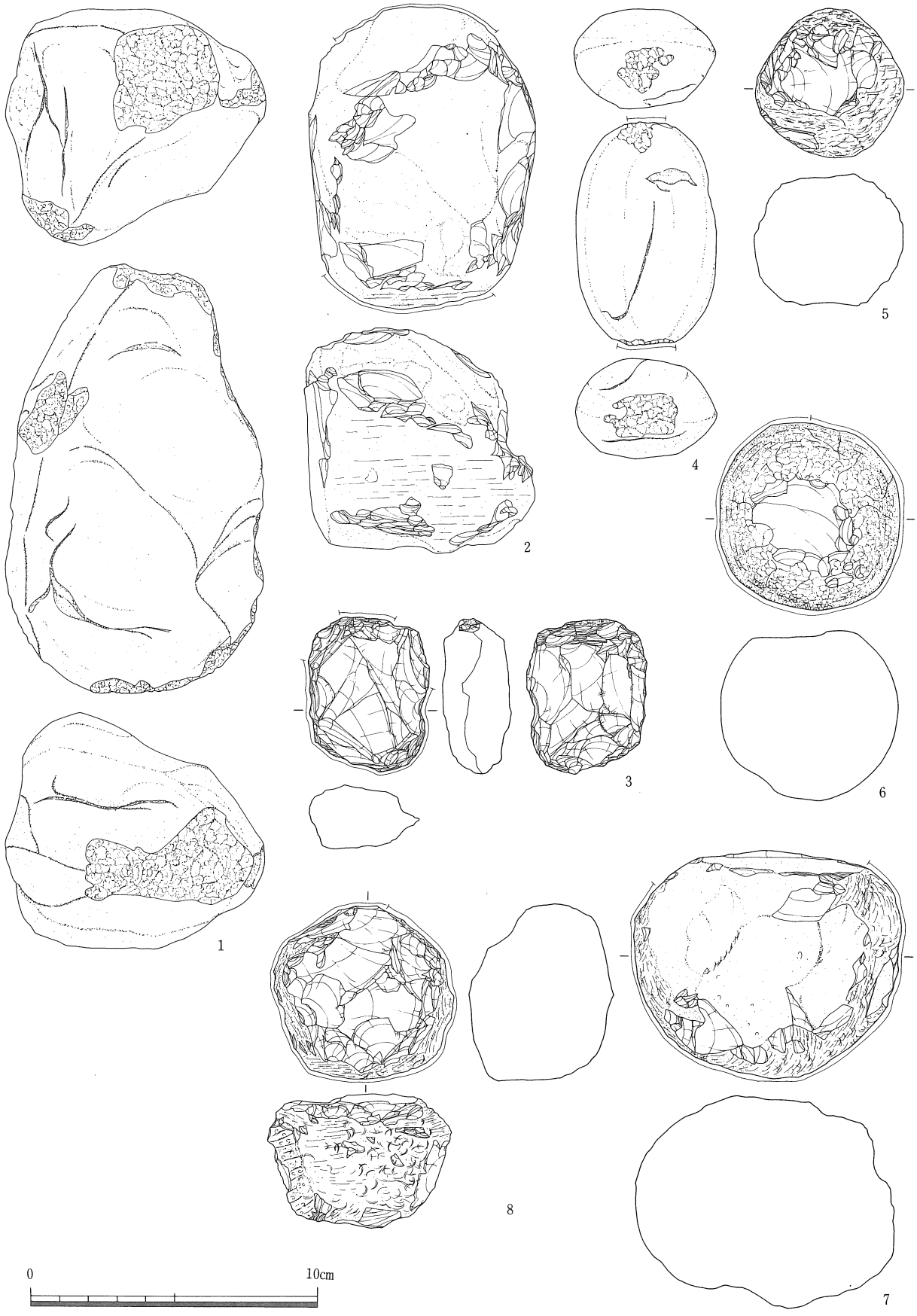


第137図　第２低地帯Ⅶ層 出土石器(15)

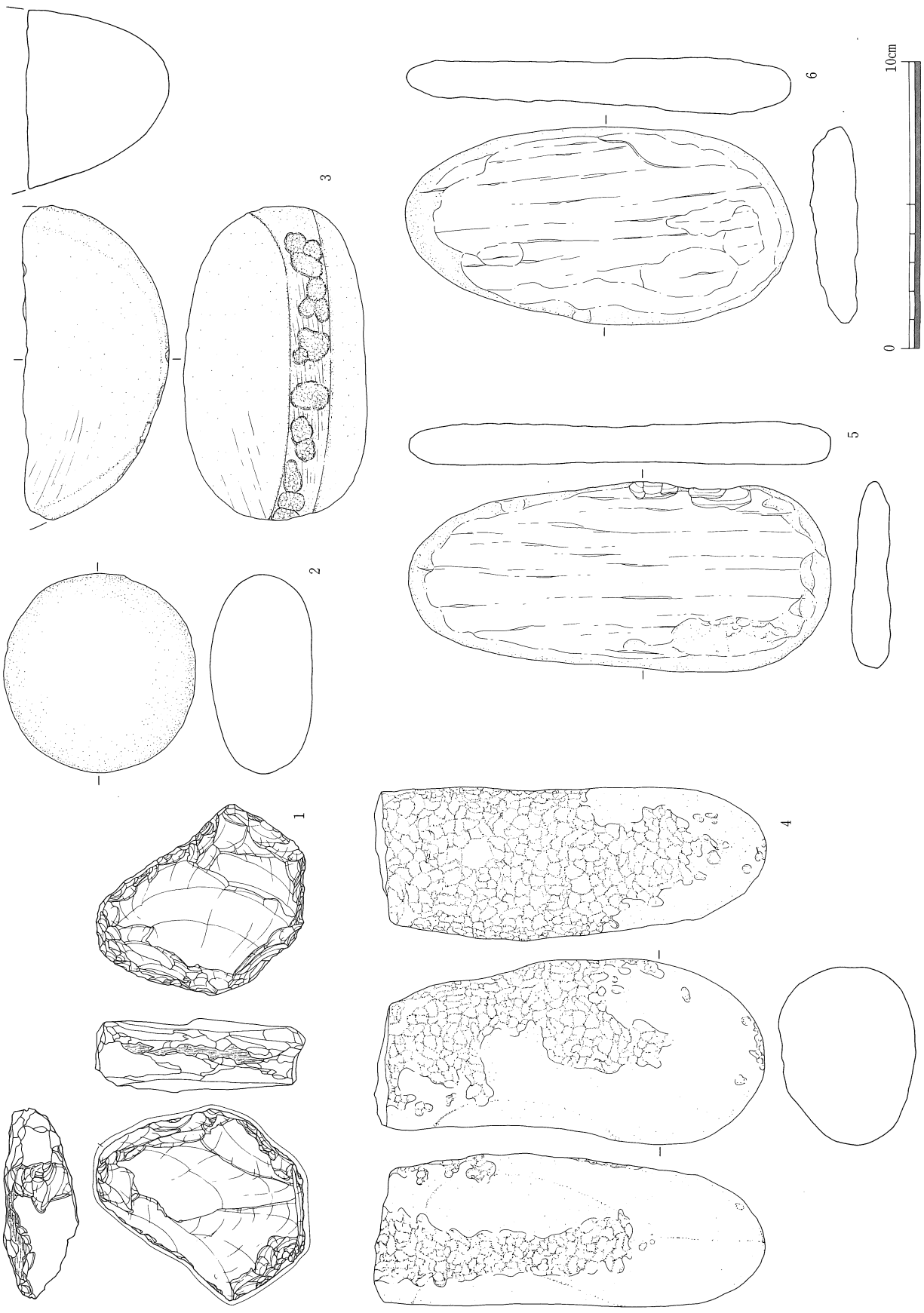
第138図　第２低地帯Ⅶ層 出土石器(16)



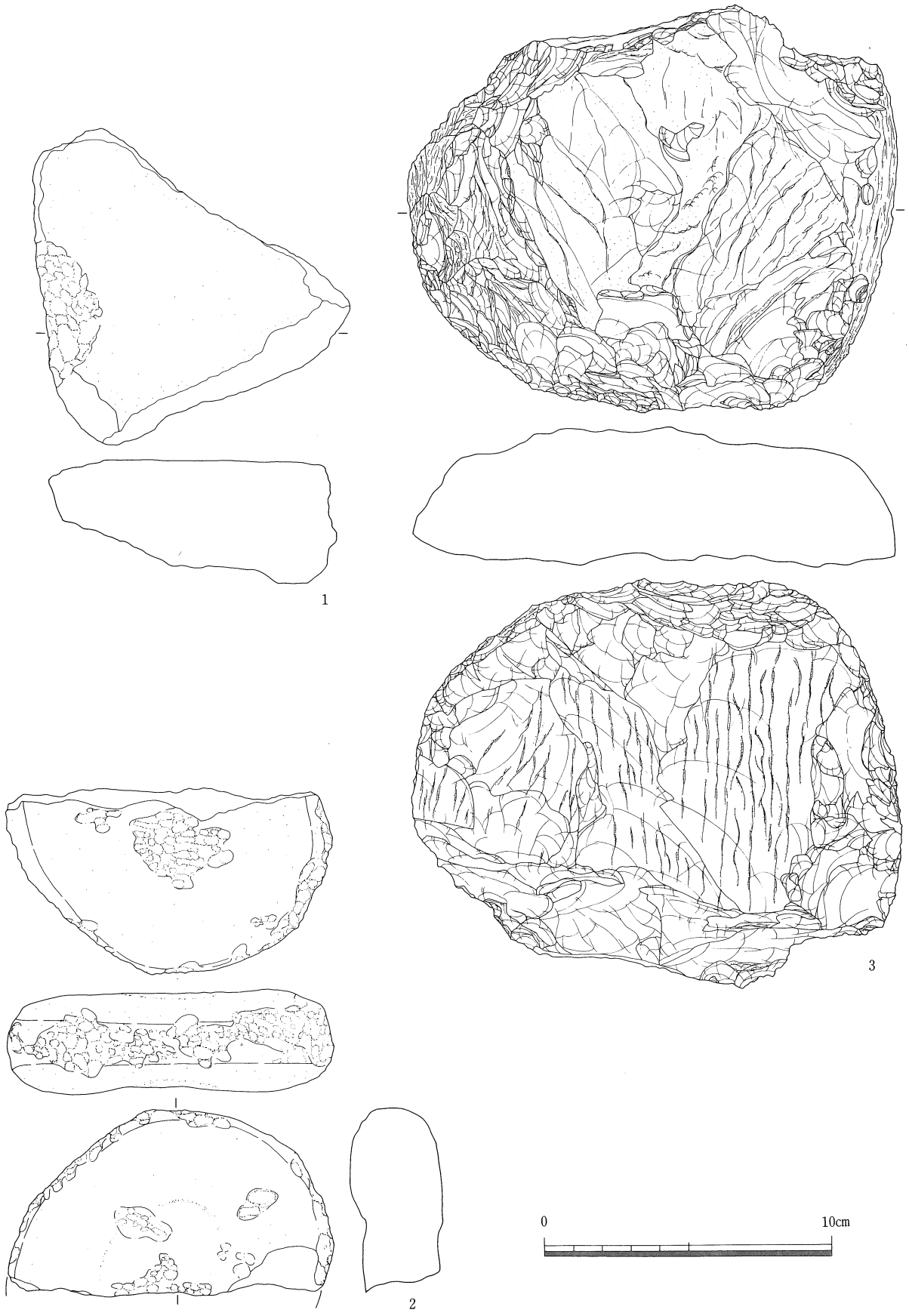
第139図　第２低地帯Ⅶ層 出土石器(17)



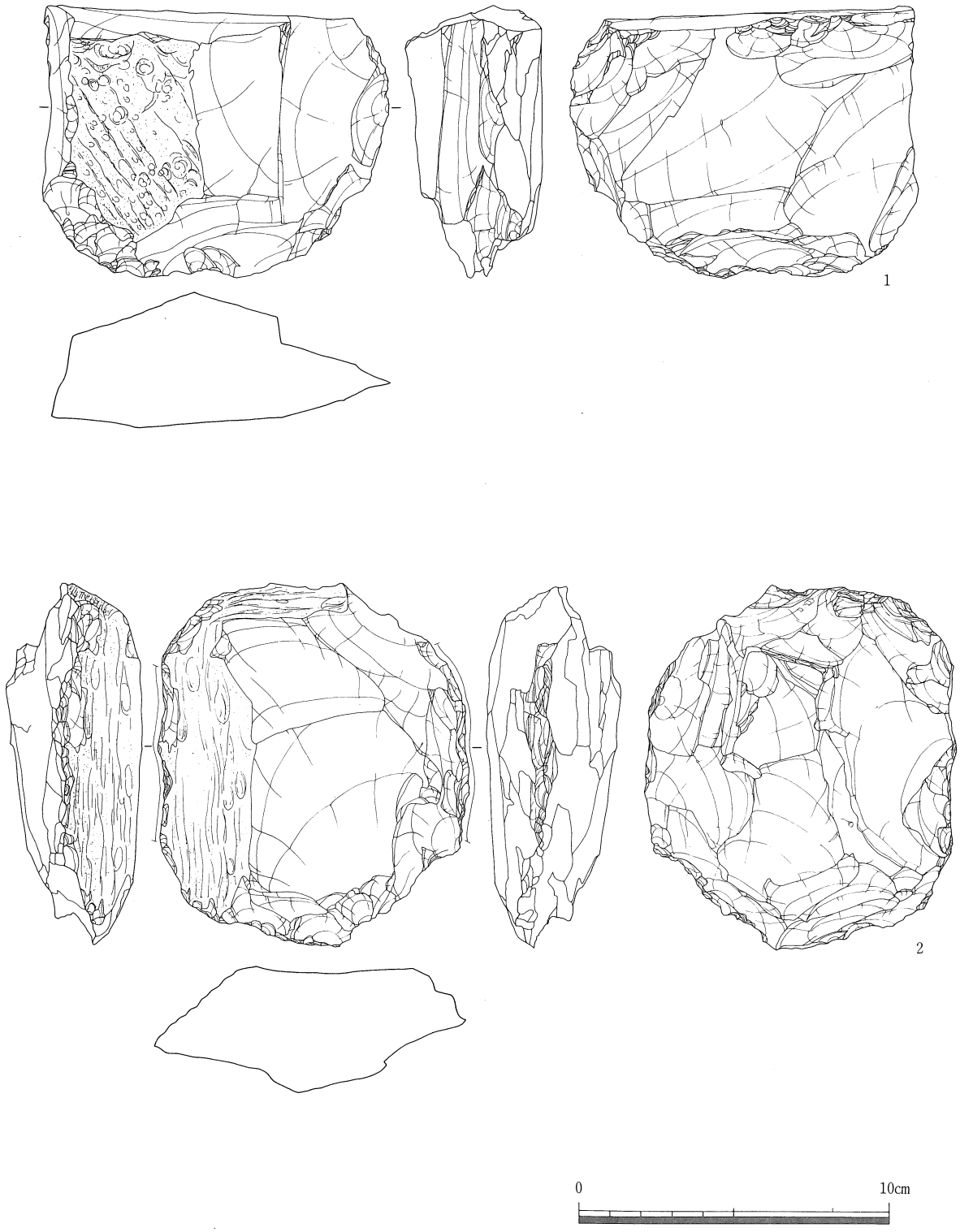
第140図　第２低地帯Ⅶ層　出土石器(18)



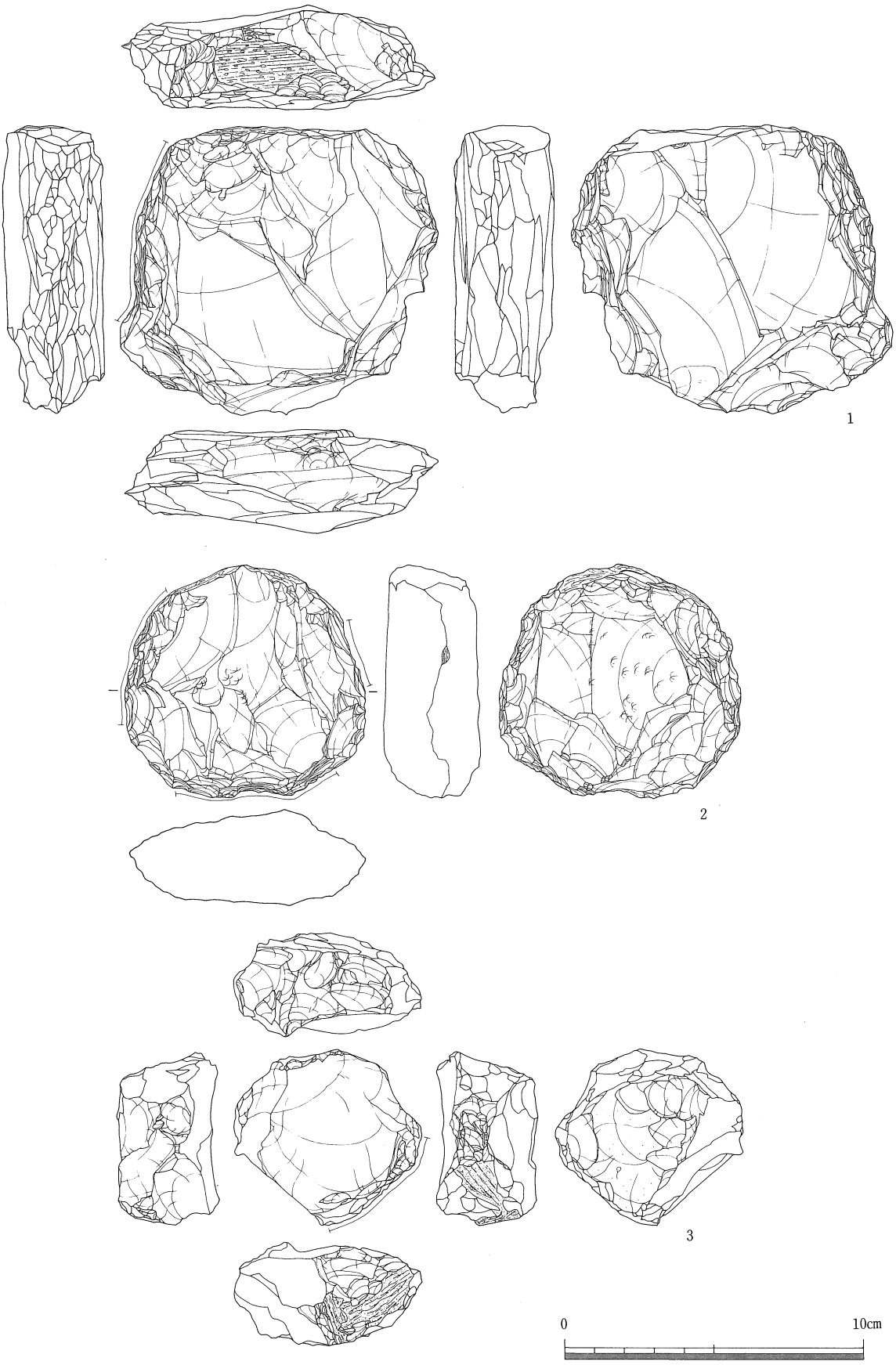
第141図　第２低地帯Ⅶ層 出土石器(19)



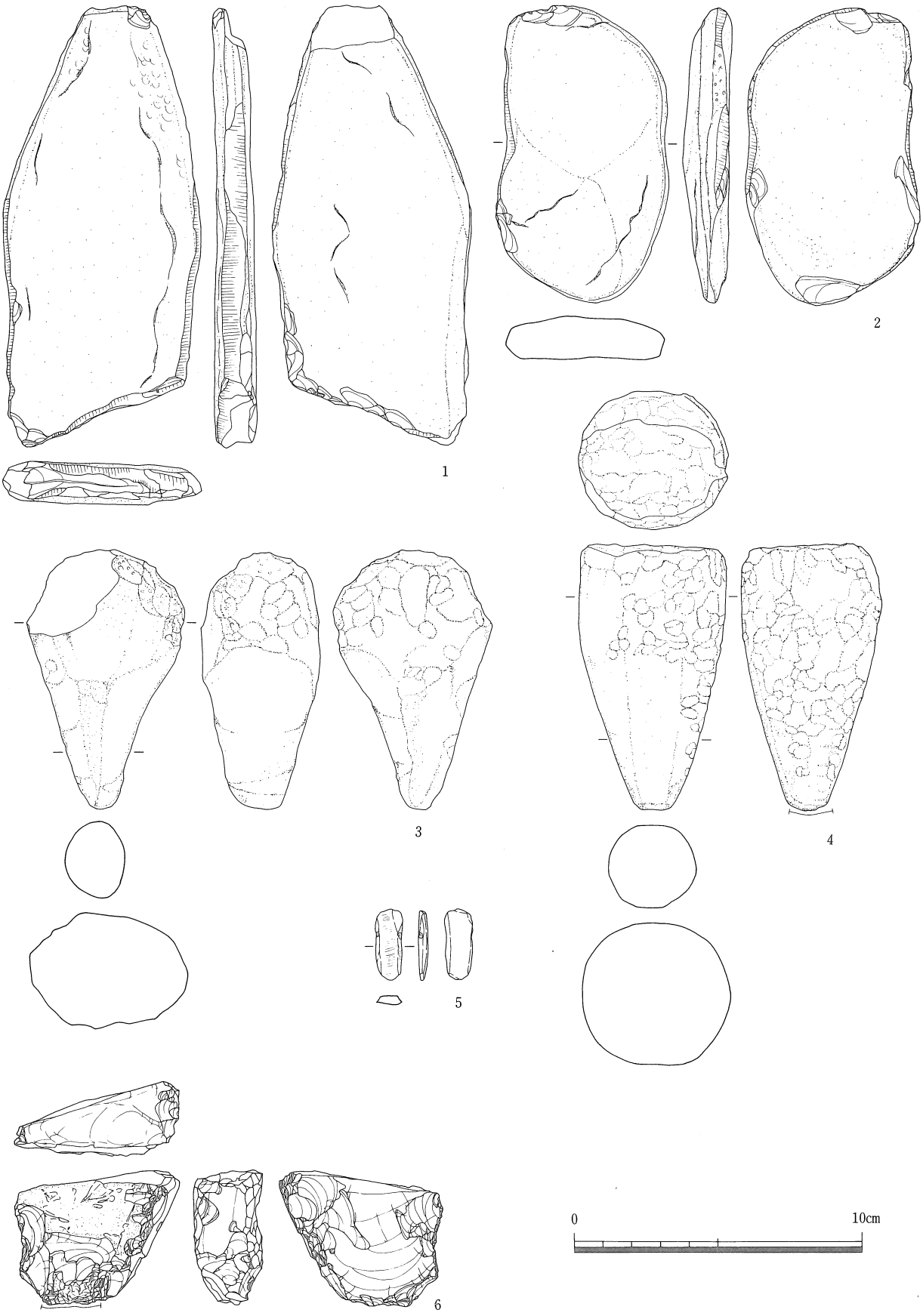
第142図　第２低地帯Ⅶ層 出土石器⑳



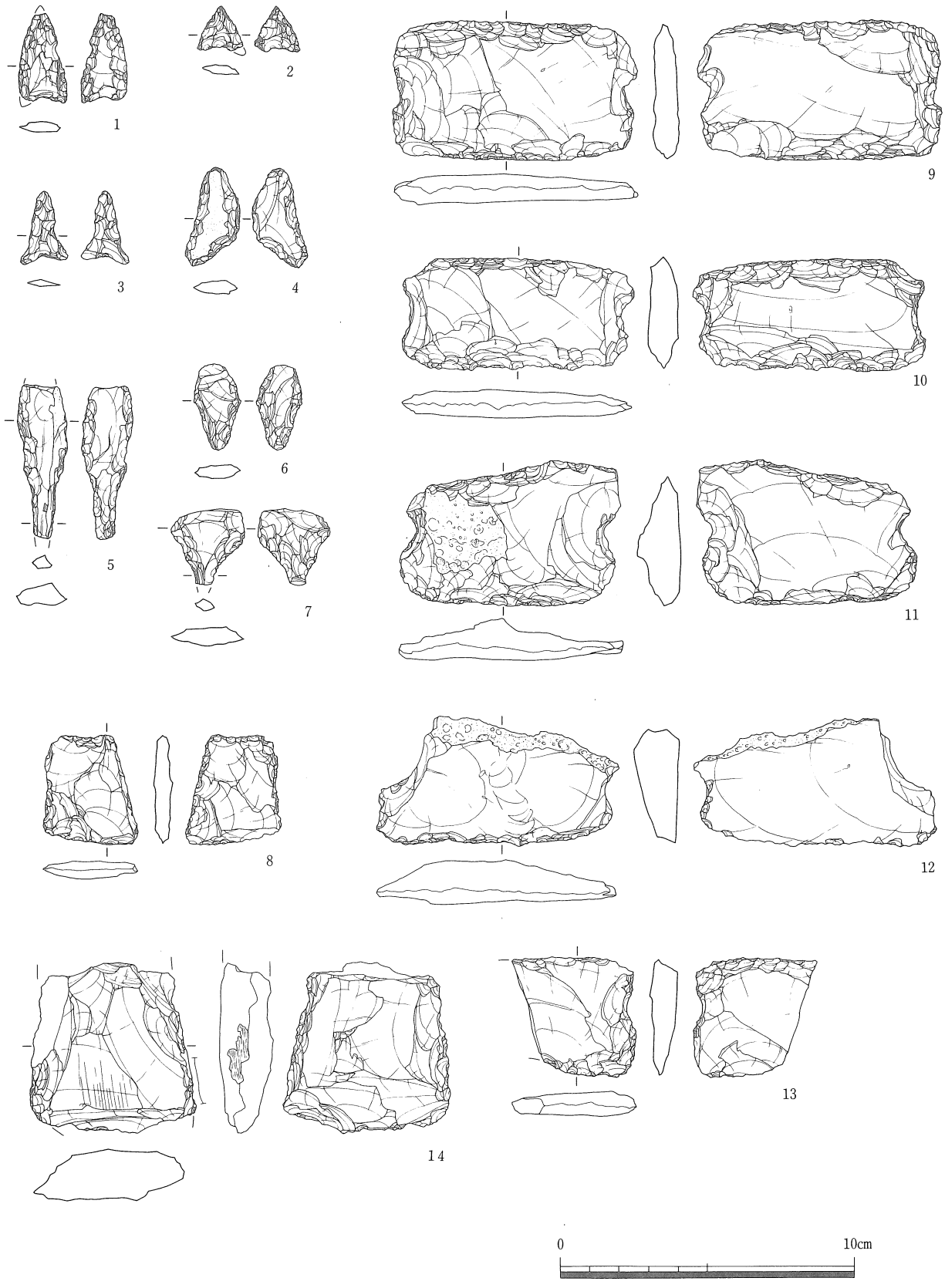
第143図　第２低地帯Ⅶ層 出土石器(21)



第144図　第２低地帯Ⅶ層 出土石器(22)



第145図　第２低地帯Ⅶ層 出土石器(23)



第146図　第２低地帯Ⅴ・Ⅵ層 出土石器

第6節　金　属　器

低地帯では図化しうる程度の金属製品は計33例検出している。鉄製品23例，銅製品4例，輸入銭6例である。

第1低地帯では流路1・2・5で鉄製品を検出している。また包含地点・層位から判断して6世紀後葉～8世紀前半の幅ですべて捉えうる。器種を特定し得た資料は計13点で，うち8点は流路2で出土している。構成は鉄鏃8点，曲刃鎌3点，刀子1点，槍先1点となる。農耕具類に比して，武具特に鉄鏃の多さが注目できる。ほぼ同時期と見て良いであろうIII期の竪穴住居から出土している鉄製品ではU字形鋤（鍬？）先を始め多器種を含むのとは対象的である。また鉄鏃で刃部形状の判明している資料では細身の尖根鏃は僅かに1例のみで他は全て台形状を呈する直箭刃鏃である。このことも一般的な比率とは掛け離れている。

（第147図1～9）は流路2出土資料である。（1）は両端を欠損するが鉄鏃茎であろう。断面方形を呈する。（2～4）は直箭刃鏃で茎は方形を呈する。篦被は確認できない。（5）は両刃の尖根鏃。先端は僅かに膨らみ，茎中位篦被が明瞭に観察できる。（6）はやや小形過ぎるが断面形状から判断して刀子であろう。基部は略円形を成し，刀身との境は僅かな抉りを入れる。模造品の可能性もある。（7）は保存状態は不良であるが槍先である。基部は袋状を成し，刃部は細身で長く比較的鋭い鏑が認められ断面菱形を呈する。（8・9）は曲刃鎌。（9）は前半部を欠損する。両者とも基部をやや太く作り折返しが確認できる。湾曲は余りきつくない。

（第148図1～4）は流路5資料。（1）は先端両隅を欠くが直箭刃鏃。（2・3）は茎で断面方形を呈する。（3）は残存部上端の広がりから見て直箭刃鏃の可能性が高い。（4）は劣化が進行し細片化しているが曲刃鎌であろう。基部に僅かに折返しが認められる。

第3低地帯では水田2上面，流路3で各1例の鉄鏃を出土したにとどまる。前者は共存資料から見て6世紀後葉～8世紀前半に比定できる。後者は9～12世紀の幅で捉えうる。

（第148図5）は台形状の鏃身を持つが先端部を欠損する。第3低地帯の水田2上面で検出している。（第148図6）は流路3資料でやはり台形状の鏃身を持つ鉄鏃である。鏃身下端にやや突出気味の篦被を作り出す。

第4低地帯では流路6を中心に8例確認している。

（第148図7）は断面矩形の鉄棒。一方に向かって細くなるが先端を欠損する。用途不明品である。流路4出土資料。（第148図8）はU字形鋤（鍬）先。先端部角がやや張り出し，U字形と言うよりも台形状に近い。台座装着部は袋状を成す。流路3出土資料で13～14世紀で捉えうるであろう。

（第148図9～第149図2）は流路6出土資料で11世紀末～13世紀で捉えうる。ただし鉄鏃（第148図9・10）は先行流路包含資料の混入の可能性があり，やや遡るかも知れない。

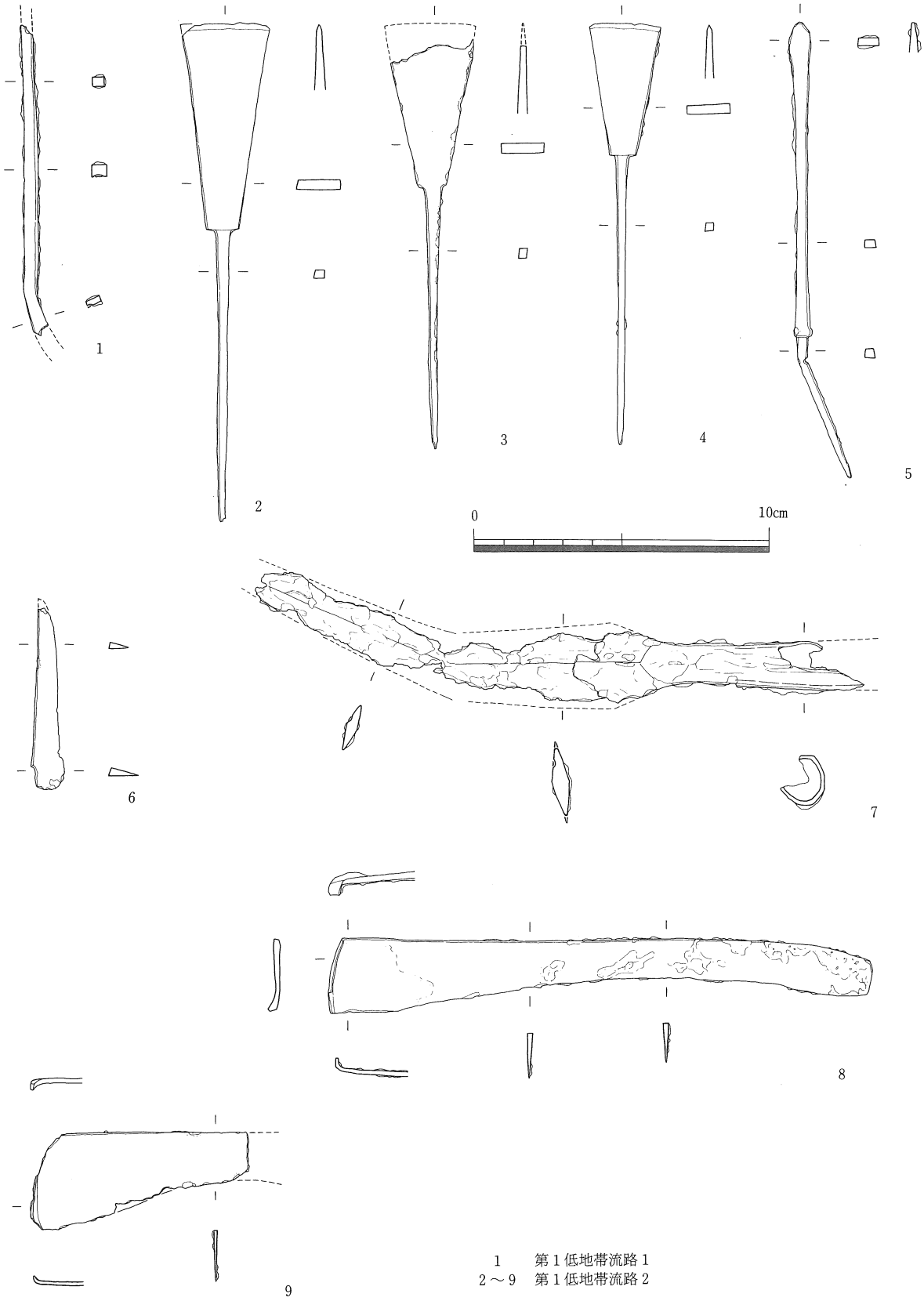
（第148図9）は台形状の鏃身を持つ鉄鏃。先端を欠損している。鏃身下端にはやや突出気味の篦被を作り出す。（10）は鏃身を欠損するが鉄鏃であろう。残存部の茎上端が開き気味であるので尖根鏃ではなく，やはり台形状の鏃身を持つ型であろう。（11）は鉄釘，断面四角形で上端を折り曲げる。（第149図1）は断面矩形の鉄棒で一端を鋭く尖らす。（第148図7）に類似している。

（第149図3）は第4低地帯流路7出土の小刀。13世紀代に比定できる。錆の付着は著しいが比較的原

形を良くとどめる。刃の一部と茎末端を欠く程度である。茎には木質が明瞭に付着し，末端部よりに一孔「目釘穴」が確認できる。

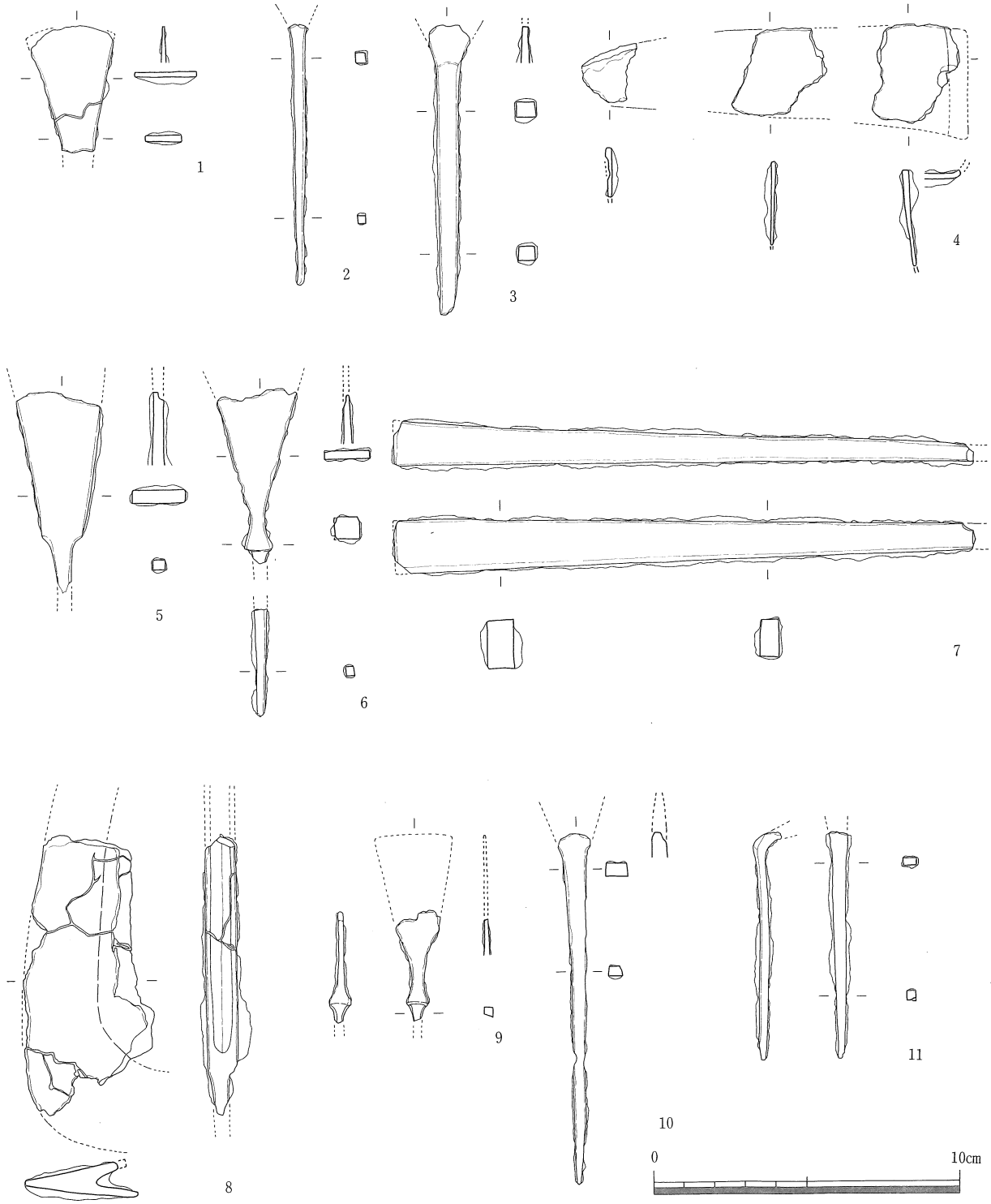
銅製品は4例ある。第2低地帯1例と第4低地帯流路1で3例である。（第149図4）は第2低地帯出土で弥生時代後期に位置付けられる。柳葉形の銅鏃。比較的細身で茎も長い。鏃身中央の両面にはかなり明瞭に鎬が確認できる。（第149図5）は銅鈴である。中央が僅かにくびれただるま形に近い形状を持ち，長部に薄い方形の釣り手部を持つ。（第149図6・7）は用途不明の銅板。乱雑に折り曲げられ，中途で欠損している。上記3例は第4低地帯流路1最上層ないしは上面遺構面で検出しており，12～13世紀代に比定できる資料である。

輸入銭6例は第4低地帯流路2・3境界部に形成された不明遺構ＳＸⅢ11内で一括出土した資料である。開元通宝（845年），淳化元宝（990年），至道元宝（995年），熙寧元宝（1068年），元豊通宝（1078年），元佑通□（1086年）で，初鋳年代11世紀末までの輸入銭を含んでいる。（大久保）



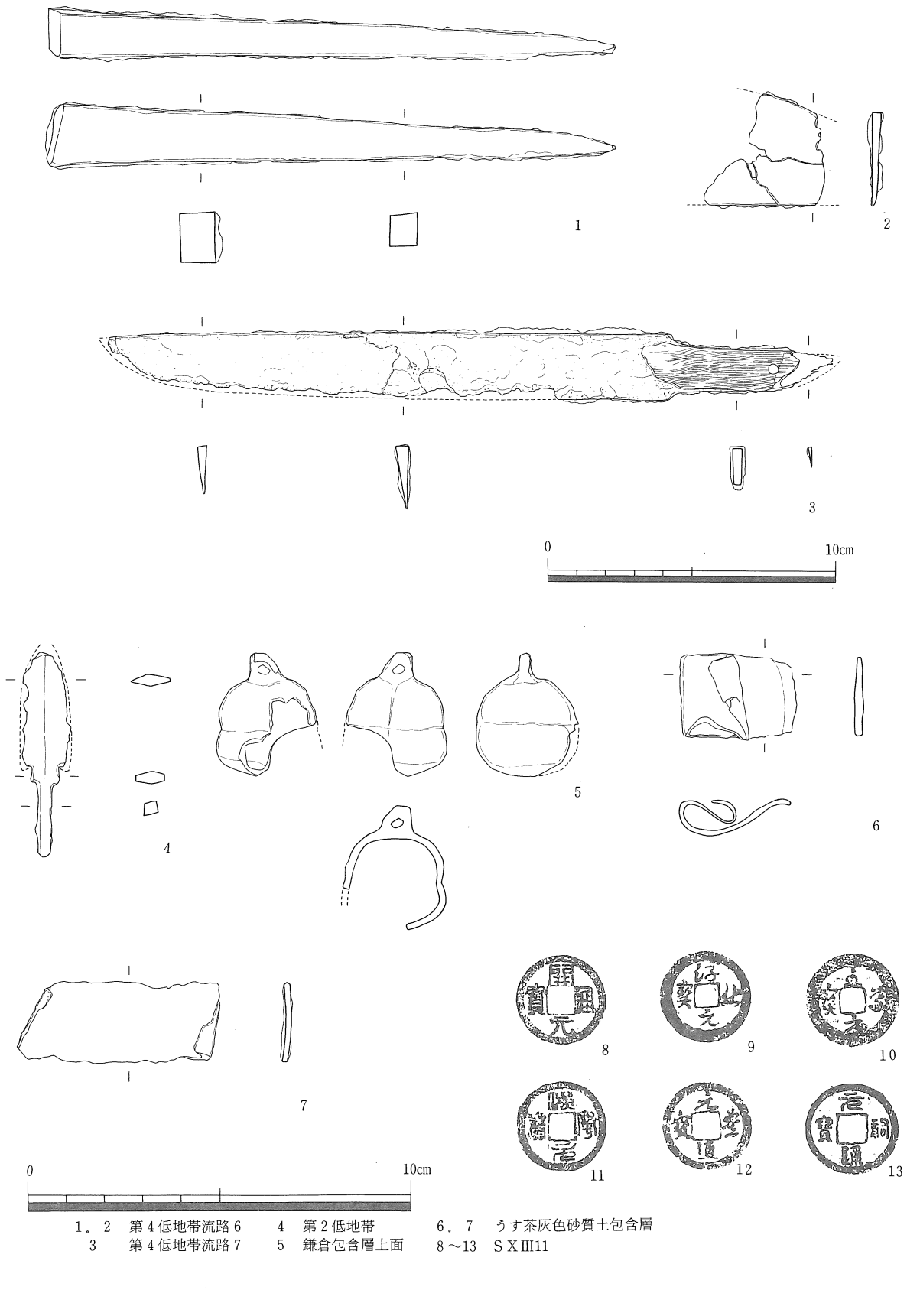
1　　第１低地帯流路１
２～９　第１低地帯流路２

第147図　低地帯 出土鉄器(1)



1～4　第1低地帯流路4　　6　第3低地帯流路3　　8　第4低地帯流路3
5　第3低地帯流路1　　7　第4低地帯流路2　　9～11　第4低地帯流路6

第148図　低地帯 出土鉄器(2)



1．2　第4低地帯流路6　　4　第2低地帯　　6．7　うす茶灰色砂質土包含層
3　第4低地帯流路7　　5　鎌倉包含層上面　　8～13　SXIII11

第149図　低地帯 出土鉄器(3)・青銅器・貨銭

第7節　木　製　品

斧柄（第162図）

板状もしくは柱状を呈する台座部に鋭角に柄を付すものを斧柄とした。何れも木の股の部分を利用した一木造りである。板状台座の諸例（第162図２～６）は横斧であろう。柱状台座例（第162図１）は台座先端を折損しているため区分は困難である。柄基部，すなわち台座裏面に続く部分は握り部より太く造り，断面形は縦長楕円形ないしは船形を呈する。残存例では台座下半は上半部に比べ厚さ・幅を減じ若干先細りとするか段を付けると云う様に，鉄斧着装用の加工を施している。柄部は多角柱状に丁寧な面取り調整が認められる。

完存資料は一例もなくすべて破損品のため，全形・規模の理解に困難な面も多い。残存部各部の寸法を見ると，台座幅2.5～6.7cm，台座長14.2cm，柄部長28.5cm，柄部径1.4～2.9cm程度である。したがって，立木伐採等用の大形品ではなく，細部加工用の小形鉄斧に伴うものと推定できる。

確認した６例は，何れも第１低地帯流路２出土資料で６世紀末～８世紀中葉の幅に収まる。

刀子柄・鉇柄・鑿柄・錐柄（第163図）

断面楕円形から円形の棒状を呈し，外表は丹念な面取り加工で丁寧に仕上げる。一方の小口面あるいは，小口面から一側縁にかけて茎を挿入するための小孔あるいは溝を穿っているものを刀子柄その他の工具柄とした。以下の分類は基本的に「木器集成図録　近畿古代編[5]」に依っている。

刀子柄（第163図１～３）は断面が扁平で小口から側縁にかけて溝状の刳り込みがあるもの，および断面楕円形で中央部以下の一側縁が曲折するものである。

やや太目で断面形が楕円形に近く，一方の小口中央部に長径と並行に，長方形の小口を穿つもの（第163図４・５）を鉇柄とした。

鑿柄（第163図６～８）は，ほぼ断面円形を呈し小口中央に方形の小口を穿つ。中には柄部上端に口金装着痕らしい凹みを持つ例（第163図７・８）もある。

以上の資料は第１低地帯流路２出土でほぼ７世紀代，下っても８世紀中葉までに位置付けうる。

鋤鍬類（第164図～166図）

今回報告する鋤・鍬類に一木造りのものは認められない。いずれも組み合わせ鋤・鍬類である。ただし一部の鍬類以外は，鋤・鍬の区分が現状では困難であるので以下では鋤・鍬類と一括する。

（第164図１）は比較的幅広でU字形の刃部に棒状の基部を付ける。基部は断面カマボコ形で柄の着装面はほぼ平坦であるがやや中央部が盛り上がっている。上端部は面取り加工で丸く納める。基部上部の凸面の一部を平坦に削り，更に横方向に浅い凹みを設けている。また基部下端では僅かに両側を削り込んで幅を狭くしている。この二か所の細部加工は柄着装時に巻き付ける固定用の紐のずれを防ぐ目的の加工であろう。ただし緊縛による磨耗等は器表の劣化により確認できない。刃部は薄いレンズ状の断面形を呈する。基部ほどの表裏面の形状差は認め難い。縁辺端部に面を成す上端部を除き，両縁辺は１～２cm幅で両面から薄く削り込みとがらせているが特に顕著な。鉄刃着装部の作出は見られない。

刃部裏面中央に，刀子状工具による線刻がある。「農」字と判読する見解もあるが確実ではない。また縁辺部下端の一部が炭化黒変している。第１低地帯流路２出土で７世紀代に比定できる。

（第164図２）は破損が著しいが柳葉形を呈する細身の身部を想定できる。身部横断面はレンズ状を呈

し表裏の区別は明瞭ではない。鉄刃装着用の刳り込みは造り出されていない。縁辺部の細部形状は不詳である。着柄部と身部の境に段を持ち身部よりも薄く作られると共に幅も狭くなっている。上半を折損しているが，少なくとも一か所に柄穴を穿っている事が判る。着柄部下端に２～３条の横方向の凹みが見られる。紐などで柄に緊縛した痕跡であろう。第１低地帯流路２出土でほぼ７世紀代に比定できる。

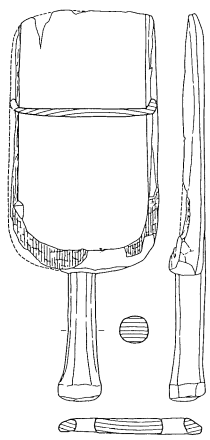
（第164図３）は，いわゆる「ナスビ形着柄鋤」あるいは「膝柄鍬Ｂ類」とされるものである。Ｕ字形の身部上方に笠形を呈する着柄部を付す。着柄部は概ね断面台形状を呈し，着柄面を平坦とするが，上半部を幅３cmに限って着柄面の裏面両側の角を落として断面カマボコ形としている。また，中央部には縦長長方形の枘穴一孔を穿つ。身部と着柄部の境は両側から深く刳り込んでおり，その部分に着柄時の緊縛痕と思われる凹みが２～３条認められる。この部分と着柄部の枘穴，削り込み部で柄に固定したものと考えられる。

身部縁辺には鉄刃着装用の深さ２cm程度の刳り込みがある。なお着装部縁辺は両面から加工して刃部様に薄く削るがこれ鉄刃に身部を密着させるための細部加工であろう。第１低地帯流路２出土で７世紀代に比定できる。

（第164図４）は着柄部片。断面形は台形もしくはカマボコ形を呈し，着柄面は平坦に仕上げる。端部は丹念な加工で面取り加工で丸く納める。端部直下は僅かに削り込み，カマボコ形に仕上げている。着柄面から穿たれた長方形の浅い枘穴がある。第１低地帯流路２出土で７世紀～８世紀前半に比定できる。

（第164図５）は，（第164図３）同様の「ナスビ形」の着柄部片。（第164図３）に比べ上端笠部の両側への張り出しが弱い。着柄面はやはり平坦に仕上げている。上半部には僅かに削り込んだ部分があり，張り出し部下端の浅い刳り込み部には固定用緊縛痕と思われる２～３条の凹みが残る。第１低地帯流路２出土で７世紀～８世紀前半に比定できる。

（第165図１）は平面長方形状の身部に棒状の基部を付す。身部表面には浅い刳り込みを入れ，匙状を呈している。先端部欠損。基部端には片側によった出枘状の突起が長く造り出されている。握り部と見るには不自然であるので，これによって身部から並行にのびる柄を結合した可能性を考える。身部の形状では大阪府鬼虎川遺跡出土の「籾掬い(6)」に類似するが，別木の柄が想定できる点で異なる。第１低地帯流路２出土で７世紀代に比定できる。



第150図　鬼虎川遺跡出土
籾掬い（註６文献）

（第165図２）は破損品であるが残存部形状，断面形状および建築部材などとは異なる丁寧な表面加工から鋤柄などの農具柄の可能性を考えているが，用材の点では不適当かも知れない。片面の大部分が炭化している。第１低地帯流路２出土で７世紀～８世紀前半に比定できる。

（第165図３）は鍬ないしはえぶり状の農具と想定している。長方形板状を呈し，下端を両面から削り込み刃部を造り出すが両側縁には及ばない。上半部の楕円形枘穴と上端の半円形刳り込みで，身部とほぼ垂直に柄と結合したと考える。使用時の衝撃に耐えるような船形隆起もなく，刃部作出も粗雑な点から見て，耕起具としてよりも耕地面をならす程度の機能しか果たし得ないのではなかろうか。ただし「えぶり」の機能を発揮するには幅の狭い点が非効率的である。第１低地帯流路３出土で６世紀後葉～８世紀初頭で捉えられる。

（第165図４）は犁ヘラ片。縁辺部のカーブ具合などから，正面向かって右上半部に当たると推定でき

る。芯持材で作られており，左下端のヘラ中央部に木芯がくる。後述する第１低地帯流路２出土犂に比べ一回り大きく，肉厚である。また裏面がかなり磨耗しており，第１低地帯流路２例ほど加工痕が明瞭に残らない。ヘラの傾きから見て，それと同様に耕起した土を進行方向左に排出するとタイプであろう。第１低地帯流路３出土で６世紀後葉～８世紀初頭に位置付け得る。

（第166図１），本例はいわゆる長床犂の系統に属し，サキ・イサリ・ヘラを一木で造る。全長78cmを測る。サキは長26cm・幅14cmを測り，舌状を呈する。先端部から10cmまでの縁辺部を上下面から削り込み刃部状に加工すると共に，やや細身となる。外表部には，縦方向の擦痕と磨耗が顕著にみられ，本品が実用に供されたものであることを示すが，前半部の縁辺にかぎってこれが認められない。かえって縁辺部作出時の加工痕をはっきり残す。このことは鉄刃装着を推定する有力な材料である。

イサリは片側に寄せて取り付き，下面より見れば左側に３cm程の肩部の突出が認められる。イサリ断面形は，下面中央がやや膨らみ，船底形に近い方形を呈する。サキとの境界部付近で，幅８cm，厚さ５cm，中央部にかけてやや細くなるが，後端部で再び広がり幅10cm，厚さ5.5cmを測る。下面はサキ同様縦方向の擦痕・磨耗が顕著である。両側面は平滑に仕上げるが上面，後端面には面取り加工痕をよく残す。イサリの前後二箇所には，上面から下面に貫通する長方形，正方形の枘穴を穿たれている。前者はタタリカタ，後者はイサリノエ結合用の枘穴で，上面での芯々の間隔32cmを測る。貫通方向はイサリに対して垂直ではなくタタリカタ，イサリノエが各々前傾，後傾して犂本体につながるように77°，78°の角度をもって穿たれている。

なお後部の枘穴には，折損したイサリノエ下端部が挿入されたままである。長さ13cmを残し，一辺４cmの方柱状を呈する。挿入部分は多少四周を削り込み細目となる。下端は挿入角度に合わせて斜めに落としている。

ヘラは立面形で角の取れた台形状を呈するが，左右対称ではなく左肩部がやや突出する。高25cm，最大幅23cm。約78°でサキに対して垂直ではなく後傾するように取り付く。また主軸に対しても直交せず左下がりに斜交する。厚みは中央部やや右よりで4.8cmを測るが左肩部に向かって薄くなる。前面は平滑に仕上げ特に下半部ではサキから続く擦痕が顕著である。これに対して背面では粗い加工痕を全面に残す。

ヘラのこのような形態・向きは耕起した土を進行方向左に排出するのに都合よい。なお本例は芯持材使用でヘラ中央部左寄りに木芯部がくる。なお後述するように（第181図６）不明農具柄は，犂イサリノエ関係品の可能性がある(7)。第１低地帯流路２出土で７世紀初頭～後葉に比定できる。

鎌柄（第167図～第168図３）

（第167図１）は，断面レンズ状で直線的に伸びる。上端部に刃部着装用と考えられる切り込みが側面から横方向に穿たれる。このため鎌柄と推定した。外表に横方向の擦痕が目立つ。本資料は以下の諸例とは大きさ・形状をかなり違えており大形鎌の可能性もある。

（第167図２）は小形の鎌で，断面円形を呈しＳ字状に緩く湾曲する。下端には滑り止めに，一側縁を隆起させた山形の突起を付す。上端には１同様の刃部着装用切り込みを認める。外表は平滑である。刃部までの長さ31cmを測り，上部背面に「十」字形の線刻がある。

（第167図３）は柄下半部で，端部側面に山形突起を持つ。外表に細かい面取り加工を残す。断面形は隅丸長方形状を呈する。

（第167図４）は柄端部片。断面形状はほぼ円形。滑り止めの形状は他とやや異なり，端部で一方向に広がり三角形状を呈する。外表は平滑である。